
かちこめ！ 花子さん

ラミトン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かちこめ！ 花子さん

【コード】

N0910V

【作者名】

ラミトン

【あらすじ】

忘れられてきた学校の怪談、トイレの花子さん。彼女はとうとう子供達に呼び出してもらえなくなり、妖怪版ハローワークを経て幻想郷へやってきた。妖怪が天下を取る幻想郷で、花子は再び怪談のエースとなれるのか!?

はじめのいっぽ(前書き)

二次ネタやネットスラングが若干含まれます。お嫌いな方は注意してください。

はじめのいっば

紙をめくる音が鳴るたびに、少女の体は小刻みに震えた。叱られることを怯えているような面持ちで、何かに緊張していることは間違いない。

「あー。そうね、昔は有名だったね」

頬杖をつく中年の女性が、紙面と少女を見比べる。女性といっても、その顔は赤黒く髪は白髪で、牙まである。彼女が人外の実在であることは間違いない。

もつとも、少女も同じく人外であるため、そこに驚いたり怖がったりするようなことはない。女性の風貌は、少し怖いけれど。

「おかつぱに、セーラー服ともんぺ。典型的だねえ」

「ど、どうも」

「別に褒めちゃいないんだけどねえ」

鼻を鳴らす女性に、少女はびくりと肩を飛び上がらせた。実を言えば人外のキャリアは少女の方が上なのだが、怖いものは怖いのである。

なにより、彼女がこの女性 というより、人の住まう地から隠れた場所にあるこの廃屋を訪れた理由が理由であるため、大きな態度を取ることができないのだ。

椅子に座って面倒くさそうな顔をしている女性の頭上、天井から吊るされたプレートをちらりと見上げる。『妖怪生活相談所 東京支部』と書かれている札を見るだけで、少女は気が滅入る思いだっ

た。

「今はどうなの？　ここに来なきゃならないくらい脅かせなくなったのかい？」

突然の質問に慌てて視線を戻し、きつちり揃えられた前髪を揺らして頷いた。

「ええと、子供達に噂されなくなっちゃって、誰も呼んでくれなくなっちゃったんです」

「はあん。あんだだけ全国で引つ張りだこだったのにねえ」

ペンを取って、女性は慣れた手つきで紙面にペンを走らせ始めた。そちらを直視することができずに、少女は終始俯いたままである。

この女性は一体なんという妖怪なのだろう。そんなことを考えていると、女性がおもむろに呟いた。

「でもまあ、いいタイミングだったかもしれないね」
「え？」

顔を上げてみれば、ちょうど書き終わったらしい女性がペンを置いて、にんまりと笑った。

「人間が科学に溺れれば溺れるほど、妖怪はやりにくくなる。お役所仕事の私らとはもかく、あんたらみたいに人を驚かして暮らして妖怪は特にそうだろう？」

「は、はい」

「実はね、そういう子らを受け入れる郷があるんだよ。そこでは人間よりも妖怪が幅を利かせてね、まさしく一昔前の日本と同じなのさ。お嬢ちゃんが輝けるかもしれないよ」

似合わないウインクなどする女性だが、少女にはその顔すらも輝いて見えた。せいぜいが役所の書記にでも回されるのだろうと思っただけに、まだ妖怪として人を驚かせるかもしれないという希望は、まさしく神仏から手を差し伸べられるが如き喜びであった。相手も自分も妖怪だが。

想像に想像を膨らませて、少女は思わず身を乗り出した。

「やります、私どこでも行きます！」

「はいはい、じゃあとりあえず、こっちじゃ引退届けだね。私のほうでやっておくから、ほら」

女性が地図を手渡してきた。ここからかなり離れた山奥に、赤い丸がついている。地図上では記号も何もなく、ただ森の中ということになっているが。

疑問に思っていることを、女性が説明してくれた。

「そこにはね、参拝客がいなくなった寂れた神社があるのさ。その鳥居をくぐれば、まあ結界が云々とか幻想の常識がどうとか色々あって、例の場所に行けるんだよ」

「は、はあ……」

あまりにもアバウトな説明に、少女は困惑した。そもそも地図自体がかなり適当な出来なので、無事に到着できるかどうかすらも心配になってくる。

とはいえ

「……ありがとうございます……」

少女は深く頭を下げた。これが最後の可能性かもしれないならば、やるしかないではないか。

丸っこい黒目を爛々と輝かせて、少女はボロボロのリュックサックを背負う。地図に目を落として、大体の場所だけを確認した。後は足で探すしかないだろう。

「しっかりとやるんだよ」

「はい！」

「ほ、本当にあった」

山に入って一週間。延々歩き続けて、少女はようやくその神社を見つけた。どうしてこんなところにあるのかと不思議になるほど深緑に囲まれており、山道らしいものもなかったのだが。奥に見える本堂にも、人が住んでる気配は感じられない。

ボロボロの鳥居には『博麗』と書かれている。ここが、件の博麗神社であることは間違いないようだ。後は鳥居をくぐれば、目的地に辿り着くことができるはずだ。

「幻想郷、かあ」

聞いたことのない地名だったが、ずいぶん昔に妖怪の賢者とまで呼ばれる大妖怪が作ったとか何とか。明治に入った頃に結界で区

切られたらしいので、昭和生まれの少女が知るはずもない。

鳥居に近づくと、なるほどなんと不思議な力が伝わってくる。神社が神聖なものであるだけに、妖怪の少女としては踏み込むことが躊躇われたが、大きく深呼吸して目を閉じた。

「始めの一步、始めの一步よ、私」

自分に言い聞かせて、目をきゅっと閉じたまま、もんぺをはいた右足を動かす。

もしかしたら、用済みになった自分をリストラという名のもとに葬り去る策略ではとも思ったが、相談所の女性が浮かべていた笑顔を信じようと自分を奮い立たせる。

「始めの　、一步っ！」

勇気を持って踏み出した、その右足。鳥居を跨ぐと同時に、懐かしさを感じた。慣れきってしまった現代日本の荒っぽい外気が、生まれたばかりの頃に感じた絹のような柔らかさに変わっている。

目を開けるのに少しだけ勇気がいったが、少女は恐る恐る、瞼を持ち上げた。

「……！」

思わず言葉を失った。結界はそのまま神社に送るのではなく、高い丘の上に少女を案内してくれた。彼女が求めたその場所は、彼女が思う以上に素晴らしい景色だった。

見渡す限りの青空、溢れる緑と、人里と思しき小さな集落。飛び交う鳥の中に、たまに妖怪が紛れていることも分かった。

妖怪の世界だ。少女はそう思った。自分が再び輝ける舞台に登ることができたのである。

いてもたってもいられず、少女は両手を広げて、青草茂る丘を駆け下りた。

「やーるぞおおおっ！」

今日も変わらず平和な幻想郷に、さらに平和な少女の聲がこだました。

かくして、かつて学校の怪談におけるエースとまで呼ばれた少女、『トイレの花子さん』こと御手洗花子みたらいは、怪異としての地位を再び築く野望を胸に、幻想郷へと足を踏み入れたのであった。

そのいち 恐怖！子供を襲う廁の怪を襲う人間！

~~~~~

太郎くんへ

こんにちは、太郎くん。元気に子供を驚かせていますか？

私はとうとう、子供にも忘れられてしまいました。昔は太郎くんとセツトみたいに扱われていたのにね、残念です。

こないだね、東京の妖怪生活相談所に行ったの。もう妖怪としては働けないかなあって思ってたけど、そこのおばさんがね、いい所を紹介してくれたんだ。

幻想郷っていうの。とっても綺麗な空気で、緑もいっぱいなんだよ。なにより、妖怪が天下を取ってる場所なの！最近は何の妖怪をほとんど見てなかったけど、こんなところにいたんだね。私驚いちゃった！

ここなら、私もトイレの花子さんとして、また活躍できるかなって思ったんだけど……

ううん、太郎くんには本当のことを言うね。昔のように怖がられるのは、ちょっと難しいみたいです。

最初はね、いつもの三番目の扉を叩いて噂を流したら、子供達が

怖い物見たさで呼んでくれたの。驚いてくれて、久しぶりに気持ちよく働けた気分だったんだけど……

ごめんね、思い出すだけでも泣きそうになるから、これ以上書くのはやめておく。許してください。

太郎くんも、巫女と魔法使いには気をつけてね。それでは、またおたよりします

花子より

~~~~~

出された煎餅を無遠慮に貪りながら、博麗霊夢はちゃぶ台に肘をついた。綺麗な紅白の巫女装束がしわになることを恐れもしないだらけっぷりだ。

妖怪退治の依頼を受けて飛んできてみれば、その住人がすでに半分妖怪であったのだ。彼女としては複雑な心境だが、依頼主の半妖は人間の味方であるので、一応話だけは聞こうというわけである。

何も半妖だから嫌だというわけではなく、依頼主の女性　ワーハクタクの上白沢慧音は、なかなか強い。霊夢に頼らなくともこちらの妖怪くらいなら退治できてしまうのだ。

「なあ、霊夢。頼めるか？」

青いメツシユが入った長い銀髪を揺らして、慧音が詰め寄る。鬱陶しげに払いのけつつ、霊夢は茶を啜った。

なんでも、慧音がやっている寺子屋で妖怪が出るといふ噂が立っているとか。厠の手前から三番目の扉を三回叩いてその名を呼ぶと、件の妖怪が襲ってくるらしい。

「花子さん、ねえ。どうしようもなくベタな名前で言葉も出ないわ」「外ではメジャーな妖怪だったそうだよ。ともかく、人里に妖怪が入り込んでいるんだ。放っておくわけにもいかないだろう」「ならあんたがやればいいじゃない」

遠慮なく眉間にしわを寄せて、霊夢は新しい煎餅を手にとった。もちろん、慧音が用意したものだ。

「寺子屋のお手洗いで人を驚かすなんて、チルノでもできるわよ。あんたが退治できないほどの妖怪じゃないでしょうに」

「それはそうなんだが、私が例の手順を踏んでも出てこないんだ。子供を狙っているらしくてな。霊夢なら襲ってくれるかもしれないだろう?」

「……まあ、うん。大人とは言えない年齢だものね」

成長期とはいえ、霊夢の背丈はまだまだ子供と言える。意地になつて否定するのも馬鹿らしかったので、煎餅を齧りつつ認めた。とはいえ、面倒なものは面倒である。

「驚かす以上の危害は加えていないし、子供も楽しんでいるんですよ? じゃあ放つとしてもいいじゃない」

「そうは言つがな、霊夢。子供達が噂に夢中で、勉強をおろそかに

しているんだ。このままってわけにもいかないんだよ」
「ううん、そういうことかあ」

子供に学を教えることを生き甲斐としている慧音からすれば、死活問題なのだろう。妖怪の仕業で困っている人を助けるのが霊夢の仕事でもある。

とはいえ、今日はもう妖怪退治をし終えてきたところなのだ。紅魔館の吸血鬼が人間を無理矢理パーティに拉致しているという話を聞いて、レミリア一派を叩きのめした。その帰りの足で、慧音邸を訪れているのである。

「今日はもう疲れたしなあ」

「困ったな。引き受けてもらえるとあって、報酬も用意してしまっただが」

頬を掻きながら、慧音がぼやいた。霊夢の肩がぴくりと動く。

「今年は豊作だったとかで、米が沢山あってな。実は、俵丸一つを報酬にしようかと思っていただけだ」

「……俵一表程度で私を釣ろうってわけ？ まったく、博麗の巫女も舐められたものね」

ちやぶ台に手を突いて、霊夢がゆっくりと立ち上がった。嘆息を一つ漏らして、慧音を上から睨みつける。

「報酬は先払いよさあ早くお米の詰まった愛しい俵を私によこしなさい」

「……」

夜も更け　　というより、丑三つ時である。何も夜中でなくとも例の妖怪は出るらしいのだが、人がいないほうが暴れやすいという霊夢の独断で、この時間に仕事をすることにした。

こじんまりと設けられた寺子屋の前に、人影三つ。一つはもちろん霊夢だが、白と緑の巫女服と魔法使いの身なりをした少女が二人ほど追加されていた。

「なんであんたらまで来てるわけ？」

呆れつつ尋ねると、魔法使いの霧雨魔理沙は箒を片手に快活に笑った。

「楽しそうだからに決まってるじゃないか」
「そうですよ！」

腰に手を当て、もう一人の巫女が目を輝かせた。妖怪の山、その頂にある守矢神社の風祝、東風谷早苗である。

「トイレの花子さんか幻想郷にいると聞けば、見にこないわけにはいかないじゃないですか！」

「どこで聞いてたのよ」
「町で買出ししてたら、たまたま子供に聞きました。退治の話は、まあ早苗ネットワークを駆使して」
「あっそ」

どうせ止めてもついてくるのだらう。下手に妨害しようものなら

反撃されてややこしくなるだけなので、霊夢はしぶしぶ諦めることとする。

「で、早苗。あんたはこの妖怪を知ってるの？」

「え、そりゃまあ。って、二人はもしかして、花子さんを知らないんですか？」

「知らないぜ」

魔理沙に言われて、早苗はとても驚いたようだ。目をまん丸にして、口到手まで当てて絶句している。

まだるっこい。霊夢は舌打ちまでしそうになりながら、

「どんな奴なのよ、その妖怪って」

「ええと、トイレの花子さんとは、小学校で多かった怪談話の一つですね。メジャーなのは、トイレの手前から三番目をノックして花子さんを呼ぶと、誰もいないはずなのに返事が返ってくるってやつです。中に入ったら殺されるだったり、妖怪の世界に拉致されるって話もありますね」

「拉致って、紫じゃないんだから」

どこぞの妖怪の賢者を思い出しつつ、霊夢は鼻を鳴らした。なんと子供が好きそうな怪談話だが、幻想郷では妖怪と対峙することが日常である。読んで字の如く子供だましな話に、ますます馬鹿らしくなってきた。

しかし、早苗はやる気満々である。まるで憧れていたものにも会つかのような、緊張と歓喜の入り混じった顔をしている。

「花子さんかあ、小学生の頃は怖かったなあ。三番目のトイレはいつも避けてましたよ」

「外の世界じゃそんな妖怪も怖がるのか？ 貧弱な子供だな」

箒で素振りなどし始めた魔理沙が苦笑を浮かべた。彼女も外で言えば小学校を上がった直後程度の年齢だろうが、半ば趣味で妖怪退治をしているのだ。比較してはいけないうらう。

とはいえ、霊夢も似たようなものである。物心ついた時からすれ違いざまに妖怪をぶちのめしてきたのだ。最近外からやってきた早苗には想像もつかないほど、精神的にも耐性ができてしまっている。

「まあいいわ。さつさと終わらせましょ」

「驚かして満足する妖怪なんて、小傘と橙くらいなもんだと思っただぜ」

「油断しちゃいけませんよ！ 花子さんはパターンによつてはとりついてきたり、念で殺してきたりもするんですから。後はトイレから手が出てきて引きずり込まれたり夜明けまでひたすら追いかけられたり、花子さんの正体が三つの頭を持つ体長三メートルの大トカゲで、声で油断させて食べてしまうって話も」

「そこまで来ると、トイレでやる意味ないわね」

失笑しつつ、霊夢は寺子屋に足を踏み入れた。

明かりなどついているわけもなく、窓から差し込む月明かりだけが頼りだった。深夜特有のひんやりとした空気が頬を撫で、木目張りの廊下は歩くたびに軋む音を立てる。雨が降っているわけでもないのに、どうしてか湿った木の匂いまでしてきた。

とはいえ、彼女らの足取りに恐れや迷いはなく、堂々と足音を鳴らして歩いていく。忍び足も何もあつたものではない。

一同は少女らしい怖がる素振りをまるで見せずに、厠の前に到着した。なんの躊躇もなく扉を押し開け、霊夢は眉を寄せる。

厠にある窓が小さすぎて、月の明かりを少しも通していない。文字通り一寸先は闇であつた。うかつに歩くこともできなさそうだ。

「暗すぎて、どれが三番目か分からないわね」
「確かに真っ暗ですわね」

ひよっこりと覗き込む早苗が、廁の臭いに洗面を浮かべながら呟いた。

「魔理沙、魔法で光を出せたりできませんか？」
「あーいよ。ちよつと待ってくれ」

なにやらカチカチと音がした後、魔理沙の持つミニ八卦炉に火が灯った。ピンからキリまで出力を調整できるその道具は、魔理沙にとつての宝物である。

淡い光にぼつと照らされた廁は、やはりどこか不気味だった。なるほど、妖怪が潜む所としては恰好の場所だったのかもしれない。

視界が確保できたところで、霊夢はさっそく仕事を始めた。

「さてと。手順は確か、手前から三番目の扉を三回叩くんだったわね」

指で数えて、三つ目の扉の前に立つ。左手の甲で、噂どおり三度ノックした。後は、妖怪の名を呼ぶだけである。

「……はーなごさん」

呟いた直後、霊夢は大幣を、早苗はお札を、魔理沙は八卦炉を構えた。間違はなく妖気が発生したのだ。

わずかに走った緊張。それに答えるかのように、廁の扉がゆっくりと開いていく。

目を逸らさず、開く扉を睨みつける。わずかな隙間から白い指が現れ、ついで出てきた少女の顔は、にたりと笑っていた。

「はーあーい」

目を見開いて不気味な笑みを貼り付ける少女。ケタケタと気味の悪い笑い声を上げて、扉から飛び出してくる。

セーラー服ともんぺの少女は狂ったように腕を振り回し、若干後退した霊夢達に走り寄ってきた。

「遊びましょ！ アソビマシヨ！」

襲い掛かるおかつぱの少女。子供が怖がるのも無理はない恐ろしさである。

しかし、相手が悪かった。驚くはずの三人の少女は、むしろ嬉々とした顔をしているようにすら見えた。

「ヒヤッハー！ 妖怪は撃滅だアツ！」

と霊夢が大幣を振り上げれば、

「ホント便所は地獄だぜ！ フウハハハーハー！」

魔理沙が八卦炉を少女に向け、

「勝ったツ！ 第一話完！」

早苗がお札を投げつけた。

寺子屋の廁に閃光が満ち溢れ、それらは徐々に膨張していき、小さい窓から漏れて里までをも照らし出し

「あれ？」

妖怪少女の間抜けな声と共に、寺子屋が爆発した。

「ああああああ」

早朝、瓦礫の山と化した寺子屋の前で、慧音ががくりと崩れ落ちていた。横目でそちらを眺めつつ、霊夢はぴしゃりと告げる。

「妖怪は退治したんだから、お米は返さないわよ」

「私の……寺子屋が……」

返事すらできない慧音を放置して、霊夢は魔理沙と早苗と共に、膝を抱えて座り込んでいるおかつぱの少女を見下ろした。

決闘ルールを無視してきたとはいえ、徹底的に痛めつけてしまったおかつぱの少女　トイレの花子さんは、ぶるぶると怯えきっている。何度か話しかけているのだが、まともな返答は得られていない。

「霊夢、やりすぎですよ」

早苗に咎められるが、彼女だって嬉々として護符を投げつけていたのだ。言われてやる義理はないとそっぽを向いてから、もう一度花子の前にしゃがみこむ。

「ねえ」

「ひいつ！」

涙目で後ずさりする花子を容赦なく追いかけて、セーラー服の胸倉を掴んだ。

「怖がらなくていいって、もう何もしないから」

「胸倉掴んで言う台詞じゃないぜ」

「逃げる奴が悪い」

魔理沙の突っ込みにぴしゃりと言い切る。花子を締め上げながら、
霊夢は誰よりもかわいいと自画自賛できる笑顔を作り、

「あなたのお名前は？」

「あわわ、誰かお助けえー！」

「あなたのお名前は？」

「ひい、ひいーっ！ 嫌だよ、太郎くんでもムラサキおばあちゃんでもいいから助けてえー！」

「あなたのお名前は？」

「もうピカツってなってドカーンはやだ、怖いのだーっ！」

両手を振り回して暴れる花子。彼女は本気で霊夢を怖がっているようだ。

掴み上げていた手を放して、霊夢は悲しげに溜息をついた。

「……仕方ないわね。八方龍殺陣から夢想天生のコンボでテーレツ

「テーさせるしか」
「御手洗花子ですっ！」

途端に背筋を伸ばして、花子のはつきりと挨拶した。霊夢が満足げに頷く。

「よろしい。で、あんたはなんで寺子屋にいたの？ 人里で人間襲っっちゃいけないってルール、知らないわけじゃないでしょう」
「……知りませんでした」
「……」

霊夢が眉を寄せると、それだけで少女はびくりと後ずさりして目を潤ませた。まるでこちらが悪者のように思えてくるが、相手は妖怪なのだ。特に気にもせず、じつと見据える。

「だ、だって私、まだここに来て一週間で」
「来たばっかの妖怪なの？ だったらなおさら、他の妖怪にでもルール聞きなさいよ。スペルカードも知らないんじゃ、女の子はやってけないわよ？」
「स्प、え？ でもだって、誰にも会わなかったし……。学校のトイレで驚かすお化けだから、とりあえずここに来たんですけど」
「はあん、それでね。でも、あんたはたまたまに人間を殺すこともあるんでしょ？」

尋ねると、花子はぽかんと口を開いた後、首をかしげた。

「え？」
「いや、取りついて殺すとか、その早苗が言ったのよ」
「うっん、人を殺したりなんてしませんよ。せいぜい襲い掛かって驚いてもらって、後はトイレでほっこりしてました。人間を殺すな

んで、考えたこともなかったんだけどなあ」
「まんま小傘みたいな奴だな」

後ろで笑う魔理沙を放って、霊夢は花子を見つめた。彼女はおかつぱの頭を掻きながらしばらく唸った後、手をポンと合わせて頷いた。

「そっか、そういうことになってたんだ。だから時々、子供が殺されるーとか言ってたんだなあ」

「いまいち話が見えてこないんだけど、そういうことになってたって、どういうことよ」

「えっと、私こう見えて、ここ最近まで学校の怪談としてはすごく有名だったんですよ。日本中で噂されてて、行く学校行く学校全部で子供達が私を知ってたもの。わざわざ呼び出す方法を広める必要がないくらい」

合点がいった。噂が広まるにつれて脚色され、とりつかれるだの手が出るだの、体長三メートルの大トカゲが正体だのと言われるようになってたのだろう。

それだけ有名な妖怪ともなれば、幻想郷に来ずともやっていけそうなものなのだが。外の世界では、さらに幻想が否定されてしまったということか。

ともかく、幻想郷のルールを知らないというのは霊夢にとっても都合が悪い。スペルカード以外にも教えなければならぬことが出てくるだろう。

「とりあえずまあ、元気出しなさいよ。ここは誰でも受け入れる世界、あんたもやり方さえ分かればうまくやれるわ」

「は、はあ」

間抜けな声を上げる花子に、霊夢は人差し指を立てる。

「とにかく、人里で人間を襲うのは禁止。襲うなら里の外つてのが幻想郷のルールよ」

「悪さしたら、私らが退治にいくけどな」

「ええっ!？」

悲鳴じみた叫びで困ったように顔を曇らせる花子。彼女の「ええっ!？」には二つの意味があることを、霊夢は感じ取っていた。

すなわち、廁の怪である彼女にとって、廁のない場所で人を襲うことはとても困難であること。もう一つは、また霊夢達に退治されるかもしれない恐怖だ。

見た目は幼く可愛らしい少女であるとはいえ、花子は妖怪である。人を襲う妖怪に例外を認めてやるわけにはいかない。人里で飼ってやるわけにもいかないのです、霊夢はとりあえずの提案をしてやることにした。

「家だったら、里の外にもあるわよ。そっちに住み着いたら？」

「あ、そうなんですか？」

「ちよっと、霊夢」

早苗が何かを訴えてくるが、無視する。しかし、言わんとしていることは分かっていた。

里の外にある住居といえば、その住人は大概が妖怪であり、人間だったとしても妖怪退治のプロだったり、花子にとってはろくなことがない連中ばかりである。

もちろん、霊夢はそれを知っている。しかし、重要なことは花子

には伝えない。

花子も妖怪なのだから簡単に死んだりはしないだろうという、他人事と言つにも酷すぎる考えだ。新参妖怪一匹がどうなるうと、霊夢の知つたことではないのだ。

「じゃ、じゃあ……幻想郷を歩いて回つて、住む場所を探してみようかな」

「そうそう、それがいいわ」

わずかに笑顔が戻つた花子に、うんうんと頷く。後ろで魔理沙が「鬼だぜ」などと呟いているのが聞こえたが、妖怪相手に菩薩のような顔をしてやる理由はない。

「そうと決まれば、早速行動しなさい。さあ立って、荷物を持って」「は、はい」

言われるがままに古びたりユックサクを背負う花子。いそいそと準備をする彼女の顔には希望の光がキラキラと舞い降りており、霊夢はわずかに心が痛んだ。

しかし、わずかにである。次の瞬間には割りともどくもよくなつていたので、躊躇いなく花子の背中を押した。

「ここから西に真つ直ぐ進みなさい。湖の近くに真つ赤な洋館が見えると思つわ」

「洋館ですかあ」

「立派な館よ。お手洗いもすごく綺麗だったわ」

「わあ！」

胸の前で手を合わせて、花子はとても嬉しそうだ。少なくとも、

母のような面持ちで頷く霊夢の背後にいる魔理沙と早苗の、哀れみの視線には気づいていないだろう。

トントンとつま先で地面を叩いて靴を直し、花子が行儀よく頭を下げる。

「色々ご迷惑おかけしました。ありがとうございました」

「いえいえ。大したことじゃないわ、地獄はこれからだし」

「え？」

「ん？」

目が合って数秒、花子は聞き逃したことが重要なことではなかったと判断したのか、もう一度深々と一礼した。

「じゃあ、私行きますね。さようなら」

「さようなら。せいぜいがんばるのよ」

「……？ はい！」

やはり何か引つかかるらしいが、彼女がそれに気づけることはとうとうなかった。朝日を浴びて、足取り軽やかに人里から去っていく後姿を見送って、霊夢はすがすがしい気持ちで振り返る。

「いやー、いいことした後ってのは気持ちいいわね」

「どの口でそれを言ってるんですか、あなたは」

「あんたもまだ妖怪に甘いわね。幻想郷じゃあのくらい普通よ」

「普通ではないだろ。適当な廃屋でも紹介してやったほうがよかったですと思っぜ」

同業者とも言える魔理沙に突っ込まれても、霊夢は大して気にならなかった。博麗の巫女としての責務は果たしたのだから、とやかに

言われる筋合いはない。

ゆっくりと伸びをしてから、颯爽と宙に飛び上がる。睡眠時間は昼寝で補うとして、お腹が減ってしまったのだ。

「さあ帰る。炊き立ての白米を食べられるなんて、久しぶりだわ」

「お、例の報酬か。私もお相伴に預からせてもらおうかな」

箒に跨り飛び上がった魔理沙が、帽子を押さえながら笑った。霊夢はそちらを横目で見つつ、

「一人につきおかず一品」

「きのこでいいなら持っていくぜ」

「あ、昨日作った山菜のてんぷらが余ってるんですけど、食べますか？」

「いいわね、いただきわ」

廁妖怪の話はどこへやら。早朝の人里上空を飛んでいく霊夢達の興味は、次第に朝食へと移っていった。

少女達の笑い声が遠のいて、朝日は徐々に力を増し人里に一日の活気を与えはじめる。人々の目覚めの時が近づいてくる、その中で

「……………私の寺子屋……………」

崩れ落ちた寺子屋の前で、慧音は二度とあの巫女に妖怪退治を頼まないで、強く心に誓ったのだった。

そのに 恐怖！紅い館の吸血鬼！（前書き）

二次成分強め。カリスマブレイクと駄メイドにご注意ください。

それに 恐怖！紅い館の吸血鬼！

~~~~~

太郎くんへ

こんにちは、太郎くん。お元気ですか？ 私は幻想郷にだいぶ慣れてきました。

ここには特別なルールがあつてね、人が集まっている里では人間を襲っちゃいけないの。妖怪が人間のお店で買い物していたりするのは、見ていてなんだかおかしかったです。

でも、大変なの。人里で襲っちゃいけないってことは、人里のおトイレで驚かすこともできないってことなんだ。私にとってはとても困ることです。

怖いけど親切な巫女さんが、里の外にも家があるよって教えてくれたの。呼び出す方法とかは変わってきちゃうけど、誰かを驚かせらなと思うって教えてもらったお家に行ったんだけど……

うーん、ごめんなさい。今回も思い出さなくないので、今日ここまで。いつか楽しいお話をおたよりできるといいな。

太郎くん、赤い館のおトイレでは驚かさない方がいいです。特に吸血鬼と魔法使いには、気をつけてね。

最近暑くなってきたから、お体を大切にしてくださいね。お化け  
だけど、なにかあつてからじゃ遅いからね。

ずっと元気でいてください。それでは。

花子より

~~~~~

人里で出会った巫女に教えてもらつたとおり、トイレの花子さん
こと御手洗花子は湖の畔を歩いていた。

夏も近づく日中であるというのに、とても深い霧に覆われている。
この湖は昼だからこそ霧に包まれるのだが、まだそのことを知らな
い花子にとって一歩先も見えない濃霧は、少しだけ怖かった。

空気中の湿気はもはや水滴に近いものがあり、花子のセーラー服
とおかつぱの髪はビシヨビシヨになってしまっている。ときどき手
櫛で水滴を落とすも、焼け石に水であった。

一応着替えも持ってきているのだが、一番のお気に入りは昔から
このセーラー服ともんぺだった。地方によって容姿が違って伝わっ
ているため、赤いワンピースやロングヘアのカツラがリュックに
入っているのだが、今ワンピースに着替えてもまた濡れてしまうだ
ろう。

もしかしたら、もうリュックの中で湿っているかもしれない。そ
う思うと、花子はげんなりとした顔になった。厠に住む妖怪である

花子にとって高い湿度は慣れっこだったはずだが、立っているだけでずぶ濡れになる湿気は経験したことがない。

湖のふちに沿ってずっと歩いているのだが、今も件の館は見えない。真つ赤で大きな館だからすぐ分かる。と霊夢は言っていたのだが、伸ばした手が霧に飲まれて見えづらくなるほど視界は悪い。もう通り過ぎてしまったのではという不安にも襲われた。

「もうやだぁ……」

嘆息混じりに呟き、花子はその場で腰を下ろそうとしてすぐに思い直した。地面もぬかるんでいるのだ。座ればお気に入りのもんぺが泥まみれになってしまう。

休憩することもできずに、再び歩き出した。歩き疲れたというのももちろんあるのだが、湖に着てから小さな羽根を生やした少女に何度も襲撃されたのだ。妖気を持つ綺麗な玉をぶつけてきて、花子は頭を抱えてひたすら逃げ回った。

彼女らが妖精であり、襲撃が弾幕ごつこという彼女達にとっての遊びであると花子が知るのには、まだ先の話になりそうだ。

太陽の光すらも遮る濃霧を見上げて、首にかけてある手ぬぐいで頬を拭った。汗だか湿気だかは分からなかった上に、手ぬぐいもすでに濡れタオルとなっていたので、もはや気休め程度のものである。

全身ずぶ濡れになり未知の生命体少女に襲われても、花子は健気に歩き続けた。兎にも角にも、どこかのトイレに住み着かなければならない。もういつそ廁の怪でなくてもいい気がしてきたが、そこはプライドの問題であった。

どこかで一息入れたいなと、花子はあたりを見回した。座れそう

な切り株でもないかと思っただが、やはり一寸先は霧であり、見えるものといえば、足元に濡れて青臭い匂いを放つ雑草くらいなものだ。

うんざりと溜息をついて、再び歩き出す。もしかしたら、霊夢に騙されたのではないか。本当はこの湖に館などなく、霧に視界を奪われて湖に落ちてしまえとも思っていたのではないか。

「……」

そうだ、そうに違いない。花子は徐々に腹が立ってきた。魔理沙と早苗はともかく、あの紅白ヤクザ巫女は人権ならず妖怪権を無視してきたではないか。

考えれば考えるほど、花子のボルテージは上がっていく。顔を真っ赤にして頬を膨らませ、今からでも文句を言いに行こうと思いついた。あれほどコテンパンに叩きのめされたことは、もう記憶の外である。

とりえず、怒りの丈を湖にぶつけておくことにした。小さな胸を大きく大きく反らして息を吸い、

「っの　馬鹿巫女おおおおっ!」

若干裏返った少女の声が湖に響き渡った。せいぜいと息を荒げながら、反響してくる声を受け止める。

少しだけすっきりした気がして、花子は呼吸を整えるために深呼吸をした。額の水滴を拭って視線を上げた、その時。

「……?」

湖の向こう岸に見えたシルエット。自分の叫びで霧が晴れたのか、

それともただの偶然か。花子からすれば天高く聳えると言ってもいいほどの大きな館が、霧の向こうに浮かび上がった。

こちらからは背面しか見えないが、それでも花子が言葉を失うに十分な見事なまでの真紅の外壁。もはや確認するまでもなく、霊夢が言っていた館だ。

「ば……」

濃霧のキャンパスに現れた紅の館を見上げて、花子はぽつりと呟いた。

「馬鹿なんて言って、すみませんでした……」

吸血鬼は、高貴な種族である。

大樹を楽々投げ飛ばす腕力、風の如く駆け抜ける俊足、あらゆる魔法を使いこなす魔力。全てにおいて高水準なバランスを持つ吸血鬼こそが、至高の悪魔なのだ。

紅魔館の主、吸血鬼のレミア・スカーレットはそう自負している。というよりも、揺るがぬ事実であると信じきっていた。

青みがかった銀髪と真紅の瞳。人形のような顔立ちをしている彼女は、十歳程度の少女であった。

もつともそれは見かけだけの話であり、実際は五百年もの時を生きている。容姿で油断する奴はことごとく力で叩き伏せてきたので、今更自分の姿に劣等感を抱くこともない。

その手を掲げるだけで多くの種族が畏怖しひれ伏すほどの圧倒的カリスマ。他のどの種族も到達できない超絶なパワーを持つ吸血鬼は、もはや幻想郷の支配者と言っても過言ではないだろう。

今日も上機嫌にそんなことを考えながら、レミリアは口の周りについた生クリームをよだれふきで拭いた。今日のケーキも実に美味であった。

空いた皿をトレーに乗せながら、紅魔館のメイド長、十六夜咲夜も嬉しそうだ。彼女の視線がレミリアの顔から離れないのが気になったが、いつものことである。彼女はレミリアにとっても従順なのだ。

今日もいつもと変わらず、優雅な一日を過ごしている。優雅に目覚め、優雅に朝風呂（夜だが）に入り、優雅に朝食（夜だが）を食べ、優雅に妹や親友と遊び、そして優雅におやつを楽しんだ。

優雅によだれふきを外し、優雅に肘掛に手をつき、届いていない足を優雅に下ろして床に立つ。

そして、優雅にもよおした。

一度この感触を覚えてしまうと、もう無視することはできない。もじもじしながら、レミリアは咲夜を見上げた。

「咲夜、お花をつみに行ってくるわね」

「一人では危険です、お供しますわ」

「何が危ないってのよ。おトイレくらい一人でできるわ」

咲夜にイーツと歯を剥いてから、早足でトイレに向かう。

紅魔館はただでさえ大きいのに、咲夜の空間を操る力で内部を広げてある。さすがに迷うようなことはなかったが、それでもトイレまでの距離を遠く感じた。わざわざ宣言しているのだから廊下を縮めてくれてもいいだろうに、咲夜はどうしてかそれをしてくれない。館の主はレミリアだというのに、なんとも困ったものである。

実を言えば、咲夜の「お嬢様が我慢して走っていく姿を少しでも長く見ていたい」というもはや邪悪でしかない願いの賜物なのだが、誰よりも従順なメイド長にそんなことを思われているなど露知らず、レミリアは思惑通りパタパタと廊下を駆けた。

目的の扉、そのドアノブに手をかける。小さなその空間は、今のレミリアにとってオアシスであり聖域であった。飛び込むように中に入って、自分ひとりだけに用意された固有結界の鍵を閉める。

長いスカートをするりと持ち上げ、ドロワーズをよいしょと下ろして、便器に座った。

「……はふう」

全ての悪しき者を体から追い出し、レミリアは一人、ほっこりと笑みを浮かべる。

カランカランと音を立ててペーパーを巻き取り、戦いの後を消し去って立ち上がろうとした、その時だった。

小さなお尻に凄まじい嫌悪感。同時に背筋を鳥肌が駆け抜け、レミリアは「ひっ」と声を上げた。

誰かがお尻を触っている。とても冷たい手だ。レミリアは今も便器に座っているというのに、一体どこから

お尻を触っていた手がぬるりと伸びて、背筋を撫でる。どんどん登ってきているそれから反射的に飛び退いて、レミリアは感じた嫌悪感を殺意に変えた。

「どんな妖怪かは知らないけど、吸血鬼にケンカを売るとはいい度胸じゃないの。お前の運命を不夜城レッドで全世界ナイトメアにしてや
」

振り返って、固まった。

便器からぬるりと出ている上半身。真っ赤なワンピースに黒い口ングヘアの少女が、目を見開き下弦の月が如く唇を歪めている。目が合い、レミリアは殺意がすうと引いていくのを感じた。同時に、得も言われぬ感情が込み上げてくる。

「う……」

「ネエ
」

ずるりと洋式の便座から這い出して、少女の顔が目の前に迫った。真っ黒で光のない双眸がレミリアの瞳を覗き込む。

底なしの黒い目に飲まれそうになる中、黒い髪の少女がケタケタとやかましく笑い声上げた。

「アソビマシヨ　ワタシト　アソビマシヨウ
」

「ひ……ひゃ……!!」

ここで一つ、補足しておかねばなるまい。吸血鬼のレミリアは本当に強く頭も切れる。が、その精神は幼い少女そのままであった。最近まで館の外に出ることは少なかった上に、幻想郷以外で自分以外の妖怪を見たこともあまりない。

幻想郷の妖怪、特にレミリアの知る妖怪はその誰もが人間の少女のような容姿をしていたため、化け物らしい化け物に出会うのは今回が初である。

幼子が初めてお化け屋敷に足を踏み入れた時と同じ衝撃が、レミリアを襲った。抑えきれぬどころか抑えようとすることすらできずに、膨れ上がる感情のまま、

「びゃあああああああああああつ！ さくやあああああつ
！」

化け物を見つめた瞳と中途半端に上がったドロワーズをそのままに、絶叫した。先ほどの優雅云々は完全に消えさり、姿そのままの子供のように泣き喚く。

「しゃあああくやあああああつ！」

「やった！ 驚き顔ごちです！」

先ほどの恐ろしい顔がすっかり変わり、赤いワンピースの少女が満面の笑顔を浮かべて便器の中へと消えていった。しかし、レミリアには自分を襲った恐怖が去ったことを理解するほどの理性は残っていない。

泣き声もピークに達しようという頃になって、ようやくトイレのドアが開けられた。咲夜の参上である。

「どうしました、お嬢様！」

いかにも緊急事態という慌てようは、しかし声だけであった。

手には天狗のものであるはずの写真機を持ち、熟練カメラマンよろしく片膝をつきファインダーを覗きながら、レンズは便器から視

線を外せないレミリアのお尻にピントを合わせている。

「変なの、変な奴がトイレから！ にゅーって出たのおおおっ！」
「な、なんですってー！」

叫びながらも、咲夜がシャッターを連打する手を止めることはなかった。やはりレミリアは気づかず、悲鳴を上げ続ける。

「手がね、手がお尻をぬるーってやったのおおおっ！」
「そんな、なんて非道な！ そしてなんと羨ましい！」

わんわん泣き叫ぶレミリアは、誰が見ても吸血鬼であることを信じてもらえないだろう。主の醜態を写真に納めまくる咲夜もまた、レミリアの付き人だと思ってももらえないに違いない。

「ああああああん！」

「絶景ッ！ 絶景ですわお嬢様ッ！」

我を忘れて号泣するレミリアと、我を忘れてシャッターを切り続ける咲夜。そのある種地獄絵図な光景は、事態に気づいたレミリアの親友パチュリー・ノーレッジが駆けつけるまで続いた。

早朝。外では昇りはじめた太陽がさんさんと光を注ぎ始めているだろうが、窓の少ない紅魔館、そのお手洗いともなれば、太陽光など届くわけもなかった。しかし、それでも花子の心中は真夏の浜辺が如き明るさに満ち溢れている。

なんと幸先のいいスタートなのか。花子はトイレの便器に身を潜めてほくそ笑んでいた。

何も本当に便器に入っているわけではなく、廁の妖怪である彼女は、そこがトイレもしくはそれに準ずる場所であれば自分だけの空間を作り上げることができるのだ。お世辞にも大きいとは言えない空間だが、誰にもばれずに隠られる花子の住処である。

紅魔館のトイレは、とても居心地がよかった。隅から隅まで綺麗に手入れをされているし、床にはマットが、そして便座にもふかふかなカバーがかかっていた。冷たい上に臭いもこもりやすい学校のトイレとは雲泥の差だ。

本当ならば花子さんという怪異にはルールがあるのだが、手順を踏まなければ登場できないわけではない。あくまで子供達の恐怖心を煽るための手段にすぎなかった。

とはいえ、アドリブで誰かを驚かすのはとても久しぶりだった。うまくできる自信はなかったが、まさかこれほどの成果を得られるとは。

「私もまだまだ、捨てたものじゃないなあ」

などと自画自賛しつつ、空間の外で便器の水面が揺らぐのを見上げる。お尻を触ってしまったのは花子としては失敗だったのだが、それも驚かせることに一役買ってくれたので、良しとすることにした。

なにやらフリフリしたドレスを着た幼い少女であった。自分も洋館ということで赤いワンピースとロングヘアのかつらなど被っているのだが、足元にも及ばないほどの豪勢な洋服を前にして、少し

恥ずかしい思いだった。

とはいえ、驚かすのにそこまでめかしこんでも仕方がない。いつかあんなドレスを着れたらと夢を見つつ、花子はいそいそとかつらを直す。

人の気配が近づいてきたのだ。トイレのドアの向こう側から、とこと響く二人分の足音。

「本当よパチエ、本当に赤いワンピースの女の子が出たのよ！」

「だからって、一人じゃ怖いからトイレについてこいだなんて。レミイ、あなた私より四百年も長く生きてるのよ？」

「仕方ないじゃない、本当に恐ろしかったのよ。あれは大妖怪……このレミリアをも凌駕するモンスターに違いないわ」

「……はいはい。ほら、ついたわよ」

カチャリとドアノブが音を立てる。しかし回らず、ドアもまだ開かない。

「待つててね。先に帰っちゃ嫌よ」

「分かったから、早く済ませてきなさいよ」

「絶対だからね。出てきていなかったら、絶交だからね」

「……この子、本当に吸血鬼なのかしら」

呆れた声が聞こえると同時に、トイレのドアが開かれた。入ってきたのは、前回と同じ少女。今は朝のはずだが、寝巻きに着替えている。

ふと、花子は気がついた。この少女　レミリアには、羽が生えている。そういえば、もう一人の声が吸血鬼だとか何とか言っていた。

彼女は人間ではないようだ。だが、花子にとっては人も妖怪も同じこと。寝巻きのズボンを下ろす手すら恐る恐るな少女を驚かすことなど、赤子の手を捻るより遙かに楽なことなのだ。

驚かすタイミングを今か今かと待っていると、おもむろにレミリアがズボンを上げて、ドアを開けた。

「うう……パチュリー……」

「何よ」

「扉、開けておいてもいいかしら」

「……好きにきなさいよ」

外の少女はどうでもいいと言わんばかりの顔だが、宣言通りレミリアは扉を開けたまま用を足そうとした。

再びいそいそとズボンを下ろすレミリアと、それを直視しないように視線を逸らしている友人、パチュリー。友達というより姉妹のように見えてしまうが、花子にとってはどちらでもよかった。

ちようどいい、一石二鳥だ。パチュリーも一緒に驚かせてやろうと、花子は鼻息荒くやる気満々である。

その、刹那。

「レミイ、待ちなさい」

「へ？」

半端に下ろしたズボンとパンツ、中途半端な中腰のまま、レミリアは頓狂な声を上げた。

パチュリーが左手に持つ本は淡く輝いており、彼女の視線は鋭く変わって、レミリアの背後　つまり、花子を睨んでいる。まだ自

分の空間に隠れているというのに。

(え？ え？ なんで？)

今度は花子がうるたえる番であった。やる気と共に妖気まで湧き出てしまい感づかれたのだが、花子はそれに気づくことができない。レミリアはこちらに気づいていないようだが、彼女の場合は妖気云々の前に恐怖心が勝っているというだけだろう。

「水面が歪んでる。向こうに空間ができてるわ」

「え、そうなの？ じゃああいつがいるの？」

「そのようね」

パチュリーが告げると、レミリアはさっと寝巻きのズボンをはいて友人の後ろに隠れた。パチュリーの背後から顔を出して、

「このレミリア・スカーレットに挑むとは、いい度胸ね。でも、どんな卑劣な手段を用いても私には指一本触られないわ」

「前に出て言いなさいよ。それにあなた、お尻触られたんじゃないかっただの？」

半眼を後ろのレミリアに向けてから、パチュリーは掲げた右手に炎を召喚した。花子はいよいよ自分に訪れた危機に気づいて、空間内で息を呑む。

手中の炎を揺らめかせて、パチュリーが呟いた。

「出てきなさい。それとも、トイレごと消し炭になる？」

「ちょ、まってー！」

いつぞやの寺子屋を思い出し、爆発だけは避けなければと空間を解除、花子は慌てて便器の上に躍り出た。急いだせいでかつらが大げさにずれてしまい、どういうわけか後ろ髪が前に回ってしまっている。ついでに空間解除にも少し失敗してしまい、上半身が濡れてしまった。

下半身はまだ空間の中にある。レミリアとパチュリーからは、黒く長い前髪を垂らしずぶ濡れになった赤いワンピースの少女が便器からぬるりと現れたように見えただろう。一瞬で涙目になったレミリアはおろか、さしものパチュリーもその気色悪さに後ずさりしている。

その上、中身はあの花子である。うろたえるあまり両手を伸ばして彷徨わせているのだが、それすらも紅魔館の世間知らずな少女二人にとっては不気味極まりない。

「ああ、あのその、あわわ」

うまく言葉にできず口籠る花子の声に、二人はさらに拒絶反応を見せる。レミリアはパチュリーの背から一切動こうとせず、そのパチュリーはむしる瞳を鋭く細めた。

「動かないで。焼き払うわよ」

「ままつ、ままつてまつてくださ」

狭いトイレの壁に手をかけて立ち上がるうとする花子だが、濡れた手でびちゃりと壁を抑えるその様は、もはや化け物以外の何者でもない。

謝罪をするどころか深まる誤解を解くこともできず、パチュリーが炎をさらに大きくさせた。花子が動くたびに、レミリアの顔が泣き面に歪んでいく。

手が滑って、花子はその場に転んだ。かつらがさらに大きくずれて、レミリア達からすれば妖怪が不気味に蠢いたようにしか見えなかっただろう。

レミリアとパチュリーの感情の緒が、音を立てて切れた。

「びえええええええつ！　　しゃあああくやあああああ！」
「気色悪い……！　燃え尽きなさいッ！」

吸血鬼の泣き声と魔法使いの怒声が響く。掌が滑って何度も起き上がることに失敗している花子は、視界を覆う長い前髪の間隙から赤い光が差し込むのを感じた。

「ま、待ってえええええ！」

「問答無用！」

狭いトイレで起き上がるうつつ、許しを請うためにパチュリーを見上げ

真っ赤な炎がぶつかる寸前で意識が途切れたのは、幸運だったのかもしれない。

フリルのついた洋服を着ることは、花子にとって夢であった。妖怪として生まれた頃は人間の子供達もせいぜいが小奇麗なシャツやスカートを身に着けていた程度だったが、元号が平成となり十

五年を過ぎた辺りになると、庶民の娘でも花子からすれば派手な衣服を身に纏うようになったのだ。

気に入っているとはいえ、普段の恰好は古びたもんぺとセーラー服。噂に合わせて時折赤いワンピースを着る程度という彼女にとって、平成の子供達は夢の国のお姫様のようにすら思えていた。

なので、今の花子は捉えようによっては幸せと言えるのかもされない。その手に握っているのが雑巾で、必死になって床を磨くようなことをしていなければ。

「ふう、ふう」

それこそ一国の姫君が住まうような部屋で、花子は初めて着たメイド服に四苦八苦しながら雑巾がけをしていた。寝室であるというのにこの広さ。一体どれだけの時間がかかるというのか。

「ほら、まだこっちが汚れてるわよ。しっかり働きなさいな」

豪勢な椅子に腰掛け偉そうにふんぞり返るレミリア。手にはティークップを持ち、隣の咲夜に紅茶を注がせている。頬を膨らませながらも反論せず、花子は雑巾がけを続けた。

パチュリーの業火にやられ、目が覚めた花子を待っていたのは長時間に及ぶ説教であった。ふかふかなベッドに正座させられて、咲夜から延々二時間もお小言を頂戴したのだ。時折「私のいる時にやれ」だの「全部脱いだタイミングで驚かせ」だの、どこかずれた言葉もちりほらりとあつた気がしたが。

ともあれ、説教が終わった花子は早々に紅魔館を立ち去ろうとしたのだが、大きな玄関ホールで運悪くレミリアに遭遇してしまった。彼女は強い悪魔である。逃げてもあつという間に捕まり、驚かせた

罰としてレミリアに奉仕させられていた。

「誰にも気づかれず紅魔館のトイレに隠れて、よりもよって私を驚かせるとはね。その手腕は褒めてあげるけれど、相手は選ぶべきだったわね」

「……」

短い足を組んで見下してくるレミリアである。あんなに怖がり泣いていた少女の偉そうな態度は、花子にとって面白いものではない。そもそも、妖怪が誰かを驚かすのは当たり前のことではないか。犬に噛まれたと思って諦めてほしいものだと、花子は自分を棚に上げつつ思った。

「なんで私がこんな目に」

「吸血鬼の館を選んだあなたのミスですわ」
「だって知らなかったんだもの」

咲夜に半ば助けを求めるように訴えるが、瀟洒なメイド長は笑顔を絶やさず、

「知りませんでした、は言い訳にならないわよ？ 世の中そんなに甘くないの」

「だから謝ったじゃないですかあ。もう許してくださいよ」

「そうそう、咲夜の言うとおりね。被害者は私だもの、私が満足するまで付き合うのは当然」

「そんなあ」

目尻に涙を溜めながらも、花子は雑巾をバケツでゆすぐ。

ここではもう誰かを驚かすことはできないだろう。さっさと他の

家に行くなり公衆便所を見つけるなりしたいのだが、レミリアの新しい玩具を見つけたかのような顔。当面は見逃してくれそうになかった。

「ほら花子、手を止めない。早くしないと日が昇っちゃっわよ！」
「ぐすん」

濡らした雑巾を絞りながら、花子は思う。自分だけは人も妖怪も見下したりしないようにしようと。驚かせ腹を膨れさせてくれた人には、ちゃんと感謝をしよう。

花子の吸血鬼への強制ご奉公は、その後三日間の長きに渡って続いたという。

そのさん 恐怖！幽閉された悪魔の妹！（前書き）

最強オリ主系小説が好きな方は、ちょっと不快に思われるかもしれませんが、ご注意を。

そのさん 恐怖！幽閉された悪魔の妹！

~~~~~

太郎くんへ

太郎くん、こんにちは。お元気ですか？ って、こんなに頻繁に手紙出してるんだから、そうそう変わらないよね。

私は今も、吸血鬼さんのお家にいます。ベッドもふかふかだしご飯はすごくおいしいし、メイド服っていうのも慣れてくると着心地がいいんだよ。レミリアさんは、ちょっといじわるだけれど。

もう少しここにいてもいいかなあって思い始めてただけで、今日でこの紅魔館ともお別れです。さすがにずっと驚かせないままでいると、私はトイレの花子さんじゃいられなくなっちゃうからね。

人里の外にはまだまだたくさんお家があるみたいなので、のんびり歩いて回ろうと思います。落ち着いたら、また手紙を書くからね。

そうそう、私が歩いてどこかに行くって言ったら、レミリアさんもパチュリーさんも、みんな『飛んでいけばいいのに』って言うんだよ。最初は冗談だと思ってたけど、幻想郷の妖怪は飛ぶのが当たり前前みたい。どころか、人間まで飛ぶことがあるんだって！

私もいつか、空を飛べるようになっていたいな。できるようになった

ら、太郎くんにも教えてあげるね。

今回は、何かに気をつけてって言わなくてすみそう。そろそろ新しい家を探しに出発です。

次におたよりする時には、上手に人を驚かせているといいな。

それじゃあ、またね。お元気で。

花子より

~~~~~

紅魔館の客間。ベッドと机しかない質素な部屋で一生懸命鉛筆を動かしている花子の背後に回り、レミリアは彼女の手元を覗き見た。

手紙を書いているようだ。なるほど、太郎という友人にあてたものらしい。男の名前であることは、西洋生まれのレミリアでもすぐに分かった。

カリカリと鉛筆の芯が紙面をなぞる音だけが響く中で、気取られぬようにそっと花子の耳元に近づき、レミリアはぼそりと呟いた。

「相手はボーイフレンドかしら？」

「ひゃっ!？」

面白いほどに飛び上がり、花子は身を挺して手紙を隠した。首か

ら顔から、耳までも真っ赤になってしまっている。

「なななんですか、なんで見てるんですか！　なんでここにいますか！」

「あら、ここは私の館だもの。この紅魔館が主、レミリア・スカレットが客間にいたとしても、誰にも文句を言われる筋合いはないわ」

「だ、だからって手紙を覗くなんて！　そういうことはしちやいけないうって教わらなかつたんですか！？」

「教わったわよ。ていうか、常識としてそのくらい知ってる。馬鹿にしないでよね」

ふふんと鼻を鳴らして、レミリアは腕を組んだ。恥ずかしさから怒りへとシフトチェンジしたらしい花子が、腕力では雲泥の差があるレミリアへと掴みかかる。

「じゃあなんで覗いたの？　ダメだって分かっているのに、なんでそういうことするの！？」

もはや花子の口調は、姉妹ゲンカに負けた妹のようになっていた。未だに残る羞恥心をなんとか憤慨に変えているが、見透かしているレミリアはしてやったりと口の端を持ち上げた。

「私は悪魔だもの。悪いことだって言われたら、やらずにはいられないわ」

「レミリアさんの捻くれ者！　へそ曲がり！　天邪鬼！」

思いつく限りの悪態を口にする花子。数日間を過ごすうちに分かったことだが、彼女は相手が目上の者であったり実力で突き放されていても、媚を売るようなことをしない。

レミリアとしては心地よさすらも感じる少女である。なので、彼女が時折自分に食って掛かるのも、楽しみの一つとすら思えるのだ。肩を上下させて息をしている花子に、レミリアはくすりと笑った。

「ふうん、そういう口の聞き方をするの？ この三日間世話してやったのは、誰だったかしらね」

「頼んでいないもん。約束通り、今日で出発しますからね」

唇を尖らせながら、花子が手紙をしまう。ちらつと見た内容からして幻想郷の外にいる者への手紙だろうが、どうやって届けるつもりなのか。

恐らく届かぬだろうと、レミリアはばれない程度に溜息をついた。知らぬが仏と思ったわけではないが、花子にそれを言うのはなんとなく憚られた。

メイド服を脱ぎ捨てていつものセーラー服ともんぺに着替えている花子は、いつでも出立できるようにだ。彼女と過ごした三日間は新鮮だったし、花子はとてもからかいやすかった。咲夜の場合は、レミリアがからかわれることの方が多いので、少し名残惜しくもある。

何より、花子には幻想郷の妖怪にありがちな喧嘩っ早さがまったくなかった。初対面の相手に弾幕をぶちまける妖怪その他の少女とは明らかに違う雰囲気。咲夜などは「やまとなでしこの原石」と言っていた。

やまとなでしこがどういったものなのかレミリアには分かりかねたが、このまま成長すれば花子がしとやかな女性になるのだろうなという想像はできる。妖怪の彼女が成長するかと聞かれれば、五百年近く体系が変わらないレミリアはどちらにも答えられないのだが。

からかいがいのある花子をこのまま帰すのは、あまりに惜しい。どうしたものかと考えていると、ふと一つの悪戯を思いついた。

そろそろ、妹に新たな友人ができてもいいだろう。にやりとしてから、レミリアは大げさに声を上げた。

「ああいけない、忘れていたわ。私、地下に本を置いてきちゃった。ううん、困ったわ。あの本は手元ないとすごく困るのよ。ああ困ったわ」

リュックを開けて忘れ物がないか確認している花子の手が、止まる。白々しさが全開なレミリアの声へとゆっくり振り返り、

「……」

じつとりとした視線を向けてくる。三日間のうちにだいぶ学習したようで、レミリアが何かを企んでいることを見抜いているのだらう。

ならば、わがままに付き合わなければ解放してもらえないことも学んでいるはずだ。レミリアは続けた。

「あの本は私の先代の叔父様の長男の奥様の娘のものなのよ。先代の叔父様の長男の奥様の娘から受け継いだ家宝……。もし失くしたりなんかしたら先代の叔父様の長男の奥様の娘に祟られてしまうわ。なにせ先代の叔父様の長男の」

「わー！ 分かりましたからいちいち全部言わないでください！ というか、先代の叔父様のお嬢さんなんて、もうほとんど他人じゃないですか」

「先代の叔父様の長男の奥様の娘、よ」

「どうでもいいです。まったくもっ」

嘆息を漏らして荷物を置き、花子は顔を上げた。

「それで、一番下の階でしたよね。どんな本なんですか？」

「そうこなくてはね」

うな垂れてかぶりを振る花子に、レミリアは不適な笑みを浮かべるのだった。

パチユリーの寝室や大きな図書館の前を通り過ぎ、花子は最下層へ続く階段の前に辿り着いた。

赤い装飾が目立つ館はどこも派手な印象だったが、この階段は雰囲気が違う。綺麗な壁紙は途切れてなくなり、ごつごつとした石の壁が暗闇へと延びていた。壁に点々とかかっている燭台の火は、明かりとしての役割を果たしているとは言い難い。

下から漂ってくる不気味な空気に、花子は息を飲んだ。わずかなかび臭さと初夏であるのに不自然なほど冷たい肌触り。階段を下りずとも、ただの地下室ではないということは否応無しに分かってしまっ。

こんなところに、本当に本があるのだろうか。もしかしたらレミリアが自分を閉じ込めようとしているのでは

「……さすがに、そんなことはしないよね」

頭を軽く叩いて、考えを押し出す。レミリアは意地悪だが悪人ではないというのが、花子の印象であった。

胸元をきゅつと掴んで、一歩ずつ階段を下りていく。その度に空気の温度が冷たくなる気がするのは、きつと気のせいではないだろう。少し寒いくらいだと感じているというのに、汗は引く気配を見せない。

燭台の揺れる炎は、まるで花子を地下へと誘っているようだ。どうしてか止まることは許されない気がして、唇を少しだけ噛みながら歩を進めた。

長い階段をようやく下りきると、思ったよりも明るい廊下が待っていた。とはいえ、壁も床も氷のように冷えた石でできているので、怖いことに変わりはない。

後ろを振り返れば階段があるだけの一本道で、どうやら部屋は行き止まりにある大きな扉の一室だけらしい。目的の本があるとしたら、あそこだろう。

ここまで来たら、もう引き返すという選択肢は花子の中から消えていた。自分のもんぺが擦れる音だけが聞こえ、むしろそれだけが励みであった。

部屋の前につき、扉を見上げる。赤い大きな扉は、廊下の不気味さをいっそう引き立てている。

勇気を振り絞って、花子はドアノブに手をかけた。力を込めて押すと、扉は大仰な音を立てて花子を室内に招き入れた。

かび臭くほの暗かった廊下から一転、ふんわりとした甘い香りと優しい光が花子の全身を包み込む。

「わあ……」

思わず声を上げていた。魔法の明かりで照らされている部屋は、たくさんのぬいぐるみと可愛い壁紙に彩られている。

つい先ほどまで歩いてきた岩穴が如き廊下からは想像もできぬほど、メルヘンチックな部屋だった。

お姫様の部屋みたいだという感想はレミアアの部屋にも抱いたが、こちらはまるでおとぎ話の中に飛び込んだような心地すら覚えた。

珍しげに部屋を眺めつつ、件の本を探す。とはいえ、花子の好奇心は室内のあらゆる装飾品に奪われてしまっていた。思考回路から「本」という文字が薄れていき、その手は自然とウサギのぬいぐるみに伸びていく。

「可愛いなあ、これ」

思わず微笑んで呟いた、その時だった。

「あなた、だあれ？」

突然聞こえた柔らかな少女の声に、花子は驚いてぬいぐるみを落としかけた。

振り返ると、やはり少女がいた。レミアアがかぶっていたものによく似ているナイトキャップからは、ブロンドのサイドテールが覗いている。瞳は赤く、顔立ちもどこことなくレミアアに似ていた。

レミアアよりは少しだけ幼いか。花子は彼女が紅魔館の主の妹だろうと推測した。

赤を基調としたミニスカートのドレスは、部屋の装飾も相まって

少女をさらに現実離れさせている。見とれてしまいそうな光景だが、しかし花子は彼女の背に生えている羽を見つめていた。歪んだ木の枝のようなものに、七色の宝石がぶら下がっている。

じつくりと凝視してしまっている花子に、少女が首を傾げる。

「なあに？ 私、どこがおかしい？」

「うえ、ううん！ ごめんね。羽が綺麗だから、つい」

「ふうん。綺麗なのかな、これ」

羽の宝石をつつつきながら、少女はさして興味なさそうに呟いた。こちらを向いて、

「それで、あなたは誰？ 人間？」

「あ、ごめんなさい。私は御手洗花子って言います。お化け……妖怪、だよ」

外では幽霊ということに通っている花子だが、正真正銘生粋の妖怪である。人間を驚かすには幽霊と名乗ったほうが都合がよかったのだが、妖怪同士となれば話は別だ。

正直に自己紹介をすると、フランドールは大きな瞳をぱちくりさせながら、

「花子。分かりやすい名前だね」

「うん。自分でもそう思う」

頬を掻きつつ苦笑すると、少女も愉快そうに口元を抑えた。

「おもしろいね、あなた。……私はフランドール。フランドール・スカーレットよ」

やはり、レミリアの妹であるらしい。しかし、花子は彼女の姓に
さして興味を抱かず、少女の名を呟く。

「フランドール……」

繰り返して、花子はその響きの美しさに感動した。自分の安直な
名前とは何もかもが違う、それこそおとぎ話のヒロインにふさわし
い名前だ。

羨ましさを覚えつつ、花子は手に持っていたぬいぐるみを置いて
頭を下げた。

「勝手に入っちゃってごめんなさい。レミリアさんに本を探すよう
に頼まれてるの」

「本？ ああ、あの漫画ね」

先代の叔父の云々は、やはり嘘だったようだ。予想はできていた、
というか確信していたので、今更驚く気にもならないが。

「後でお姉さまに返しておくから、花子が持っていかなくてもいい
よ」

「え、でも」

「お客さんにやらせるわけにはいかないもん。それよりねえ、一緒
に遊ぼうよ」

につこりしながら、フランドールが花子の手を取った。早く他の
家に行つて誰かを驚かせたい気持ちはあったが、彼女の笑顔を裏切
ることは、花子にはできなかった。

急いで誰かを驚かさなければ死ぬということもなく時間が押して

いるわけでもないので、頷くことにする。

「いいよ。何して遊ぶ？」

「うーん、弾幕ごっこかな」

「ダンマク？」

聞いたことのない遊びに、きょとんとした顔になる。すると、これにはフランドールが驚いたようだった。

「知らないの？ 幻想郷の妖怪なの？」

幻想郷には、まだまだ知らない常識が山ほどありそう。申し訳なさそうに俯いて、花子は呟く。

「ごめんね。私まだ幻想郷に来て一月も経ってないの」

「あら、そうなんだ。じゃあ弾幕ごっこはできないねえ」

フランドールが眉を八の字に歪めた。どうしたらいいものかと唸りながら、首を傾げている。

花子は困った。なにせ初対面なので、フランドールの価値観や趣味が分からない。鬼ごっこなど体を使う遊びは、彼女がレミリアの妹であると気づいてしまった以上提案する気にもなれなかった。

「どうしようかなあ。なにしようかなあ」

考え込むフランドールを見ているうちに、花子はふと気がついた。彼女の背後にあるベッドの上に、掌に乗る程度の布製の玉がいくつか転がっている。

まるでフランドールの羽のようにカラフルなそれは、お手玉のようだ。客室に置いてきたリュックにも四つほど入っている、花子に

とって馴染み深いおもちゃであった。洋風の部屋には似つかわしくないようにも思えたが、色合いのおかげですっかり馴染んでいる。

「ねえねえ、フランドールちゃん」

「フランドールでいいよ。どうしたの？」

「あれ、貸して？」

指差すと、フランドールはこちらとお手玉を交互に見てから、とりあえず言われた通りにお手玉を持ってきてくれた。受け取った数は三つ、花子がかもつとも得意とする数だ。

「それ、魔理沙がくれたの。でもうまくできなくて、すぐやめちゃった。花子是可以るの？」

「それなりに。こっ、よっ」と

右手に三つを掴み、そのうちの一つを上に向けて。フランドールの目がそれを追った。ついで二つ目を空中に放り投げ、直後に空いた手で一つ目を掴む。その頃には二つ目が落下に入っていて、素早く三つ目を放り同時に左手の一つ目を右手に受け渡す。

「ほいつ、ほいつ、ほいつ」

一連の動作をテンポ良く繰り返すと、お手玉を追ってくる回っていたフランドールの瞳が輝いた。眩しいほどの笑みを浮かべて、

「すごいすごい！ なにこれ、どうやってるの？ 魔法？」

「魔法じゃないよ。練習すればフランドールもできるようになるよ」

空中のお手玉を全て受け止めて、花子はそのうちの二つをフランドールに手渡した。両手にお手玉を握った彼女は、しかし途端に不

安そうな顔で俯いてしまう。

「私にもできるかなあ」

「大丈夫だよ、二つなら簡単なもの。教えてあげるから、やってみようよ」

整ったフランドールの顔を覗き込む。西洋人形のような少女はしばらく考え込んでから、まるで一世一代の大決心をするかのように頷くのだった。

吸血鬼という悪魔がどれほどの能力を持っているかを、花子はよく知らない。そもそもが子供を驚かす妖怪である上に、人間からの認識は亡霊であった。科学に浸っている外の世界では退治されることもなく、戦いなどというものは本や新聞の世界で起きていることだった。

なので、目の前のフランドールにあらゆるものを破壊をする力があることなど知らないし、また身体能力から魔力までずば抜けていることなど分かるはずもない。

ただ分かることといえば、フランドールという少女は世間知らずで人懐っこく、姉に似てわがままであり姉よりよく笑うということだろうか。

あれから数時間、お手玉で遊んでいた。カラフルな玉がポンポンと宙を舞う。数は、二人合わせて六つ。

フランドールの成長は目覚ましいものがあつた。最初こそ苦戦していたが、十分も立てば二つのお手玉を自在に操れるようになった。

それから練習を続けて、今はぎこちないながらも三つの玉を使っている。

花子が三つでお手玉をできるようになるまでは、かなりの時間がいったのだが。少しだけ嫉妬を覚えたが、フランドールの笑顔を見ているとどうでもよくなってしまうた。

さすがにひたすらお手玉というわけにもいかず、二人はたまに雑談を挟んだりもしている。花子が外の世界からやってきたばかりという話に、フランドールはとても興味を示していた。

「じゃあ、外の世界では弾幕ごっこかやらないの？」

「全然やらないよ。ぽこぺんとかドツチボールとか、ケイドロとか。女の子は本を読んだりシールを交換したり、好きなアイドルの写真を切り貼りしたり。時々トイレに隠れてケータイをいじってる子もいるよ」

「ううん、ほとんど分からないや。でも、いっぱい遊びがあるのね。外の世界は楽しそうで、羨ましいな」

何も幻想郷に弾幕ごっこしかないわけではないだろうが、フランドールはどういうわけか弾幕ごっこ以外の遊びをほとんど知らなかった。せいぜいが読書とぬいぐるみ遊びくらいか。

「ねえフランチちゃん。お外には出ないの？ 他の妖怪の子と遊んだりすれば、色々教えてもらえるんじゃないかな」

「そうだねえ。そうかもしれないけれど、私は外に出してもらえないのよ」

小さく溜息をつくフランドール。その顔に悲しみや苦しみという色はなく、苛立ちだけが前面に現れていた。

「レミリアお姉さまが、フランは外に出ちゃだめって言うの」

「なんで？」

「私の力が危ないってのもあるだろうけど、あいつは私を子ども扱いしてるのよ」

なにやら込み入った話になってきて、花子はお手玉を動かす手を止めた。同じように遊んでいた玉を受け止めてから、フランドルが天井を見上げる。魔法の光に照らされている部屋の天井はやはり無機質で、空には届きそうもなかった。

「外には『サイキョーオリヌシ』っていうこわーい化け物がいて、私を執拗に狙ってグチャグチャにしちゃうんだって」

「化け物……。ううん、妖怪だらけの幻想郷で化け物って言われてもねえ」

「だよね。私もそう思う。しかもこの化け物がさあ、またおかしいんだよね」

おもむろに立ち上がって、フランドルはベッドに腰を下ろした。そのまま後ろに倒れこんでから、花子に向かっておいでおいでをする。

素直に従ってフランドルの隣に座ると、彼女は倒した体を起こしてから続けた。

「白銀の髪に紅蓮の瞳を持っていて、ちょっと女顔だけどとんでもなく整った顔だそうよ。神の過ちで与えられた究極の力とどんな天才も舌を巻く頭脳を持ち、時空すらも切り裂く漆黒の魔剣を携える戦士なんだって。自分だけを正義と信じて、人の話を聞かずに誰彼構わず攻撃してはお説教するらしいの。お説教された相手はそいつにベタ惚れになってひれ伏してしまうんだって」

「へ、へえ……。なんかすごいね。すごいとしか、言えないね」

花子は自分の笑みが引きつるのを感じた。住んでいた小学校の男子がこつそりノートに書き綴っていた『超時空最強究極勇者カイゼル』のようなものだろうか。あれを見たときの衝撃は凄まじく、トイレに作った空間に駆け込んで笑い転げたものだ。

「ホントにすごいよね、褒め言葉じゃないほうの意味で。他の妖怪達は家来にするくせに、私だけは許せないからってグチャグチャの挽き肉みたいにしちゃうんだって。なんで私なのかしらね、人間を直接襲ったことなんてないし、料理になった人間しか食べたことないのに。」

第一、人間を食べるのが悪いことだっていうのなら、人が鳥を食べたりウサギを食べたりするのも悪いことじゃない。そんなことを言ったら、何も食べられなくなってしまっわ」

やれやれ下らぬと苦笑して、フランドールは肩をすくめる。

「全ての能力を反射する力を持っているから、サイキョーオリヌシにはフランのキュツとしてドカーンも効かないのよーなんてお姉さまは言うけど、誰が信じるっていうのかしら。どうせ作るならもう少しマトモな化け物を作ってほしいものだわ。与太話もいいところだよ」

膝に頬杖をついて散々愚痴ったあげく、レミリアが作り出した史上最強の生物へ妹直々に止めをさした。

「そんな奴が実際に存在したとしても、暢気な幻想郷にいる意味なんてないのにね」

「ま、まあね」

幻想郷は平和である。非常に危ういバランスではあるが、基本的にはのぼのとした世界だ。しょっちゅう幻想郷を揺るがす程の異変が起きてはいるものの、大概が巫女と面白半分に関首を突っ込んだ連中によって解決されてしまう。

力あるものが正しいなど、エゴと呼ぶことすらおこがましい愚行であると花子ですら分かる。レミリアは必死に考えてその化け物を作り上げたのだろうが、花子としても疑問を抱く部分が多かった。というよりは、疑問しか残らない設定である。

レミリアにより生み出され妹のフランドールにより全否定されたサイキョーオリヌシ氏に同情しつつ、花子は話題を変えた。

「じゃあ、フランちゃんはずっと家にいるの？」

「うん。たまに魔理沙が遊びに来てくれるわ。白黒の魔法使い、見たことない？」

言われ、花子は背筋に冷たいものが走るのを感じた。魔理沙という名前の響き、黒白の魔法使い。真夜中の寺子屋で浴びた真っ白な光が脳裏に蘇る。

額から冷や汗を流す花子を見て、フランドールは何があったかを悟ったようだ。ケラケラと笑いながら、

「花子、魔理沙に退治されたんだ？」

「う、うん。人里で襲っちゃいけないって知らなくて、あそこの寺子屋で子供を驚かしてたんだけど……」

「魔理沙は強いもんね。私でも負けちゃうことがあるもん」

「うう、三人がかりならなおさらだよね」

ぼつりとこぼしたその言葉に、フランドールが笑みを消してこち

らを向いた。

「魔理沙だけじゃなかったの？」

「霊夢さんと早苗さんっていう、二人の巫女さんも一緒にいたよ」

「……それは、ご愁傷様だね」

頭を撫でてくれるフランドールに目を細め、彼女の背後　枕元
にある目覚まし時計に目がいった。

正午までには出ようと思っていたのだが、時刻はすでに三時を回っている。楽しい時間はあっという間にすぎるもので、もう少しフランドールと遊びたい気持ちもあったが、花子は申し訳なさそうに新たな友人へ頭を下げた。

「ごめんね、フランちゃん。私そろそろ行かなくちゃ」

「ええっ、もう行っちゃうの？」

フランドールは撫でていた手を止めて、花子の手を取った。

「もう少しいてもいいじゃない。もつと遊ぼうよ」

「そうしたいけど、人間を驚かさないといけないの。また遊びにくるよ」

半ばお願いするように言うと、分かってくれたらしい友人は上目遣いに呟いた。

「絶対来てね。約束よ？」

「うん、約束」

小指を差し出すと、フランドールも自分の小指を絡めてきた。二度振って誓いとし、花子は自分の荷物のもとへと向かった。

リュックを背負って、名残惜しそうな視線を向ける友人に手を振る。

「ばいばい、またね」

「うん、またね」

小さく手を振り返しながらも、フレンドールは寂しそだった。家から出してもらえないらしい彼女にとって、遊びに来てくれる友達はとても貴重なのだろう。

扉が閉まり、向こう側からお手玉で遊ぶ音が聞こえてきた。住む学校を変えて友達がいなかった頃、トイレに作った空間で一人でお手玉をしていたことを思い出す。とても寂しく、つまらなかった。

幻想郷で落ち着くことができれば、今度はもっと長く彼女と一緒にいよう。そんなことを考えながら、花子は地上に向かって歩き出す。

ほの暗くかび臭い廊下を怖いと感じることは、もうなかった。

「お世話になりました」

無理矢理留まらせていたのはこちらだというのに、律儀に頭を下げる花子。幻想郷で生きていくには少し素直すぎるかとも思うのだが、そのうちここでのやり方も身につくだろう。レミリアは咲夜が差す日傘の下で微笑んだ。

「あなたはよく働いてくれたわ。本当にうちのメイドにしたいくらい」

「そうですね。妖精達とは比較にならなかったわ」

咲夜にまで褒められて、花子が恥ずかしそうに頭を掻いた。他の人間や妖怪ならばもう二度とやるものかと吐き捨てそうなものだが、まったく純朴な少女である。紛れてしまえば人里の子供と言われても分からないだろう。

リュックを背負いなおして、花子が顔を上げた。

「レミリアさん、お願いがあるんです」

「なにかしら」

訊くと、彼女は少しだけ躊躇ってから意を決したように、

「フランちゃんのこと、なんですけど」

「……言っただらんない」

「あ、あの……フランちゃん、外に出ちゃいけないんですか？ もっとたくさん友達できたほうが、フランちゃんも楽しいと思うの」

言われるだろうとは思っていた。フレンドールを隔離しているのは、確かにレミリアが過保護であるという理由もあるのだが、それ以上に複雑な事情があった。花子の言葉は、レミリアからすれば不躰な詮索とも言える。

とはいえ、彼女をフレンドールのところへ差し向けたのはレミリアであるし、当初の目的通り友達になってくれたのだから、花子を責める気にはならなかった。

魔理沙と霊夢が乗り込んでから、フレンドールもだいたいぶ落ち

着いてきている。そろそろ外に出してやってもいいかもしれないが、なにせ五百年近くも閉じ込めてしまったのだ。ゆっくり慣れさせる必要もあった。

真剣な眼差しでじつとこちらを見つめる花子に、レミリアは苦笑を浮かべた。

「……考えておく。ただ、色々と事情があるのよ。すぐにはいかないから、また遊びに来てあげてちょうだい」

「そう、ですか。分かりました」

納得してくれたのかは分からなかったが、いつか彼女にも理解してもらえることだろう。レミリアは努めて笑い、

「この三日間、本当に楽しかった。再会を楽しみにしているわ」

「うん、ありがとございます。必ずまた来ます」

もう一度お辞儀をして、花子がこちらに背を向けた。

大きな街道に出るまでの間、門番の美鈴に彼女の道案内兼護衛を頼んである。幻想郷の妖怪達は喧嘩っ早いからという理由だが、我ながら人が良くなったものだ。レミリアは思った。

美鈴が待つ門へと歩きながら、花子は上半身だけで振り返りながら告げる。

「それじゃあ、さようなら」

「ええ、さようなら」

門で美鈴と合流し、彼女はとうとう行ってしまった。再び住居や驚かせる人間を探すと言っていたので、当分は遊びに来れないので

はないだろうか。

小さくなっていく花子の背中を見送りながら、レミリアは何気なく呟いた。

「私のこと、友達だと思ってってくれてるのかしら」

「ふふ、散々意地悪しましたからね」

ちゃっかり聞いていたらしい咲夜が笑った。少しだけ唇を尖らせ、

「でも、一緒におやつを食べたり遊んだりもしたわ」

「そうですね。あの子もなんだかんだで楽しんでいたみたいです、きつとお嬢様を友達だと思ってくれていますよ」

「そうかしら。そう思う？」

「ええ、もちろんですわ」

笑顔で頷かれて、レミリアはあつという間に上機嫌になった。妖精メイドや来客には高飛車な態度を取る彼女だが、咲夜の前ではそこらの子供と大差がない。

自慢げな顔で踵を返し、レミリアは館へと向かった。隣を歩く咲夜へと、小さな胸を張る。

「花子もラッキーね。このレミリア・スカーレットと友人になれるなんて、これほど光栄なことはないものね」

「ふふ、おっしゃるとおりですわ」

驚かされて酷い醜態を晒したことなど、もはやレミリアの中でどうでもいいことになっていた。花子は彼女にとって、すっかり大切な友人に昇格している。

次に会うときは悪戯はせずに、フランドールやパチュリーも混ぜて遊ぼうと考えながら、レミリアは紅魔館の扉を開けるのだった。

そのさん 恐怖！幽閉された悪魔の妹！（後書き）

紅魔館に乗り込んできたオリ主が出された飯食って過ごしてるだけのフランちゃんをミンチ寸前までSYUKUSEIした拳句に「今まで殺した人間の数を言ってみる」的な説教をするお話をよく見かけるので、ご本人に鬱憤を晴らしてもらいました。一番好きなキヤラだったので、ついカツとなつてというやつです。

ドストレートな表現になつてしまいましたが、正直な気持ちでもあります。不快に思われた方は申し訳ない。

最強オリ主は嫌いじゃないですよ、いやホントに。

そのよん 恐怖！人妖店主の不気味な道具屋！

~~~~~

太郎くんへ

こんにちは。私はいつも通り、元気です。幻想郷に来てから外を歩くことが増えたけれど、旅というのも慣れると楽しいものなんだよ。

レミリアさんの家を出て、美鈴さんに大きな道まで案内してもらいました。湖で私を襲った子供たちは、妖精だったんだって！幻想郷には不思議なことがまだまだありそうです。手紙を書くのが楽しいから、とても嬉しいよ。太郎くんにも楽しんでもらえていいいな。

ところで、太郎くんはパソコンの作り方を知っていますか？小学校で子供と先生が使っているところを見て、夜中にこっそり二人で遊んだりしたけど、作り方なんて考えたこともなかったね。

幻想郷には時々外の道具が落ちていることがあるそうなのだけれど、こっちの人は使い方どころかそれが何なのかも分からないことが多いのだそうです。パソコンもそうだけど、ケータイやテレビ、昔のゲーム機なんかもあるみたい。

使い方はそれなりに説明できたのだけど、作り方を聞かれて困っ

てしまいました。改めて考えると、使えるだけで作り方をまるで知らないなんて、確かにちよっとおかしいよね。

もしもパソコンの作り方を知ることがあつたら、私にも教えてください。みんなに自慢しちゃうんだ！

それではまた、お元気で。

花子より

~~~~~

夕暮れを過ぎた霧の湖は、昼ほど霧は満ちていなかった。

花子が訪れた時は、湖でも稀に見る濃霧であつたらしい。普段も視界は悪いが歩くだけでずぶ濡れになることはない、隣を歩くチヤイナ服の少女、紅美鈴が教えてくれた。運が悪かつたということだろう。

湖で出会つた自分より小さな空飛ぶ少女達は、妖精だつたらしい。確かに見た目は本で読んだ妖精のそれだったが、まさかそのものずばりとは思ひもしなかつた。

妖精達は美鈴にもカラフルな妖力弾を撃つてきたが、美鈴は呆れながらも相手をし、彼女らを追い払つた。悪態をつきながらも楽しそうな妖精達を見て、これがフランドールの言っていた弾幕ごっこであるのだと気がつく。同時に、練習しなければ自分には当分でき

そうもないなど、地下で退屈しているだろう友人に胸中で詫びた。

今はもう霧の湖を抜け、街道へ続く並木道を歩いている。日は落ちかけているが、妖怪である花子にとって夜はそれほど恐れるものではない。

ただ一つ心配なのは、誰かに弾幕ごっこを仕掛けられるかもしれないことである。美鈴曰く、相手が妖怪ならば容赦なくケンカを売ってくるとか。丁重に断れば許されることもあるらしいので、花子はそこに賭けるしかないのだ。

自然にできたという割りには綺麗な並木道を歩きながら、花子は隣を歩く美鈴を見上げた。彼女は花子から見たら、とても背が高い。

「美鈴さん、案内してもらっつといてあれなんですけど、門番はいいんですか？」

花子が紅魔館に侵入した時は、大胆にも外壁を無理矢理登ったので、美鈴とは会っていなかった。咲夜とレミリアから、彼女が紅魔館の門番であると聞いたのだ。

「ん？ ああ、大丈夫ですよ。紅霧異変の後から、紅魔館は人を招き入れることが増えてますから。最近はお出迎えするためにいるような立場ですし、お嬢様も『見張りというよりも挨拶係』なんて言うんですよ。夕方からは来客も少ないので、ちょうど暇になるところだったんです」

「ならいいんですけど……。壁をよじ登って忍び込んだ私が言うのも変ですけど、泥棒とかは入ってこないんですか？」

「入ってきますよ、白黒の魔法使いみたいな恰好をした泥棒が」

魔理沙だと、花子は確信した。館に閉じこもっているフランド

「ルも知っていたし、あんな服装を好む者はそうそういない。間違いないだろう。」

とはいえ、美鈴の顔に嫌悪感はなく、むしろ楽しそうである。侵入されて困るというわけではないらしい。理由は、美鈴本人が教えてくれた。

「でも、誰も怒らないんです。なんだかんだでお嬢様や妹様とも仲がいいですからね、魔理沙は。パチュリー様も、嫌そうな顔しながらお茶を淹れたりするくらいですし」

泥棒に入るのに悪人と思われない魔理沙。なんともおかしな話だと思っただが、幻想郷だから仕方ないと無理矢理に納得した。

夏も近いからか、日は沈みきることを拒むように花子達の影を長く伸ばしている。空を彩る鮮やかなオレンジは東にいくにつれて深い藍色と混ざっていき、雲は二つの色を同時に受けて、幻想郷の夕暮れは神秘的な色合いを見せていた。

まるでフランドルの羽みたいだ。なんとなくそう思った時、花子は自然に美鈴へ訊ねていた。

「美鈴さんは、フランちゃんがどうして閉じ込められてるか知ってますか？」

「妹様、ですか？ ええ、まあ一応は」

立ち止まって頷く美鈴。心に浮かんだ疑問は、もう止めることができなかった。

「フランちゃん、悪い子じゃないですよ。どうして地下に閉じ込め

「られないんじゃないんですか？」

「……あー……」

鬼気迫る口調に、美鈴は頭を掻きつつ言葉を探している。説明を避けているというわけではなく、何から話せばいいのかという感じだ。

あまりに真っ直ぐ見つめる花子に、彼女はかぶりを振って溜息をつく。

「花子さんは、妹様とお友達に？」

「はい。地下で会って、一緒にお手玉をしました」

「……そうですか。妹様が心を許された人なら、教えてあげてもいいかな」

再び歩き出す美鈴を追いかけて、その隣に並ぶ。足の長さもまるで違うので歩幅が合わないが、彼女は花子に歩調を合わせてくれていた。

さきほどまでの垢抜けた空気から少しだけ神妙な顔になって、美鈴が続ける。

「妹様には、『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』があります」

「破壊……ですか」

「ええ、破壊です。全てのものには最も緊張している『目』という部分があるそうで、妹様はそれを自分の手中に移動させることができるのです。それを握りつぶしてしまえば、どんなものでも壊れてしまう。石も木も鉄も、隕石までも。例えそれが、人や妖怪であっても」

「……」

美鈴はフランドールと仲がいいのだろうなと、花子は直感した。語られる言葉の節々から、痛ましいと思っっている心が伝わってくるようだ。

「花子さんが仰るとおり、妹様はとてもいい子です。あまりにも素直で、純粹すぎます。それ故に、あの力を簡単に使ってしまう。」

幻想郷は妖怪の世界ですが、バランスをとっても大切にしています。誰か一人が突出し暴れてしまえば、幻想郷は壊れてしまう。あるいは、妹様が何かの拍子に幻想郷を破壊してしまうことだってあるかもしれません」

「そんなこと」

「可能性の問題です。幻想郷にはいろんな能力者がいますから、フランドールお嬢様だけが危険というわけではないのですが、妹様の場合、無垢のあまりにあらゆるものを破壊する危険があるんです。そうやってしまえば、妹様は幻想郷で生きていく資格をなくしてしまう。」

一緒にお酒を楽しんだ時、レミリアお嬢様は寂しそうに言っていました。『幻想郷ならフランドールも外に出られると思っただのに』と私は外でお嬢様達がどういう暮らしをしていたかは知りません。でも、好きで閉じ込めているわけじゃないということは、分かります」

知らないうちに、花子は俯いていた。あの眩しい笑顔を浮かべるフランドールに、そんな力があつたなんて。少しだけ怖いと思っってしまったことの罪悪感もまた、心を締め付けてくる。

一緒に遊ぼうと誘ってくれたフランドールがなにもかもを破壊してしまうかもしれないなど、やはり花子には信じられなかった。それに、何よりも。

「閉じ込めてるだけじゃ、何も変わらないですよね」

「……」

美鈴は答えなかった。だからというわけでもないのだが、花子の口は堰を切ったように言葉を紡ぎだす。

「だって、そうじゃないですか。誰かに怒られるのが怖いとか迷惑をかけたくないとか、そんな理由で閉じ込めてたら、いつまでたってもフランちゃんは変わらないと思います。もっと、もっと色々な人と出会えば、もしかしたら」

「お嬢様だって」

遮るような美鈴の声に、口が止まる。そちらを見れば、彼女は先ほどよりも藍色が強くなった空を見上げていた。背が高くて顔は見えなかったが、悲しそうな雰囲気伝わってくる。

花子は自分がとんでもないことを言ったのではと思ったが、美鈴は怒っているわけではなく、むしろ優しい声音で囁くように言った。

「お嬢様だって、妹様を外に連れていきたいのです。魔理沙や霊夢だけじゃなく、もっとたくさんの方達を作ってほしい。もっと色々なことを知ってほしいと思っておいでです。」

妹様を誰よりも愛していらっしやるのは、咲夜さんでも私でもパチュリー様でもなく、花子さんでもなく……。たった一人の肉親である、レミリアお嬢様なんです」

「……」

「妹様は、ご自身の意思で館に留まっていますよ。自分の能力が誰かを傷つけ壊してしまい、結果的にレミリアお嬢様が傷つくことを恐れているのです。時々出してくれと暴れるのだって、あの方にとってはちよっとした駄々にすぎません。」

レミリアお嬢様もフランお嬢様も、お互いの気持ちを理解しあっているのです。お二人は、本当に仲がよろしいのです」

何も言えなかった。美鈴の言うことは理解できたが、それでも心が幼い花子は納得することができずにいる。

慥然とする花子を諭すように、美鈴は続けた。

「そう見えないかもしれませんが……お嬢様は、とても優しく温かいお方なんですよ。ただ、少しだけ不器用で、吸血鬼だという自尊心に邪魔されてしまっているだけで」

徐々に眩きに近くなる声。歩き続ける美鈴の声は、ともしれば風の音に掻き消されてしまいそうだ。

並木道が途切れ、馬車や牛車も通れるだろう大きな街道へ出た。

ここから先は、一人で民家を捜すことになる。

どう声をかけていいのか分からずに戸惑っている花子に、美鈴が振り返る。逆光で見えにくかったが、花子には彼女がどこか苦しいな笑顔を浮かべていることが分かった。

花子に向かって、美鈴は深々と頭を下げた。

「どうか……どうかお嬢様を責めないであげてください。どうか、お嬢様を嫌わないであげてください」

どっぴりと日も暮れ、人間ならば視界を殺されているだろう街道を歩きながら、花子は何度目になるのか分からない溜息をついた。

別れの挨拶はなんとか明るくできたものの、美鈴には辛い話をさせてしまった。知らなかったから仕方ないという言葉で片付けるには、あまりにも複雑な事情だ。

生まれた時から小学校で過ごし、知恵も思考も子供に近い花子であつても、レミリアとフランドールが抱えている問題に首を突っ込むべきでないことくらいは分かった。

美鈴にレミリアを嫌わなくてくれと言われてしまったが、彼女を嫌うつもりは毛頭ない。むしろあの三日間で一番話したのはレミリアであるし、花子にとって彼女はもう友と呼んで差し支えない存在だ。

星空を見上げてぼうつと歩いていたが、もはや自分が考え込んでも何かが変わることはない。ぶんぶんと頭を振って、

「よし。今度行ったら、二人とたくさん遊ぼう」

それが、花子にできる最良の選択であつた。

気を取り直して歩いていると、遠くに光が見えた。小さくぼつりとあるそれは、民家だろうか。ちょうど夕食時だろうなと思うと、花子のお腹もぐうと鳴った。

一人赤面しつつ、紅魔館を発つ時に咲夜がサンドイッチをくれたことを思い出す。その場にリュックを下ろして、小さな箱を取り出した。

紅魔館にはいまいち似合わない、竹で編まれた弁当箱だ。食べ終わったら洗う場所も探さなければと考えながら、花子は竹箱の蓋を開けた。

暗がりで見えにくい中、一切れ取り出し口に運ぶ。舌の上に広がったのは、表面だけが焼かれた香ばしいパンと柔らかなスクランブルエッグ、そしてカリカリになるまで火を通された干し肉の風味。ベーコンエッグサンドなるものは食べたことがなかったが、パンと材料の素晴らしいコンビネーションに、花子は思わず目を見開いた。咀嚼するたびに溢れる風味と香りは、頭のとっぺんまで痺れさせてくるようだ。

言葉も出せぬままあつという間に一切れを食べつくし、水分を取るために水筒を取り出す。外の世界で手に入れた、蓋がそのままコップになるタイプである。

中に入っているのは、やはり紅魔館で入れてもらった紅茶だ。これまで縁のない飲み物であったが、咲夜が気を利かせてくれたらしく砂糖まで入っており、その甘味もまた絶妙だ。

明かりのない街道で少女が黙々とサンドイッチを貪る様は不審極まりない光景だが、そもそもが人通りのない里の外。それも夜となつてしまえば、通るのは夜目の利く妖怪くらいなものだ。襲う対象となる人間がいないとあれば、その妖怪すらも見かけることはない。

下手に取っておけば腐つてしまいかねないという自分への言い訳をしつつ、花子はサンドイッチを全て平らげてしまった。紅茶を飲んで口の中をさっぱりとさせ、竹箱と水筒を片付ける。まだ水筒には紅茶が残っているが、こちらはしばらく温存しようという腹積もりだ。

「ごちそうさまでした」

食前の挨拶を忘れてしまったことを軽く恥じつつ、作ってくれた咲夜に感謝の気持ちを呟いた。

リュックを背負い、腹ごなしがてら先ほどの民家を目指すことにする。夜はまだ始まったばかりであるし、辿り着いてからでもトイレに忍び込んで一仕事できそうだ。

学校の怪異であった花子にとって、最も望むべきターゲットは子供である。しかし、人里の外に出てしまった今、そうそうめぐり会うことはないだろう。子供だと思っていたレミリアですら、五百を超える年齢であったのだから。

大人でも子供でも、この際人間でなくても構わない。誰かが驚き、彼女をトイレの花子さんとして語ってくればそれでいい。花子はだいぶ吹っ切れた気持ちで、暗闇に輝く小さな光目指してぐんぐん歩いていった。

徐々に大きくなっていくその光は、思っていたよりも近くにあつたらしい。徐々に見えてきたその建物は、瓦屋根の一軒家だった。しかし、民家ではなく店のようだ。玄関口には外の世界にあった標識やらブラウン管のテレビやらが雑多に放り投げられており、機械類は風雨に晒され使い物にならないだろうことは一目で分かる。

雑貨屋、だろう。外に並べられている粗大ゴミにしか見えないものにもまだ値札が貼られており、花子にとってはもはや雑貨どころの騒ぎではないのだが。

道具の墓場にしか見えない店頭に呆れつつ、視線を上げた。もうはっきりと看板が見える距離である。大きな木の板に達筆な文字で、『香霖堂』と書かれていた。

店は閉まっているようだが、明かりはついている。さて、どうやって忍び込んだものか。入り口は明かりが灯っているし、人の気配もする。正面から堂々と行くわけにはいかないだろう。

そうになると、裏口か。花子はばれないように抜き足差し足で香霖堂の裏に回った。しかし、それらしい戸口はなく木造の壁が続くばかり。今日も驚かせないのかと、思わず肩を落とした。

最後の希望は、正面からこっそり侵入して家主にばれぬようお手洗いに隠れることである。学校のトイレにいた頃は無縁であった苦労を強いられ、花子は改めて幻想郷の厳しさを身に感じていた。

明かりが灯っている正面の扉を見て、またも困ったと眉を寄せた。引き戸ならば多少は侵入が楽になるうというものだが、ドアである。ドアノブを捻るだけで音が出るし、扉に鈴でもつけられていようものなら、それはもう目も当てられない結果になるだろう。店である以上、来客を知らせるベルがある可能性は極めて高い。

どうしたものか。小さな腕を組んで、花子は立ち尽くした。今から別の民家を探すことも考えたが、明かりはここ以外に見えなかったので、辿り着く頃には日が昇っているだろう。

そろそろ少し休みたい気もする。いつそ、客人として訪ねてしまおうか

そんなことを考えていた、その時であった。

「おや？ お前は確か」

背後からの声に振り返る。そして、「ひっ」と声を上げた。

立っていたのは、上向きに持たれた小さな八卦炉を松明代わりにして、もう片方の手で箒を担いでいる黒白の魔法使い。花子のトラウマ、霧雨魔理沙である。

霊夢と早苗の術もあったが、彼女が持っている八卦炉から放たれ

た光こそが、花子にとって何よりも恐怖だった。寺子屋が爆発した原因も、主に魔理沙にある。

さつと身を翻し逃げようとする花子だが、箒をそこらに放り投げた魔理沙によって捕まってしまった。襟首をつかまれ、

「なんで逃げるんだ？ 挨拶くらいしろよ」

「あわわ、なんでここにあなたがいるの!？」

「なんでって、夕飯食いつぱぐれたから香霖に出してもらおうと思ってるんだよ」

抵抗を止めると、魔理沙はあつけなく手を放してくれた。ありがたい限りだが、下手に逃げれば容赦なくあの光を浴びることになるかもしれないので、花子は結局その場から動けなかった。そこまで酷い人間には思えないのだが、ここが幻想郷である以上、花子の常識は通用しないと思ったほうがいいだろう。

とはいえ、やはり敵視されているような雰囲気は感じない。お人好しが過ぎるとよく言われる花子は、すっかり彼女が悪い人間ではないと確信してしまった。魔理沙の口から語られた名前に、首を傾げる。

「こつりん?」

「ああ、ここの店主。本当は森近霖之助って名前なんだけどな、そんな大層な名前が似合う奴じゃないんだ」

「へえ」

我ながらなんとも適当な相槌だと思いつつ、一つ頷く。すると、店のドアが取り付けられた鈴をカラリと鳴らして開いた。出てきたのは、眼鏡をかけた白い髪の青年だった。

青年は花子と魔理沙を一瞥した後、半眼になって溜息をつき、

「名前が似合わなくて悪かったね。僕は気に入っているんだけど」「いいじゃないか、香霖のほうがじっくりきてるぜ」

まったく悪気のなさそうな明るい声でそう言つと、魔理沙はさつさと店の中に入ってしまった。どうも二人は、親しい間柄であるようだ。

そうになると、当然浮くのは花子である。どうしたものかともじもじしていると、青年　森近霖之助と目が合った。

「君は？」

「あ、私はその、御手洗花子といいます。妖怪で、ええと、なんと
いうか」

「僕を襲いに来たのかい？」
「いえ！ 襲うというか、ああでもそうなのかな。でももう失敗してるのでそれはいいです」

しどろもどろになりつつ答える。店の奥から魔理沙が「晩飯はどれだ？ これか？」などと言っているのが聞こえるが、霖之助が動じる様子はなかった。

「魔理沙とは知り合い……に近い何かのようだね」

「そ、そうですね」

「なるほど。もう店は閉めてしまったけど、これも何かの縁だ。夕飯は魔理沙が食べてしまっただろうけど、お茶くらいなら出すよ」

花子が返事をする前に、台所か何かからけたたましい金属音が響き、魔理沙の悲鳴が聞こえてきた。霖之助が呆れ顔でそちらに行つてしまったので、招かれた花子としては立ち去るわけにもいかず、

大人しく後をついていく。

誰かを驚かすのは、明日以降になりそうだ。

酒という飲み物を、花子は初めて口にした。例えようのない不思議な味であり、学校給食の残りが主食であった花子にとって、それはあまりにも衝撃的であった。

最初こそ吐き出してしまいそうになったが、飲んでいくうちに悪くないと思えるようになっていた。顔や体が熱く頭はぼうつとしてくるが、それも嫌いな感覚ではない。

ただ困ることといえば、自分の顔が真っ赤になることだろうか。少し恥ずかしいが、魔理沙や霖之助も酔いが回ってきているので似たようなものだ。

魔理沙が食事を終えてからすぐに、酒盛りは始まった。その場に居合わせたというだけで、縮こまっていた花子も強制参加となったのである。

「でさあ、私は採れたてのキノコを宴会に持っていったんだよ。ちやんと食べれるやつだぜ。だっていうのに、誰も手をつけないんだ。失礼だと思わないか？」

「魔法の森で採れたキノコだろう？ そんな話を聞いてしまったら、もし本当に食べれたとしても箸は伸びないと思うね」

「酷いな。なかなかうまいし、味噌汁の出汁にもなるんだぜ？」

「魔法が出そうな味噌汁だね。僕は遠慮したいところだ」

「キノコ汁はうまいじゃないか。なあ花子」

二人の会話を肴にちびちびやっていた花子は、突然話を振られて陶器のカップを置いた。

「キノコのお味噌汁は、食べたことないなあ」

「なんだって、そいつは損をしているぜ！ 今度うちに遊びにこいよ、たんと食わせてやるからさ」

「遊びには行きたいけど、キノコ汁はいらさない。不思議なキノコを食べなきゃならないほど、私は困っていないもの」

「ほう、お前もなかなか言うな」

隣に座る魔理沙に小突かれ、花子は悪戯っぽい笑みを返した。酒が入っているというのものもあるが、なにより魔理沙と馬が合ってしまったのだ。思いやりとは程遠い性格ではあるが、だからこそ変に気を遣う必要がない相手である。

霖之助は彼女の兄のような存在なのだろうかと、花子は思っていた。食事の準備から片づけまで彼がやっていたし、魔理沙の突拍子もない話に律儀に返事を返すのも霖之助であった。聞けば、二人は魔理沙が物心つく前からの幼馴染であるとか。自分と太郎に似たものを感じ、それがさらに二人への親近感を強めていた。

「そつえば、花子は最近外から来たんだよな？」

魔理沙に聞かれて、花子は頷いた。

「うん、まだ一ヶ月も経ってないよ」

「それじゃあさ、この店にあるものについて、結構詳しいんじゃないか？」

三人が今いるのは、店の奥にある霖之助の住居である。ここに来るまでちらりと店の中を覗いたが、確かに小学校の学習室で見たパソコンや子供が隠し持ってきていた携帯電話が置いてあった。しかし、香霖堂にあったものはどれも古いタイプのものだ。

詳しいかどうかは知らないが、使い方くらいは分かる。なので、一応首肯することにした。

「たぶん、それなりに分かると思う」

「じゃあ、香霖の質問にも答えられるかもな」

「そうだね。聞いてみようか」

身を乗り出してきた霖之助に、花子は思わず姿勢を正した。こちらを見るその瞳には、凄まじいまでの好奇心が輝いている。

「あの『パーソナルコンピュータ』というものなんだけど、外の世界の式神だろう?」

「し、式神?」

「あらゆる計算をあっという間に解くし、ちょっとした命令ですぐに情報を集めてくる。水に弱いという欠点も同じだ。だからこれは、箱に式神を閉じ込めている」

「えっと、それはちょっと、違うってどうか……」

まさかそんな頓狂なことを聞かれるとは思ってもいなかったので、花子は苦笑を浮かべるほかなかった。しかし、霖之助は式神云々については確信してしまっているらしく、花子の気持ちを置いて本題に入ってしまう。

「使い道は分かるんだ。僕的能力で」

「能力、ですか」

「うん。見たものの名前と用途が分かるという力なんだけど、肝心

の使い方が分からなくてね。あのパーソナルコンピュータも、蹴っても叩いても反応しなくて困っていたんだ」
「そ、そんなことしちゃだめですよ!」

思わず慌てるが、霖之助も魔理沙もぽかんと口を開けるばかりで、何が悪いのかまるで気づいていないようだ。

機械類に衝撃は厳禁であることなど、科学と疎遠である妖怪の花子ですら分かる。しかし、幻想郷にはそういった常識すら存在していないらしい。

そもそも電気が通っていない幻想郷である。機械の類が役に立つとは思えないのだが。

「機械は乱暴に扱ったら、すぐに壊れちゃいます」

「人間の力でも壊れるのか。人に力で負けるなんて、ずいぶんともろい式神だぜ」

小馬鹿にしたように鼻で笑う魔理沙。そもそもその解釈が間違っているの、なんと説明したらいいのやらと花子は一生懸命に言葉を探した。

しかし、霖之助の次の言葉で、言葉探しを完全に諦めた。

「以前魔理沙達がゲーム機というおもちゃを蹴鞠のように蹴って遊んでいたけれど、あれもすぐにバラバラになってしまったね」
「そうですか……」

小さくかぶりを振って、酒を口に含む。先ほどから飲んでいる酒と同じものなのに、どこか切ない味がした。

こちらの思いなど露知らず、魔理沙がカップに酒を注ぎ足しながら

ら、何かを思い出すように視線を彷徨わせる。

「ああ、『げいむき』は硬いから蹴ると痛いし、そのくせ妙にもろかったぜ。橙ちえんが蹴飛ばしたら粉微塵になったな。あいつは加減が下手だから、普通の鞠でも爆発させてしまっただ」

「ゲーム機の中にはパーソナルコンピュータと同じでたくさん管があつたけど、もしかしてあの中に小さな式神が入っているのかな」「あの管にか？ あんな細くちゃ八目鰻も入らないぜ」

「ミミズなら入りそうだけど。花子、あれはどうやって作っているんだい？」

どこまでもずれた話の挙句、この質問である。そもそも使いこなすこともできない機械類であり、内部構造など花子が知るわけもない。どのコードが何の役割を果たしているかも理解できないというのに、その作り方など、どうして花子が知っていようか。

そもそも、機械がどうやって動いているのかという原理すら分からない。電気が通って、それでうまく動く。そんなレベルの知識しかない花子にとって、霖之助の問いは宇宙の果てに何があるのかを教えてくれという難題に等しかった。

「ううん、ごめんなさい。どうやってできるのかは分かりません」

頭を搔くと、霖之助はそれはもう落胆を露わに溜息をついた。遠慮もなにもあつたものではない。一方の魔理沙が笑い飛ばしてくれたことが、救いといえれば救いか。

「外人だつてそんなものじゃないか。携帯電話を自慢げに使いこなしても、原理を知らない奴ばかりだぜ。ほとんどが『ばつてりーがなくなつたからもう使えない』とか言つて、一日くらいで壊れちゃうしな」

「それは、壊れてるのは違うよ。電池切れで、ええと、なんて言えればいいかな……。そう、お腹が空いて倒れちゃってるようなものなの。だから、とある方法で電気を上げれば元に戻るんだよ」

「そうなのかい？　壊れたと思って捨ててしまったのはもったいなかったな。しかし、空腹だったのか。やはり中には式神か、あるいは妖精が入っているということだね。なるほど、外の世界は妖怪や妖精を小さくする技術で溢れ返っているというわけか」

例え話だったというのに、真に受けられるとは。もはや説明する気力も起きなかった。

「もう、それでいいです……」

「僕の仮説は正しかったわけだ。うん、これは嬉しいね」

上機嫌に酒を煽る霖之助。幻想郷に機械が普及するのは当分先のことだろうから、彼が満足ならそれ以上突っ込むのは野暮かもしれない。

耳元で諦めると囁く魔理沙は、彼の仮説が実は不正解であると気づいてくれているようだ。霖之助がこういう人間であると一番知っているのは、彼女なのだろう。

「さて。それじゃあ仮説が正解だと証明されたことを祝して、乾杯といこうか」

「なに言ってるんだ、もうできあがってるくせに」

「いいじゃないか、ほら。僕の頭脳と才能に」

霖之助が半分ほどしか入っていない透明なグラスを掲げた。呆れ笑いなど浮かべつつ、魔理沙と花子はそれぞれのカップを持ち上げ、

「うんちくの天才、香霖に」

「飛びぬけた洞察力の霖之助さんに」

乾杯。

カチリコロリと、控えめだけれど楽しげな音が、小さな部屋に転がった。

そのこ 恐怖！疾風操る鴉天狗！

~~~~~

太郎くんへ

こんにちは、太郎くん。花子はなんとかやっています。

今日は、落ち込み気味です。香霖堂でお世話になったあと、霖之助さんと魔理沙の勧めで妖怪の山まで来たのだけど……

幻想郷は妖怪の天下だし、私みたいに子供を怖がらせるだけの妖怪は下っ端だっていうのは分かった。でも、まさかあんなにも力の強い妖怪がいるなんて。

太郎くん、天狗という妖怪に会ったことがありますか？ お話で聞いたよりもずっと強くて、とても速かったです。

友達を悪く言われても、仕返しの一つもできなかつたんだもの。見下されちゃうのも仕方がないことなのかもしれないね。

少しだけ、自信をなくしてしまいました。私はこれからもトイレの花子さんでいていいのかな。

私は、幻想郷の妖怪でもいいのかな。悔しくて怖くて寂しくて、辛いです。

本当はこの手紙を出すのは止めようかと思ったけれど、手紙のお姉さんが伝えなさいと言うので、誰よりも仲がいい太郎君には正直に話すことにしました。

だから、このことは誰にも話しちゃだめだからね。二人だけの内緒だよ。

今日だけは、弱い花子を許してください。

それでは。

花子より

~~~~~

曇天ながらも明るい朝、街道に行く影二つ。

ようやく幻想郷に慣れてきた厠の妖怪、御手洗花子と、彼女の新たな友人にして普通の魔法使い、霧雨魔理沙である。

二人は今、妖怪の山に向かっている。魔理沙の箒に乗っていけば早いそうだが、霖之助達の話を知っているうちに、花子は幻想郷を歩いて回りたいという気持ちが強くなっていた。そんな彼女の言葉を魔理沙が汲んでくれた結果である。

とはいえ、花子としては無理に付き合わせてしまって申し訳ない

気持ちもある。何より、魔理沙は山に用がないのについてきてくれているのだ。暇つぶしだそうだが、それでも詫びずにはいられなかった。

「ごめんね、ついてきてもらっちゃって」

「気にするな。朝の散歩は健康にもいいんだから、一石二鳥ってやつだ」

箒を肩に担ぎながら楽しそうな魔理沙は、本心で言ってくれているのだろう。ざっくばらんとした彼女の性格は、とても気持ちのいいものだ。時々傷つくほど正直な言葉をぶつけてくるが、愛嬌というものだろう。

街道は何度か枝分かれしていたが、妖怪の山はそれと分かるほど堂々と聳え立っている。幻想郷で山といえば妖怪の山を指す、という霖之助の言葉にも納得がいく。

初夏の緑爽やかな山は、曇り空の下であっても生き生きと輝いて見える。これからあそこに行くのだなと思うと、それだけで花子の胸は高鳴った。

「魔理沙は、山に行ったことがあるんだよね。どんな場所だった？」

「空飛んでたから上からしか見てないけど、なかなか綺麗なもんだぜ。といっても、私が行ったのは秋だったからなあ。今とはだいぶ違う景色なんじゃないか？」

「そっかあ。秋の山は綺麗なものね。田舎の学校に住んでいた時は、秋が一番好きだったよ。都会では季節を感じることはあまりないから」

花子の能力である廁の空間には、それが学校のトイレである場合限り『あらゆる学校のトイレを渡り歩ける』という特徴もある。

これを利用し、彼女は色々な学校でトイレの花子さんとして、子供達の恐怖を得てきたのだ。学校らしいものが人里の寺子屋しかない幻想郷では、ほとんど役に立たない能力であろう。ちなみに、同じ厠の怪異である太郎も同等の力を持っている。

太郎と共に色々な学校を巡ったことを思い出したが、昔話を語る前に魔理沙が話題を戻してしまった。

「都会ってというのは、あれか？ 石でできた高い家ばかりの町のことだよな？ 早苗が自慢げに話してたけど、私は森に住んでるほうが楽しいと思うな」

高層ビルが立ち並ぶ都会の様子は、魔理沙には想像できないのだろう。花子としても、ブロンドの髪と魔法使いの服を着た彼女には、幻想郷こそがふさわしい場所だと思える。

とはいえ、黒髪のおかつぱにセーラー服ともんぺという花子に都会が似合うかと言われれば、誰しもが首を傾げるところなのだが。学校にしかないのだから都会も田舎も関係がないと、花子は自分を棚に上げることにした。

「便利、らしいから。人間にとって、食べることも住むことも困らないのは素晴らしいことなんですよ？」

「まあ、そりゃそうだがな。努力や苦勞を知らずにいると、ダメ人間になるだけだ。どこかの紅白みたいにな」

「霊夢のこと？ あの人、あまりそんな風には見えなかったけれど」「あの小さい神社を掃除するのに丸三日かけて、挙句手抜きだらけだったりするくらいにはズボラだぜ」

本人がいらないのをいいことに、いても堂々と言いそうだが、魔理沙はケラケラと笑った。

昨晚の酒盛りで、博麗霊夢なる少女が悪人ではないことを知った。老若男女、さらには人も妖怪も神様にさえ平等に接するという話だ。とはいえ、彼女は妖怪退治の専門家である。妖怪へは厳しいポーズを取っているらしく、弱小強豪問わず、それこそ平等に退治してくるらしい。人里や神社の外で出会ったら、覚悟しなければならぬ。

そんな話の中で上がったのが、今向かっている妖怪の山である。たくさん妖怪や神様が住んでいるらしく、生半可な人間は近寄ることも叶わないそうだ。

誰かを驚かすという目的もそうだが、紅魔館に行ってからというもの、花子は幻想郷の妖怪に強い興味を抱いていた。

「どんな妖怪がいるんだろうなあ」

「天狗が有名だぜ。あとは河童か」

「天狗に河童。外では見たことがないや」

「だろうな。だから幻想郷にいるんだし」

「あ、それもそうだね」

頬を掻きつつ、苦笑する。有名が故に幻想として認識されてしまった河童と天狗である。外の世界で彼らを見かけることがないのは当然のことだ。

ふと、魔理沙が肩に担いだ箒を下ろした。見れば、もう山の麓。どうやら一時の別れがやってきたようだ。

「私はここまでだな。山を下りてきたら、また会おうぜ」

「うん。ここまで付き合ってくれてありがとう、魔理沙」

頭を下げると、魔理沙は花子のおかっぱ頭に手を置いて、

「気にするな。それより」

顔を上げてみれば、彼女はこちらを心配するような、わずかに眉を八の字にした面持ちになっていた。花子が首を傾げると、小さい息を一つ吐き出し、魔理沙が言った。

「山に行くなら、天狗に気をつける」

「天狗に？」

「ああ。あいつらはよそ者を嫌うし、プライドも高い。特に弱い奴が相手だと、連中はすごく高圧的なんだ」

「そ、そうなんだ。分かった、気をつけるよ」

頷いてから、花子はリュックを背負いなおす。高圧的で自尊心の強い妖怪といえ、レミアアがいたのだ。うまく接すればきっと仲良くできるはずだ。

箒に跨った魔理沙が宙に飛び上がり、帽子を押さえる。

「それじゃあ、元気でな」

「ありがとう。魔理沙もね」

片手を上げて颯爽と飛び去る魔理沙の後姿を見送ってから、花子は再び妖怪の山を見上げた。

豊かな緑が風に揺れ、それはまるで花子を歓迎しているかのように見える。どんな出会いがあるのだろう。踊る心を抑えきれずに、山へ続く道を意気揚々と歩き出した。

妖怪の山は、思っていた以上に未開であった。道らしい道はほとんどなく、草木の生い茂る獣道ばかり。ちょうど外の博麗神社に続く山がこんな道程だったなと花子は思った。あの山を歩いたことが、もうずいぶん昔のことに感じる。

正午を過ぎても未だ太陽は姿を見せない。今日は一日曇りだなと、木々の隙間から曇り空を見上げつつ大木の根に腰掛けた。

魔理沙と別れてから歩き通しだったので、さすがに空腹だ。花子は握り飯が入っている包みをリュックから取り出し、その一つを口に運んだ。香霖堂で魔理沙にこしらえてもらったものだが、塩加減が程よくなかなか美味である。

二つの握り飯を平らげて、水筒に入っていた最後の紅茶を飲み干した。どこかで水を補給しなければならぬが、確か山には大きな川が流れていると霖之助が言っていた。

誰か適当な妖怪にあつたら訊いてみようと考えつつ、花子は登山を再開する。山頂まではまだまだ遠く、今夜はどこかで宿を借りるか、それができなければ野宿になるだろう。そもそもが便所暮らしであつた花子にとって、野宿は大して苦にならない。むしろ空気がうまいので居心地がいいと思ってしまうほどだ。

歩けど歩けど道は現れず、今自分がどこにいるかなど、とうに分からなくなっていた。山頂目指して登っているということだけは、間違いないのだが。

誰かに道を訊ねようにも、妖怪や人間の類は一向に見かけない。正確に言えば空を飛ぶ妖怪らしき影は何度か見たのだが、地上で出

くわす者といえ、リスや鹿といった口の聞けぬ連中ばかりであった。

ひたすら登り続けて早三時間。花子とはとくに時間の感覚などなくなっていたが、このままでは水も取れないまま日が暮れてしまうことだけは分かる。

妖怪の彼女は人間より遥かに体力があるし、水も二、三日は飲まなくても生きていけるのだが、外の世界からやってきたばかりの花子にとって、そのサバイバルはあまりにも酷なものと言えよう。

せめて川だけでもと、花子は周囲を見回した。目に入るのは木と草の生い茂る山の景色ばかりで、耳を澄ませど水の音は聞こえてこない。どうやら、山に流れる川はここから遠くにあるようだ。

当てずっぽうに歩いたところで、簡単に辿りつくとは思えない。どうしたものかと、花子はいよいよ頭を悩ませた。

ともかく上を目指そう。解決に程遠い決断をした、その時。花子を吹き飛ばすほどの疾風が駆け抜けた。

「うわぁっ!」

声を上げて、花子は盛大に転がった。あちこちに体をぶつけつつ、咄嗟に伸ばした手で大木にしがみつく。なおもごうごうと吹き荒ぶ風は、彼女の小さな体を大木から引き剥がそうとしているように思えた。

飢えた猛獣が如く猛る疾風は、しかし次の瞬間、なんとも間の抜けた声によって掻き消えてしまった。

「あやや？　こんなところに子供がいるとは」

大木から転げ落ち倒れた花子の背後から聞こえたその声は、大人びていながら幼いソプラノを感じさせる少女のもの。痛む体に涙など浮かべつつ立ち上がり、花子は声に振り返った。

やはり、少女がいた。外見で言えば、花子より年上だろう。背もずっと高く、霊夢や早苗くらいはあるように見える。黒いボブヘアで、頭には赤い小さな帽子を乗せていた。

「大丈夫ですか？　怪我はなさそうですが」

「は、はい。なんとか」

「それは何より。あれだけ転がっておいて無傷とは、人間ではありません」

服についた泥を払いつつ、花子は頷いた。

「あ、うん。私は妖怪です。ええと、トイレの花子さん、という」

「ほう、文献で見た記憶があります。しかし、廁の妖怪ですか。あまり綺麗なイメージじゃありませんねえ」

「あは、確かに」

言われてみれば、便所の妖怪など清潔な印象とは程遠い。とはいえ、何も便所の垢をすすっているわけではないし、生活空間はあくまで廁に作る花子固有の空間だ。出入り口と仕事場がトイレであるというだけなのだ。空気や臭いまでは、どうしようもなかったけれど。夏場は苦労したものだ。

それを説明したところで、言い訳にしかないだろう。花子は苦笑しつつ頬を掻くに留まった。

あれほどの風を起こすだけのスピードで飛んでおきながら、黒髪の少女は急いでいたわけではないらしい。軽く会釈をしつつ、

「私は、鴉天狗の射命丸文と申します。ここ妖怪の山で新聞記者などをやらせてもらってますよ」

「天狗さんだったんですね。私は御手洗花子。さっき言ったとおり、トイレの妖怪です。幻想郷にはまだ来たばかりで」

「おやおや、新入りさんでしたか。して、なぜこの山に？」

言いつつ、文はカメラらしきものをこちらに向けて、ぱちりとシャッターを押した。許可などあったものではないが、特別気にすることもなく花子は頷く。

「ええと、せっかく来たのだから色々見て回ろうと思って。魔理沙達から山の話聞いてるうちに、行ってみたいなあって」

「なるほど、魔理沙と知り合いましたか。しかし、この山で見るところとなると……山頂の守矢神社か川の河童か、中腹にいる我々天狗の住処くらいなものですか」

「とりあえずてっぺんに行こうと思ってます。天狗さんの邪魔にならない方がいいのだけれど」

「それなら問題ありません。この山は妖怪ならば行き来は自由ですよ」

ほつと安堵の息をつき、花子はふと魔理沙の言葉を思い出していた。天狗はよそ者嫌いで自尊心の塊だと言っていたが、文はそんな風にはとても見えない。

やはり仲良くできるではないか。いつか魔理沙に自慢してやろうと考え、文のカメラが鳴らしたシャッター音で我に返った。

「外から来たばかりでは、色々大変でしたでしょう。幻想郷の連中

は血の気が多いですからね」

「えへへ、そうですね。人里では霊夢や魔理沙に退治されちゃいましたし、紅魔館でも酷い目に会いました」

「……あやや、中々ハードな日々をお送りですな。性悪巫女に手癖の悪い魔法使いはまだしも、あの吸血鬼にまでやられるとは」

「どうやら、一方的に攻撃されたと思われてしまったらしい。慌てて両手を振り、

「で、でも、紅魔館では私がレミリアさんを驚かせたからやられちゃったんだし、あとでフランちゃんとも友達にもなれたんですよ。悪いことばかりじゃなかったです」

「おや、あのワガママ娘とお友達になれたんですか？ 花子さんは人がよろしいですねえ。私なら取材以外では話すのもごめん被りたいものですが」

文の中でのレミリアの評価は、とても低いようだ。内心でレミリアに同情しつつ、花子は話題を戻した。

「そんなわけで、今は色々なところを歩いて回ってる途中なんです。ついでにお手洗いがあったら、誰かを驚かそうかななんて思ってますけど」

「なるほど。しかし、なぜ歩きなのです？ 山頂を目指しているのなら飛んだほうがずっと早いと思いますが。こだわりか何かですか？」

「それもありますけど、飛べないんですよ、私」

「またも苦笑いで答えると、文はさぞ驚いたようだ。目を丸くして、視線を花子と空へ交互に向けた。」

「飛べない……？ 妖怪なのにな？」

「は、はい。外の妖怪はみんな飛べませんよ。変、ですか？」

ここまで驚かれるとは思ってもいなかった。幻想郷の妖怪は確かに飛ぶのが普通であるらしいが、まさか飛べないことがおかしいとまで言われるなど、さすがに予想していなかった。

しかし、文は未だに信じられないといった顔で、

「変も何も。妖怪が飛べないなんて、笑えない冗談です。……一応聞きますけど、外の妖怪が人間を襲うことは？」

「ありますけど、せいぜい怖がらせたり驚かせたりするくらいですね」

花子が生まれた時にはすでに、外の世界に住む妖怪は人を驚かし怖がらせることを目的としていた。人を食らうために襲うなどという話は、聞いたことがない。

しかし、文の驚愕は徐々に失望や怒りへと変わっている。自分は事実を告げただけなのにと、花子はだんだん不安でいっぱいになっていった。

「……なんてこと。それでは、あなた方は人間や妖怪と戦ったことがないのでですか？」

「そ、そうですね。ケンカはたまにするけれど、本気で戦うなんてことは……」

「信じられない。外ではそこまで妖怪のレベルが落ちているなんて

出会って早々だというのに、文はすっかり人が変わってしまったかのように、花子へ冷たい視線をぶつける。

「恥ずかしくないのですか？ 人間共に蹂躪された拳句、驚かし怖がらせるだけなどというエンターテイメントに成り下がっていることが」

「え？ え？」

「え？ じゃないでしょう。理解できないの？ 妖怪が人間の楽しみに利用されて、悔しくないのかって聞いているのよ。妖怪は人を襲い、人は妖怪を退治する。その図式は妖怪ならば知っていて然るべきよ。どんな下級妖怪だって、戦い方は知っているとこのに」

突然目つきを険しくして厳しい口調になった文に、花子はしどろもどろになった。どうして怒っているのか分からないのだ。

実は彼女が千年を生き超一流の実力を持つ大妖怪であり、天狗としての特性以上に妖怪としてのプライドが高いということを、花子を知る由もない。

「幻想郷に来て、妖怪や妖精に勝負を仕掛けられたことは？」

「しょ、勝負ですか？ えっと、弾幕ごっこのこと？」

「そうですね、それでいいです。仕掛けられたことはあるようですね」

「まあ、一応は。でも私、弾幕できないから、逃げちゃいましたけど……」

呟くように答えると、文はいよいよ怒りを面に出し、声を荒げた。

「逃げた？ 逃げたですって！？ あなた、そんなことで幻想郷で生きていけると思ってるの？ いくらなんでも情けなさすぎるわ、あまりにも平和すぎる。よくまあそれで、吸血鬼の友人だなんて言えたもんだわ」

「そ、そんな」

それは関係ないではないか。そう言おうとしたのだが、花子の言葉は文によって打ち消されてしまう。

「幻想郷はその実、力の社会なのよ。戦い、勝てば自分の意志を押し通せる。負ければ大人しく引き下がる。それをレミリアも分かっているでしょうに、勝負事に背を向ける弱小妖怪と友達ごっこだなんて、吸血鬼が聞いて呆れるわ」

「ちょ、そんな言い方ってないです！ 私が弱くて逃げたつてのは本ただけど、レミリアさんまで酷く言わなくてもいいじゃないですか！」

「分かってないわね、あなた。吸血鬼はとても強く恐ろしい種族なのよ。一時は幻想郷を乗っ取ろうと画策して、それを実行に移そうとしたこともある。それだけの実力を、レミリア一派は持っているの。だというのに、こんな三下のグズとつるむなんて……あいつらにはプライドってものがないのかしら。吸血鬼も落ちたものね」

だんだんと、花子は腹が立ってきた。レミリアは花子にとって、幻想郷でできた初めての友人なのだ。彼女は傲慢ちきでワガママだが、本当はとても優しい女の子だと花子は知っていた。

フランドールとまた会う約束をしたけれど、同じくらいレミリアにももう一度会いたいと思っている。それほど大切な友人をコケにされて、黙っていられるわけがなかった。

「確かに……私みたいな弱くてのろまな妖怪じゃ、レミリアさんやフランちゃんとは釣りあわないかもしれないよ。でも、それでも私なんかと友達になってくれたのは、二人が優しいからじゃない。それを、そんな風に言うなんて酷いよ」

「外の妖怪というのは、どこまでぬるま湯に浸かっているのかしらね。妖怪が友達を作るなどは言わないけど、妖精からも尻尾巻いて逃げるような奴が吸血鬼と対等になれるわけないじゃない。」

ああ……それとも、あなた程度の妖怪と対等なほどにまで、吸血鬼は地に落ちていたのかしら。だとしたら納得だわ。せいぜい弱者同士、傷の舐めあいでもしてなさいよ」

唇を噛んで、花子は拳をきゅっと握り締めた。なんで初対面の相手にここまで言われなければならないのだ。自分だけならず、レミリアやフランドール、さらには外の妖怪達まで。

一体何様のつもりなのか。憤りと呆れを浮かべる文の顔を見て、先ほどまで感じていた印象は完全に消えてしまった。

こちらの心中を察しているだろうに、文は肩などすくめて挑発するかのように、花子が貶めてほしくない新たな名を口にした。

「魔理沙も魔理沙よ。人間にしては肝が据わってると思ってたけど、こんな弱いのと馴れ合うようじゃ、所詮はあいつも弱い人間だったってことかしらね。失望したわ」

「……っ！」

我慢の限界だった。弾かれたように土を蹴り、花子は右手を拳にして振り上げ、文へと飛び掛っていた。

しかし、怒りのこもった一撃は文にとってあまりにも遅い。花子の容姿もあいまって、まるで子供の駄々のように見えただろう。あつけなくかわされて、地面に突っ伏す。

地面の冷たさと口の中に入った土の味が、花子の不快感を煽った。起き上がって振り返り、怒りのままに文を睨みつける。今までもケンを力をしたことはあったが、これほどまでに目つきを鋭くさせたことはなかった。

心のどこかで自分の理性が、落ち着け、冷静になれと叫んでいる。しかし、花子はそれを無視して、怒声を上げた。

「もう許さない。それ以上私の友達を悪く言うのは、絶対許さないんだから！」

「あ、そう。それで、どうするの？ 弾幕ごっこもできないあなたが、私と戦うつもり？」

あからさまな挑発だったが、頷かずに黙って妖力を高めた。せいぜいの変化にしか使わなかった妖力だ。戦うために使うなどうまくできるわけもなく、ほとんど垂れ流しているような状態である。妖力弾を形勢することなど、できるわけもない。

あまりに雑な力の使い方を見て、文が鼻で笑った。

「やる気なんだ？ いいわ、面白い。幻想郷には決闘のルールがあるんだけど、まあ今回は特別よ。私に一発でも入れられたら、今までの言葉を撤回してあげる」

「約束だよ。絶対に謝ってよね」

「私は鴉天狗。真実を記事にすることこそが私の誇り。嘘はつかないわ」

余裕をにじませる文は隙だらけに見えるが、彼女から漂う妖気は痛いほど実力の差を物語っていた。文が少しでも攻勢に出れば、花子程度の妖怪は簡単に倒されてしまうだろう。

しかし、一発だ。一発でも殴れば勝ちなのだ。勝てば、大切な友人への冒涇を撤回させることができるのだ。

一陣、風が吹き抜ける。折れた木の枝が乾いた音を立てて転がった、その刹那。

「うわああああっ！」

花子は駆け出ししていた。不慣れながらも妖力で肉体を強化し、拳を文へと叩き込む。

しかし、吹き荒れる疾風。文は武器である天狗の団扇を使うこともなく、風を操った。

きりもみしながら吹き飛ばされて、再び地面を転がる。なおも風が花子を押し倒そうとするが、負けるものかと起き上がり、もう一度飛び掛った。しかし、

「話にならないわ」

たったの一蹴り。文にとってはわずかに足を動かしたただけだといふのに、凄まじい威力だ。腹を蹴られた花子は、一瞬で頭の中が真っ白になった。

視界は機能しなくなり、倒れて体が土にまみれている感覚もなく、自分が声を出しているかも分からない中で、文の声だけがなぜか鮮明に聞こえてくる。

「私はね、むやみに戦うのは好きじゃないのよ。それでも花子、あなただけは許せなかった。なんで分かる？」

妖怪は強くなってはならないの。人を襲って食らい、人を畏怖させ、そして人に退治される。そういうものなのよ。特にこの幻想郷では、そうしたバランスをとっても大事にしているの。だといふのに、あなたは妖怪や妖精との戦いからすら目を背けた。外から来たばかりの新参というだけでは説明できないほど、花子、あなたは考えが甘すぎるのよ。

戦いを避けて仲良しごっこがしたいというだけでは、妖怪が幻想

郷で生きていく資格はないわ」

ようやく取り戻せた視界が移したのは、下駄のように高い靴底を持つ、文の靴だった。起き上がろうとしても、体は痛みに屈してしまつてちつとも動かない。

「本当に幻想郷で生きていくつもりなら、強くなりなさい。そうね、せめて妖精くらいになれば、人里周りで人間と馴れ合うくらいは許されるんじゃないかしら。……少なくとも今のままじゃ、この山に居ることは絶対に許されないわ。私が許さないわ。山の土が穢れる前に、さつさと下りなさい」

吐き捨てられた言葉が花子に突き刺さると同時に、再び突風が吹き荒れる。またも飛ばされ、花子は体勢を整えることもできずあちこちに体をぶつけた。

風が収まる頃には、文の気配はなくなっていた。

リュックがクッションになってくれたおかげで、大きな怪我はしなくてすんだようだ。しかし、痛いことには変わらない。手も足も言うことを聞かず、呻くことすら苦しい。

立てない。花子は身も心も打ち砕かれてしまった。外の世界で妖怪として生きてきたことも、幻想郷でこれから生きること、全てを否定されてしまったような心地であった。

「……」

何度も何度も起き上がろうとしたが、体中を駆け抜ける痛みに妨害されてしまう。仰向けになることすらできない。

やがて日が落ち、辺りは闇に包まれてしまった。木々のざわめきだけが耳に届く中、花子は今も倒れたまま、動けずにいる。

痛みよりも、ただただ悔しかった。文に負けたことよりも、友達を悪く言われても何もできなかった自分が情けなくて仕方がない。今まで、自分の無力さがこんなに恨めしいと思ったことはなかった。

ふと、頬を冷たいものが流れていった。同時に聞こえる、天から降りてきた水が木の葉を叩く音。雨が降ってきたのだなと思うと、どうしてか悔しさが一気に溢れ出してしまった。

「……はあっ」

まるで心を満たす悔しさを雨で流してしまおうとしているかのように。弱い自分を土に埋めてしまおうとしているかのように。

「ううう　　あああああ　　！」

冷雨降り注ぐ暗闇の中、花子は独り、声を上げて泣き続けた。

降り注ぐ雨音に混ざる泣き声は、もう何時間も前から衰えることを知らずにいる。

濡れた草木と土の香りは、嫌いではない。しかし、酒の肴にはならなそうだ。天高く聳える大樹、その太い枝に腰掛けて、彼女はそんなことを考えた。

「雨見酒も、悪かあないんだけどね。こう暗いうえに雰囲気までも湿っぽくちゃ、いまいちってエもんだよ」

独りごちて、山に響き渡る泣き声の主を見下ろす。体に不釣合いな大きな角を、雨水が伝った。

雨に濡れながら泣き続ける少女を眺めつつ、こちらも同じく雨に濡れながら、しかし対象的なほど明るい笑顔で瓢箪を煽る。

「まあ、酒はいつでもうまいんだけどさア。こう、情緒つてもんがね」

彼女の名は、伊吹萃香。遠い昔に幻想郷から姿を消したはずの、鬼である。人攫いを生業とする最強の妖怪だ。鴉天狗に面白いものがあると云われて、暇つぶしがてらに来てみたのだ。

眼下で泣くあの妖怪少女こそが、文の言っていた面白いものであることは間違いない。しかし、土と雨に汚されることなど構いもせずになんわん泣く少女は、お世辞にも面白いと言えなかった。

「……そういえば、文はなんだか機嫌が悪かったねえ。あいつが苛立ってるところなんて初めて見たよ」

彼女は天狗の中でも古参で実力があり、滅多なことでは怒らない。鬼がどれほど恐ろしいかも知っているはずだし、証拠に普段は萃香に媚びるような態度を取っていた。

そんな文が不機嫌を隠しもせず、かつ鬼がとても嫌う嘘をついてまで萃香をここに向かわせた理由。深く考えずとも、明白だった。

「……本当に、あいつは度胸があるよ。まったく」

最強の鬼とまで謳われたこの伊吹萃香に、弱小妖怪の指導をさせようとは。

見るだけで弱いと分かる少女に文が何を感じたのかは知らないが、長年鬼の手下であった天狗が鬼を騙すなど、前代未聞のことである。長い年月を生きてきた萃香であっても、こんな経験は初めてだ。

あるいは初めてだからこそ、この侮蔑とも取れる行為を面白いと感じたのかもしれないが。

それに、経緯から考えて、おかつぱの少女が泣く理由は文にあるのだろう。だとすれば

「私に嘘をついた落とし前は、しっかりつけてもらわないとねえ」

にやりと不敵に笑い、萃香は太い枝から飛び降りた。

そのろく 恐怖！天狗も恐れる最強の鬼！

~~~~~

太郎くんへ

太郎くん、こんにちは。毎日のようにお手紙を書いています、迷惑じゃないかな。邪魔になっていたりしませんか？

私は、どうやら甘えていたようです。外と幻想郷とでは妖怪のあり方が違うと知っていたのに、私は外の妖怪でいようとし続けたの。

いつものように太郎くんや他のみんなと子供を驚かす、そんな毎日が幻想郷でも送れると思ってた。きつと、できないことはないと思うの。ちよつと変わった人が多いけれど、みんないい人ばかりなもの。

ただ、幻想郷には幻想郷の常識があったんです。空を飛ぶことも、弾幕ごっこも、みんなその常識の一つ。後から来た私がそれを無視するなんて、できないよね。

だからね、太郎くん。花子は誓います。

外の世界での「トイレの花子さん」とは、今日でお別れです。私は幻想郷に生きる廁の怪、「御手洗花子」として生きていきます。

きつと驚いているだろうね。心配しているかな？ でも、すつごく強い妖怪の先輩がいろいろ教えてくれるそうなので、安心してね。手紙のお姉さんがわざわざ取りに来てくれるので、修行中でも手紙を書けそうです。

ドジでトンマな私だけれど、きつと幻想郷に輝く一等星になつてみせる。応援してね！

しばらくは特訓に集中しちゃうけど、必ずまたお手紙を書きます。それまで、お元気で。

花子より

~~~~~

箸が重いと感ずることがあるうとは、思いもしなかった。

今も腫れぼつたい目を俯かせ、花子は屋台の赤提灯に照らされた八目鰻の蒲焼を眺めた。つい十分ほど前に一口食べただけで、そこから一向に箸が進まない。味は悪くない、どころか驚くほどおいしいのだが、今の彼女には八目鰻の香ばしさに感動する力すらも残されていなかった。

「花子ちゃん、冷めちゃうよ」

袖をたすきがけにした蘇芳すおうの和服を着た少女 屋台の女将であ

る夜雀のミスティア・ローレライが、苦笑気味に告げる。花子はそれに対して、

「……はい」

と、消え入りそうな声で返した。このやりとりは、屋台に来てもう三度目になる。酔っ払いの相手には慣れているだろうミスティアも、これには苦笑いだ。

一方、その酔っ払い。花子の隣に腰掛け、一升瓶をがぶがぶ飲んでいる萃香である。泣き止んだものの暗い気持ちを腹に抱えていた花子は、彼女に無理矢理この屋台へと連れてこられた。初対面だというのに萃香は名前だけを名乗り、嫌がる花子の腕をむんずと掴んで文字通り引きずったのだ。

屋台の常連らしい萃香の顔を見るや、ミスティアはすぐに八目鰻と酒を用意してくれた。ご丁寧に、花子の分までしつかりとだ。しかし、花子は出されたコップに入っている焼酎には口をつけていない。

ここに来てから三十分も経っていないのに一升瓶を二本も空にした萃香が、口元を拭いた。

「なんだい花子、もっとグイっといきなよ。まずは飲む。そうすりゃ言葉は出てくるさ」

「……そんな気分になれないです。それに、話すことなんてありません。私、あなたのことほとんど知らないもの」

「ふうん、そうかい」

八つ当たりにも聞こえる言葉に、新しい鰻を焼いているミスティアの顔が青くなった。花子は鬼の恐ろしさを知らないから、この無礼も無理はないのだが。

しかし、萃香は腹を立てるようなことをせず、むしろ楽しげに口元をほころばせた。

「じゃあ、このまま泣き寝入りするんだ？」

「……なんのことですか。私は別に」

「天狗に仕返し、しなくていいのかい？」

弾けるように顔を上げて萃香を見る花子の顔は、驚いているといふよりは怒っているように見える。

「見てたんですか？」

「いんや。見たのは花子が泣いてるところだけだよ」

できれば触れてほしくないことなのだが、萃香はどこまでも正直な少女であった。言われたくないことまでズバズバ言うが、そこには文のような皮肉つばさがまるでない。魔理沙に似ている部分があるなど花子は思った。

しかし、どうして泣いていた理由が天狗にあると知っているのか。探るような瞳でじつと萃香を見据えると、彼女はにやりと笑って、

「私は密と疎を操る鬼。ちんけな隠し事ができるなんて、思わないことだね」

文との悶着を知っていることと彼女が鬼であったり密と疎を操る力を持っていることは、実のところまるで関係がない。しかし、萃香から感じる不思議な貴祿のせい、花子は彼女の言葉におかしなほど納得してしまった。

今も文にレミリアを悪く言われたことは悔しいし、一泡吹かせてやりたいと思う気持ちはある。もし萃香が本当に強い妖怪だという

のならば、協力を仰ぐ者としてこれほど心強い相手はいないのではないか。

小さく頷いてから、花子は呟くように告げた。

「仕返し……したいです。文さんに、レミリアさんのことを悪く言っただの、謝ってほしいです」

全てを知っていると思い込んでの発言だったのだが、レミリアという言葉を聞いて萃香は目を丸くしている。どうしてだろうと、首を傾げた。

「全部知ってるんですね？」

「あえ？ ああうん、もちろん。吸血鬼を悪く言われたから、謝ってほしいんだろ？」

おうむ返しもここまでくると清しいほどだが、頭の回転は小学生レベルである花子にはそれを見抜くことができなかった。鰻を二人前差し出してくれたミステリアだけが苦笑を浮かべている。

花子はこくりと強く頷いた。自分のコップを手に取り、一気に酒を飲み干す。

「ぶはっ」

音を立ててコップを置き、早速ほてり始めた体をそのままに、萃香へと頭を下げる。

「萃香さん、お願い！ 文さんへの仕返し、手伝ってください！」「ふうん、やっとこさいい顔になってきたじゃないか。幻想郷の妖怪ってなら、こうでなくっちゃ。なあ夜雀」

「私に振らないでくださいよ。ま、その通りだとは思いますが」

呆れつつも同意するミスティアに気を良くしたのか、萃香はずいと花子の方へ身を乗り出し、その肩に手を回した。ついでに、新しい一升瓶の中身を花子のコップへ注ぐ。童女二人が肩を組んで酒を飲み交わす絵図は滑稽以外の何ものでもないのだが、幻想郷では日常の光景である。

なみなみと注がれた酒を再び口に流し込み、熱い感触が喉を伝う。それらが胃袋に落ちる頃には、花子の抱いていた暗い感情はすっかり消え失せ、取って代わったように文への復讐心が燃え上がっていた。

「絶対やつつけてやるんだから。あんな天狗なんて、けちよんけちよんにしてやるんだから！」

「よしよし分かった、手貸してあげるから、まずは何があつたかを話してごらんよ」

萃香はこれまた墓穴を掘った。酒が回ってきた花子が萃香へと視線を向け、

「全部知ってるんですよね？　なんでまた聞くんですか？」

「あぁっと、これはほら、アレさ。腹の中のを全部吐き出してからじゃなきゃ、力が入らないってエヤツさ」

苦しい言い訳だったが、花子はうとうと唸ってから、この場で愚痴るのも悪くないと口を開いた。萃香が事の顛末を知っていようがいまいが、気分をすっきりさせられるのならば悪くない。

「実はですねえ。私が幻想郷に来たのは、最近のことなんですよ」

萃香とミスティアは思わず目を合わせた。彼女の愚痴が、よもや

郷に来るところから始まるうとは思わなかったのだ。しかし、幻想郷に来てから愚痴らしい愚痴を吐いていない花子は、語れる愚痴は全部語る腹つもりでいた。

幻想郷きつての大妖怪である萃香も、これには降参のようだ。酔っ払いのぼやきが普段は言えない本音であることは、無類の酒好きである彼女もよく知っているからである。

「……夜雀」

「はいはい」

ぺらぺらとよく舌の回る花子と、呆れ顔ながらも微笑を浮かべる萃香。彼女らの前に、ミスティアは蓋を開けたばかりの一升瓶を二本置く。

「最初はうまくいってたんですよ。人里の寺子屋でがんばって花子さんしてたのに、あのヤクザ巫女ったら」

長い夜になりそうだ。そう呟いた萃香の声は、残念ながら花子には届いていなかった。

あれほどの土砂降りがあったというのに、日付の変わった夜空は満点の星空となっていた。

川の流れに足をつけながら、萃香は宝物の瓢箪を呷る。火照った体を冷やすという名目で川を訪れたのだが、彼女が素面になることは、まずないと言っている。今は、散々飲ませてしまった花子の付

き添いという形だ。

その花子とはいえば、萃香にならって川辺に靴を置き、夏場でも温まることのない川の水に素足を浸して夜空を眺めている。もう酔いはだいぶ醒めているようだ。かなりの量を飲んでいたはずだが、もしかしたら彼女は酒豪なのかもしれない。

「気持ちいいですねえ」

「だろう？ 酒の後はこれが一番だよ」

愚痴を言い終えた花子は、冷水の心地よさも相まってとても上機嫌だ。勧めた萃香としても、これほど喜んでもらえるのならばうれしい限りである。

隣で目を細める花子の愚痴を思い出して、萃香は頬を緩めた。

「しかしまあ、花子はずいぶん波乱万丈な日々を送ってきたんだねえ」

「そ、そうかなあ」

足で水面を叩いていた花子は、照れたように頬を掻く。

「色々あったけど、みんないい人でしたから。文さんは、その、ちよつと嫌な人だと思っただけだよ」

「……」

「確かに私は弱いけど、それでもみんなと仲良くしていけます。これまでもそうしてこれたんだもの」

あの天狗は確かに口が悪い。あれに好き放題言われたのだから花子が怒るのも無理はないが、花子は萃香が思っている以上に憤慨している。今でこそ落ち着いてはいるものの、文を許すことはできな

いようだ。

しかし、萃香は文の言葉が間違っていると切って捨てることができなかつた。

「ねえ花子。あんたは、弱いままでもいいと思ってるのかい？」

わずかに真剣みがある声に、花子が萃香のほうを向く。横目でそちらをちらりと見てから酒を一口飲み込んで、袖で口を拭いた。

「確かにまあ、天狗は言い過ぎたと思うよ。虫の居所が悪かつたんだろうねエ。でもさ、私やあいつがおかしいことばかり言ってるようには思えないんだよ」

「……どういうことですか？」

花子の声には、わずかな苛立ちが込められていた。萃香を理解者だと思ってくれていたのだろうと思うと少しだけ申し訳なかつたが、そもそもの目的が彼女を諭すことにある。こんな役割を押し付けてきた天狗には相応の報いを与えてやらなければと考えつつ、萃香は続けた。

「どうもこうも、ここは幻想郷だからねえ。文の言うとおり、自分の筋を通したいなら力で示すしかない」

「だからって、無闇に戦うのはおかしいです。ちゃんと話し合えば、きつと」

「花子さア、あんたは妖怪だろう？ 弱っちい人間みたいなこと言つて、そんなんじゃ幻想郷でやってけやしないよ」

「うう……。でもでも、レミリアさんやフランちゃんは、普通の遊びをしますよ。二人ともいい人だったし、戦いが好きなようには見えなかつたよ」

本当に心から、吸血鬼の姉妹を友人だと思っているようだ。あのわがまま姉妹にはもったいなさすぎる言葉だと声には出さず苦笑して、

「仕方ないねえ。私や長話は嫌いだけど、一つ昔話をしてあげるよ。花子にとっちゃ酷な話だろうけど、ちゃんと聞くんだよ」

「……？」

怪訝な顔をする花子。それでも律儀に話を聞く体勢に入ってくれ、彼女の真っ直ぐさが、萃香は好きだった。

「幻想郷は、博麗大結界で覆われている。あんたが通ってきた、外の世界と郷を区切る結界のことだね。あれができてから、妖怪は人間を簡単に取って食うことができなくなった。ある妖怪がちゃんと食料を提供してくれるから、妖怪はだんだん戦えない腑抜けになっていった。ちょうど、今の外にいる妖怪達……花子みたいにね。」

そんな時に、外の世界からめっぽう強い妖怪がやってきたんだ。連中は郷の妖怪達をあっという間に手下にしちゃってねエ。幻想郷を乗っ取るうとしたんだよ。結局は幻想郷で一番強い妖怪がそいつをコテンパンにして、いろいろな禁則事項を決めた契約を結んだのさ。最近のことだよ、まだあれから十年も経ってない」

「そんなことが……」

「うん。その幻想郷を我が物にしようとした悪魔が……レミリア・スカーレット。あんたの大事なお友達さ」

途中から予想はできていたらしく、花子が声を荒げて反論するよくなことはなかった。しかしそれでも、彼女の顔は動揺を隠せずにいる。

「レミリアさんが……そんな……」

「あのチビは、頭の中がガキだからねエ。どうせ深く考えないで、『幻想郷を私だけのものにしたいわ』なんてわがまま言ったんだろ。巻き込まれた方はたまったもんじゃないよ」

冗談めかして声真似などしてみたが、花子はくすりとも笑わなかった。

やはり落ち込んだか。予想はしていたのだが、暗い顔をしている花子を見ると萃香は口を開くのが億劫になった。花子は萃香にとつて、もう大切な友人だ。できればこんな顔をしてほしくない。

しかし、彼女のためだと自分に言い聞かせて、話を再開する。

「まあ、あの騒動のおかげで妖怪共は目が覚めたんだから、ありがたいっちゃありがたいのかもしれないね。幻想郷の妖怪はこのままじゃまずいと思い立って、博麗の巫女 あんたの言うところのヤクザ巫女だね。霊夢に相談したのさ」

「霊夢に？ なぜ？」

「あの子はね、花子が思っている以上に重要な役割を担っているのさ。幻想郷のバランスは、霊夢が保っているんだからね。この辺は長くなるから、また今度にしよう。」

続けるよ。この頃は霊夢と面識がなかったから聞いた話なんだけどね、当時のあいつは大した異変もない生活にだらけきっていたそうだよ。ただでさえアレな感じなのに、酷いもんだつたらうねえ。ところが、それでも考えるべき時はちゃんと考えるんだよね、霊夢は。幻想郷には人間と妖怪双方が活気付くために戦いが必要だと判断したんだ」

外の世界に浸りきっている花子には、戦うことで得られる活気など理解もできないだろう。彼女の持論である「対話で解決できる」

に落ち着いてしまいかねないので、萃香はさつさと続きを口にした。

「そこで霊夢が考えたのが、スーパーカドール。自分の得意技に名前をつけた、技の美しさを競うルールさ。スポーツ感覚でできる決闘は、弱い人間にも巫女を倒さなきゃならない妖怪にも大うけだった。私はもつと力技でやりあうのが好きなんだけど、まあ私の考えが古いんだろうね。」

スーパーカドールを使って流行りだした遊びが、あんたが妹のほうの吸血鬼に誘われた『弹幕ごっこ』だよ。美しさのほかに当たったら負けってルールがある。戦いを遊びに置き換えた弹幕ごっこは幻想郷で知らない奴がいけないほど有名になったんだ」

よもや弹幕ごっこが決闘の一つだとは思いつかなかったのか、花子は口を半開きにして話を聞いていた。なんとも間抜けな顔で、川に浸かっている足首に夏草が絡みついても気づかない有様である。

話はまだまだ複雑だったりするのだが、萃香は長話がいい加減苦痛になってきたので、さつさと終わらせることにした。慣れない真面目な顔をふにやりと和らげて、

「そんなわけで、幻想郷じゃ戦いが日常で、決闘は遊びなんだ。弹幕ごっこくらいできないと、笑い者にもなりやしないってエことさ」
「むう。でも私、弹幕どころか空も飛べないし。妖力だつて変化へんげにしか使ったことないですよ」

「だから天狗に友達を馬鹿にされちまうんだよ。弱い妖怪をいじめるのが大好きだからね、連中は。……悔しかったんだろう？ 仕返しをしたいんだろう？」

水面に映る自分の顔を見つめながら、花子は小さく一度だけ頷く。泣き寝入りすることを良しとしない辺りはまだ救いがあると萃香

は思った。幻想郷　こと妖怪の間では、やられたらやり返すことが常識である。勝者が敗者の再挑戦を積極的に受け入れることはスperlカードルールにも記載されているし、勝った妖怪は大抵調子に乗っているのだ。また叩きのめしてやると意気込む輩が多いのだ。そういう意味では、花子は幻想郷の妖怪に向いているのかもしれない。

間違っていたのは自分であつた。その事実気づいてしまった花子が、どこか申し訳なさそうに頭を下げた。

「私は弱いから……文さんにまたやられちゃうと思うの。萃香さん、力を貸してください。文さんをやっつけてください」

「ああん？　何言ってるんだい。やり返すのはあんただよ？」

「えっ」

驚いて顔を上げる花子は、どうやら萃香の言いたいことをいまいち理解していなかったようだ。何のための長話だったのやらと溜息をつき、

「確かに手伝うって言ったけどね、そりゃあんたを鍛えてやるって意味さ。文にやられたのは花子なんだから、やり返すのも花子なのは当然だろう？」

「そ、そんなあ！　さっきも言いましたけど、私は空も飛べないんですよ。そんなすぐに、あの文さんと戦えるわけじゃないですよ」

「だからア、そのためのスperlカードルールなんだったよ。弱い奴でも強い奴にケンカを売れるルール。それを遊びにしたのが弾幕ごっこ。文はよくやってるらしいから、それで勝負すればいいじゃないか。飛び方と弾幕の作り方くらいなら教えてやるし、スperlカードも一緒に考えてやるから」

萃香の見立てでは、彼女をどれほど仕込んだところで、せいぜい中堅妖怪に届くかどうかといったところだろう。決闘を先延ばしにすぎるのもお互いにとって面白くない。特訓の期間は数ヶ月程度にするとして、その時間内にどれだけ鍛えても、花子の地力では宵闇の妖怪か氷精程度の強さにしかなれないかもしれない。

しかし、花子が幻想郷で生きていくには、とりあえず十分だ。文には勝てないかもしれないが、萃香は萃香で彼女を懲らしめる予定がある。そこで花子の仇をとってやってもいいだろう。

萃香はもう花子を育てる気であるのだが、当の本人は決断しかねているようだ。

「でも、ううん。文さんに仕返ししたいって気持ちはあるけれど、何も戦ってコテンパンにしたいなんて思っただけじゃないなあ」

「甘い甘い。ちょっとやそつとの悪戯があつて天狗に効くわけないよ。文は頭の回転がめっちゃ早くちゃ早いんだ」

「うう、そっかあ。そうですねえ」

納得したような口ぶりではあるが、不満そうに唇を尖らせている。辺り本心ではないのだろう。それでも、花子の心中はもう戦い方を学ぶ方向に傾いているようだ。

後一押し。萃香は川に足を叩きつけて水飛沫を上げながら、

「幻想郷じゃどこにいても弾幕ごっこをやってるし、これからも郷を歩いて回るなら、流行ってる遊びくらいはできないとねえ。幻想郷の一員になるんじゃないのかい？」

「むむ、それを言われると……」

「吸血鬼の妹にも誘われたんだらう？　いつまでもお手玉ばっかじゃ飽きられるよ。弾幕ごっこにも付き合っただらうなきゃ」

フランドールのお話を花子がとても楽しそうだったので、きつと彼女にとって一番の友人なのだろうと萃香は踏んでいた。奥の手として取っておいた手段は、かなりの効き目があったようだ。

今までで一番長い唸り声を上げて、花子は腕組みをして熟考している。そこまでスペルカードルを学ぶことが嫌なのかと萃香はさすがに驚いたが、実際はただ単に初めてのことを学ぶということに逡巡しているだけである。

しばらく右に左に首を傾げながらうんうん言っていた花子だが、ようやく決心がついたらしく、よしと小さくつぶやいてから萃香へと振り向いた。同時に足も動き、川面が揺れる。

「萃香さん、私やります。空の飛び方とスペルカードのやり方、教えてください！」

「よしきた！ その言葉を待ってたんだよ！」

勢いよく立ち上がり、川面をバシャバシャとやりながら、萃香は花子の手を取り肩を抱き寄せた。霊夢の住む神社で漫画なるものを読んから、一度やってみたかったことがあったのだ。

ほとんど背丈が同じなので背伸びなどしつつ、されるがままに肩を寄せられる花子の顔の横から腕を突き出し、夜空に散らばる無数の星から適当なものを一つ選んで指差した。

「いいかい花子、あれだよ！ あれがお前の目指す星だよ！」

「ほ、ほし？ 私そんなもの目指すって言ったっけ」

「余計なことは考えなくていいよ。それよりほら、見てごらん！」

あの美しく輝く一等星。花子はある風、幻想郷で輝く星になるんだよ！」

実際のところその星は三等星程度の光しか放っていなかったし、

花子が見ている星はまったく別の星だったりもするのだが、萃香の意味のない熱血っぷりに巻き込まれ、花子もまた瞳を輝かせた。単純な少女が二人集まったところで、やはり単純でしかないのである。

「私、あの星のようになります！ 幻想郷で一番輝いて見せます！」

「いや、一番は私……。まあ、いいか。誰よりも光り輝く一等星になるんだ花子！ あの星に誓えるか！？」

「誓えます！」

「声が小さいよ！」

「誓いますッ！」

川のせせらぎをかき消して、花子と萃香の声が妖怪の山にこだまする。一言発するたびにヒートアップしていく二人のやりとりは、日が昇るまで続いたという。

朝方、声を枯らして問答を繰り返す二人を見た通りすがりの厄神が、引きつり笑いで「これは厄い」などと呟いたらしいが、それはまた別の話である。

彼女の部屋には、壁という壁に原稿の覚書が貼ってある。鴉天狗の部屋は、どこも似たようなものだ。

窓から差し込む朝日は、窓際にある机だけに当たっている。そんな薄暗い、しかし自身にとっては慣れ親しんだ自室で、文は握って

いたペンを机に転がした。

「はあ……。私は馬鹿だ」

空飛ぶ皮肉とまで呼ばれることがある文は、その場に誰もいないのをいいことに、長いこと口にしていなかった自虐を呟いた。昨日の夕方に起きた出来事を酷く後悔しているのだ。

あの御手洗花子なる妖怪の不甲斐なさには本気で腹が立ったし、幻想郷に住まう先達として喝をくれてやったことも間違ったことだとは思っていない。

ただ、それにしても自分らしくなかった。狡猾な天狗である彼女は、その天狗仲間からすら「嫌な奴だ」と言われることがあるほど皮肉屋である。花子はある見えた目の妖怪にしてはそこそこ常識のある少女だったので、分かりそうな皮肉でからかうのが普段の文である。

しかし、昨日はタイミングが悪かった。最初こそポーカーフェイスで近づいたのだが、その時点で文はすでに不機嫌だったのだ。ばら撒いた号外をライバルの姫海棠はたてにこき下ろされた挙句、博麗の巫女に里に紙くずを捨てたという理不尽な理由　無論、文にとってはである　で退治された後だったのだ。

誰かとくだらないことでケンカをするなど、幻想郷では日常茶飯事である。問題は、その後だ。

かなりきついことを言った上に実力の差を見せつけたとはいえ、花子があそこまで泣き崩れるとは思わなかったのだ。頭に上った血が引き冷静さを取り戻した文を襲ったのは、長い人生でほとんど無縁だった罪悪感。とはいえ、今更手のひらを返すかのように謝りに行くことも気が引けた。

そこで文は、山に遊びに来ていた鬼の伊吹萃香を捕まえ花子の居場所を教えたのである。本当の理由を話せば花子に無理矢理頭を下げさせられるのは火を見るよりも明らかだったので、面白いものがある、としか言わなかった。彼女の身なりは童女のそれだが、中身は鬼の中で最も強いと謳われる大妖怪だ。花子を見れば、文の言わんとしていることくらいは伝わるだろう。

そう、伝わってしまったのだ。鬼に嘘をついてしまったということまで。それが何より文を後悔させていた。

「何をやっているんだかなあ……」

あり得ない失態であった。千年も生きれば一度や二度は魔が差すこともある。しかし、よりもよって鬼相手に嘘をつくような愚を働いてしまうとは。

どなしっぺ返しを食らうことになるのだろう。気になって気になって、夜も眠れなかった。一睡もせずに朝を迎え、記事でも書いていけば気も紛れると思ったが、それも無駄な努力に終わっている。

「は　　ああああああ……」

長い溜息と共に、文は机に上半身を投げ出した。机上にあったペンや雑多な本が雪崩となって落ちていく。それすらも、今の文には気にならなかった。

鬼。それは最強の種族である。なんとも簡単な説明だが、それだけで全てを物語ってしまう存在が鬼なのだ。排他的で自尊心が高い天狗すらも、彼らの姿を見ただけでへりくだってしまうほどに。

鬼は一樣に、嘘を嫌う。どこまでも馬鹿正直な主張をその力で押

し通す。彼らに嘘をつこうものなら、いかなる妖怪といえどもただではすまないだろう。

「ただではすまない……だろうなあ」

改めて声に出してみると、その響きのなんと恐ろしいことか。あの妖精以下の弱小妖怪を育てるとなればそれなりの時間はかかるだろうが、それを終えた萃香は必ず文に仕返しをしにくるはずだ。

死にはしないだろうが、死ぬほどの覚悟をしなくてはならない。今の文にできることといえば、せいぜいが「痛い仕返しじゃありませんように」と祈ることばかりだ。

文は朝日と呼ぶには高く上りすぎた太陽を窓から見上げ、

「あと何度、この朝日を拝めるのだろう」

我ながら大げさだと思いつつも、ぼんやりと呟くのがあった。

そのなな 恐怖！瞳閉ざした無意識の怪！

~~~~~

太郎君へ

太郎くん、こんにちは。一週間ぶりだね。なんだか手紙を書くのがとても久しぶりに感じます。

修行が始まったのはいいのだけれど、私は妖怪としての基礎もできていない状態だったそうです。普通の妖怪なら無意識のうちに来て当たり前前のができないから、まずはその練習から始めました。

一週間続けてもうまくいかなかったから、先はまだまだ長いかなあと思つてただけけど……。無意識の力つてすごいんだね。幻想郷では教わるのがとても多いです。

ともかく、修行は順調……。かな？ 今のところは、結構楽しくやっています。心配しないでね。

そうそう、太郎くんは心を読まれることをどう思う？ 恥ずかしいけど、その人を嫌いになったりどこかに閉じ込めたくなくなったりするかな？

きつと難しい問題なのだろうし、いざ心を読まれてみないと分か

らないのかもしれないけど、心の中を知ってもらえるということはいいいことなんじゃないかなと花子は思っています。単純かな？

明日からは、空を飛ぶ練習です。楽しみだな。ちゃんと飛べるようになったら、一番に手紙を書くからね！

それではまた。お元気で。

花子より

~~~~~

「むーむむむむ」

座禅を組み、眉間にしわなど寄せながら、花子が唸り声を上げている。彼女はとても真剣なのだろうが、萃香にはどうしてもそれがおかしく見えてしまう。

花子の修行が始まってから、一週間の時が過ぎていた。妖怪の山にある巨大洞窟近辺の川原である。魚も取れるし、少し歩けば木の実が豊富な場所もある。何より洞窟が鬼の住む地底界に通じているため、文と遭遇する可能性が極めて低い。もし彼女がやってきたとしても萃香を見れば逃げてしまうだろうが、秘密裏に特訓したいという花子の頼みを萃香が呑んだ結果である。

実は遠まわしに特訓を推した人物こそが射命丸文なのだが、花子がそれを知ることはないだろう。萃香は嘘が嫌いだが、花子に直接

聞かれない限り教えてやるつもりもなかった。

それにしても、瓢箪の酒を呷りながら一心不乱に修行を続ける花子を見やる。この妖怪を育てるのは、思っていた以上に骨が折れそうだった。

変化へんげにしか使わなかったためか、花子は妖力の使い方が驚くほど下手だった。ただ恐ろしい顔に化けるだけであれば適当な量を垂れ流せばそれですむのだろうが、弾幕を放つとなればそうはいかない。妖力を思い描いた通りの量と質で使えなければ、空を飛ぶことすらできないのだ。

まさか飛行程度の妖力も練り上げられないとは思っていなかった。飛び方さえ教えれば簡単に飛べるだろうと考えていた萃香はとて驚いた。妖怪ならば息をすることと同じほど簡単な力の使い方だと思っていたからだ。

そんな理由があつて、花子は今、人間の僧のような精神統一修行をしている。始めたころに比べてだいぶ妖力の扱いにも慣れてきたようだ。

もうそろそろ飛行を教えてもいい頃合かもしれないが、まだかなり無駄が多い。基礎はもつと徹底させたほうがいいだろう。そこまですべて考えて、萃香はふと口元に苦笑を浮かべた。

「私もこの一週間で、ずいぶん師匠役が板についてきたねエ」

自分が誰かにものを教えるなど、今まででは想像もできなかった。たまに戦いや弾幕ごっこの手ほどきをしてやることはあれど、大体が力技で叩きのめし体に教え込むという荒業だ。これほど本格的に妖怪を指導した経験はなかったが、なかなか楽しいものだと感じている。

きつと花子が素直だからだろうと、萃香は思った。時々ひねくれたことを言う少女だが、鬼の萃香が気に入るほどに根が真っ直ぐなのだ。一週間も続いている基礎訓練を文句も言わずに続けているあたり、その性格が見て取れる。

「しかし、ふうん。意外といつかなんといつか」

唸る花子を見ながら、ぼんやりと呟いた。萃香ほどの妖怪となれば、相手の妖気を見るだけでその人物が持つ妖術の縁が分かる。天狗ならば風との縁が凄まじく強いし、妖獣は地の力を借りて大地を自在に駆け回る。いわゆる得意分野である。必死に妖力をまとめ上げようとしている花子から漏れている妖気は、水との縁が深いようだ。

厠の妖怪と聞いていたので、妖気の縁を見るのが少し嫌だったが、花子が持つ縁は汚水などではなく、純粋な水と繋がっていた。厠と綺麗な水との繋がりが萃香にはいまいち分からなかったが、花子のいた学校はほとんどが水洗トイレだったということがその理由である。さらに言えば花子は綺麗好きなので、夜中に出てきてはトイレ掃除をしていたせいで、汚いものとの縁が薄いのだ。

萃香は花子が汚物を操る妖怪になるのではとハラハラしていたが、とりあえずその心配はないようだ。水を用いたショットと、彼女特有のスペルカード。花子がどんな技を編み出すのか、今から楽しみだった。

「ま……弾幕は当分先になりそうだけだね」

今の花子は、下手をすれば人間や妖精以下である。数ヶ月でどこまで育てられるかまったく予想ができないが、元来前向きな萃香が不安に感じることはなかった。

日がずいぶん高くなってきた。そろそろ昼食時だろう。集中しきっている花子に近寄り、その肩を叩く。

「花子、そろそろ飯にしようか」

「むむむ……むむむ？ もうお昼ですか、あつという間だなあ」

唸り声をやめて顔を上げる花子。同時に、彼女が練り上げていた妖力が崩れて霧散する。もう少し綺麗な後片付けがあるだろうにと思っただが、生まれたばかりの妖怪と大差ないのだから、こんなものなのかもしれない。

立ち上がるうとして、花子がバランスを崩す。足が痺れているようだ、これもいつものことである。慣れた手つきで支えてやると、彼女はやはりいつも通り律儀に頭を下げた。

「うう、すみません」

「気にしないでいいよ、私も座禅は嫌いだし」

歩きにくそうな花子の手を引き、萃香が作った簡単な焚き火小屋へ向かう。寝泊りもそこでしているが、嵐でも来ない限り雨風は凌げる大ききさになっている。

本日の昼食は、萃香が能力で集めて一網打尽にした川魚。花子が座禅を組んでいる間にワタを抜いてあるので、あとは焼くだけだ。かなりの量があるので、干物を作ることできるだろう。

焚き火を囲むように、串に刺した魚を立て並べていく。程なくしてうまそうな香りが溢れ、萃香と花子の食欲をそそった。白米がほしいところだが、ないものねだりしても仕方がない。二人で両手を合わせて、いただきますと声を揃える。

二人分の合掌を受けて焼き魚がどう思ったかは知らないが、とも

かく萃香と花子は好きな魚を手にとって口に運んだ。軽く塩を振った程度の味付けだが、焼き魚にはこれが一番だと萃香は思っていた。満面の笑みで魚の白い肉を頬張る花子も、きつと同じことを思っ
てくれているだろう。こここのところ毎日一食は魚を食べているが、
まだ飽きられてはいないらしい。

酒を飲みつつちびちび食べる萃香と違い、花子はよほど腹が減っていたのか、あつという間に一匹目を平らげてしまった。指を舐めつつ、火に炙られている焼き魚を見つめている。

「次、食べていいですか？」

「いいよ、遠慮しないで食べちゃいな」

いちいち許可を取ることもないだろうにと、萃香は笑いつつ頷いた。花子が喜んで一番大きい魚を取り、

「……あれ？」

頓狂な声を上げる。どうしたのかと見てみれば、彼女は焼かれている魚を凝視していた。手にはもう焼き魚を持っているのだ。

「どうしたんだい？ 食べるなら一匹ずつにしな、欲張りはよくないよ」

「ち、違います！ ねえ萃香さん、最初に焼いてた時より、一匹少
なくないですか？」

指差された焼き魚は、言われてみれば確かに少ない。全部で五匹焼いたはずだが、もう一匹しかなかった。

「んー？ 花子、あんたそれ本当に二匹目？ もう三匹目なんじゃ

ないの？」

「まだ二匹目ですよ！ 萃香さんこそ、もう食べちゃっておかわりしたんじゃないですか？」

ややムキになって、花子が反論する。弱い妖怪でこうまで萃香に突っかかってくる者は、彼女意外にそうはいないだろう。そのことが嬉しくもあつたが、犯人扱いされたのでは面白くない。

胡坐に組んだ右ひざに頬杖をついて、萃香は溜息をついた。

「私や酒の肴につまんではる程度だよ。恥ずかしがらなくてもいいさ、食い盛りつてことで許してあげるよ」

「違いますってば！ ……あ、ほらまた！」

花子の視線に釣られて焚き火に目を落としてみれば、魚がさらに一匹姿を消しているではないか。さすがの萃香もこれには目を丸くした。

「ありや？ なんだいこれは」

「また、ごまかして！ 萃香さんは鬼なんですよ。強い妖怪なら、魚をあつという間に食べちゃうくらいできるんじゃないんですか？」

「ああん？ むちゃくちゃな言いがかりだねエ。早食いと強さになん関係があるってんだい」

「そ、そりゃまあ、なんとなく……」

もう分かっていたことだが、花子はいまいち思慮の足りない少女である。

「花子。あなたはもう少し考えてからものを言ったり行動したほうがいいよ」

「……萃香さんに言われたくないです」

言葉に詰まった。自分を柵に上げた発言であることは自覚していたが、改めて反論の余地がないことを思い知らされる。なるほど、萃香も考えてからものを言ったほうがいいことは明確だ。

返す言葉を必死に探すも、萃香がそれを掘り当てられることはなかった。花子がにやりと不適に笑い、

「うふふ、一週間も一緒に暮らしてるんです。私にだって萃香さんの欠点くらい見えてますよ」

「それを指摘する度胸があるかどうかは、また別だけどね……。ハア、ともかくほら、私は食べてないよ。串だってこれしかないじゃないか」

今も少しずつしか減っていない一匹目を花子の前に掲げて見せるも、花子はいまいち納得できないらしい。

「ううん、でも私だって食べていないもの。やっぱり萃香さんが無意識のうちに食べちゃったんですよ」

「無意識って、私は今まであんたと話してたじゃないか……。目にも留まらない速さで魚を平らげる妖怪なんて、聞いたことないよ。亡霊に心当たりはあるけど」

呆れて笑いが引きつったが、ふと酒を飲む手を止めた。

「ん？ ……無意識？」

この場にいるのは、萃香と花子。確かに二人だけだ。しかしそれは、萃香の意識が認識している人物は、である。

脳裏に鴉羽色の睡広帽子を大切にしている妖怪少女の姿がよぎる。ここは地底の入り口付近なのだから、彼女と遭遇したとしてもなん

ら不思議ではない。

すぐ近くに、彼女がいる。萃香は確信した。

「あのイタズラ娘め……」

「?」

きよとんとしている花子を置いて、萃香は自身の能力である『密と疎を操る程度の能力』を使った。

生命活動に支障が出るのでほんの一瞬だけだが、萃香と花子の無意識を萃める。二人から無意識が消えたのは一秒にも満たない時間であったが、それでも無意識に潜んでいた者を見つけ出すには十分だ。

花子の隣に、何の前触れもなく本当に突然、少女が出現した。薄く緑がかった灰色のセミロングの上には、萃香の予想通り鴉羽色の帽子が乗っかっている。まるで初めからそこにいて昼食に参加していたかのように、焚き火の前に座って焼き魚を頬張っていた。

「んー。あふいーへほひいひおはへん、ほーひい」

もぐもぐとやりながら理解不能な声を上げる少女に、花子がとても分かりやすいリアクションを取った。

「うわ、わああああっ!?!」

気配も何もなかったのに突然隣に現れたのだから、彼女の反応も無理からぬことだろう。手に取っていた魚を落としてしまっても気にならないほど驚いているが、鴉羽色の帽子を被った少女 古明地こいしは、まるで気にした様子を見せていない。

これも無意識の行動なのだろうか、萃香は訝しげに眉を寄せた。こいしは無意識を操る妖怪であり、自身も無意識に予想外の行動を取ることが多いそうなのだが、萃香には無意識の行動とやらが故意に思えて仕方がない時があった。どうにもわざとらしいのだ。

「こいし、食べたきゃちゃんと顔見せてからにしな」

「あわわわ、誰？ 誰なのこの子!？」

腰を抜かしている花子の言葉を聞いているのかいないのか、こいしは口に含んでいた魚を飲み下し、幸せそうな笑顔を浮かべた。

「お魚、おいしいねえー」

なんとも間の抜けた声に、萃香は笑うしかなかった。

唐突なこいしの昼食参戦には驚かされたが、追加で魚が数匹犠牲になった程度で、花子は満腹になることができた。

三人揃って食後の挨拶を終え、今は食休み中である。神出鬼没が過ぎるこいしに最初はどぎまぎしていたが、話してみれば普通の少女であった。少しだけ話し方がのんびりしているが、彼女の性格だろう。少なくとも花子と同レベルかそれ以上の常識は持ち合わせているようだ。

こいしは地底の妖怪だと、萃香が教えてくれた。地底界の妖怪は忌み嫌われ封印された者達であり、こいしは心を読む覚まねという妖怪であるそうだ。第三の目を閉ざしたせいで心は読めず、代わりに無

意識を操れるようになったとか。

花子には心を読まれることにどんな不都合があるのかいまいち分からなかった。確かに心中を見られるのは少し恥ずかしいが、だからといって地底深くに封印することはないと思うのだ。彼女が子供と同程度の精神年齢だからこそその感想であるが。

とはいえ、複雑な事情に首を突っ込めるような立場でないことはフランドールの一件で学んでいる。こいし自身もそんなに気にしているわけではなさそうなので、しつこく聞くことはしなかった。

最近では彼女を初めとして地底と幻想郷を出入りする妖怪も増えているそうだ。萃香曰く、地底の連中は割りと陽気に暮らしているらしく、地底に封じられたことを恨んでいる者は少ないという。いつか行ってみたいと花子は思った。

「なるほどお。それで花子は、妖力を練るところから始めてるんだねえ」

幻想郷に来てからのことをかいつまんで話すと、こいしは笑顔のままに納得してくれた。郷の妖怪は実力至上主義なところがあるので今回も馬鹿にされるのかと心配していたが、杞憂だったようだ。萃香がもらってきたというお茶を飲みつつ、花子は頷いた。

「幻想郷の妖怪になるんだから、最低限のことはできないとって言われちゃって。一から始めなきゃならないのが恥ずかしいけど、がんばらなきゃね」

「えらいねえー。私、勉強とか練習とか嫌いだから、すごいと思うよー」

語尾を伸ばしがちで暢気なイメージが強いこいしだ。失礼かもしれないが、確かに勤勉そうには見えない。この時花子はまだ知らな

かったが、こいしは自分の好きなことにだけは妥協しないタイプである。弾幕ごっこがとでも得意だったりするのも、そういう理由であつた。

お茶を一口すすってから、こいしはわずかに眉を寄せて、

「お姉ちゃんはいつつも、地霊殿の妖怪としての自覚を持ってーなんて言うんだ。私はほとんど出歩いてて家にいないんだから、ほっといてくれればいいのにねえー」

「あのねえこいし。さとりはあんたを心配してるんだよ？ ただ一人の家族なんだから、たまにや姉貴に孝行してやんな。大体こいしはいつもー」

「あーあー聞こえなーい、こんなところでお説教なんてされたくないーい」

耳をふさいで目を閉じるこいしである。花子が今まで出会った妖怪とは違ったベクトルの変わり者だが、一緒にいて気楽な相手だつた。彼女を監督しなければならぬ立場の者は、その限りではないようだが。

「……さとりも苦労するわけだよ、こりゃ」

溜息と共に言いたいことも吐き出した萃香が、立ち上がった。

「よし、花子。続き始めるよ」

「はい」

「ええー、もうやるの？ もっと休憩してもいいじゃない」

特訓するのは花子だというのに、こいしが唇を尖らせてブーイングを飛ばしてくる。そもそも彼女が現れたことでいつもより昼食の休憩時間が延びているのだが、なんともマイペースな少女であつた。

ややこしくなると見たのか、萃香はあえて返事をせず花子をつもの岩に座るよう促した。最初は硬くて嫌だったがすっかり慣れてしまった岩の上に座禅を組み、花子はさっそく瞼を閉じて集中を始める。

幻想郷でよく使われる単語として、妖力、魔力、霊力がある。これらは全て一様に同じものだが、属する種族によって呼び名や気質が変わるのだ。妖怪や妖精ならば妖力、悪魔ならば魔力、神に属する者であれば霊力となる。

人間の場合はその限りではなく、目指した方向で手に入れられる力が変わってくるのも特徴だ。魔法使いの魔理沙は魔力に精通しているし、神に仕える身である霊夢ならば霊力を身に秘めているのだ。これらの力は固体のキャパシティで保持できる量が変わってくる。これと単純な身体能力などが相まって、妖怪を下級、中級、上級とランク付けすることとなるのだ。あくまで人間から見た物差しであるが、この場にいる者で例えるならば、萃香は上級、こいしは中級にそれぞれ分類される。

花子の目標は、下級でもいいので妖怪として認識されるだけの力をつけることである。彼女の妖力は決して多いとは言えないが、妖怪としての最低ラインは超している。力の使い方が絶望的に下手なだけで、使いこなせるようになれば下級妖怪の仲間入りも夢ではない。

その妖力を使いこなすということが、今も花子を苦しめている。勉強を教えてくださいという子供が、ペンの握り方から教えてもらっているようなものだ。

「ほら花子、また余計な妖力が漏れてるじゃないか。あんたはもとが少ないんだから無駄をなくせって言うてるだろう」

「は、はいっ」

萃香の叱咤は厳しい口調ではないが、言葉に強者特有の力が籠っている。花子は素直に集中しなおした。

一週間も特訓を続けているものの、花子のものであるはずの妖力はなかなか言うことを聞いてくれなかった。必要な量を体中に満たしては戻し、再び満たすの繰り返し。この訓練は妖怪ならば一度はしたことがある身体強化の基礎である。準備運動程度のものなのだが、彼女はこのコントロールすらも難しい状態なのだ。萃香がこれ以下の訓練方法を知らないのも、ともかくやるしかない。

文との決闘ももちろんあるが、何より早く一人前の妖怪になりたい。焦ればうまくいかぬと分かっているのに、花子はうまくできない自分に焦れてまた余分な力を込めてしまった。すかさず萃香の叱咤が飛んでくる。

「花子、まただよ」

「はい、すいませんっ」

「焦ってどうにかなるもんじゃアないんだから。落ち着きな」

完全に見透かされていることに申し訳なくなりつつ、一度深呼吸して冷静さを取り戻した。

第三者であるこいしに見られている緊張や、こいしとも対等に接せるだけの妖怪になりたいという気持ちがあつての焦りだったのだが、さすがに萃香もそこまでは気づいていないようだ。

一方そのこいしはといえば、断りもなしに萃香のかばんからお茶の葉を取り出し、またも勝手にやかんを使って湯を沸かし、茶を淹れていた。当の萃香は、気づいていながらも止めようとしないう。諦めているようだ。

さも当然とばかりに木製のカップ　これは彼女の自前である

に注ぎ、こいしは特訓に励む花子を見ながら難しい顔で茶をすった。

「んー。ふむふむ」

「……」

「なあ。なるほどねえー」

目を閉じている花子にはこいしの顔が見えなかったが、なにやら神妙な声は聞こえてくる。それがどうにも、気になって仕方がない。

「そっかそっか。そういうことかあー」

「……むう、こいしちゃん、静かにしてよ」

「ええー？」

まるで理解できないと言わんばかりにきょとんとしているこいしだが、首を傾げたいのは花子のほうである。

萃香も気になっていたらしく、瓢箪の酒で唇を潤してから、こいしへと振り返った。

「さつきからぶつぶつと、どうしたんだい？」

「んつとねえ、花子は妖力のコントロールをしようとしてるんだよねえ？」

集中は解いているが律儀に座禅を組んだまま、花子が頷く。すると、こいしは何か満足したような笑みを浮かべて、

「やっぱり。でもそれじゃ、きつといつまでたってもできないと思うよ。萃香さんも、気づいてるんじゃないの？」

「……まあ、ねエ」

微妙な面持ちで、萃香が頬を掻いた。
理解できずにぼかんと口を半開きにしていて、こいしが自慢げに胸を張る。

「花子のやろつとしてる力の操作はね、普通の妖怪なら息をする」と同じくらい簡単なことなんだよ」

「うん、それは聞いたよ。それができなきゃ話にならないって」

「そうそう。でもね、これは練習すればできるようになるってもんでもないの。ねえ萃香さん」

「あ、えつと……まあ……」

しどろもどろな萃香は、答えをはぐらかしているようだ。

まさか、この一週間の努力が水泡に帰すというのか。花子はとうとう座禅を解いて立ち上がり、こいしへと詰め寄った。

「どういうこと？ こいしちゃん、教えてー！」

「うふふ、いいよおー。教えてあげる」

人差し指など立てて、こいしがウィンクする。深緑の瞳が片方隠れ、そのしぐさが可愛いのは結構のだが、花子はそれどころではない。

しがみつくのではというほどの勢いで近寄る花子をものともせず、こいしは立てた人差し指を引っ込めた。

「花子は、どうやって呼吸してるの？」

「え？」

「どうやって眠りに落ちてる？ おなかが減ったって、どうやって理解してる？」

「そりゃ、息なんて自然にできるし……。目を閉じてて気づいたら眠ってるし、おなかが減るのだって」

彼女が言いたいことはなんとなく分かっていたが、こいしが意味もなくこんな話をしているとも思えず、花子は続きを待つことにする。

どうしてか妙に嬉しそうな顔で、こいしが頷いた。

「うん、そうそう。息も眠るのも、おなかが減るのも、心臓が動くのも、みいんな無意識。花子の知らないところ　あなたのおうつと奥深くで知らないうちにやっつてることなの。練習なんてしなくてもできるし、どんなに練習したって自分の意識で操ることはできない」

「……つまり、妖力のコントロールは無意識にできているはずのことだから、どれだけ練習しても無駄……ってこと？」

「私には花子がどうしてそれができないのか分からないけど、特訓でどうにかなるものじゃないと思うなあー」

ずいぶんと気楽に言ってくれるが、花子はすっかり落ち込んでしまった。夏に近づいている太陽が照り付ける中必死になって座禅を組んだ一週間が、こんなに明るい笑顔で否定されてしまったのだから無理もない。

やりきれない気持ちをぶつけるために、萃香に振り返る。八つ当たりだと分かっているけど、つい頬を膨らませてしまう。

「知ってたんですか？　萃香さん」

「いやア、一応効果がないわけじゃないよ。複雑な妖力のコントロールをする時は、誰でもこの基礎訓練はするしね。大は小を兼ねるって言うから、どうかなあと思ったんだけどねえ」

「そんなあ」

目じりに涙など浮かべてしょぼくれる花子。申し訳ないとは思っ

ているのか、近寄ってきた萃香が頭を撫でてきた。

「まあその……なんだ。よくなってきたのは事実なんだし、元気だしなよ」

「うう。でも無駄だったんですよねえ」

「あはは、無駄だったねえー」

笑顔で止めを刺してくるこいしは、まったく悪気はないのだろう。彼女を責める気には、とてもなれなかった。

付きっ切りで特訓に付き合ってくれた萃香と二人揃って溜息をつく。実らない努力を続けていたという事実で、花子の心はすっかり折れてしまっていた。

「もうだめかなあ。幻想郷の妖怪になれないのかなあ」

文に散々言われてしまった時の気持ちに蘇り、失意のどん底に落ちていきかけた花子だったが、ちらりと見えたこいしの自信満々な顔でなんとか舞い戻る。

「……どうしたの？ こいしちゃん」

「うふふ。無意識でしか操れないものなら、その無意識を操っちゃえばいい。そう思わない？」

「……あ」

無意識を操るこいしの力を持つてすれば、花子の無意識下に妖力の操作をすり込むことができるのではないか。こいしが笑顔でいる理由が分かり、花子は一抹の希望を抱くことができた。

しかし、これには萃香が懐疑的であった。

「簡単に言っけどねえ。あんたの能力でそんなことまでできるのかい？ もしそうだとしたら、意識しなきゃ呼吸ができなくなる、なんてことにさせちまうこともできちゃうじゃないか」

「あ、うん。無意識を操るんだから、もちろんそれもできるよー」

恐ろしいことをさらっと口走るが、萃香の反応は「あ、できるんだ」といった程度であった。

幻想郷には危険な能力を持つ者があまりにも多いため、どうにも感覚が狂ってしまったっているようだ。こいしもこいしで、どうでもいとはかりにさっさと話題を戻した。

「花子はいいい子だから、私が特別に無意識を操ってあげるねえ」

「でもいいのかな、そんなインチキみたいなこと……」

「むー。インチキなんかじゃないよお。私の力で花子を助けてあげたいだけだよ」

半眼で唇を尖らせるので怒らせてしまったかと思っただが、こいしはすぐにふんわりとした笑顔に戻った。喜怒哀楽が掴みにくい少女である。

「大丈夫、私に任せて」

「そ、そこまで言うなら……お願いしようかな」

「うん、そうこなくっちゃ！」

嬉しそうに手を叩いて、花子より頭一つ分ほど背が高いこいしが、ひざに手を当てて中腰の体勢を作った。

「そんじゃ花子。私の目を見て？」

「う、うん」

息がかかってしまうほどの距離なのでどうにもやり辛かったが、花子は言われたとおりこいしの瞳をじっと見つめた。

花子の黒目をじいっと覗き込み、彼女はささやく様な声音で告げる。

「無意識にはねえ、いろいろなものがあるの。生きるために必要な大切なことが詰まってる。どうでもいいものもたくさん落ちてる。単純だけど複雑で、サラサラしてるけどドロドロ。明るいけど真っ暗な、そんな場所。私はそこを操れるの。自分のものも、人のものもね」

「……」

一言一言が心に染み込んでいくようで、花子は思わず息を飲んだ。深緑の双眸に吸い込まれるような心地で、まばたきもできずに立ちすくむ。

「深い、深あーい場所にある。そこに花子の声は届かないけど、私が閉ざしたこの瞳は、そこを見ることができるの。今も見えてるよ、花子の無意識。そこにないものを私があげることくらい、とっても簡単。」

信じられない？ そうかもねえ。でも、本当に簡単なんだよ。とおっても簡単なの」

柔らかな感触。小さな手が頬を撫でている。そのことに気づくと同時に、花子の額にこいしの額がぶつかった。

「ほら、ね」

すう、とこいしが離れ、花子は途端に目が覚めたような心地を覚

えた。頭の中がすつきりとしていて、とても気持ちがいい。

何をされたのかはまるで分からなかったが、体の芯が定まったような、不思議な感覚があった。今まで雑に流れていた自身の妖力が、体中を丁寧に通っている。全身がなんとなく軽いのも、気のせいではないだろう。

ものの数秒で、花子は最初の目標をクリアしてしまっていた。

「あ……わ……す、萃香さん」

「ありや。驚いたねえ、まさか本当にできちゃうとは」

そう呟く萃香だが、彼女の顔は驚愕というよりも呆れに近い。こいしはといえば、腰に両手を当ててそれ見るとふんぞり返っている。

「だから言ったでしょー？ 簡単だった」

「あ、ありがとう。こいしちゃん」

「うん、どういたしましてえ」

やわらかく微笑むこいしに、花子はどんな顔をしたらいいのか分からなかった。萃香も似たようなものらしく、とりあえず飲もう、というよく分からない結論に達している。

体内を巡る妖力は紛れもなく自分のものだし、萃香が目指せといっていた無意識下でのコントロールができていることも分かる。妖怪としての基礎を身につけられたのだから、これが嬉しくないわけがない。しかし、それ以上に唾然としてしまっていた。

あまりにもあっけなすぎるではないか。自分の両手を見つめて、ぽつりと零す。

「……この一週間って、なんだったんだろうなあ」

「にひひ。何事も経験、経験ってねえー」

間延びしたこいしの声は、なんとも暢気なものである。夏の日差しまでもが脱力しそうだ。花子も思わず両手をだらりと下ろして、溜息をつく。

「まあ、うん。結果オーライってことだよな」

「そうそう。難しく考えないのが一番だよー」

にこにこしながら言うこいし。こんなにもやる気がなくなってしまうのは、きつと今も彼女が無意識を操っているからだろ。そういうことにしよう。

花子は萃香と目を合わせ、とりあえず、笑っておくことにした。

鬼の萃香がここにいれば、火を焚かずとも妖怪共に襲われる心配などない。しかし、小さくなった火種を消すことをなぜかもつたいたなく感じて、萃香は燃えすぎない程度に焚き火へ薪を足していた。硬い地面では寝にくいだろうから、花子が寝るスペースにはやわらかい土を集めている。その上に適当な布切れ　昔、山で倒れたのだろう人間の衣類だろうが、花子には内緒にしてある　をしいて、花子とこいしが寄り添うように眠っていた。

まさか無意識を操ることで妖力のコントロールまでできるようになってしまつとは思わなかったが、こいしがそれ以上手を貸すことはなかった。飛行と弾幕ごっこは、予定通り萃香が教えてやること

になるだろう。

こいしは、こついうところの空気は読めるのだ。だからこそ余計に、普段ぼうつとしてるのがわざとらしく見えてしまう。どちらにしても悪い妖怪ではないので、萃香も問い詰めるようなことまではしないのだが。

酒を一口飲み込んでから、空を見上げる。そろそろ来る頃だろう。そう思った直後、背後から声がかかった。

「あらあら、古明地の妹までいるなんて。地底との不文律はどうなつたのかしら」

「地底から船まで出てきてるんだ、もうあつてないようなもんだと思つよ」

「困つたものだわ」

「地底と地上とを切り離そうつてのが古い考えなんだろうよ。私もあんたも、年を取りすぎたのさ」

振り向かずとも、背後では冗談めかして口元に手を当てて、「まあ失礼ね」などと言っているのが手に取るように分かった。

しかし、友人にいつまでも背を向けたままにいるのも失礼だろう。振り返つて、花子から預かっていた手紙を渡す。

「ほら、『手紙のお姉さん』。今日は書いたみたいだよ」

「確かに預かりましたわ」

細い指が手紙を受け取り、萃香はその珍妙としか言えない光景に思わず失笑してしまう。

「しかしまあ、あんたが直々に手紙を運ぶなんてねエ。花子に特別なもんでもあるのかい？」

「あの子にはなにも。彼女が外で関わったとある御仁に頼まれて
るだけよ」

懐に手紙をしまい、彼女は肩をすくめた。幻想郷と外の世界を自
由に行き来できる者など、彼女くらいなものである。他にいとす
れば、幻想郷の最高神、龍神くらいなものだ。

郷の外で何をやっているのかは知らないし興味もないが、彼女ほ
どの妖怪に手紙運びを頼める者がいることに、萃香は目を丸くした。

「あんたを使いつ走りにする奴がいるのかい？ 大した奴だ、さぞ
強いんだろうねエ」

「力だけが優劣を決めるなんて、古い考えですわ。萃香、年を取っ
たんじゃなくて？」

思わぬ言葉に、つい吹き出してしまった。まさか、気にしていた
のだろうか。

火に軽く照らされた女の顔は怒っているわけでもなく、いつもと
同じ何を考えているか分からない微笑を口元にたたえているばかり
だ。無駄に頭が回る彼女とまともに話するのは疲れるので、萃香
はいつも適当に流すような会話を心がけていた。

「ま、いいや。昔の知り合いか何かってことにしておくさ」

「似たようなものよ。……さて、それじゃあ今日はこの辺で、失礼
しますわ」

返事を待たずに、女 妖怪の賢者である八雲紫は、空中に現れ
た空間の裂け目に消えた。こいしに負けず劣らず神出鬼没な妖怪で
ある。

花子が幻想郷に来てすぐ、紫は彼女と接触したらしい。それから
というもの、花子の手紙を毎回外に届けているそうだ。どういう理

由かなど想像もつかなかったが、紫の場合は本当に酔狂でやっている可能性がある。考えるだけ無駄だろう。

しかし、『手紙のお姉さん』とは。花子に聞いた話では、そう呼べと紫が言ったそうだ。しかも、何度もしつこく。

「お姉さん……お、お姉さんねえ……ふふ」

ぶるぶると震える体を何とか抑えて、萃香はしかし、笑いを完全にこらえることができなかった。

遙か太古から生きている大妖怪が、まさか、そんな小さなことにこだわるなんて。

「あいつ、やっぱり自分の年を気にしてるんじゃないか」

賢者と呼ばれる友人の意外な一面。これを肴にもう少し飲めそうだ。

くつくつと笑いながら、萃香はもう少しだけ一人酒を楽しむことにした。

そのはち 恐怖？秋を司る山の神！

~~~~~

太郎くんへ

こんにちは。またお手紙書いちゃいました。

太郎くん、突然だけど、神様って信じる？ 私は正直、最近まで信じていませんでした。だって、見たことがなかったんだもの。

でも、その考えは今日すっかり変わってしまいました。神様はいるんです。外の世界は分からないけれど、この幻想郷にはいました。

神様に会っちゃった。すっごく優しくて、いい人たちだったよ。季節はずれだったからか、ちょっと神様らしくなかったけどね。

幻想郷には、もっとたくさん神様がいます。いつか会ってみたいな。

あ、それからもう一つ。以前私は幻想郷の廁の怪になるんだーって意気込んだけど、あれ、前言撤回させてください。ごめんね。

トイレの花子さんでもあり、郷に生きる廁の怪ではあるけど、私は私。御手洗花子なものね。もっとありのまま、自由に生きてみることにします。

本当に勉強することが多くて、少し大変です。でもまだまだ、がんばるからね！

太郎くんも、がんばって子供を怖がらせてくださいね。それでは、お元気で。

花子より

~~~~~

花子は空を嫌いになりかけていた。自力で飛んでいるわけではないが、彼女は今、母なる大地を自らの足で歩くことの大切さを身に沁みて感じている。

「ひええええっ！ 高いiiiiiiiっ」

叫びの通り空中高く 少なくとも、森の木々より遙かに上である。萃香に手を、こいしに足をつかまれ、まだ飛行を会得できていない花子は無理矢理空へと運ばれていた。

萃香は飛行のイメージを掴むためとかなんとか言っていたが、このままではむしろトラウマになるであろうことは間違いない。涙目になっている花子に気づかず、萃香とこいしはとても楽しそうだ。

「ほおーら花子、楽しいだろう？」

「今日はお天気だから、気持ちいいねえー」

などと暢気に笑いつつ、二人はくるくるとその場で手を繋いでいるかのように回り始めた。当然、その間にいる花子も回転に巻き込まれる。

「ひよえええええつ！」

抵抗すれば落ちるし、かといって怖いものは怖い。目を閉じれば和らぐかとも思ったが、いつ落ちるかも分からない恐怖に耐えられるほど、花子の精神は頑強ではなかった。

山に生い茂る森がぐるんぐるんと回る。しかも、花子を回しているのは妖怪二人である。こいしは無意識だろうが、萃香は確実に悪ノリで回転を加速させた。いよいよもって、花子は生命の危機を感じ始めた。

「やめてえええええ」

「あははー、楽しいねえー」

残酷なほど純粋なこいしの笑い声が、花子を解放してくれないだろうことを教えてくれる。しかし、このままでは本当に危険だと思った花子は、最後の力を振り絞ってこいしに語りかけた。萃香は後回しである。

「こいしちゃん！」

「んー？」

なおも花子を回しながらだが、こいしが応えてくれた。今が好機とばかりに、花子はパツと目を輝かせ、

「あ、あのね。本当に苦しいの、だからお願い、もうやめてー！」

「んー」

「もう、もうだいぶ飛ぶ感覚も掴んだから！　また川原で集中すれば飛べる気がするから！　ね！」

「うーん」

花子の足をつかんでいるこいしの顔は見えなかったが、その声が高速回転中に出されるべきものではないことは分かった。とぼけた声を出すくらいならば止まってくれ、という思いは心に秘めつつ、手を握っている萃香を一瞥する。

もしかしたら萃香のほうが早いかと思ったのだが、目が合った萃香はにやりとほくそ笑んだ。意図するところは分かる。鬼は嘘をつかない種族であるが、彼女は捻くれ者だ。言葉を交わさなければ嘘にはならないと言い切り、話して都合が悪くなるときは決まって口を閉ざしてしまう。今がまさにその状態だ。

やはり、こいししかいない。もう一度、背後のこいしに聞こえるよう声を張り上げる。

「こいしちゃん、ねえ、何でも言うこと聞くから、お願いだから

」

「あ、弾幕ごっこやってる！」

唐突に、今まで何もなかったかのような素振りで、こいしが手を放した。そのまま凄まじい速度で、遠くのほうで妖怪同士が興じている弾幕ごっこを見物に行ってしまう。

固定されていた花子の足が自由を取り戻し、慣性のままに振り回される。ここまできたと見たのか、萃香がすぐに回転の勢いを殺し、花子を抱えてくれた。

「やあー、楽しかった。どうだった？」

「どつもどつもないですよ、萃香さんもこいしちゃんも、酷いんだから！」

顔はすぐ目の前にあるというのに、花子は遠慮なく怒鳴り散らした。しかし、萃香が動じた様子はない。

「まあまあ、あんな目に合ったんだ。いざ空を飛んだ時に嵐が来ても、もうビビらないで済むじゃないか」

「屁理屈ですよ」

「でも嘘じゃない。だったらいいのさ」

これだ、と花子は頭を抱えなくなった。萃香の肩に手を置いておかなければ落ちそうで怖かったので、叶わなかったが。

あれだけの目に合っておきながらも、花子は心から二人を責める気にはなれなかった。妖怪としての基礎が身についてから、すでに五日目。妖怪が空を飛ぶために行う訓練をひたすら行っていたが、未だに太陽の下を飛び回ることはできずにいる。

人間が自転車に乗れるようになるのと同じで、飛べるようになる時間には個人差があるそうだが、花子は焦っていた。二人の妖怪に面倒を見てもらいながらその期待に応えられないことが、申し訳なくて仕方がない。

萃香とこいしにも、その焦りは伝わっているのだろう。やり方とはかく、二人は二人なりに少しでも早く花子が飛べるよう考えてくれているのだ。そう思うと、なおさら焦ってしまう。悪循環であった。

とはいえ、こんな悪ふざけをされては面白くない。じつくりトレーニングすればいいと言ったのは萃香なのにと、不満げに唇を尖らせる。

「もう。私は真剣なんですよ」

「分かってるって。あんまり真面目に練習するもんだから、息抜きも必要かなってさ」

「どんな息抜きですか……。それよりも、萃香さん」

先ほどから気になっていた違和感の正体に、花子はようやく気がついた。いつも萃香の肩にかけられている、あるものがなくなっているのだ。

きよとんとしている萃香の脇腹　いつもそれがぶらぶらと揺れている場所を指差し、

「瓢箪、置いてきたんですか？」

「え？」

悪ノリを終えて満足そうだった萃香は、左手一本で花子を支えて空いた右手をふと脇腹にやり、

「……………え？」

顔色を青くした。いつもの彼女らしくない、恐怖とも絶望とも取れる顔である。花子としては気になったことを尋ねただけだったので、彼女がこんな顔をするとは予想できるはずもない。

そのせいなのかどうかは知らないが、次の瞬間に起こった出来事を、花子は一瞬理解できなかつた。

「私の」

パツと。それはあまりにも自然に、いつものように、何の気なしに。

「私の　！」
「はえ？」

萃香の左手が当然のように花子から離れ、支えをなくした花子がすっ呆けた声を上げ、

「私の伊吹瓢いぶきびょうがなああああいつ！」
「のおおおおっ!？」

重力に思い切り引つ張られる花子の視界で、わめきながら飛び去っていく萃香。彼女はこちらを振り向こうともしなかった。

助けてくれないのだな。瓢箪のほうが大事なんだろうな。そう思うととても寂しかったが、彼女にとってはそれだけ大切なものだったのだろう。

涙が飛んでいく。いや、自分が落ちるほうが速いのだ。舞い散る涙の粒とは、かくも儂く美しいものなのか。そんな詩的で、それでいてかなりどうでもいいことを考え、口元には微笑など浮かべつつ

「……黙ったときゃよかった」

誰ともなしに呟きながら、花子は森の木々に突っ込んでいった。

葉の生い茂る夏の木々であっても、落下する花子を完全に受け止

めることはできなかった。それでもいくらかは衝撃を防いでくれたようで、かつ土が柔らかかったこともあってか、地面に激突しても奇跡的に軽傷で済んだらしい。

実を言えば、日頃の飛行訓練が効果をなし、無意識のうちに妖力で落下速度を抑えていたからというのが一番大きな原因であるが、花子がそれを知る由はなかった。今はただ、全身に感じる激痛に呻き声をあげることしかできない。

「うう………いったあ」

妖怪でよかったと、花子は痛み支配されかけている意識の片隅で思った。人間ならば間違いなく死んでいただろう。

程なくして、自分がへし折ったのだろう木の枝や葉が大量に舞い落ちてきた。申し訳ないことをしたなと胸中で森の木々に詫びつつ、なんとかはいつくばって適当な木に背を預ける。

擦り傷がヒリヒリと痛い、この程度ならばすぐに治るだろう。つばをつけておけばいいかとも思ったが、口も手も土だらけなのでやめておいた。手ぐしでおかっぱ頭を整えもんぺについた砂を軽く払って、立ち上がる。

問題は、ここがどこなのか分からないことだ。妖怪の山は大きい。山を覆う森も当然広い。飛べない花子にとって、萃香達を探すことは大変難しく思えた。

とはいえ、じっとしていても始まらない。誰かに会えれば、道を探ることができる。文のような意地悪な人じゃないことを祈ろうと、花子は歩き出した。

風が木々を揺らし、葉が夏の音色を奏でている。来た頃はまだ夏の初めだったが、もうすっかり太陽の季節だ。見上げた木々から溢れる木漏れ日があまりにも元氣いっぱい、花子は独りで森を彷徨

うことになんの怖さも感じなかった。

まずは川を探さなければと歩いていたが、一瞬視界の端に映ったものが気になって足を止める。

ここは森である。季節は前述の通り、夏だ。土と木の茶と石の灰色、木々の緑が主な色彩である。そんな夏の森に、一際鮮烈な赤が見えたのだ。

何気なくそちらを見やって、ぽかんと口を開けた。上空からは葉に隠されて見えなかったが、信じられないほどの大木が聳え立っていたのだ。その根元には空洞が作られ、中にはこじんまりとした赤い丸屋根の家が一件、すっぽりと入っていた。さきほど花子の目に入った赤色の正体は、この屋根だろう。

大木の中に家を建てるといふ斬新すぎる発想にも言葉を失ったが、花子が何よりも驚いたのは、大木から見たらほぼ根元である位置から無数に伸びる木の枝だ。梨やブドウ、栗に柿といったあらゆる秋の果物が成り、その葉は夏だというのに真っ赤に染まっている。

花子の立つ場所は夏も盛りだが、さして離れていない大木の周囲だけは、紛れもなく秋であった。

「……………」

何がどうなっているのか分からなかったが、ここは幻想郷である。あまり物事を深く考えすぎるとろくなことがないということは、いい加減学習していた。

ともかく、家である。誰がいるかもしれないし、山の住人ならばきっと花子がいた川の間所も分かるだろう。わずかに逡巡したもの、花子は秋に包まれた家を訪ねることにした。

大木に近づけば、なるほどやはり秋である。生い茂る草もわずか

に色を変えているし、落ちてくる葉はことごとく紅葉している。同じ木から落ちてくるはずなのに、イチヨウやモミジとその種類は多彩だ。しかし、気温や湿度だけは夏と変わらない。暑い秋というものがどうにもおかしくて、落ち着かなかった。

間近で見ると、窓やドアもどこことなく丸みのある可愛らしい家であった。さっそく、ドアを二度ノックしてみる。

「すみません、どなたかいらっしゃいますか？」

声をかけてしばらく待つしてみるも、返事はなかった。

留守なのだろうか。日はまだ高いし、出かけていたとしてもおかしくはない。諦めて立ち去ろうとした、その時。

「はあああああ い」

溜息をそのまま返事にしたかのような、なんともかったるような声が返ってきた。ノックをしてからたつぷり数十秒は経っているというのに。

ともかく、花子は声を返した。

「あ、あの。お尋ねしたいことがあるんですけど」

「ええ？ こんな暑い日に……」

暑いのと尋ねごとの間にどんな因果関係があるのかは分からなかったが、ともかく出てきてくれるようだ。

じっと待つこと数分、木製のドアがようやく開かれた。

現れたのは、花子よりいくらか年上の外見を持つ、金眼の少女だった。よれた臙脂色のランニングシャツと少しずり下がった短パンといういでたちは寝巻きもかくやといった酷い服装であるが、どう

いうわけかブロンドの髪には楓が三枚並んだおしゃれな髪飾りをつけている。

あまりにも気だるげな顔だったので、花子は次の言葉を飲み込んでしまった。猫背の少女が下から上へ睨みつけるように、花子の全身を眺める。

「あなた、そんな服装で暑くないの？」

「……え？ あ、いやまあ、暑いっちゃ暑いですけど。夏ですからねえ」

「あ、そ。それで、何の用？」

すっかり本題を忘れかけていたが、少女が切り出したおかげで思いつくことができた。

「そうだった。あの、実は私、道に迷っちゃって」

「やだ」

「ええっ!？ まだ何も言っていないのに!」

きつぱりと言い切られうるたえる花子を置いて、少女はさっさと家の中に入ってしまった。無常に扉が閉まり、再び玄關に立ち尽くすこととなった花子。遠くで鳴いているセミの音が、とても切なく感じた。

分かつてはいたのだ。幻想郷には変人が多い あるいは変人しかいない のだから、この程度は日常茶飯事と言ってもいいはずだ。

そんな歪んだ幻想郷観を持ち出し無理矢理に納得しようとした花子に、声がかかった。

「あの、どちら様？ 人間……じゃないね。妖怪か」

高く柔らかな声だ。振り返ると、家の中に消えた少女と瓜二つのやはり少女がいた。クリーム色のノースリーブシャツと、赤いミニスカート。先ほどの少女と同じ金髪だが、瞳は赤かった。秋の果物がたっぷりと乗ったざるを抱えて、額の汗を拭っている。

返事に困っていると、少女はわずかに眉を寄せて、

「姉さん、いなかっただけ？」

「あ、さっきの人かな。ええっと、中に戻っちゃいました」

「……あの馬鹿姉」

溜息をついてから、少女が花子へと軽く頭を下げた。

「ごめんね。姉さんは秋以外あんな感じなの」

「いえいえ、お邪魔したのは私ですし。それにしても、この辺だけ秋っぽいですよえ。秋が好きなんですか？」

「あは、まあ外れてはいないわね。私達は秋の神だもん、秋が嫌いなのじゃないわ」

「へえー」

呆けた声を出しつつ、にこりと笑う少女を見上げる。そしてふと、少女の言葉を反芻し、目を丸くした。

「て、え？ ええつ、神様!？」

「うん、私は秋穰子あきみのじい。豊穰を司る秋の神。よろしくね」

「あわわわわ」

大慌てで、花子は頭を下げた。そのまま土下座まで行くのではな
いかという勢いに、穰子と名乗った少女がわずかに身じろぎする。

「神様だなんて知らず、その、ご無礼を、ええっと、お許しください

「い！ 私は御手洗花子と申します！」

「あはは、あなた面白いねえ。嫌いじゃないわ、そういう子。でもまあ豊作祈願された時以外働かないし、私はそんなにすごい神様じゃないよ。だからほら、頭を上げて？」

「は、はい」

大層な神様ではないと言われたところで、花子にとって神様がすでに大層な存在である。がちがちに畏まってしまい、これがむしろ穰子を困らせることとなってしまった。

何せ、神なのだ。爆発するのではというほど心臓が脈打ち、花子の背中は気温以外の原因で汗びっしょりになっていた。

なんとか頭は上げたものの穰子を直視できずにいると、やれやれと言わんばかりに苦笑して、穰子が自宅であるう家のドアを指差す。

「さつき出てきた、私の姉さんいるでしょ。たぶんまた寝巻きのまま接客したんだろうけどさ」

「あ、はい……」

やはり寝巻きだったのかとどうでもいいことに納得していると、穰子が肩をすくめた。

「あの人も、私と同じ秋の神よ。紅葉を司る、ある意味私より秋らしい神様かな」

「……え？ 嘘、あの人も？」

無礼極まる発言であったが、花子は途端に肩から力が抜けていくのを感じた。

神様といえど千差万別、八百万とはよく言ったものである。思えば萃香やレミリア、フランドールも強力な妖怪であるが、身なりも性格も子供のそれだ。なるほど、秋の神だからといって尊厳に溢れ

た偉大な者というわけではないらしい。

納得しきってしまうのも失礼だとは思ったが、幻想郷の神は少なくとも紅葉の神であるらしい寝巻きの少女と眼前の穰子は、もつと気楽に接しても良さそうだ。

「少しは緊張解けたかな？」

穰子に言われ、花子は頷いた。もうすっかり心は落ち着いている。

「すみません、取り乱しちゃって」

「いいのいいの。素直な子は好きだよ。とにかく、中へどうぞ。暑い中で立ち話もなんですよ？」

川への道を聞こうと思っていたのだが、穰子はドアを開けて花子を待っている。

急いで帰る必要もないだろうし、何より少し萃香を懲らしめてやりたい気持ちもあり、花子は神の住まう家に少しだけお邪魔することにした。

「じゃあ、お言葉に甘えて。お邪魔します」

「はい、ようこそ。今お茶と果物出すから、適当に座っ」

ざるをテーブルに置いた姿勢で、穰子が固まる。

何事かと彼女の視線を追えば、穰子の姉であるらしい紅葉の神が、二つ並んだベッドの一つで仰向けに寝転がっていた。ランニングシヤツと短パンを脱ぎパンツ一丁でだらしなく口を開けて寝ている様は、もはや神どころか少女であることも危ぶまれる光景である。

「紅葉姉さんっ！」

「ううん？ 穰子、おかえりいー。暑いからなんか冷たいの作つてえ」

「……」

上半身裸でありながら色気の欠片も感じられない姉に近寄り、穰子はそこらのタオルケットを引つつかみ、少女 静葉にかぶせた頭から足まですっぽりと、である。この頃には、すでに神様は偉いという常識が花子の頭から消えていた。

もぞもぞと動いてタオルケットの位置を調整しつつ、静葉がうつすらと目を開ける。ぼんやりとしているだろっ顔が、花子の方を向いた。

数秒、目が合う。穰子がお茶の準備を始めるのと同時に、静葉が悲鳴を上げた。

「ちよちよ、ちょっと穰子！ お客さんがいるなら言ってよ！」

タオルケットで胸元を隠し、ベッドの脇に散乱している服の群れからオレンジのシャツを取り出している。

今更恥らわれてもと花子は困ったが、とりあえず挨拶をすることにした。口元の苦笑いは、どうあっても消せそうになかったが。

「お邪魔してます。御手洗花子つていいいます」

小さくお辞儀をすると、とりあえずシャツだけを着込んだ静葉が髪飾りを直しつつ、取り繕うような笑顔を浮かべた。

「よ、よっこそいらっしやい。ごめんね、こんなところを見せて」

いえ、と一言返すと、律儀に姉の分までお茶を淹れたらしい穰子

が戻ってきた。お茶請けだろう、剥かれた柿が皿に盛られている。

赤いレースの膝丈スカートを穿いて、静葉がそそくさと席につく。その隣に穰子も腰掛け、花子も習って対面の椅子に座った。お茶はどうやら紅茶のようだが、以前咲夜が淹れてくれたものとは違う香りがある。

持ってきたのは穰子だが、遠慮せずにごとと勧めてくれたのは静葉だった。建前があるのだろう。何も言わずにお茶を啜る穰子は、姉の立たせ方も知っているようだ。よくできた妹である。

本当は静葉も物腰柔らかで静かな少女なのだが、それは秋に限った話。冬は暗く春は苛立ち、そして夏はこの通り。季節を通じて性格が変わるのは穰子も同じなのだが、静葉はそれが酷く顕著であった。夏に遭遇してしまった花子は、とてもタイミングが悪かったと言えるだろう。

しかし、少しばかり雑談をするうちに、静葉もだいたい本来の性格に立ち戻ってきたようだ。時間が経つにつれて、先ほどの出来事を後悔し始めている。

「あー、穰子。お客さん呼ぶなら先に教えてよね。よりによってあんなところ見られちゃ、私の立場ってもんがないじゃない」

「何言ってるの。最初に花子ちゃんを迎えたのは姉さんだよ」

「え？ そうだった？」

きよとんとした顔でこちらを見るものだから、花子は曖昧な返事をするこゝろしかできなかった。寝巻きで客人を追い払ったと知れば、静葉がさらに傷つくことは目に見えて分かる。

しかし、それは出会ったばかりの花子だからこその遠慮であった。実の妹である穰子は、遠慮なく言い切った。

「姉さん、寝てたまんまの格好で玄関出て、花子ちゃんを追っ払っ

たでしょ」

「う、嘘……。私そんなことしたの？ 花子ちゃん、ごめんね」

「ええと、お休み中にお邪魔した私が悪かったんですから、気にしないでください」

遠慮がちに答えると、静葉は何かに驚いたらしく目を丸くした。じっと花子を見た後、隣の穰子の袖を引っ張る。

「ちよつと穰子、聞いた？ 妖怪なのにこんだけ謙虚な子っている？」

「いないってことはないんじゃないの？ 確かに妖怪は基本的に自分勝手だけど、河童や山彦なんかは話の分かる奴もいるよ」

「まあそうだけど。いやでも、いいわあ。花子ちゃん、気に入ったわ」

妙にべた褒めされてくすぐったくなり、花子は照れ笑いを浮かべつつ頭を掻いた。何せ相手は神様なのだ。嬉しくないわけがない。

花子に興味を持ったらしい静葉が、テーブルに身を乗り出した。傾いて紅茶が零れかけたティーカップを、穰子がかさず押さえている。

「ねえ花子ちゃん、あなたはなんて妖怪なの？」

「姉さん、お茶が服にかかるよ」

「後で洗うからいいの。それより、ね。花子ちゃんにはどんな力があるのかしら？」

大樹周りの作物の世話があるため毎日作業に勤しんでいる穰子と違い、彼女は秋以外は暇で暇で仕方ないらしい。客人とお喋りが久しぶりであることも相まって、声音は穰子よりもおっとりしているというのに、静葉は妙に積極的だった。

わずかに気おされつつ、花子は視線を宙に彷徨わせる。

「ええっと、お手洗いで子供を驚かせる妖怪、でした。外では」

今は違うのかと聞かれれば困ってしまうが、少なくとも子供を驚かすことはほぼ諦めている。曖昧な答えになってしまったが、二人の興味は別に逸れたようだった。

ティーカップを受け皿に置いて、穰子が軽く首を傾げる。

「ん？ 花子ちゃんは外から来たの？」

「あ、はい。何ヶ月か前に」

「あらま、じゃあまだ来たばっかなんだ。どうして幻想郷に？」

「そうですねえ……」

話すべきか少しだけ迷ったが、花子は今までの経緯を語ることにする。

外からやってきた日から今日までのことをかいつまんで話すと、秋姉妹は興味津々に耳を傾けてくれた。弾幕ごっこができなかったり空を飛べないことを知るとやはり少し驚いたようだが、怒ったり笑ったりはしなかった。

途中で静葉と穰子が質問を挟んできたりもしたので、話は二時間ほどかけて、ようやく終わりに近づく。

今は萃香と空を飛ぶ修行をしていると話すと、少しだけ考え込む仕草を見せてから静葉が告げた。

「ううん。飛ぶ練習ねえ……。すぐにも飛べると思うよ、花子ちゃんは」

「でもまだ、コツっていうか、そういうのが……」

「んー、違う違う。なんていうのかなあ……ねえ穰子」

突然話を振られた穰子は、食べていた柿を飲み込み、指で唇を拭きつつ、

「んだね。姉さんの言いたいことは分かるよ」

「え？ えっと、どういうことですか？」

うるたえ気味に訊ねると、それには静葉が答えてくれた。

「花子ちゃん、まだ自分が外の妖怪だと思ってるでしょう」

「……？」

「外にいたからできなかった、外と違うからうまくいかない、そう思ってる場所があるんじゃない？」

言われて振り返ると、確かにそうであった。外の世界と幻想郷の常識を比べてしまい、外との違いを言い訳にしていることには心当たりがある。

「そうかもしれないです。だから私、幻想郷の妖怪にならなくちゃって」

「それぞれ。その発想がもう間違ってるんだよねえ」

柿を一切れかじりつつ、穰子。いよいよもって理解できず、花子は困惑した。

すぐにも答えがほしかったのだが、静葉が飲み終わったカップを突き出しおかわりをくれと妹にせがみ、穰子が自分でやれとポットを姉に押し付ける問答がしばらく続き、とりあえず手元の柿をいただくことにした。

結局自分で紅茶を淹れる羽目になった静葉が少しだけ退席し、なにやら文句を言う彼女を横目で見送りつつ、穰子が頬杖をついた。

「おいしい?」

「あ、はい。すごく甘くて、瑞々しくて」

「あは、ありがと。この家の周りはいつも秋だからね、気温以外」

柿を頬張りつつさすがは秋の神様だと尊敬の眼差しを向けると、穰子は彼女に良く似合う微笑を浮かべ、

「ねえ花子ちゃん。外の柿はどんな味?」

「外の柿、ですか? ううん、こつちとそんなに変わらないと思いますけど……」

「だよ。うん、そうだろうね。柿はどこにいても、柿であることに変わりはない。そりゃまあ品種とかは違ってくるだろうけど、それが柿であるという事実は決して変わらないよね。例え常識の境界を越えても、さ」

静葉が戻ってきた。話は聞いていたらしく、黙って妹の隣に腰を下ろし、ポットの紅茶をカップへと注ぐ。

ちらりと静葉を横目で見つつ、穰子は続けた。

「外の世界にいた花子ちゃんと今幻想郷にいる花子ちゃんは、違う人なのかな? 修行の話をしてる間中ずうっと幻想郷の妖怪にならなくちゃならないって力んでたけど、それ、本当に必要?」

「他の妖怪みたいにならなくちゃっていう花子ちゃんの気持ちは、私達にも分かるの。こんなだけと神様だからね、いろんな神様と比較されるともつとがんばらなくちゃって思ったりもするよ」

「夏はこんなだけどねえ、姉さん」

頬を膨らませる静葉を笑いつつ、穰子がカップの縁を人差し指でなぞる。

花子は何も言えず、ただじつと続きを待った。二人の話から、何か大切なものをつかめるような気がしたのだ。

紅茶を一口含み唇を潤してから、静葉が肩をすくめた。

「もつと自然に、力を抜いてやってみたらどうか？ 幻想郷にいたって花子ちゃんは花子ちゃんだし、幻想郷の妖怪にーなんて余計なこと考えるから、変に強張っちゃうんだと思うよ」

「ううん、そうかなあ」

「吸血鬼とか鬼とか、あのみようちくりんな人間の魔法使いとも友達になっただんじゃ？ その上天狗にまでケンカ売ろうっていうんだから、花子ちゃんはもう立派な幻想郷の妖怪だよ。私が、秋と紅葉の神である秋静葉が保証してあげる」

「その妹である豊穰の神、秋穰子もね。ま、その保証にどんな力があるのかって言ったら、なんもないんだけどさ」

「ちよつと穰子、せつかく格好つけたんだから余計なこと言わないだよ」

「いいとこ全部持つてこうとした姉さんが悪いの。ま、そんなことよりさ」

おもむろにミニスカートのポケットを探り、穰子が小さなブドウのブローチを取り出した。花子に手渡し、

「あげる。私の帽子とおそろいの、友達になつた印」

「え、でも、いいんですか？ 神様の大切なものなんじゃ……」

「そんな立派なものじゃないよ。私と姉さんが趣味で作ったものなんだ。受け取ってほしいな」

そこまで言われては、頂戴しないわけにはいかない。花子はブローチをセーラー服の胸元につけた。

今度は静葉が立ち上がり、彼女のものと思われる机の引き出しから何かを取り出し、戻ってくる。

「じゃあ、私はこれをあげるね」

差し出してくれたのは、彼女が頭につけているものと似た、それよりも少し大きい真っ赤な楓の髪飾りだった。

もらってばかりで申し訳がないと思いつつ、素直に受け取って頭につける。少しだけ感じる重みが心地よかった。

「ありがとうございます、大切にします。……でも、もらっというアレなんですけど、なんで突然？」

「穰子が言っただじゃない、友情の印だつて」

「そうそう。まあ、花子ちゃんが上手に飛べて、弾幕ごっこも私達より強くなりますようにって願いも込めてあるけどね。一応は神なんだから、多少は効果がある……かも？」

なんちゃつてと笑いつつ、穰子が紅茶を飲み干して椅子から降りた。同時に、玄関のドアがノックされる。

ノックの後に聞こえてきた声は、聞き覚えのあるどこか間延びした声だった。

「こんにちはあ、花子来てますかあー？」

人様の家をノックしつつ脈絡もなく本題を切り出す人物など、花子はこいし以外に知らない。どうして花子のいる場所が分かったのか見当もつかないが、なぜかこいしなら簡単に見つけられても仕方がないと納得できてしまう。

もう迎えが来てしまった。数時間程度の短い付き合いであったが、静葉や穰子と別れることに寂しさを覚える。彼女らが神であること

を忘れてしまうほど、二人と話をするのが楽しかったのだ。

何か、二人にお返しできるものはないだろうか。かばんをいつもの川原に置いてきてしまったことを悔やみつつポケットを探り、小さな感触を覚える。

ポケットから出された花子の手には、赤とオレンジの模様が入ったビー玉が二つ、握られていた。宝物とまではいえませんが、花子にとってはお守りのようなものだ。

「こ、これ。こんなものしかないですけど」

一つずつ、穰子と静葉に渡す。それは本当に小さくて、二人からもらった綺麗な飾りに比べればいかにも安っぽいものであったが、秋姉妹は大事そうに受け取ってくれた。

静葉は赤の、穰子はオレンジのビー玉をそれぞれ両手で包み、

「ありがとう、すごく綺麗だね」

「宝物にするよ。ずっと持つてるから」

嬉しかった。新たな友人ができたことはもちろん、二人と宝物を共有できたという喜びは、花子にとってとても大きなものだった。遠慮のないノックが次第に大きくなっていく。人の家を訪ねたことがないのだろうかと心配になるほど、こいしが力を込めているのだ。

「花子あー！ いないのー!?!」

いなくなったらどうするのだと思ったが、これ以上返事をしなければドアが壊れかねない。

「い、いるよ！ いるから外で待ってて!」

「はあーやくうー。もうすぐおゆはんだよー」

「まだ夕方だよ、もう」

ぼやきながらも、わざわざ探しに来てくれたこいしを待たせるのは忍びない。

花子は静葉と穰子に向かって、丁寧にお辞儀をした。

「それじゃ、私行きます。お世話になりました。柿とお茶、おいしかったです」

頭を上げると、姉妹が少しだけ寂しそうに笑っていた。秋まで静かに暮らしているのだろう二人にとっても、花子と過ごした時よりも新鮮だったのだ。

穰子と静葉は揃って胸元で小さく手を振り、

「がんばるんだよ。豊穰の秋に、また会おうね」

「元気でね。紅葉の秋に、また会いましょう」

最後にもう一度小さく礼をして、花子はドアへと向かう。振り返ることはしなかったが、秋の姉妹が最後まで見送ってくれているだろうことは、見もせずに分かった。

ドアを開けると、こいしが腰に両手を当てて、むっつりと膨れていた。

「遅いよあー」

「も、元はといえはこいしちゃんの手を放したからなのに……」

「まあいいや、早く帰ろ。萃香さんも待ちくたびれてるよ」

どうやら、瓢箪は見つかったらしい。萃香ならば能力で萃めればいいだけの話なのだが、結局地道に探したようだ。

ひよいと花子を横抱きに抱え上げ、こいしが飛び上がる。彼女は大木の周りだけ秋になっていることに大して興味を示していない。遠のいていく大樹。生い茂る葉の間を抜けて上空に出る頃には、切り取られた秋の景色は完全に隠れていた。

秋になったら、また会える。その時までにはきつと上手に空を飛べるようになって、二人に見てもらおう。

こいしの腕の中で、花子はそつと胸元のブローチに触れ、目を閉じて髪飾りの重みに身を任せた。

夕食を終え、今日できなかつた訓練の補完をするために、花子は川辺の岩で神経を集中させていた。座禅は組まずに、立ち上がったままである。

空を飛ぶ自分をイメージすることがどうしてもできなかつた理由を、秋姉妹が教えてくれた。幻想郷の妖怪たる自分を想像してしまつたがために、今の花子と噛み合なかつたのだ。

もっと楽しく、ありのままの自分で空を駆け回る。萃香やこいしと、レミリアやフランドールと、穰子や静葉と一緒に。

飛びたい。空を飛んで、幻想郷を見てみたい。皆と同じ視線から、御手洗花子として。

「飛びたい」

眩き、妖力を操る。少しずつバランスを取るように、慎重に。地面から体が反発するようにイメージする。

そして、とうとうその時はやってきた。

「わ……！」

わずかに。本当に少しだけである。それでも、経験したことのない感覚を花子に与えるには十分だった。

浮遊感というものならば、何度か味わったことがある。体が宙に浮く心地というやつだが、本物とはだいぶ違うのだなと、歓喜と混乱の中でぼんやりと考える。少なくとも、こいしや萃香に振り回された時とは大違いだ。

背の低い花子の視線は、せいぜいが大人の腰あたりだった。それが今は、だいぶ高く感じられる。

高さにして数十センチ程度だが、しかし紛れもなく、花子は飛んでいた。

水面に浮かぶような心地で、川の上へと漂っていく。月の光を反射して輝く川を上から眺めるのも、花子にとって初めての経験である。

「わわ、萃香さん！ 飛んでる、私飛んじゃってる！」

「うんまあ、見れば分かるよ」

大した感動もなさそうな花子の師、萃香。だが、彼女が口元に浮かべる嬉しそうな笑みは嘘ではなさそうだ。隣に座るこいしが「おー」と小さな拍手をしてくれている。

喜びのあまり、花子はふわりと空中に漂ったまま身を翻した。

「すごい、飛んでるんだ……！ 私今、飛んでぶへえ」

飛行のイメージが崩れ、川へと真つ逆さまに落下する。浅くて助かったが、こいしには腹を抱えて笑われてしまった。

もんぺもセーラー服もびしょ濡れになってしまったが、花子はとても上機嫌だ。

それはそれは小さな前進だが、それでも花子にとっては大きな一歩。

失笑しつつも手を伸ばし、萃香がよくやったと褒めてくれた。それに笑顔で頷いて、ふと川面に目を落とす。

水面に映る自分の姿は暗く見にくかったが、月光に照らされたブローチと髪飾りだけが綺麗に輝き、まるで穰子と静葉が祝福してくれているように思えて

「ありがとうございます」

花子の眩きは、川に運ばれ森の中へと溶けていった。

そのはち 恐怖？秋を司る山の神！（後書き）

タイトルに限界を感じる……！

さて、秋姉妹です。力の弱い神様ですが、花子の飛行が上達しない理由をパツと見抜くあたりがやっぱり神様だなあというお話。妖怪とはベクトルが違いますから、萃香でも分からないことを話半分で理解しちゃえたりするのかなと想像しつつ書きました。

静葉の扱いがかなり酷い感じですが、夏ですから。夏バテしちゃってるんですね。

東方キャラは登場作品によって衣装が変わるのが好きなので、秋姉妹にも夏服になってもらいました。薄着で健康的な静葉と穰子も可愛いと思います。

そのきゆう 恐怖！人里に住まうワ－ハクタク！

~~~~~

太郎くんへ

お元気ですか？ 花子は元気です。

だんだん飛ぶことにも慣れてきました。もう少して自由に飛びまわれそう。空を飛ぶって、とても楽しいよ！

今日は桑の実を晩御飯にしました。まだ青いのも残ってるけど、甘酸っぱくておいしいよ。山の学校に行けばあるかもしれないから、太郎くんも探してみてくださいね。

ごめんね、手紙のお姉さんを待たせてしまっているの、今日は短いけどこれまでにします。なんだか日記みたいになっちゃったけど、許してね。

またおたよりします。

花子より

~~~~~

花子の特訓を始めて二週間、彼女の成長は予想していたより早いものの、まだまだ時間はかかりそうだ。こいしに手を引かれてフラフラと飛行練習をしている花子を眺めつつ、萃香は瓢箪の酒を呷る。細かい妖力のコントロールはだいぶ上達してきた。こいしも手伝つてくれるおかげだろう。自由奔放なこいしがこんなにも長く付き合ってくれるとは思っていなかったが、よほど花子のことが気に入っているようだ。

「あわわ、こいしちゃん、手を放さないでね！」

「分かってるってえー」

重力に引つ張られがちな花子は、まだ一人で飛ぶことは難しそうだ。もう少し落ち着けと何度も言っているのだが、土から離れることへの恐怖が心のどこかに残っているのだろうか。

今は練習を楽しんでもらうのが一番なのかもしれない。そうなるのと、付き添いは萃香よりもこいしの方が適任だろう。あの能天気さが花子の気を楽しんでくれるはずだ。

ゆっくりと川の上を飛んでいる二人をしばらくの間眺めていたが、じっと見ているだけというわけにもいかない。飛行練習をこいしに任せて、萃香は立ち上がった。

「おうい、花子にこいし。ちょっと出かけてくるよ」

「あれ？ どこに行くのぉー？」

こちらに振り返ると同時に、こいしが花子の手を放した。慌てて空中で停止してから、花子も萃香の方を向く。

「お出かけですか？ 珍しいですね」

「うん、ちよつくら人里に用事があつてねエ」

鬼は人間にとってそこらの人食い妖怪以上に天敵なのだが、萃香はサバサバした性格やその容姿も相まってか、あまり嫌われてはいない。無論好かれてはいるわけでもなく、自分から近寄ろうとする人間は皆無であるが。

新入りの花子や地底暮らしが長いこいしが深く気にした様子はなく、二人揃って二つ返事で空を飛ぶ練習へと戻っていく。人攫いでもするのかわれそうだと思っただけに、萃香はむしろ拍子抜けしてしまった。

「あの子ら、私が鬼だつて忘れちゃいないだろうねエ……」

呆れた溜息をついて、飛び上がる。自身を霧状にしてしまえばあつという間に里へつくのだが、花子の飛行練習を見ているうちに飛びたい気分になってしまった。

ぶかぶかと入道雲が浮かぶ夏の空を飛びながら、萃香はポケットに手をつっ込んだ。確か、里の外で軽く人間を襲った時に奪った金銭がいくらか残っていたはずだ。

まるで強盗であるが、幻想郷の人間は食うことも攫うこともできないので、代わりに多少小遣いを頂戴することになっていた。この手法で人間の通貨を手に入れている妖怪は、割りと多い。

取り出した硬貨の枚数を見て、一人頷く。欲しているものは買えそうだ。

一時間ほど飛び、人里に到着した。今日は晴れているだけあって、

ずいぶんと人が多い。里の大通りに出ている屋台には、妖怪が店主のものもちらほらあるようだ。

人間と妖怪の関係は、ここ数十年　少なくとも萃香が地底から出てくる前と後では、大きく変わってしまった。人間の里で妖怪が買い物を楽しむ日が来るなど、百年前ならば夢にも思わなかったことだ。

里の外では人間を襲っているであろう妖獣や妖怪が、どこぞで拾ってきた綺麗な石を首飾りにして売っていたりする。金銭を稼ぐ手段はいろいろらしい。あの方法は自分には向いていないだろうなどと、萃香は肩をすくめた。

目的の店までのんびり歩いていると、自分の目の前だけがやたらと開けていることに気付く。鬼である萃香を見つけた人間が、逃げるように道を譲っているのだ。人間とまではいかなくとも他の妖怪と同じように扱ってほしいと常々思っている萃香としては、寂しい限りである。

しかし、慣れていることも間違いない。片手を挙げて感謝を伝えつつ、街道のど真ん中をありがたく通らせてもらった。

程なくして、目当ての店を発見する。店名には興味はなかったが、大きく掲げられたのぼり旗には『本』と書かれている。庶民向けの写本や読み書き算盤の指南書などを扱っている店だ。

今まで縁がなく、そしてこれからもないだろうと信じていた店へと足を踏み入れる。店内に満ちている香りは、紙の匂いだろうか。萃香にとってはあまりにも馴染みがなく、なんとも落ち着かない。酒でも飲もうかと思ったが、飲食厳禁の張り紙を見てそれすらも断念させられた。

さっさと用事を済ませるために、萃香を見るなり怯えきっている店主を捕まえる。

「やあ親父、ちょいと聞きたいんだけどさ」
「ハヒツ、なななんでもございましょう」

初老の男なのだが、なんとも情けない顔だ。そんなに怖がらなくても良いだろうにと、萃香は頬を掻いた。あまりの恐れっぷりにほんの少し傷ついたのは、彼女だけの秘密である。

「スペルカードルールについて詳しく書かれた本、置いてるかい？」
「あ、ええええ！ ございますとも、確かこちらの棚に」

他の客を押しつけて大慌てで棚に駆け寄り、店主は一冊の写本を持って戻ってきた。あまり上物とはいえない紙が紐で閉じられているだけの簡単な作りだが、大衆向けの写本ならこんなものか。

奉納でもするかのように写本を差し出し、真つ青な顔でこちらを見上げる店主。さすがに気の毒になってしまい、さっさと会計を済ませることにした。

「ありがとう。そいつアいくらだい？」
「そそそそんなお金なんて受け取れません命があれば私はそれで！」
「別にあんたを攫うつもりなんかはないよ。私や買い物に来たんだ、ちゃんと払わせてくれよ」

「さ、左様でございますか。そうしますと、こちらのお値段に……」
震える手で算盤を叩き、こちらに差し出してくる。なんとも安すぎる値段だが、親切心からの値下げだろうと思いついで、無理矢理納得した。

写本を受け取り、しかし萃香はその場から動かない。店主が「早く出ていってくれ」と涙目になっている視線で訴えてくるが、そういうわけにもいかなかった。

「親父」

「ヒッ!?!」

たった一言で縮こまる店主に、萃香は極力気にしない振りをしつつ続けた。

「弹幕ごっこの遊び方が書いてある本なんて、あったりするのかな」「えっ……ああいや、実はそれが、そのう」

妙にしどろもどろである。あるのかないのか、それだけが聞きたかったのだが。

しばらくじっと見つめていると、店主は青から白に変わりつつある顔で、

「も、申し訳ございません。あれはどうしてか、なかなか本にしようという方がいませんで」

スペルカードルールと混同されがちだが、弹幕ごっこはスペルカードとはわずかに趣が異なった遊びである。基になったものはスペルカードルールだが、弹幕ごっこは決闘よりもスポーツという感覚に近い。

美しさを競うという性質上第三者の審判を必要とするスペルカードルールと違い、スペルカードを使った弹幕ごっこは一対一でもできる遊びだ。いかに美しく、避けにくく、しかし必ず攻略できる弾幕であることが重要だそうだ。萃香が力技の弾幕を放った時に、人間の魔法使いが言っていた台詞である。

弾幕の作り方や飛ばし方は萃香が直々に教えてやるとして、花子が一人である時や修行の合間に勉強できるようにと、こうして本屋へと足を運んだのだ。

しかし、弾幕ごっこの指南書が売っていないとは。これは困ったと、萃香は眉を寄せる。すると、その顔を見た店主が土下座せん勢いで頭を下げた。

「大変、大ツ変申し訳ありません！ 次回までには必ずご用意致しますので、どうか、どうかお許しを！」

「別にあんたを責めちゃいないよ」

「へへエーッ！」

自分が悪代官にでもなったようで、なんとも居心地が悪い。さつさと戻るかと踵を返したところで、萃香は柔らかいものにぶつかった。

布である。一歩下がって全体を見てみると、それが群青色のスカートであることに気付いた。

「鬼がこんなところで、何をしているんだ」

女だ。青いメッシュが入っている銀髪は、腰まで伸びている。何度か会ったことがある相手だった。

萃香は買った本を脇に抱えて、鼻を鳴らした。

「本を買いに来ただけさ。それ以上のことはしてないよ」

「本当か？」

「私は鬼だよ、嘘は言わない。そんなことを知らないお前じゃないだろう、ワーハクタク？」

挑発気味に口元を歪めると、ワーハクタクの上白沢慧音はじつと萃香を見つめ、

「……人は鬼を怖がる。イタズラに歩き回らないでいただきたい」

「ずいぶんと酷いこと言うねエ。あんただって半分は妖怪じゃないか」

「鬼は強すぎる。人間にとっては天敵なんだ。それはあなたが一番知っているはずだろう」

「……世知辛いもんだよ、まったく」

いつだったか、地底の仲間に戻ってこいと言われたことを思い出す。地底がとても恋しくなったが、萃香はその気持ちを振り払った。

「言われなくても出ていくさ。可愛い弟子が待ってるからね」

「そうしてくれると助かる。……すまないな」

一応は彼女も悪いと思ってくれているらしい。慧音の半身は妖獣であるため、人間だけの味方をすることに負い目を感じているのだろう。

このまま放っておけば後味が悪くなる。萃香は唇に人差し指を当てて、頭を下げたまま動かない慧音に声をかけた。

「なあ、ちょっと頼まれてくれないかい？　それが終われば気兼ねなく帰れるんだよ」

「構わないが、食ってほしい歴史でもあるのか？」

「ああ、違う違う。ワーハクタクに用はないんだ」

萃香は、ニカツと笑った。

「用があるのは、寺子屋の先生様である上白沢慧音の方さ」

弾幕ごっこの教本がないのなら、作ってもらえばいい。なんとも安直な考えだったが、慧音は萃香の頼みを喜んで引き受けてくれた。美しい正座で机上の紙に筆を走らせる慧音の姿は、とても様になっていた。蝋燭に灯された火がちらちらと輝き、彼女の背中から伝わる緊張感に拍車を掛けている。

教職者という者はどうにも堅苦しくて苦手だったが、彼女の教えならば受けてみたいと思わせる、そんな後姿だ。もともと、本当に慧音の授業を受けるかと聞かれたら、萃香は無言で首を横に振るだろうが。

慧音も弾幕ごっこを楽しむことがあるそうで、霊夢やレミリアとも戦ったらしい。結果は敗北だったが、あの霊夢に「美しさだけなら負けていたかも」と言わしめたほどの腕前だ。

人里から出て行く条件として提示したはずの教本作成だったが、結局里からは出て行かず、今は慧音の自宅兼寺小屋にいる。外見も内装もずいぶんと新しいが、最近建て直したのだろうか。

壁に貼ってあるたくさんの半紙には、子供が書いたと思われる『元気』という字が入っていた。力強く主張しているものから控え目に小さく書かれていたものまであり、まるで半紙の上で子供達が駆け回っているようだ。

「それにしても」

筆を動かす手を止めることなく、慧音が口を開いた。

「まさかあなたが妖怪を育てるなんてな。それも、弾幕ごっこを教えたいとは」

「なんだよ、おかしいかい？」

萃香は瓢箪を呷りながら、口元を笑みに歪めた。今になっても、らしくないことをしていると萃香自身が感じているのだ。はたから見てもおかしくないわけがない。

しかし、慧音はわずかに肩を震わせてから、首を横に振った。筆は止まっていなかった。

「いや、意外だと思ったただけだ。その名を聞けば、人も妖怪も恐れる。そんな鬼が、あの廁の妖怪を育てるなんて、さすがに予想できないさ」

「だろうね。私だって予想しなかった。でもまあ、花子はいい奴だからね」

「そうか。正直、彼女が霊夢達に退治された時は、ここでやっていけるような妖怪だとは思わなかった。しかし鬼に育てられれば、あの子も一人前になれるそうだな」

「花子はやればできる子だよ。不器用なだけだね」

溺愛するつもりはなかったが、花子はすっかり愛弟子である。文に勝つのは難しいと思うが、できる限りのことはしてやりたい。

慧音にもそれは伝わったらしく、彼女はようやく手を止めて振り返り、

「教え子が成長する喜びは、師の立場にいる者のみが味わえる。これだけは、誰にも譲る気にならないな」

「そうだね。あんたが教師でいる理由がなんとなく分かった気がするよ」

光栄だと笑いながら、慧音が完成したらしい冊子を渡してきた。あまり大きくなく、頁数も少ない。遊びのルールが書かれているだけなのだし、これなら片手間で読めそう。

わずかに開いた障子の外を見れば、もう日が落ちる時間のようだ。

「さて、そろそろお暇しようかな。本、ありがとうよ」
「……萃香さん、今日は泊まっていったらどうかな」

藪から棒の誘いに、萃香は目を丸くした。何か裏があるのかと思っただが、慧音は小さく肩をすくめる。

「突然の申し出だ、戸惑うのも無理はないと思う。ただ、同じ教育者として、あなたがどんな風に妖怪を教示しているのか聞きたくてね」

「そんな大したことはしてないけどね。それに、花子達が待ってるしなあ」

「彼女は何十年も生きていそうじゃないか。一日くらいなら自炊できるだろう」

花子はしっかりしているし、こいしもついている。慧音の言うとおり心配はいらなと思うが、彼女とは特別親しいわけでもない。

なんとなく答えあぐねていると、おもむろに立ち上がった慧音が箆笥の中から何かを持ってきた。その手に持っている物を見て、萃香の思考が停止する。

一升瓶だ。美しい飾りも施されており、酒にはうるさい萃香が一目でそうだと分かるほどの上物である。

「これは生徒の親御さんから頂いたものなんだが、なにせ私一人では飲みきれなくてな。あなたも飲んでくれれば、ありがたいんだが」
「……そうかい？ まあ、そこまで言うなら、付き合ってやらないこともないけどね」

言いながらも、萃香の視線はちらちらと一升瓶を気にしている。

この時すでに、彼女の頭からは花子達のもとへ帰るといふ選択肢が消えていた。

茶碗を二つ用意した慧音が、その一つに酒を注ぐ。ふわりと舞う香りは、普段萃香が飲んでいる瓢箪の酒よりも遙かに濃厚だ。自然と唾液が溢れ、萃香はごくりと唾を飲んだ。

「さあ、どうぞ」

差し出された椀を受け取って、さらに瞳を輝かせる。高鳴る鼓動を感じつつ口に含めば、その味のなんと甘露なことか。思わず目を見開くと、慧音がくすりと笑った。

「喜んでもらえたようだな」

「いやア、こいつはいい物だよ！　こんな美味しい酒は久々だ」

「それはよかった。今つまみを用意しよう。干し肉程度しかないが、それでいいかな？」

「何から何まで、すまないねエ。いやしかし、こいつは美味しいなあ」

酒の減る量など普段気にすることはないのだが、今回はかりは一気に飲むのがもったいなく感じて、萃香はちびちびと酒を楽しむことにした。

久方ぶりの上物に舌鼓を打っていると、干し肉が盛られた皿を持った慧音が戻ってきた。萃香の対面に座り、自分の椀に酒を注ぐ。

「同じものではないが、もらい物の酒はまだまだあるんだ。今日はゆっくり楽しんでいってくれ」

「いいのかい？　鬼にそんなこと言っちゃまって」

「例え鬼であっても、誰かを育てることは決して楽ではないだろう。たまには骨休めも必要さ」

「はは、あんたはいい奴だね。そんじゃア、お言葉に甘えようかな」

茶碗を持ち上げる萃香。乾杯は、酒飲みにとって握手と同義である。答えて、慧音が自分の椀を萃香のそれにこつんとぶつけた。

修行の内容やそこに至るまでの経緯を聞かれ、萃香は身振り手振りで答えていった。逆に寺小屋での教育方法を聞けば、慧音は意気揚々と授業風景を教えてくれる。

慧音は萃香のことを教育者と呼んだ。そんな呼ばれ方は少しくすぐったくて、照れ笑いなど浮かべてしまう。普段はあまり見せない表情だが、今の二人は鬼と人妖ではなく、同じ教育者だ。たまにはこんな顔も悪くはないだろう。

二人のささやかな酒宴は深夜まで続き

その日、慧音亭に保存されていた酒は、綺麗さっぱりなくなってしまったという。

太陽が輝いていた青空は、次第に月の支配する星空へと移り変わっていく。どちらが好きかと聞かれても、花子は答えられる自信がなかった。

夏も真っ盛りなこの時期だ。日が完全に沈んだとなれば、それなりの時間だろう。修行を切り上げて、花子とこいしは夕食をとることにした。

本日の夕食は、こいしが木の蔓で編んだ籠にたつぷり入ったやまぐわの実である。二人が飛ぶ練習がてら採集したものだ。少し物足りないが、最近は魚続きだったので気分転換にはいいかもしれない。

花子の小指程度の大きさしかない実を噛んでみれば、甘酸っぱい味が口の中にふわりと広がった。しばらく川の水にさらしていたので、とても冷えている。

「おいしいねえー」

目を細めて、こいしも上機嫌だ。二人ともよく運動した後なので、完熟した甘さが身に沁みる。

真っ赤になってしまった指を舐めつつ、花子は焚き火に目を落としました。

「萃香さん、遅いねえ。たくさん木の実取ったのにな」

「どこかでご飯食べてるのかなあー。ねえ、全部食べちゃおう？」

「う、うーん。確かにお腹空いてるしなあ。でも、もし萃香さんが帰ってきたら」

「むう。花子は心配性だなあー」

自分が食べたいだけだろうと思ったが、あえて口にはしなかった。例え言ったとしても、悪びれもせず「うん」と答えるに決まっているからだ。

とりあえず、花子は紅魔館で借りたまま返せていない竹編みの弁当箱に、萃香の分を分けることにした。こいしが抗議の視線を送ってくるが、無視する。

「川で冷やしておけば、一日くらいは持つよね」

「新鮮じゃなくなっちゃおうよあー。また明日取りに行けばいいじゃない」

とうとう言葉で訴えてきたが、花子は弁当箱を川に浸して石で固定しつつ、呆れの混じった声を上げた。

「そんなに食べたいの？ こいしちゃん、結構食べてたのに」
「だって、おいしいんだもん」

と、こいしは頬など膨らませてみせる。彼女は時々、マイペースを通り越してただのわがままになる時があった。変に意地を張るその姿は、花子にスカートレット姉妹を思い出させる。

頭一つ分程度とはいえ、こいしは花子よりも背が高かった。もしかしたら、食べる量も彼女の方が多いのかもしれない。

だとしたら、もっと食べたいと思うのも無理はないだろう。今もまだ膨れているこいしに、残っている桑の実を差し出す。

「食べていいよ。私、お腹いっぱいだから」

「……でもお、花子はそんなに食べてなかったよ」

「ううん、大丈夫。食べて食べて」

少し強引に籠を受け取らせると、こいしは籠に残った木の実をしばらく見つめてから、いつも使っている皿にその半分を移した。

先輩妖怪としての自尊心があったのだろう、どことなく気まずそうな顔をしながら、桑の実が転がる皿を花子に手渡してくる。

「半分こ、しよ」

「……うん。ありがとう」

笑顔で答えると、こいしもまた嬉しそうな笑みを見せてくれた。いつもそうだが、彼女が笑うと周りの空気までもが笑ったような気がするのだ。不思議な少女だった。

ささやかな食事をしつつ飛び方のコツなどを話し合っていると、ふと背後から声がかかった。

「こんばんは。仲がよろしいことね」

両端がりボンで結ばれているスキマに腰掛けている、八雲紫である。彼女はよくスキマを椅子代わりにしているのだが、どういう原理なのかはいまいち分からなかった。

もうそんな時間かと、花子は慌てた。手紙を書くのをすっかり忘れていたのだ。

「ごめんなさい、手紙のお姉さん。今日はまだお手紙書いてないんです」

「お喋りに夢中だったものね。いいわ、書き終わるまで待つてあげましょう」

「ありがとうございます、すぐに書いちゃいますね」

今日は長く書けないなと思いつつ、リュックからピンクの便箋と封筒、さらに下敷きとえんぴつを取り出す。慣れた手つきで下敷きを石の上に置き、さっそく手紙を書き始めた。

せっかく来てくれた紫をあまり待たせるのも気が引けるので、花子は急いでえんぴつを動かした。それでも字が汚くなりすぎないよううに注意はしているが。

突然、手元が暗くなった。こいしが背後から覗き込んでいるようだ。手紙を見られるのは、あまり気持ちのいいものではない。手を止めて、振り返った。

「どうしたの？ こいしちゃん」

「誰に書いているのお？」

「太郎くん。えっと、外の世界にいる友達だよ」

「へえー」

そこまで興味はなかったのか、こいしはすぐに焚き火へと戻っていった。

こいしが紫にお茶を淹れている音を背後に聞きながら、五分ほどで手紙を書き終えた。便箋を封筒に入れて、シールで止める。もう紙も封筒も少なくなってきたので、調達する方法も考えなければいけないだろう。

手紙を紫に手渡して、花子は頭を下げた。

「これ、お願いします」

「早かったわね。はい、確かに預かりましたわ」

美しい微笑を口元に湛えて、紫が手紙を懐に納めた。どうやって太郎の下へ手紙を届けているのかを、花子は知らない。紫もまた、こいし以上に謎の多い女性である。

「そうそう、萃香なのだけね。今日は帰らないみたいよ」

「あれ、そうなんですか？」

「だから言ったのにー」

先ほど和解したというのに、まだ桑の実のことを根に持っているようだ。しかし花子は、こいしのブーイングを聞かなかったことにした。

視線で萃香が帰らない理由を訊ねると、紫が一つ頷いた。

「今日は、人里のご友人宅に泊まっていくらしいわ。おかしなこともあるものね」

「そっかあ。わざわざありがとうございます」

「どういたしまして。それでは、そろそろお暇しようかしら」

半分ほど茶が残っているようだったが、紫は茶碗を置いて立ち上がった。花子とこいしに背を向けて、彼女の身長より少し大きなスキマを作り出す。

「それではお二人とも、ごきげんよう」

「お休みなさい、手紙のお姉さん」

「さようならあー、スキマのおばちゃん」

元気いっぱいに手を振るこいしだが、花子はこの瞬間、空気が凍りつくのを全身で感じた。

スキマに手をかけた姿勢のまま、紫が停止している。汗が一筋、花子の頬を伝っていく。時間が止まってしまったようで、それを拭うことすらできなかった。

ギリギリと、まるで壊れたからくり人形のように、紫の首がこいしの方へと向けられる。引きつった笑みを浮かべているが、目は笑っていない。

「古明地の……こいしと聞いたわね」

「うん、古明地こいしだよ」

「そう。ではこいし、あなたには一つ、講義をしてさしあげなければいけませんわね。ああ、そのままの姿勢で構いませんわ、楽になさいな。でも話はしっかり聞くこと。いいわね？」

こちらの返事を待たずに、紫は大きく息を吸い込んだ。

「私のように一人一種族の妖怪はその分類どおり他の種族と寿命も能力もまるで違うの。つまり年齢をその他の種族と比べることはなんの意味もない、ということですね。覚妖怪のあなたにとっては老人のような年齢であったとしても、それが境界の妖怪である私に

も通用するとは限らない、むしろ通用しない可能性の方が極めて高い。例えば数百年生きているあなたや吸血鬼も、その花子にとつては老婆が如き年齢であるはず。にもかかわらず友人として対等に接しているということは、あなた達の関係に年齢という概念は無意味であることの証明に他ならない。花子はレミリアには敬語を使っているようだけれど、その妹にはこいしと同じように接しているわ。それがどういう意味か、分かるかしら？ つまるところ、妖怪という特殊な存在にとって大切なのは年齢ではなく外見のイメージや雰囲気なのよ。そう、あなたにとって千を超える年齢の女性がおばさんであったとしても、それが他種族であるのなら外見年齢で相手を呼ぶべきなの。お互いの関係を円滑にするためにはそうするのがベター、いえ、ベストだわ。こいし、あなたはベストな選択肢が目の前にあるというのに、あえて別の選択をするというのかしら？ それは勇敢ではなく無謀、愚行とすら言えることよ。さあ、私は可能性を示した。後はあなたが選択なさい、古明地こいし」

ほぼ一息で言い切り、彼女にしては珍しく肩で息をしながら、紫はじつとこいしを見つめた。こいしはおろか、花子すらも呆気にとられて口を半開きになっているが。

しばらく 数分程だろうか。あるいは数十秒だったのかもしれないが、長くも短い時間を経てから、こいしがゆっくりと首を傾げた。

「で、何が言いたいの？」

「お姉さんと呼びなさい」

「はぁーい」

間の抜けた返事と共に、空気が一気に弛緩していく。花子もようやく肩の力を抜いた。

初めて紫に会った時、花子は何度もお姉さんと呼ぶことを強要さ

れた。花子としては名前で呼びたかったのだが、紫お姉さんでは馴れ馴れしい気もしたので、手紙を届けてくれていることへの感謝も込めて『手紙のお姉さん』と呼ぶに至っている。

どうしてここまでこだわるのだろうか、花子は胸中で疑問を感じた。再び講義が始まってはたまらないので、決して言葉には出さなかったが。

妖怪は、肉体の成長が著しく遅い。種族や固体によっては、吸血鬼姉妹のように一定を過ぎてから成長がほとんど止まる場合もある。花子やこいしが紫のこだわりを理解できる日は、とても遠そうだ。

満足したらしい紫は、満面の笑みでもう一度「では、御機嫌よう」と告げると、スキマの中に消えてしまった。

普段は大人の魅力に溢れており難しい言葉を使う紫だが、時々見せるこういった一面も、花子は好きだった。

残った桑の実を頬張りながら、頬に手を当てたこいしが何事もなかったかのように破顔する。

「んー、おいしいー」

彼女に習って果実を頬張り、おいしいねと笑いあう。

焚き火の炎が小さく爆ぜる。夜空へ舞い上がった火の粉はきらきらと、まるで二人と一緒に笑っているかのようにだった。

そのきゆう 恐怖！人里に住まうワーハクタク！（後書き）

スペルカードルールと弾幕ごっこについては、完全に僕の独自解釈です。スペルカードで使われる技のほとんどが弾幕ですが、美しさを競うのになぜ当たってはいけないのかなどが原作でいまいち明確にされていないなかったので、勝手に別物にしちゃいました。もしどこかに明記されていたら、教えてもらえると助かります（・A
）

そのじゅう 恐怖？山の神社の現人神！

~~~~~

太郎くんへ

こんにちは。手紙を書きすぎて、最初に書く言葉に一番悩むようになっちゃいました。とりあえず、花子は元気です。

私ね、とうとう弾幕を作れるようになったの！自分で作るとうんな風になってるのか分かり辛いんだけど、とっても楽しいよ。

こいしちゃんのお手本も見せてもらったの。やっぱり上手で、花みために綺麗だったんだ。私もいつか、あんな弾幕を使ってみたいな。

太郎くんや学校みんなには、きっとスペルカードとか弾幕ごっこって言うても伝わりにくいだろうけれど、見てもらえばきっと気に入ってくれると思うの。

今日ね、山の頂上にある神社に行ったの。その巫女さんといういろなお話をしたんだけど、萃香さんに聞いたら、あの人も神様なんだって！

現人神って言うらしいんだけど、太郎くんは知ってる？ 人間な

のに神様だなんて、なんだかすごいんだね。とっても優しくいい人だったよ。

明日も朝から弾幕の練習をするの。本当に楽しくて、すっかり夢中になっちゃった！

もっとしっかり練習して、文さんとの勝負に負けなくらい強くなるからね。応援してくれると嬉しいな。

それではまた、お元気で。

花子より

~~~~~

いつもの川辺で、体に流れる妖力を掌に集中、緊張させる。夕焼けを照り返す川の流れを意識し、掌握していく。数日前に始めた、新たな修行だ。

飛行練習を繰り返し、花子はずいぶん空を自在に飛べるようになった。それだけでも喜びはひとしおだったが、妖力のコントロール練習も真面目に繰り返していたおかげか、基本的な妖弾の形成もできるようになっていた。

妖弾はまるで手の延長であるかのように、花子の思うとおり自由自在に操れた。これは彼女が特別なのではなく、妖力に通じる者ならばできて当然のことらしい。本人も知らないうちに、弾幕ごっこ

にぐつと近づいていたのだ。

今はさらなる力の向上のため、花子の妖力と『縁』なるものが近い水を操る特訓をしている。萃香とこいしが見守ってくれているが、花子とはずいぶん離れた場所にいた。

その理由を誰よりも自身が一番知っているだけに、花子は何も言えなかった。むしろ正しい選択だとすら思える。なぜなら

「……とおおりやあああつ！」

勢いよく両手を振り上げる。同時に川の音が重々しく変化し、花子の視界が突然現れたものに覆われる。

水だ。それも、かなり大量の。

「あああああああつ!?!」

手を振り上げた姿はそのままに、花子は悲鳴を上げた。

立ち上がったとしか表現できない量の川の水が、ただ叫ぶことしかできない花子に迫っている。逃げようにも間に合わない。操るにしても、混乱した頭では妖力を制御することは叶わなかった。

「あああああああぶ」

重力のままに落ちてきた大量の水を頭から被り、流水音が耳から離れてから、ようやくその場に座り込んだ。今日は川に流されなかっただけ、幸運と言えるだろう。

髪から服からずぶ濡れになってしまったところで、萃香とこいしが近づいてきた。

何度となく繰り返した失敗だ。一番面白くないのは本人である。

へたり込んだまま唇を尖らせていると、こちらの気持ちを知ってか知らずか　きつと知った上でなのだろうが　無遠慮に笑いながら、こいしがタオルで花子のおかっぱ頭を拭いてくれた。

「あはははは、今日も派手にやったねえ。びしょびしょだねえー」

「むう、あんまり笑わないでよ」

「だっておかしいんだもん」

下手に同情されるよりは笑い飛ばしてくれた方が気は楽だが、花子としてはどうにも恥ずかしい。髪を拭くこいしに身を委ねつつ俯いていると、全て予想していたらしい萃香が着替えのワンピースと体を拭く手ぬぐいを手渡してきた。受け取りつつ、頭を下げる。

「ごめんなさい、またダメでした」

「まあまあ、水のそばであんだけできりゃ、水がないところでも呼ぶことはできるってことじゃないか」

花子はもう、水を操れている。萃香の言つとおり離れた場所でも手に水を呼ぶこともできた。しかし、操作の精度がいただけなかった。かなり上達してきたとはいえ、妖力に関して不器用であることは変わっていないのだ。

近くの水にしる呼んだ水にしる、もつと細かく操れなければ、とても弾幕として使える代物にはならない。もう少しで弾幕ごっここの練習にたどり着けるというのに、なんとももどかしい気持ちだった。

川の流水を自分の体のように操れるようになれば、水との縁を完全に掌握できたということだと萃香は説明してくれた。

妖弾が撃てるのだから、もう弾幕ごっこはできる。しかし、風を自由に操る文を見てしまった花子は、少しでも文に近づぐために、何が何でも水の力を手に入れたかった。

毎日ずぶ濡れになるこの特訓を諦めずに続けている理由は、そういうわけである。

こいしが髪を拭き終わったところで、セーラー服ともんぺを脱いで体を拭く。赤いワンピースに着替えてから、三人で焚き火の周りに集まった。季節が夏から秋に変わり始めた今、濡れてしまった花子は火に当たらなければ寒くて敵わない。

赤々と燃える焚き火に手をかざしながら、花子は溜息をついた。

「ううん、どうしてうまくいかないんだろう」

「力みすぎてるだけさ。もうちょっと肩の力を抜いてごらんよ」

「花子は焦ってるだけだから、きつとうまくできるよお」

二人の先輩に慰められて、しぶしぶ小さく頷く。それでも花子の心には、次こそは必ずという熱い決意が生まれているのだった。

こいしがいつものようにお茶を淹れてくれたところで、萃香がノートを取り出した。花子の私物だが、幻想郷に来てからほとんど使っていないかったものだ。つい最近まで白紙だったというのに、今は結構なページを消耗している。ここ数日、三人で花子のスペルカードとなる技を考えているのだ。

ノートをばらばらとめくりながら、萃香は唸り声を上げた。

「水の技が多いけど、河童と被りはしないかねえ。花子、気持ちちは分かるんだけどさア、あんたは何も水にこだわることはないんだよ？ 廁の妖怪なんだから、水にばっか頼ってるって技の意味が薄れちゃうんじゃないかね」

「そんなことないです。私は外の水洗トイレの妖怪だったんだもの。水との縁が深いつて教えてくれたのも萃香さんじゃないですか」

「まあ、そうなんだけどさ」

頭を搔いてから瓢箪を叩る萃香。反論したとはいえ、確かに彼女の言うとおり、水にまつわるスペルカードばかりでは芸がない。

スペルカードルールは一種のパフォーマンスであり、弾幕ごっこは遊びなのだ。技は楽しく、美しくなければならぬ。トイレの花子さんとはいえ、全部が全部トイレにまつわるスペルカードにしてしまふのも、なんとなく味気ない気がした。

もっと捻りの効いた技を考えたいとは常々思っていたのだ。萃香が置いたノートを開いて、皆で考えた技のアイデアを流し見していく。だが、新しい技が閃くことはなかった。

「うーん、いいアイデアないかなあ」

「結構考えたけどねえ。七つだけ、作った技」

花子の背後からノートを覗き込んだこいしが訊ねた。視線はアイディア帳に落としたまま、頷く。

「うん。まだ水を操れないから、実際に使えるものは二つくらいだけれど。こいしちゃんは、どうやって新しい技を考えているの？」

「私？ ー、そうだなあ。お散歩したりお姉ちゃんと話したりしてるときに、ビビビってくるよ」

「……さすがというか、独特だよな」

「えへへ、そうでしょー」

褒めたわけではないが喜んでくれているようなので、花子は突っ込みをそつと胸の奥にしまっておくことにした。

もっと色々考えたかったが、疲れた体と頭ではいい答えを導き出せそうにない。こういう時は一度のんびり休んでリセットをかけるほうがいいと、花子は幻想郷に来て学んだ。ノートを閉じて、リュックに戻る。

ふと、ボロボロのリュックに輝く二つの飾りが目に入る。以前秋姉妹にもらった、ブローチと髪飾りだ。汚れたり落したりしないよう、リュックの飾りとして使わせてもらっている。

妖怪とは違った着眼点を持つ彼女達なら、あるいは新鮮な意見をもらえるのではないか。そう思い立つと、花子はさっそく萃香へと振り返った。

「萃香さん、明日、ちょっと出かけてきていいですか？」

「あん？ 珍しいね、どこに行くんだい」

「静葉さんと穰子さん 秋の神様のところです」

意気揚々と答えると、萃香はわずかに難しい顔をして、

「あー……秋姉妹か。たぶん今は会えないだろうねエ」

「なんでですか？」

「なんでって、もうすぐ秋だよ。秋の神なんだから、忙しい時期じゃないか」

言われてようやく気がついた。まだまだ日中は暑いとはいえ、徐々に散る葉も多くなり、山の頂上は紅葉が始まっている。仕事盛りの季節にお邪魔をするのは、野暮というものだろう。

せつかく浮かんだ名案が潰れてしまい、花子はあっというまに消沈した。今日一日の疲れがどっと出た気がして、その場に座り込んでしまう。

「だめかあ……。神様なら、きつといいアイデアをくれると思っただけだなあ」

「な、なにもそんなに落ち込まなくてもいいだろう。神頼みがしたたってんなら、秋の二人じゃなくてもいいじゃないか」

「そりゃそうですけど。でも、博麗神社は嫌ですよ。文さんがよく

いるって聞いたもの」

「あの神社にやそもそも神様らしいのが見当たらないよ。私が言ってるのは、この山の頂上にある社のことさ」

初めて文に会った時に聞いた、守矢神社だろう。人里で花子を退治した人間の一人である、東風谷早苗の住居でもあるそうだ。

突然幻想郷にやってきて山頂を我が物にしてしまった神社、という話をこいしから聞いていたので、花子はなんとも胡散臭いと思っていた。それが顔に出てしまっていたらしく、萃香が苦笑を浮かべる。

「大丈夫さ。連中はおかしな奴らだけど、れっきとした神様だよ。静葉と穰子より力もあるし、あそこの神は山の妖怪から信仰を集めてるんだ。頼ってみる価値はあるんじゃないかい？」

「そうなんですか？ ううん、じゃあ明日、行ってみようかなあ」

呟くように言うと、カップのお茶を冷まそうと必死だったこいしが顔を上げた。

「じゃあ私も行くー。天狗さんに会わないように、私が無意識で花子を隠してあげるよあ」

「そいつアいいね。私も一緒したいけど、あいにく地底に用事があるんだ。二人だけで行つとくれ」

「地底に用事？ 友達にでも会いに行くのあ？」

こいしに訊かれた萃香は、なにやら不穏な笑みを口元に浮かべ、

「まあね」

とだけ答えた。何かを企んでいることは間違いないだろうが、花

子には自分に被害が及ばないことを祈ることしかできない。

翌日の予定が決まったところで、三人は夕食の準備を始めた。飯ごうで米を研ぎながら、山の神は自分を受け入れてくれるだろうかと、花子は小さな不安と格闘するのだった。

結論から言えば、花子が抱いた不安は完全に無駄なものであった。とても立派な鳥居をくぐったところで、境内を掃除していた巫女装束の少女と目が合った。

「ああっ！ あなたはトイレの花子さんじゃないですか！」

そう叫ぶや否や、かなり立派で高そうな箒を無造作に投げ出し駆け寄ってきた少女は、守矢神社の現人神にして風祝かぜはふり、東風谷早苗である。

あっという間に距離が縮まり、あっけに取られる花子の手を取って、早苗はとても嬉しそうだ。

「こないだはあんまり話せませんでしたから、また会いたいなあと思って思ってたんですよ。うわあ、本物だあ！ といつても、私花子さんに会ったことはないんですけど。ああでも、学校ではやっぱり噂になりましたよ。手前から三番目のトイレは、女子の間ではタブーになってましたから。それにしても、トイレの花子さんまで幻想郷に来ちゃうなんて。まあそのおかげで会えたんだから、私としては喜ばしいことなんですけどね」

「は、はあ……」

一気に喋り終えてなおも笑顔を絶やさない早苗に、花子はどう返事をしたものかと迷った。とりあえず、疑問に思ったことを口に出しておく。

「あなたは、私を知っているんですか？」

「そりやもう！ あ、申し送れました。私、ここの風祝で東風谷早苗といえます。最近外から来た身ですので、花子さんのこともよく存じ上げていますよ」

「そうだったんですか。あは、なんだか親近感沸くなあ」

「私は疎外感」

隣でこいしが唇を尖らせた。そちらへと視線を移し、早苗は軽く頭を下げる。

「あら、ごめんなさい。つい花子さんに気を取られちゃって。久しぶりね、古明地こいしさん」

「お久しぶりい。いつも通り、元気そうだねえ」

どうやら二人は知り合いらしい。どういう関係なのか少し気になったが、深く聞くほどのものでもなさそうなので、花子は友人なのだろうということに納得することにした。

早苗がこちらを向いた。彼女はこいしよりも少し背が高いので、花子が早苗の顔を見るにはわずかに顔を上げなければならない。

「それで、今日はどんなご用で？ 参拝ですか？」

「んつと、実はここの神様に、相談したいことが……」

「相談ですか。んー、それは難しいですねえ」

困った様子の早苗を見て、花子は自分がまたもとんでもないこと

を口走ったことに気がついた。

いくら幻想郷とはいえ、ここは神社なのだ。祭られている神は、花子の友人でもある秋姉妹とは格が違うかもしれない。そんな神様を相手に「弾幕のアイディアをくれ」などと軽々しく言うなど、罰当たりにも程があるではないか。

どう謝ろうかと慌てて思考を廻らせていると、早苗が深い溜息をついた。

「神奈子様は、天人が酒宴を開くとかで、早朝からノリノリで天界に行かれました。諏訪子様は、人里の縁日で人の子のふりしてリンゴ飴を大人買いすると、嬉しそうにお賽銭を持ってお出かけになってるんです。私は一人、お留守番ってわけですね」

「え？ あ、そうなんですか……」

思わぬ理由に、花子の肩から安堵する以上の力が抜けた。神様にしてはスケールの小さいことに張り切るものだと思っただが、花子の持つ神へのイメージこそが間違っているのかもしれない。

こんなにも人間味が溢れた神だからこそ、人も妖怪も気軽に信仰できるのだろう。気楽な信仰心にどれほどの力があるのか、花子には分かりかねたが。

ともかく、目的の神がいなくなっただけでは仕方がない。どうしたのかと考えていると、早苗が首をかしげた。

「相談ごととは、なんでしょう。私で力になればいいんですけれど」

「ううん、実は」

隠すようなことでもないので、花子はここに訪れた理由を正直に話した。

しばらく無言で聞いていた早苗だが、話を終わると途端に目を輝かせ、

「そういうことでしたら、私に任せてください！ こう見えても、弾幕ごっこはかなりの数をこなしてるんですから！」

「でも、お掃除の邪魔しちゃったなら……」

「あんなの後でもいいんですよ。さあ、こいしさんも中にどうぞ」

半ば強引に引つ張られる形で、花子とこいしは境内の一角にあるどこか近代的な社務所に案内された。

書類の類はほとんどなかったが、白いタイル張りの床にデスクとオフィスチェアがいくつか並んでいるそのさまは、花子に外の世界を感じさせる。こちらの気持ちに気付いたのか、早苗が言った。

「ここは、外から来たときのまんまなんですよ。動かすのも面倒だし、何かに使えるかなと思って。結局使わずじまいですけどね」
「なるほど」

社務所の一番奥にある来客用のソファまでやってきて、花子とこいしは早苗に促されるままに腰を下ろした。

すぐそばの大きな窓からは、境内を見渡すこともできるようだ。眺めがいいだけでなく、来客を見落とさないようにする意図もあるのだろう。

お茶と饅頭を持ってきてくれた早苗が、お盆を置いてから対面に座った。

「さてと。スペルカードのアイデアでしたよね。今は、どんなものを考えているんですか？」

「えっとねえー」

まるで自分の物であるかのように花子のリュックからノートを取り出し、こいしがテーブルに広げる。視線で見てもいいかと早苗が訊ねてきたので、花子は頷いた。

ノートを手に取って、早苗がページをめくっていく。とても真剣に読んでくれていて、とても真面目な印象を受けた。掃除は投げ出していたが。

しばらくしてから、早苗はノートをテーブルに戻した。お茶を一口飲んで、湯飲みをそっと置く。

「一通り見ましたけど……。花子さんは、水にこだわりすぎじゃないですか？ まあトイレの花子さんだから、そうしたいという気持ちは分かりますけど」

「ううん、やっぱりそう思いますか？ 萃香さんにも言われちゃったもんなあ。でも、他にアイデアが出なくって」

「いっぱい考えたけどねえー」

こいしと顔を合わせ、二人して困ったように嘆息を漏らす。しかし、早苗はなぜかそれに困惑している様子だった。

「アイディア、出ないんですか？ トイレの花子さんなの？」

「う、は、はい……。早苗さん、何かありますか？」

思わず訊くと、彼女は何のためらいもなく即答してみせた。

「学校の怪談があるじゃないですか。トイレの花子さんだけじゃなくって、例えば　そうですね、音楽室にあるベートーベンの肖像画が夜中に目を光らせるとか、理科室の人体模型が動き出すとか、紫鏡に十三階段。学校は怪談の宝庫ですよ」

「あ……」

まったく思い当たらなかったが、『トイレの花子さん』という妖怪ないしお化けへの認識は、トイレの怪異というよりも学校の怪異という色合いが強い。あまりにもトイレに固執しすぎていたが、花子は学校の怪談におけるエースだったのだ。もし他の怪談を弾幕にできれば、バリエーションはぐっと増すだろう。

そう考えると、花子の頭にあつという間にアイデアが沸いて出てきた。まだほとんど撃つたことのない弾幕だが、そのイメージもはっきりと思い浮かべられる。

忘れないうちに書き留めなければ。花子とはっさにこいしへと手を伸ばしていた。

「こいしちゃん、ペン取ってー！」

「あいあいさー！」

リュックから取り出し、こいしがなぜか嬉しそうにペンを渡してくれた。ありがとうと言告げると、さっそくノートにペンを走らせる。

絵心があるわけではなかったが、それらしく絵を描いて説明をつけるという作業をひたすらに行う。あくまでイメージであり、実現できなければ調整していけばいいのだ。

ある程度書き留めたところで、こいしと早苗が意見を挟んでくれた。おかげで、考え付いた弾幕は急速に出来上がっていく。

美しく、意味があり、避けにくく、しかし必ず攻略できるもの。これらの条件を満たさなければならぬので、弾幕は簡単に作れるものではない。こんなにも順調に完成間近まで作れるのは、こいしと早苗という先輩の助力ももちろんだが、それ以上に花子のモチベーションが最高潮だからだろう。

学校で共に子供を怖がらせた仲間達の力を借りているようで、思

いつく弾幕はとても懐かしく、花子は楽しくて仕方なかった。

時折早苗に学校の妖怪達について訊かれ、それに答えるたびに新たなインスピレーションが湧いてくる。昼食を取ることも忘れて、三人は昼下がりまでスペルカードの案を出し続けた。

わずかに日が傾き、あと一時間もすれば夕刻になるうという時になつて、花子はようやくペンを止めた。

「ふう……。いっぱい書いたなあ」

額の汗を拭つて、満足げな笑みを浮かべる。

ノートはアイディアですっかり埋まつていて、後はどれを実践できるか試していくだけだ。対面でお茶を啜る早苗に、花子は頭を下げた。

「早苗さん、ありがとうございました。助かりました」

「いえいえ。私も小さい頃に戻れたような気がして、楽しかったですよ」

「また遊びに……。じゃおかしいか。参拝に来ますね」

「遊びにでもいいですよ。花子さんとこいしさんなら、歓迎しますから」

立ち上がった早苗に習つて席を立ち、二人は社務所の外に出た。

夏の終わりに吹く風は、どこか涼しく感じられる。

考えた弾幕を早く試してみたくて、花子は踊る心を抑えきれず、空中に飛び上がった。

「それじゃあ、また」

「ええ、また。あまり張り切りすぎないくださいね」

「花子、そわそわしてるもんねえ」

落ち着きのなさは、どうやら早苗とこいしにも伝わってしまったらしい。恥ずかしげに頭を掻いてから早苗に手を振り、花子とこいしは帰路についた。

思えば、こうして空を飛んでどこかへ行くことも初めてのことだ。練習の段階で散々飛んでいたから行きはあまり意識しなかったが、改めて空から妖怪の山を見下ろすと、生い茂る緑のなんと美しいことか。

見とれて速度が落ちてしまったが、先行するこいしが振り返り、

「花子お、早くー。もうお腹ぺこぺこだよお」

「あ、ごめんね、すぐ行く！」

「ご飯を食べたらすぐに練習を始めよう。そんなことを考えながら、花子はこいしの背中を追った。

「いくよー！……よいしょおおっ！」

「おおー、綺麗綺麗」

「ほんと？ うまくできてる？」

「ばっちりだよお、ノートと一緒に形だよー」

夕暮れも深まり夜闇が落ちようかという時間になっても、花子とこいしの弾幕練習は続いていた。眼下にいつもの川が流れている、その上空だ。ここならば弾幕を飛ばしても、周囲に被害が出る前に妖弾は消える。

あれほど水にこだわっていたというのに、今では妖弾での弾幕に夢中だ。あいかわらず短絡的な少女だと、萃香は酒を呑みながら頬を緩めた。

「しかしまあ、結果よければ、か」

一人呟き、花子が飛ばす弾幕を眺める。まだまだ改良すべき点はあるが、なかなか立派なものだ。学校の怪談をモチーフにしたと言っていたが、そもそも学校なるものがどういうものなのか萃香には分かりかねた。

しかし、技の意味は誰よりも花子が知っていればいいのだ。綺麗であることが大前提であるし、とりあえず弾幕を作って意味は後付け、という方法でスペルカードを作る者もいるくらいなのだから。

それに、何より

「強くなれるかもね、花子は」

地力は小さい。センスがあるとも言えない。お世辞にも強い妖怪ではない御手洗花子だが、萃香はそれでも彼女が強くなることを願い、そして信じざるを得なかった。

幻想郷の妖怪における強さとは、ただ力の強弱だけではない。萃香はここ数年でそれを教えられたのだ。人間の魔法使いや氷の妖精といった、本来ならば歯牙にもかけぬような者であっても、この郷においては強者となり得る。

強いと言われる彼女らは、弾幕ごっこは楽しいからやっている、一様にして語るのだ。もしもそれこそが強さの秘訣ならば、あれほど楽しそうな顔をしている花子もまた、強くなれるのではないか。

「強く、なつてほしいね」

そしていつか、自分とも遊んでほしいものだ。妖弾を配置する花子を眺めながら、萃香はいつもの瓢箪を呷る。

「こいしちゃん、次のやついくよ！」

「いいよお、じゃあ試しに、私が避けてあげるー」

「うふふ、避けられるかなー？」

「かかってこおーい！」

散らばる妖弾の輝きと少女達の笑い声は、太陽が沈みきつても消えることはなかった。

そのじゅう 恐怖？山の神社の現人神！（後書き）

お待たせしました（・A、）

ちょっとだけ巻き気味の特訓終盤回です。次々回くらいには文と戦えるかな？

こいしが食いしん坊キャラになりつつありますが、それは僕が同人誌の「こいしのグルメ」がとても好きだからかもしれません。

番外編 弾幕ごっこの遊び方 著：上白沢慧音（前書き）

完全に独自の設定です。原作設定とはかけ離れているので、ご注意ください。

番外編 弾幕ごっこの遊び方 著：上白沢慧音

弾幕ごっこの遊び方

ルールを守って楽しく弾幕！

強い者は弱い者に合わせて、公平に仲良くケンカしよう！

~~~~~

### 其の一 弾幕ごっこの決まり事

少し多いので、以下に箇条書きでまとめる。

- ・持ち点からの減点制である。点数はカード枚数×三点。計算が分からない者は、相手に聞くこと。

- ・スペルカードの枚数は、双方同じ枚数にする。決闘前に相手と相談して決めること。

- ・もし複数人で決闘を挑む場合、持ち点はチームで共有する。

- ・弾幕は「ショット」と「スペルカード」の二種類がある。

- ・ショットが被弾したら一点、スペルカードの弾幕が被弾したら三点減点。ただし、カード技を避けきった場合は二点加点となる。

- ・チームで挑んでいる場合、同時あるいは連続で被弾したとしても、減点されるのは最初の一回分だけである。

・カード宣言するタイミングは自由。宣言中あるいは直後にショットが被弾した場合、ショットは無効となる。ただし、被弾して気絶した場合はその限りではない。

・宣言された相手はショットを中止しなければならない。ただし、カード宣言で技を撃ち合うことは可能。

・カード技を双方が同時に使用した場合もルールは変わらず、被弾したら三点減点、避けきれれば二点加点。互いに避けきった場合は、双方の持ち点に二点加点。

・カード技が相手に被弾したら、技を中止し、相手が立て直してから仕切り直しとする。同時にカード技を撃っている場合も同様である。追い討ちは絶対ダメ。

・敗北条件は、主に「持ち点を失う」、「スペルカードを使い切る」の二つ。

・ショットやカードの多様で力尽きたり、弾幕に撃たれて気を失う、または降参した場合も敗北とする。このケースは稀だが、覚えておくこと。

・なお、最後のスペルカードで相手の得点を奪いきった場合に限り、カード使用者の勝ちとする。

・複数人で挑んでいる場合、チームのうち一人でも気絶か降参したら失格とする。チームは常に連帯責任。

・お互いの最後のスペルカードを双方共に攻略した場合は、どちら

かの持ち点が多かったとしても引き分けとする。

・二人共がカード技で被弾し、お互いの得点が同時になくなった場合も引き分けである。

・ヒットは自己申告制。公平に楽しむため、ズルはやめよう。

以上。

其二 スペルカードの技について

妖怪ならば誰でも妖弾を飛ばすことくらいはできることと思う。

これを綺麗に配置し広げることが、弾幕だ。

弾幕ごっこにおける弾幕は、決まり事の項で述べたとおり、「ショット」と「スペルカード」の二種類がある。本項目では、この二種について解説していく。

まずは「ショット」について。これといって禁止されているわけではないが、ショットは避けやすい直線的なものが主流である。もちろん時折変化をつけても楽しいが、あまりに凝ったショットはスペルカードに近くなってしまったため、ほどほどにしよう。当たっても決定打にはなりにくいので、避けやすくありながらも相手がスペルカードを使いたくなるようなショットが望ましい。

次に「スペルカード」について。これこそが弾幕ごっこの醍醐味であり、花形といえる。広範囲に展開される密度の高い弾幕だ。基本的に回避が困難なものを用意するのだが、絶対に攻略できないものは遊びにならないので、注意してほしい。このあたりの力加減が

上手いと、弹幕ごっこが強いと讃えられる。がんばって、難しいけど避けられる弹幕を目指そう。

なお、スペルカードで使用する技は、大本のスペルカードルールで定められている規則が適用される。すなわち、「弹幕は美しく、かつ意味があるものでなければならぬ」ということだ。

妖怪ならば、誰しもが自分だけの特技を持つているはずだ。人を驚かせてみたり、闇や夜目を操ったり、毒や虫を操る者もいたと思う。これらは全て意味になるので、是非とも焦らずじっくり考えて、あなただけのスペルカードを作って頂きたい。中には、自分の肉体そのものを弹幕とする者もいるようだ。身体能力に自身があるのなら、試してみるのも悪くないだろう。

妖弾の配置と弹幕の飛ぶ軌跡で美しさを競うのがスペルカードルールだが、当てることと避けることに重きを置く弹幕ごっこにおいては、美しさは慣れるまで必要以上にこだわらなくてもいいかもしれない。しかし、この遊びを楽しむ者は大抵が女の子なので、相手よりも綺麗な弹幕を用意したいと思うのは当然だろう。努力は必ず実を結ぶ。親しい妖怪に相談しながらでもいいので、諦めずに美しさを追求してみてほしい。あなたの美的感覚が、相手の心を驚掴みにする武器になるかもしれないのだから。

~~~~~

おわりに

上白沢慧音

非常に短い内容であるが、いかがだっただろうか。弹幕ごっここのルールを簡潔にまとめたので、妖弾を撃てる妖怪ないし人間であるならば、本書を熟読すれば遊びの輪に加わることができるはずだ。

弾幕ごっことは、博麗の巫女が定めた決闘方式「スペルカードルール」を用いた遊びである。妖怪達の間でこの遊びが大変流行しているのは、すでに周知されていることと思う。

美しい弾幕を評価しあうだけでなく、それを相手に当て、また弾幕を避ける遊戯とし、少女達の間ではもっぱらスペルカードルール代わりの決闘として使われることが多い。第三者の手間をかけない上に遊びであるため、争いの決着方法としては平和的だと言えるだろう。

私もこの遊戯を嗜むことがあるが、ただの遊びと侮れない一面もある。力ある者は、避けにくいながらも必ず攻略方法がある弾幕を用意し、それらは当事者以外が見た場合は一様に息を飲むほど美しい。また力の弱い者も強者と同等に戦え、本質が遊びであるため楽しみながら向上心を持つことができる。

自分を持ち上げるようで大変恐縮であるが、幻想郷の歴史を創る身から言わせてもらえば、この遊びは郷の行く末を大きく動かしたといえる。大本の決闘方であるスペルカードルール以上に、妖怪は異変を起こしやすくなり、また人間が妖怪を退治できるようになった。異変解決を巫女以外もできるようになったせいも、人間どころか妖怪ですら巫女の真似事をするようになったことには、大変驚かされる。

この遊びのおかげで、人間と妖怪の距離は大きく縮まったのだ。根底が敵対関係であることは変わらないが、半人半妖の私としては、非常に喜ばしいことである。

弾幕ごっこが郷全体にもっと浸透し、人にも妖怪にも弾幕を楽しんでもらえればと、筆を動かした次第だ。弾幕を撃つてみたいがルールが分からないという新入り妖怪の力になれば、著者冥利につきる。

最後になってしまったが、本書を記すきっかけをくれた我が友人と、さらにそのきっかけとなった某妖怪少女に感謝を捧げつつ、筆を動かす腕を止めたい。

この本を読んでくれたあなたに、より良い幻想郷ライフがあらんことを。

番外編 弾幕ごっこの遊び方 著：上白沢慧音（後書き）

本作品内における弾幕ごっこのルールです。作中でのバトルシーンは、このルールを元に行われます。作中でダラダラルールを語るのが嫌だったので、慧音先生の本としてまとめました。

PCの方は、バトルシーンの時に本頁を別窓で表示しておくと便利かもしれません。ケータイの方は、がんばってうまいことやってください（・A・） 無論、ここを見なくても分かりやすい描写を心がけていきますが……w

そのじゅうち 恐怖！夜雀女将の赤提灯！

~~~~~

太郎くんへ

こんにちは。幻想郷はすっかり秋になってしまったけれど、そこらはどうですか？ 今いる学校は、もう寒いかな？ それともまだ暑いかな？

空も飛べるようになったし、スペルカードもいっぱい作りました。なんだか今では、外の世界にいた頃の私が嘘みたいです。

ずっと自分が飛ばすかお手本を見るかしかしてなかった弾幕だけれど、正面で見ると、すごいね。とっても迫力があって、ときどきしたよ！

男の子がよくやっていた、ドッジボールってあるでしょ？ あれのボールをすっごくくいっぱいにしたのが、弾幕です。想像できればいいんだけど、どうですか？

避けるので精一杯だったけど、上手な人は避けながら弾幕を撃つみたい。私もできるようにならないと！

こいしちゃんは、もう練習いらないよーなんて言っていたけれど、

そんなことないよね。もっともっと特訓して、文さんに勝たなくちゃ！

寒くなると学校のトイレは辛いから、太郎くんもこれからがんばり時だよ。一緒にがんばろうね！

またお手紙書きます。これからも、どうか元気でいてね。

花子より

~~~~~

「弾幕を撃ちたいかぁー！」

雲一つない見事な秋晴れの空に、風に飛ばされないよう帽子を押さえたこいしの声が響く。

「おおー！」

「うおー！」

「撃たせるー！」

呼応する声は一つや二つではなく、重なり重なって花子の耳へと届いた。

元気一杯に腕など振り上げてみせる、花子よりも背が低い何人も少女達。彼女らが持つ蝶のような羽は、一様に似ているようでそれぞれが独自の個性を持っていた。自然の具現、妖精だ。

萃香の提案で、花子は実戦に近い弾幕回避練習を行うことになっ

た。妖精のほとんどは、スペルカードにできるような技を使えるほどの力を持たない。せいぜい、弾幕ごっこをさらに単純化した弾のぶつけ合いができる程度だ。

弾幕もどきとはいえ、飛ばしている物は紛れもない妖弾だ。妖精の性格によって大きさや形も変わるため、彼女達の相手をするには花子にとって間違いなく経験値となるだろう。

この案自体は、花子も賛成した。妖精はイタズラ好きだが無邪気だし、遊ぶ感覚で練習できるのならば文句もない。

しかし、なぜか張り切って飛び立ったこいしが数十分後に連れてきた妖精の数が、どうしても理解できなかった。

「花子と遊びたいかぁー！」

「誰か知らないけど、誰とでも遊びたいぞー！」

「遊ぶぞー！ 遊ばせるー！」

「弾幕撃たせるー！」

三十人はいるだろうか、整列するでもなく自分勝手に飛び回る妖精達だが、どういいうわけかこいしの言うことにはしっかりと従っている。

せいぜい五、六人を相手にすると思っていた花子は、頬が引きつるのを感じた。後方の萃香も似たような顔をしているだろう。あるいは、にやりと楽しげに口元を歪めているか。

「よぉーし、それじゃ花子、そろそろいくよぉー」

「うえ、ちよつと待っ」

まだ心の準備が。そう叫ぼうとした花子だが、彼女の声が口から出ることはなかった。

びしりと、こいしが花子を指差す。同時に、今まで好き勝手に動

いていた妖精が軍隊よろしく花子へと向き直った。

「そーいん、発射よーい！」

「おおおおー！」

妖精達が揃って両手を振り上げた。同時に出現する、大小さまざま無数の妖弾。花子は息を飲んだ。

やるしかない。覚悟を決める。こいしもきつと、花子のためにこんなにたくさん妖精を集めてくれたのだから。

大きく息を吸い込んで、花子は決意を声に乗せ、叫んだ。

「私はいつでもいいよ！ さあ、かかってき」

「撃てえー！」

「とりゃあああああ！」

「えええええつ！？」

覚悟の決め台詞を途中で遮り、妖精達がいつせいに弾幕を投げ飛ばした。個性豊かな妖弾が、花子の視界を埋め尽くす。

「最後まで聞いてよおおおおつ！」

「えー？ なにいー？」

耳に手など当てて、こいしが答えた。こういつ時の彼女は、まず反省をしない。それでも文句を言ってやりたかったが、妖弾はもう目の前に迫っている。

「もおおおおつ！ こいしちゃんの馬鹿あ！」

「はえー？ なにいー？」

速度すらもばらばらな妖弾をかわしつつ、花子は悲鳴にも近い声を上げた。

反撃は萃香に禁止されている。花子の力はもう下級妖怪の中でもそこそこのものになっていたので、下手に弾幕を展開すれば、力の差を見た妖精が逃げてしまいかもしれないからだ。

「花子ががんばれえー」

なんとも暢気なこいしに答える余裕など、花子にはなかった。ただでさえ弾幕を避けるなどしたことがないのに、これだけの量だ。歯を食いしばり、愚直なほどに真っ直ぐ進んでくる妖弾を避けていく。

妖精が放つ弾幕だけあって、特別な動きはまったくなかった。ひたすらに花子を狙ってくる直球ばかりで、眼前よりもその奥からくる妖弾に意識を向けていけば、回避は難しくくない。

油断さえしなければ、被弾しないで済みそうだ。そんな思いが脳裏をよぎった瞬間だった。

「っ……!!」

正面に集中していた花子の頭上から、妖精達のものではない弾が現れたのだ。赤と青のハート型をしている、何度もお手本として見せてもらった妖弾だ。

気付くと同時に、花子は集中を前方以外にも向けなければならなくなかった。縦横無尽に駆け抜けるハートは、妖精の弾幕と衝突し霧散していく。

こいしだ。妖精だけでは相手にならないと判断したのか、それとも自分も混ぜてほしいという無邪気な思いからの参戦か。どちらにせよ、彼女の気まぐれはすぐには終わらない。

視界が開けた。妖精達のスタミナが切れて、妖弾の数が一気に減ったのだろう。直線に狙ってくる妖精の弾はやがて数えるほどになり、花子の目はようやくくいしりの姿を捉えた。

そして、愕然とした。こいしが自慢げな顔で、一枚の紙をこちらに見せ付けている。

「……へ？」

見紛うはずもない、スペルカードだ。彼女は今、カード宣言をしているのだ。

「本番、いくよぉー」

「えええ！ カードを使うなんて、私聞いてない」

「そおれー！」

花子の声を聞こうともせず、こいしが無数のハートを発射した。

本能「イドの解放」。ばら撒いているようにしか見えないハートの妖弾は、しかしすぐに、こいしを中心として規則的な動きをしていることが分かった。

「ずるい！ 練習なんだからスペルはなしだよ！」

叫んではみたものの、弾幕を展開するこいしの顔はいつも以上にぼうつとしていて、とても話を聞いてくれるとは思えなかった。なぜあんな顔でこれほどの弾幕が撃てるのかと突っ込みたかったが、彼女のことだ。いつものようにはぐらかされるに違いない。

練習とはいえ、妖弾は当たればそこそこ痛い。今は弾幕を避けることに集中しようと、花子は視線を戻した。

高速で迫ってきた妖弾だが、身構える花子をよそに突然減速を始

めた。遅くなつたとはいえ、妖精達の妖弾程度の速度はあるのだが。上下左右から狙つてくる弾幕は、ストレートな妖精のものに比べれば難しかったが、避けられないほどのものではなかった。手加減してくれているのかと思つたが、わずかな余裕を見つけて背後を振り向いた花子は、自分の考えがいかにも甘かつたことを思い知らされる。

「うえっ!?!」

回避した弾幕がさらに減速し、後続の妖弾と合流して溜まつているのだ。もうすでに花子のすぐ背後にまで押し寄せている。これ以上同じ場所に留まり避けていては、いずれ溜まつた妖弾に当たってしまう。

視線を戻して迫るハートの弾幕を回避しつつ、花子の体は無意識のうちに、こいしへと吸い寄せられるように前進していった。

上方から落下するかのようには花子を狙う妖弾を上体をそらして避け、直後に身を翻して宙返り。飛ぶことにはすっかり慣れたとはいえ、こんなにもアクロバティックな動きを連続でしたことはなかった。早々に息が切れてくる。

しかし、こいしの弾幕は優しくなるどころか、むしろ一気に難しくなつたように感じた。それは当然のこと、この時花子はまだ気付いていなかったが、すでに彼女は妖弾の減速域よりも奥、高速で妖弾が飛び交うこいしの目前まで来ていたのだ。

大雑把に避けるだけでなんとかなつた妖精のそれとは異なり、こいしの技は細かく正確に動いてかわさなければならぬ。体力も精神力も削られる。彼女が特別というわけではなく、スペルカードの技は、そういうものなのだろう。

赤と青のハートが、体を掠めていく。こんな状況では、弾幕の美

しさを堪能することなどできるはずもなかった。秋も深まり涼しくなったというのに、汗が頬を伝っていく。

これ以上は集中力が持たないと、花子が無自覚に諦めかけた時だった。ぴたりと、こいしの弾幕が止んだ。

何事かと見てみれば、こいしがあっけにと取られたような顔をしてこちらを見ていた。弾幕を撃っている時も似たような顔だったが、彼女とはそこそ長い付き合いになってきている。表情の変化を間違えることはないだろう。

「ど、どうしたの……?」

息も絶え絶えに訊ねてみると、こいしは突然両手を合わせて、ぱつと笑顔を浮かべた。

「すごーい！ 花子、よく避けたねえー！」

「え? ……え?」

「全部避けられちゃったから、これが弾幕ごっこだったら花子に得点だよ」

一瞬、こいしの言っている意味が分からなかった。避けきったというのか。初めての弾幕、それもかなりの実力者であるこいしのスペルを。

喜びが胸に湧き上がったが、それを表に出す前に、こいしがポケットから新たなカードを取り出した。

「でも、今の『イドの解放』はこのスペルとセットなの。ねえ、もう一枚付き合ってえー」

「……うん、いいよ」

頷いて答えると、こいしは嬉しそうにカードを持ち上げた。

こいしのスペルを攻略したことで、花子は今までにないほど自信に満ちていた。それに、弾幕を避ける感覚を忘れたくないという思いもある。

「ありがとう！ それじゃあいくよおー」

「よし、こーい！」

カードをしまい、彼女にしてはとても珍しく思える真剣な顔つきで、こいしが両手を広げた。その真っ直ぐな瞳に、思わず体が強張る。

いつ妖弾が来るか分からないので、油断せずに身構えた。しかし、一秒二秒と時間が過ぎても、こいしは弾幕を展開しない。

どこか調子が悪いのだろうか。声をかけようかと思った、その時。花子の背後から現れたハートの妖弾が、横を通り抜けていった。

「な、なに？」

口から漏れた疑問には、弾幕そのものが答えてくれた。さきほど避けたはずの妖弾が、こいしへと向かっていくのだ。ハートは全て、彼女が広げた掌に吸い込まれていく。こいしを見てはいけないと、花子はようやく気付いた。慌てて、背後の溜まった弾幕へと振り返る。

しかし、遅すぎたようだ。密集したハートが蠢いたかと思うと、爆発したかのように花子の視界一杯に展開された。

抑制「スーパージェゴ」。ハートの形が連想させる可憐さは感じられない。むしろ、徐々に恐怖心すら芽生えてくる。妖弾は一気にこいしへと吸い込まれ、その途中にいる花子すら飲み込んでいく。

「っ……」

もう少し早く気付ければ、対処法を思いつけたかもしれない。しかし、花子はその場から少しも動くことができなかつた。弾幕の不気味さと勢いに吞まれてしまったのだ。

目前に青いハートが迫り、思わず頭を抱えた。これがいけなかつた。

身を縮こまらせてしまったがために、ハートが花子の脳天に直撃したのだ。

「あつっ」

我ながらおかしな声が出たなと思った時には、花子はもう落下を始めていた。当たり所が悪かつたのか、妖力の集中が一気に解けてしまったらしい。

世界がひっくり返ると同時に、意識も薄れていく。幻想郷に来てからというもの、気を失つてばかりだ。胸中で溜息すらつく余裕ができたところで、こいしの悲鳴が聞こえてきた。

「はわわ、萃香さん！ 花子があー！」

「分かつてる！ 花子、しっかりしな！」

大慌てで飛んできた萃香に抱き止められた直後に、花子は痛みの眠りへと落ちていった。

包帯が巻かれた頭に触ると、まだ脳天がズキリと痛む。重傷と呼ぶほどのものではないので、この手当ては大げさだと思つたが、こ

いしがどうしても言うので任せた結果だ。当たった場所は頭のてっぺんだったので、額のあたりに巻かれた包帯には何の意味もなかったりする。

「うう、痛いなあ」

「思いつきり頭に当たったんでしょ？ 想像しただけでこっちも痛くなるよ」

言葉とは裏腹に楽しそうな笑顔を見せたのは、袖をたすきがけにした和服の妖怪少女、ミスティアだ。花子達は今、すっかり馴染みの店になってしまった八目鰻の屋台に来ている。

こいしが花子にお詫びをしたいと言い出したので、彼女の誘いを受けてやってきたのだ。今日の支払いは全てこいしが持つそうだが、お金のほうは大丈夫なのだろうか。

本人に聞いてみようにも、こいしは隣で突っ伏して眠りこけている。萃香のペースに合わせて呑んだせいで、すっかり酔いつぶれてしまったのだ。さらにその隣では、萃香も夢の世界に飛び立っている。

「……私、お金持っていないのに」

「いいよ、ツケておくから。いつものことだしね」

にこりと微笑むミスティアは、外見だけならばこいしと大差ないというのにとても大人びて見えた。彼女の爪の垢を煎じてこいしに無理矢理飲ませたいとすら思ってしまう。

普段の彼女はイタズラ好きな妖怪らしいのだが、屋台を切り盛りする姿からは、そんなミスティアを想像することができなかった。

「でも、花子ちゃんはラッキーだったと思うよ」

「ラッキー、ですか？」

「うん」

頷きながら、ミスティアが焼きたての鰻を出してくれた。頼んでいないのだが、彼女は時々こういったサービスをしてくれる。

「初めてだったんでしょ？ 弾幕ごっこ」

「私は避けるだけだったけれど、うん。初めてでした」

「こいしちゃんは弾幕ごっこ強いから、スペルを避けられたっていうのはとても大きな経験だと思うな」

「それは……確かに、私も嬉しかったです」

こいしのスペルカードを攻略できたことは、素直に嬉しい。しかし、その後があまりにもお粗末すぎる。

溜息を漏らした花子のコップに酒を注ぎながら、ミスティアが少し意地悪な笑顔を浮かべた。

「それに、弾幕の痛さも知れたんだし。次からは覚悟できるでしょう？」

「う、まあ……」

「ふふ、妖弾は痛いもんね。でも、霊夢の霊力弾はもっと痛いよ」

「そうなんですか？」

なみなみと注がれた酒を少しだけ口に含んで、花子は霊夢のことを思い出した。幻想郷を冒険するきっかけとなった巫女だが、もうおぼろげにしか顔を覚えていない。服装が特徴的なので、見れば分かる自信はあるが。

一升瓶を作業台に置いてから、ミスティアが肩をすくめた。

「もとは妖怪を封印する技だったらしいからね、巫女のスペルは。人間も当たると痛いみたいだけど、妖怪には大ダメージだよ。アレ

には当たりたくないなあ」

「ミステリアさんは、霊夢と弾幕ごっこをしたことがあるんですか？」

「あるよ、何回か。勝てなかったけど。嘘みたいに強いんだから」

いつか戦うことになるかもね、と付け足して、ミステリアはウインクなどしてみせる。妖怪である以上、退治屋である霊夢や魔理沙と対峙することは覚悟しておけと萃香に言われたが、花子は今から身震いする思いだった。

萃香もこいしも起きる様子がないので、花子とミステリアはしばしの談笑を楽しんだ。

普段よく遊んでいるらしい宵闇の妖怪と里の外にいた商人を脅かしてみたり、八目鰻は夜目に効くと宣伝しておきながら自分の歌で夜目を効かなくさせていたり、やはりミステリアも外見にふさわしい子供っぽさを持っているようだ。

屋台の常連となっている花子だが、いつか店の女将としての彼女ではなく、一人の少女としてのミステリアとも話してみたいと思った。

もう水のように飲めてしまう酒を楽しんでいると、焼いている鰻にたれを塗りながら、ミステリアが訊ねてきた。

「そっいえば、文さんとの決闘はいつするの？」

コップをテーブルに置いて、花子は視線を宙に彷徨わせた。勢いのままに特訓を続けてきたが、明確な予定などは一切立っていない。酷いときには、弾幕ごっこの練習が楽しすぎて文のことを忘れていることすらある。

おかつぱ頭をポリポリと搔いてから、花子は苦笑を浮かべた。

「まだ決めてないんですよ。もっと練習しなきゃいけないから」
「うーん、そうかなあ。こいしちゃんの弾幕を避けたんなら、もういい勝負できると思うけど」

実のところ、花子としてもどこまで練習を重ねればいいのかは分からなかった。最近はおっぱら弾幕を撃つ練習をしていたが、避ける練習は今日始まったばかりだ。

ミスティアの言うとおり、花子は避けることだけで言えば、なかなかのセンスを持っていた。無論、本人に自覚はない。

「でも、まだ弾幕ごっこ自体はやったことがないもの」

「ふうん。じゃあやってみればいいんじゃない？ そこの妖怪なら、結構乗ってくるよ」

あまりにもあっけらかんとした顔で提案してくるミスティア。彼女は挨拶代わりに弾幕を飛ばすほど、遊びに手馴れている。まさか花子が弾幕ごっこを重い試練と受け止めているようとは、思いもしなかったのだ。

もちろん花子も弾幕ごっこは遊びであると知っているため、心中を正直に語らず、誤魔化す言葉を探した。

「ふうん、でもまだまだ……」

「やっていくうちにコツも分かってくるよ。練習試合だと思えば、ね？」

花子は唸り声を上げた。ルールはもう覚えているし、スペルも必要な数を揃えてある。いつ実戦をしても問題ないのだが、こいしのスペルを見て、さらに直撃を受けたことで、わずかに恐怖心が芽生えてしまっていた。

加えて、彼女にとっての仮想敵がああ射命丸文なのだ。こいしから聞いた話では、文は取材と称してこいしに挑み、その弾幕を避けきっただけでなく写真を撮る余裕すら見せたという。

文との実力の差を埋めるには、どれほどの訓練を積みばいいのだろうか。そんな思いが胸にあるため、いざ本番となると、どうにも気が引けてしまうのだ。

しばらく腕組みをしつつ考え込んでから、花子は小さく自嘲気味に笑って、

「まだへたつぴだし、やっぱりもう少し練習してから
弾幕するのぉー？」

突然隣から声が上がリ、花子は驚いてそちらを向いた。いつの間にか、こいしが目覚めていたらしい。

酔いもすっかり醒めているらしく、こいしは目をきらきらと輝かせて花子の顔を覗いた。

「誰とやるの？ 私？」

「いやだから、練習してからにしようかなって」

「ええー。もう練習することないよう。後はいっぱい遊んで強くなればいいのー！」

「そ、そうかなあ」

断言されてしまい、花子は頬を掻いた。弾幕ごっこに関しては先輩であり、何より大好きな趣味だと豪語するこいしが言うのと、とても説得力がある。

助けを求めるようにミスティアを見るが、彼女もまた笑顔で頷くばかりだ。

「やってみようよ。きつと楽しいよ」
「うんうん。花子なら上手にできるよお、私が保証するもん」

二人から背中を押されて、思わず俯く。無論、花子としても実戦を体験してみたいという思いもあるし、弾幕ごっこは遊びなのだから、そこまで緊張し思いつめる必要はないということも分かっている。

こいしの向こう側にいる師をちらりと見るも、萃香は幸せそうな顔でいびきなど掻いている。どうやら、決断は自分自身でしなければならぬらしい。

「……もう、できるかな？」

「できるぞ！ 吸血鬼さんのためにがんばってきた花子なら、絶対大丈夫だよ。自分を信じてえー」

特訓を始めた頃から付き合ってくれていたこいしにここまで言われては、引くわけにもいくまい。

それに、なにより。

「レミリアさん、フランちゃん……」

地下で花子を待っていてくれるランドールと弾幕ごっこで遊べるようになるために、そして、初めての友人であるレミリアへの侮辱を取り下げさせるために。

コップの中身を一気に飲み干し、喉を下る熱い酒をやる気に変えて、花子は一大決心をした。

「よし。弾幕ごっこ、やってみる！」

「やったあ！ じゃあ明日、山の中を飛んでみようよ。遊びたくてうずうずしてる子、きつといるよお」

「じゃあ私も、明日は屋台お休みにしてお弁当作っていくね」
「おおー、みすちーのお弁当、楽しみい」

花子にしてみれば目指していたものに手を伸ばす一大決心なのだが、こいしとミステイアはなんとも気楽なものだった。彼女達にとつては、遊び仲間が一人増えた程度の認識なのだろう。

その後、ルールの再確認やスペルカードの話などにすっかり夢中になってしまった三人は、いつもの閉店時間を過ぎても談笑を続けた。途中で目を覚ました萃香までもが加わって、さらに話は盛り上がり

翌日、花子達は全員揃って、昼過ぎまで寝過ごした。

太陽の日差しに照らされながらも涼しい空を飛びながら、妖怪の山を見下ろす。妖怪も妖精も浮かれてしまうような、とても良い天気だ。

「こつこつ日は、面白い記事が書けそうな気がしますねえ」

いつも持ち歩いている文花帖と写真機を手に、文は目を細めた。通り抜けていく風すらも、楽しげな歌を口ずさんでいる。風を操る力を持つ文にとって、耳元で奏でられるその音色は心をくすぐるものがあった。

今日は何か、いいことが起こりそうだ。そう心で呟いた時だった。

「あら、文じゃない」

聞き覚えがある、というより馴染み深いとすら言えるその声に、文はわずかに渋面を浮かべて振り返った。

その先にいた人物は、やはり頻繁に会う人物だった。しかし、できれば妖怪の山では出くわしたくない相手でもある。

こちらの顔を見て、その少女は不満げに眉を寄せた。

「なによ、その顔」

「ここで出くわして、他にどんな顔しろっていつのかしら？」

思わず、呆れの溜息が出た。相変わらずおめでたい配色の巫女装束に身を包み、人間の癖に堂々たる態度で腰に手を当てている。妖怪の天敵、博麗霊夢だ。

また強制妖怪退治に乗り込んできたのかと思ったが、彼女が手首に下げている木の札が、そうではないと教えてくれている。

「通行手形？　なんであなたがそれを持つてるの？」

「今日は早苗に呼ばれてるの。ついでにおゆはんもご馳走になる予定よ」

「……それはあなたの中だけですな」

「だから予定。提案はこれから」

「ふんぞり返って言うことじゃないわね。妖怪退治でもらったお金をその日の宴会で使い果たすから、いつも金欠なのよ」

その宴会で好き勝手飲み食いする自分を棚に上げ、文はやれやれと肩をすくめた。

ともかく、今日の霊夢は守矢神社から正式な招待を受けている。追い返すために戦う必要もない。

「それにしても、守矢とは商売敵じゃなかった？ お呼ばれするよ
うな仲間じゃなかったと思うんだけど」

「まああその分社がうちにあるくらいだし、敵ってほどでもない
わ。それに、タダでご飯が食べられるなら、そっちを優先するのは
当然でしょ？」

「プライドよりも食欲が優先だなんて。幻想郷はこんなのがバラ
ンサーでいいのかしら」

もはや突っ込む気にもなれず、とりあえず無駄に威張り散らす霊
夢をファインダーに収めておいた。一面記事にはなり得ないが、遭
遇したネタはとりあえず撮っておくのが信条なのだ。

霊夢のペースに合わせて山頂へと飛びながら、他愛もない話を続
けた。何か面白いことでもあればそちらに行くのだが、眼下の森は
平和である。

と、霊夢が突然停止した。あさつての方向を見つめる彼女の視線
を追うと、色鮮やかな妖弾が舞っているのが見えた。幻想郷では珍
しくない、弾幕ごっここの輝きだ。

弾幕自体は、強者である二人を驚かせるほどのものではない。し
かし、文はすぐに霊夢が見つめているものに気がついた。

「おや……あれは」

「一時は馴染めないかとも思ったけど、案外うまくやってるみたい
ね」

黒髪のおかつぱに、セーラー服ともんぺ。一心不乱に弾幕を飛ば
すその少女は、特徴がなさすぎるのが特徴と言える新入り妖怪、御
手洗花子だ。

相手の名前は分からない。だが、弾幕の腕はそこそのものと言
える妖怪少女と、花子は今、文の目から見ても互角以上に戦えてい

た。

初めて会った時以来見ていなかったが、当然のように空を飛び、スペルカードとして使えるレベルの弾幕を飛ばせるまでになっただらしい。

「なるほど、確かに　うまくやっているようですね」

「あんたを倒すために、ね。どう？　散々馬鹿にしたダメ妖怪が、それなりのレベルになって立ちふさがる気持ちは」

答えられなかったが、こちらの顔を見たらしい霊夢が「なるほどね」と呟く声が聞こえてきた。文自身も、頬が緩んでいるのを自覚している。

我ながら嫌な性格をしているとは思う文は、いつも憎まれ口を叩いてしまう。そんな嫌味な言葉に秘められた想いに気付いてくれる者は、少ない。

花子はそれに気付いてくれた。あるいは萃香辺りが気付かせたのかもしれないが、そんなことは些細なことだ。

悔しがり、強くなり、同じ土俵に立てる所まで登ってきてくれた。そのことが、文にとって嬉しくないわけがなかった。

「近いうちに、山で宴会がありそうね」

霊夢が言った。ゆっくりと頷いてから、

「ええ、そうね。とびつきり楽しい宴会が」

「ちゃんと私も呼びなさいよ？　いつも招待してあげてるんだから「仕方ないわね。ただし、鳥鍋は出ませんよ？」

「ま、兔鍋で我慢してあげるわ」

冗談などを交わしつつ、文は先に飛び立った霊夢の背を追った。

霊夢と共に山頂へ向かい、再びネタ探しを始める。しかし、どうしてか花子の弾幕が瞳に焼き付いて離れない。

文は、花子と対峙し彼女の弾幕を正面から見る時が、楽しみで仕方なくなっていた。

その一週間後、射命丸文の自宅に一通の手紙が届けられた。

配達人は、八雲紫。

差出人は、御手洗花子。

丁寧に糊付けされた茶封筒に、あて先は書かれておらず

代わりに、大きな字ではっきりと、『果たし状』と書かれていたのだった。

そのじゅうち 恐怖！夜雀女将の赤提灯！（後書き）

その場にいるのに台詞がほぼない萃香さん。いつかきつと、君にもスポットライトが当たるよ……！

ちょっとだけスペル中の描写がありました。本番ではもっとアクション色を強くできたらなと思っています。

そのじゅうに 決戦！勝利は我が友のために！（1）

~~~~~

果たし状

射命丸文殿

あなたに、弾幕ごっこで決闘を申し込みます。

今日から七日後、場所は守矢神社。スペルカードは五枚でどうでしょうか。

もう弱い私じゃありません。逃げも隠れもしません。

必ず、約束を果たしてもらいます。

御手洗花子

~~~~~

さしもの天狗といえど、三日間徹夜をして机に向かい続けるのはきつい。文は乾いた瞳を瞬かせながら、届けられたその書状をぼんやりと読んだ。

果たし状など、ずいぶん古いやり方をするものだ。あくびをしつつ、手紙を折り畳んで机に放る。

「ふわああっ……。やはり無理はするものじゃないですねえ。ろくに回らない頭じゃ、いい記事は書けません」

「睡眠はとても大切よ、一日十二時間は取らなければね。ところで、手紙の返事を頂いていないのだけれど」

話しかけたわけではないのに答える声に、横目で視線を送る。部屋にぽつかりと浮かんだ妙なスキマ 両端を可愛いリボンで結んであるが、気味が悪いことに変わりはない から、上半身だけを出した八雲紫が笑っていた。絶対に玄関から入ってこないのは、いつものことだ。

「返事の前に、聞かせてくれませんかね？」

「何かしら」

「あなたほどの人が、なぜ手紙運びなど？ しかも、あの花子さんの」

こっぴどしまった肩を自分で揉みつつ訊ねると、紫は唇に人差し指を当てて、

「ひ・み・つ」

「……それ、可愛いと思ってるんですか？」

「あら、酷いのね」

やれやれと、文は溜息を漏らした。何度か彼女と話した経験から、これ以上詮索しても無駄だろうことは分かっている。神出鬼没で何を考えているか分からない、そのくせあり得ないほど頭が切れる。鬼ほど恐れる理由はないが、それでも鬼と同じくらい嫌な相手だ。

使い古した椅子の背もたれにぎいと背を預け、文は体を伸ばした。少しはこりが抜けたように感じ、一息つきつつ果たし状の返事を告げる。

「だいぶ前のことですけど、吹っかけたのは私ですしね。ま、受けて立ちましょう」

「逃げたりなんかしたら、萃香がカンカンになるものね」

「その話は、できればやめてもらいたいものです」

苦笑を浮かべながら、机についている大き目の引き出しを開ける。プルタブのついた缶がいくつか入っており、うち二つを手にとって、一つは紫へと放った。

外の世界にある『缶ジューズ』なる飲み物を、河童が真似て作ったものらしい。密閉されているため、中に入っている飲み物はかなり日持ちする。ちなみに、中身はただのお茶だ。

「どうもありがとう。ご馳走になるわね」

缶を受け取った紫の礼に肩をすくめて答えてから、文は机に放り投げてしまった果たし状に目を移す。

約束を果たしてもらおうと書いてあったが、恐らくレミリアに対する謝罪のことを言っているのだろう。なぜそこまであの吸血鬼にこだわるのか、文にはいまいち分かりかねた。レミリアが花子と気が合いそうな妖怪だとは思わないし、他にもっと仲良くなれる者もいるのではないか。

文の心中を悟ったらしい紫が、缶の口から唇を離した。

「レミリアは初めてのお友達、らしいわよ。だからこそ、彼女を貶めたあなたを許せない。幼くて可愛らしい意地だと思わない？」

「確かに。ですが、それにしたって意固地になりすぎでしょう。もう三ヶ月以上経っているんですよ？」

「花子をあの子に任せたのは、あなたじゃない」

一転、文はばつの悪そうな顔をした。萃香が花子を育てるよう仕組んだのは紛れもなく文自身であり、こうなることも想像に容易い。からかわれていると知りつつも、文はかぶりを振る。

「そうじゃなくて、花子さんの心中を言ってるんです。果たし状の文面　鉛筆で書いたようですが、筆圧が強すぎる。かなり力を入れて書いたみたいですよ」

「さすがは新聞記者様ね」

「どうも。まあつまり、彼女の私に対する敵意が強すぎると言いたいんです。何か、知ってるんでしょう？」

花子が定期的に外へ手紙を書いているという話は、最近魔理沙から聞いていた。結界を越えて外に物を運べる妖怪など、紫以外にあり得ないはずだ。

相変わらずはぐらかすような微笑を口元にたたえ、紫は缶のお茶を上品に飲んでから、

「幻想郷は全てを受け入れる。それはとても」

「残酷、ですか？　いい加減聞き飽きました」

「何度でも言いますわ。その度に意味合いが変わってくるから。それこそが、この言葉の真意」

分かりそうで分からない言葉を連ねるのも、いつも通りだ。

さっさと本題を切り出させたくて、文は一つ、小さく咳払いをする。

「それで、どうなんです？」

「せっかちな。言ったでしょう？ 幻想郷は、御手洗花子の全てを受け入れた。その幼さも、弱さも、何もかも。ほら、残酷でしょう？」

「……最初からそう言えばいいのに」

言葉があまりに足りない気がするが、キーワードは出揃っている。相変わらず遠まわしなことをすると、文は呆れつつ茶を口に含んだ。紫は話をやめて、また微笑んでいる。

外の世界で忘れ去られる危機に瀕した花子は、やっとの思いで幻想郷に辿り着いた。彼女にとっては最後の希望と言って良かっただろう。

しかし、そこで待ち受けていたものは、光満ち溢れる未来ではなかった。厠で子供を驚かすことを生業としていた花子だが、巫女に退治された拳句に学び舎を追われ、喧嘩っ早い妖怪や妖精が蔓延る里の外へと放り出されたのだ。

湖の濃霧に包まれ、イタズラ好きな妖精に妖弾をぶつけられ、何がなんだか分からない恐怖に怯えたことだろう。そんな中で、彼女は紅魔館に辿りついたのだ。

館で何が起きたのか、文は知らない。どういう経緯でレミリアやフランドールと友人になったのかも分からないが、それでも花子の胸中は容易に想像がつく。

たった独り、手探りで歩き続けてきた彼女にとって、友となってくれた吸血鬼の姉妹はどんなに暖かな存在だったことだろう。彼女達がどれほどワガママであったとしても、隣で一緒に笑ってくれるだけで、幼い花子はとても癒されたはずだ。

幼さ故の強い気持ち。初めての友達という言葉だけでは表現できないほど大切な、しかし親友と呼ぶにはまだ付き合いの浅い友。花

子にとつては、この幻想郷でかけがえのない存在だったに違いない。そんなレミリアを、文はあれほどまでに貶してしまつたのだ。彼女が今日まで怒りを引き摺るのも、無理からぬことだろう。

「さしずめ、心の友といったところですかねえ」

「育てたのは萃香と古明地の妹だけれど、花子を一番強くしたのは、レミリアなのでしょうね」

「あの傲慢お子ちゃま吸血鬼も、誰かの役に立つことがあるわけだ」

類杖をついて呟くと、紫が「まあまあ」と口元を押さえた。彼女の見た目は絶世の美女だというのに、時折こつこつした年寄り臭い仕草を見せる。本人に言つと何をされるか分からないが。

疲弊しきつた体に、これ以上の長話は堪える。文は椅子から立ち上がり、スカートの埃を払つた。

「さて、私は少し休みます。花子さんには、決闘承知の旨をお伝えください」

「承りましたわ。それでは、お休みなさい」
「ごきげんよう」

ぬうとスキマに引つ込んで、紫は姿を消した。

寝る前に汗を流そうと、風呂場に向かう。河童の発明は便利なもので、天狗の家には捻ればお湯の出る蛇口が完備されていた。

栓をした湯船に湯を張りつつ、服をあらかた脱ぎ捨てる。下着だけになったところで、文はふと部屋に戻った。どうせ急いだところで、湯が溜まるまで時間がかかる。

机に放られた果たし状を手を取って、はらりと広げる。可愛らしい丸文字で書かれたその書状を眺め、

「七日後、か。楽しみだわ、とても」

笑みとともに零れた言葉に、嘘はなかった。

守矢神社の鳥居の前で、花子は空を見上げた。雲一つない晴天だ。いつもの川原を発つ時、決闘日和だと萃香は言っていた。決闘などしたことがないのでよく分からなかったが、彼女が言うのだから、きっとそうなのだろう。

もう、あの川原に戻ることはない。またいつでも行けるけれど、この日のために修行をした日々は、もう過去となってしまった。そのことが少しだけ寂しかったが、花子はもう前を向いている。とても長かった。しかし、いよいよなのだ。一人前の妖怪となって最初に成すべきことが、目の前にある。

高鳴る胸と共に、境内へ踏み込む。同時に、目を丸くした。まだ昼前だというのに、守矢神社はまるで祭りでもやっているかのような賑やかさだった。実際、祭りと呼んでも間違いではないかもしれない。

喧騒の正体は、あちこちで始まっている酒盛りだった。山に住む天狗や河童を始めとした妖怪、山の外に住む一人一民族の妖怪。さらには物好きな天人から仙人、神様までいる始末だ。

「うえ、あれ？」

「おうい、花子！ やつと来たね。どうだい、中々のもんだろう」

手を振りながら駆け寄ってきたのは、萃香だった。その口ぶりか

ら、正月の神社もかくやといったこの賑わいが彼女の仕業だと分かる。

三度の飯より酒が好き、その次に楽しいことが好きといった萃香のことだから、こうなることはなんとなく予想していた。しかし、限度というものがあるのではないか。花子は諦めも含めた溜息をゆつくりと吐き出した。

「……中々なんてもんじゃないですよ、もう」
「なんだい、つれないねえ。賑やかなほうがいいじゃないか」

萃香がケラケラと笑った。そちらにじっとりとした視線を向けつつ、花子は嘆息を漏らす。

神社の住人であるはずの早苗はどこかと探してみれば、すでに来上がつているらしい神様と思しき女性と童女の面倒を見ていた。花子は、ここの神だけは崇拜すまいと心に決めた。

「まったくもう。決闘なんだから、もつとこう」
「厳かに、かい？ 古い古い。今の時代、決闘も楽しくいかなきゃ嘘さ」

「そ、そうなんですか？ ううん、萃香さんがそう言うならいいけれど。それにしても、よくこんなに集めましたね」
「私の能力にかかれば、こんくらい朝飯前だよ」

十や二十では収まらない数の妖怪がどんちゃん騒ぎをしている様は、もはやただの宴会だ。実際、花子と文の決闘も余興の一つではないのかもしれない。

決着をつけるべきは花子と文であり、それを酒の肴にされても構わないと思うのだが。やはり複雑な心地だった。

渋面を浮かべる花子の肩を、萃香が小さな手でなだめるように叩

いた。

「まあまあ。あんたが喜ぶ奴も連れてきたからさ。ええと、『すべしやるげすと』ってエんだろ?」

萃香の視線を追って、花子は目を見開いた。

守矢神社にはどう考えても似合わない真っ赤なパラソルの下で、やはりこの境内では酷く浮いている豪華な椅子に腰掛け、ワイングラスを傾ける少女。青みがかかった銀髪を秋風に揺らす彼女は、花子と目が合ったと分かると、にっこり微笑み手を振ってくれた。

「レミリアさん……」

「あいつだけは、力を使わないで呼んできたんだ。決闘の理由を話したら、すぐに行くって言うてくれてね、一家総出でお出まじってわけさ」

「一家総出って、え、じゃあ」

思わず、レミリアの周囲を見渡した。片時も主から離れまいと隣に佇む咲夜に、パラソルの位置が気になるらしくいじくっている美鈴。レミリアが腰掛けている椅子の後ろに見える帽子は、パチュリーだろうか。

そして、見つけた。パラソルを固定しようとしている美鈴の腕にぶら下がって遊ぶ、姉とおそろいの帽子を被ったブロンドの少女。サイドテールが元気に揺れる、フランドールだ。

「フランちゃん、外に出してもらえたんだ……」

「ちょっとばっかし渋ったけどね。花子が会いたがってたって言ったら、妹の方が聞かなくなっさ。レミリアの奴、妹にはあんな顔を見せるんだねえ」

フランドールに駄々をこねられて困るレミリアの様子が、花子には簡単に想像できた。よかったと心から思い、目を細める。

紅魔館の面々がいる場所に駆け出そうとしたが、萃香が回り込んできて、花子の両肩を掴んだ。

「待ちな」

「な、なんですか？ まだ決闘まで時間があるし」

「そうだ。あんたは今日、決闘に来てるんだよ。いつもは遊びでやってることでも、今日の花子にとっちゃ真剣勝負だ。あいつらは楽しみに来てるけど、あんたは違う。だろ？」

「うう、でも」

「お楽しみは、勝ってからあー」

間の抜けた声と共に、後ろから抱きつかれる。首に腕を回して頬ずりなどしてきたのは、こいしだった。

「こ、こいしちゃん？ どこ行つてたの？」

「霊夢とこ」

答えて、こいしが一点を指差す。そちらを見れば、霊夢と魔理沙が、妖怪と談笑しつつ酒を飲み交わしていた。妖怪の山に出入りする数少ない人間だと聞いているが、あんなにも堂々とされては人間かどうかも怪しまれそうなものだ。

あっけに取られていると、相変わらず花子を放さないこいしが言った。

「ね。吸血鬼さんと遊ぶのは、花子の勝負が終わってからだよ。

天狗さんにちゃーんと勝つてから、自慢しに行こつ」

「うん……そうだね。そうするよ」

こくりと小さく頷くと、こいしが頭を撫でてくれた。

瓢箪をいつものように豪快に呷って、萃香がこちらに向き直る。あまり見ない真剣な眼差しに、花子とこいしは自然と背筋を伸ばした。

「花子。今だからはっきり言うが、あんたはとても弱かった。教えられることは全て教えるつもりではあったけど、私は正直、あんたが弾幕を撃てるようになるとは思っていなかったよ」

「……」

「でも、あんたはやってくれた。花子は私が思ってた以上に、できる子だった」

にこりと、萃香が口元に微笑を浮かべた。

「師としてじゃなく、友として　あんたに出会えたことを、心から誇りに思う」

「私も、同じ気持ち」

こいしの短い同意も受けて、花子は心がすうと軽くなるのを感じた。今なら、どこまででも飛んでいけそうだ。

しっかりと目を合わせてから、萃香は自分の握りこぶしを花子の胸に押し当て、

「あんたは強くなった。ここから先は、花子の道だ。……しっかりとやるんだよ」

「はい。絶対、文さんに勝ってみせます！」

「おやおや、大した自信ですねえ」

聞き覚えのある声に、花子の背筋が強張った。いつかの記憶が蘇りかけたが、すぐにそれを振り払う。

対面の萃香が上方を見上げ、「おいでなすつた」と笑みを浮かべた。高く昇った太陽のせいで逆光だったが、降り立たずとも、その少女が誰か花子には分かる。

「しかしまあ、本当に宴会になるなんて。これはあなたの仕業ですか？ 萃香さん」

「仕業つてエ言い方はないだろう。可愛い愛弟子の真剣勝負、盛り上げてやりたいと思う親心さ」

「そうそう、親心！」

こいしまでもが胸を張り、それを見た少女 射命丸文は、皮肉げに肩をすくめた。

「さようで。あんな馬鹿みたいに大げさな果たし状を送られたものですから、私はもつと敵かな決闘かと思っていましたが」

「それは私も同じですけど。でも、あなたを叩きのめすのに、雰囲気なんて関係ないです」

眉をきつく吊り上げ、気丈に言い放つ花子。先ほどまでまだ時間ではないと言っていたというのに、文を目の前にした途端、彼女はすっかり臨戦態勢になっていた。

しかし文は、まるで花子を無視するかのようについと視線を逸らし、大げさに境内を眺め回した。

「あやや。こりゃすごい。神様天人、妖怪に人間。なんでもござれですな。さすがは『密と疎を操る程度の能力』、人心掌握も思いのままですか」

「守矢の連中が宣伝したつてのもでかいけどね」

「いやいや、それだけじゃこんなには集まりますまい。決闘場所のみならず、観客までも集めるとは、師の愛とは素晴らしいですねえ」

ふいに花子へ目を向けて、文はにやりと口の端を吊り上げ、

「おんぶに抱っこ」

「……！」

「何でもかんでも師匠に任せ、自分じゃ何もできやしない。果たしてあの頃から、何が変わったというのかしら」

ぐっと唇を噛む花子。萃香は何も答えず、ただ弟子を見つめている。

反論しようとして、花子は口を開きかけた。しかし、それより早くこいしが叫ぶ。

「花子がんばったよ！ すっごいいっぱい悩んで、痛い思いをして、がんばったの。何も知らないくせに、勝手なこと言わないでよ！」

怒気を露わにするこいしは、とても珍しかった。しかし文は少しも動じず、冷やかな視線をそちらに向ける。

「おや、古明地のこいしちゃんじゃありませんか。友情はいつでも美しいですねえ。無意識の中に逃げていた出来損ないの覚に友達を思っ心があつたとは、驚きました」

こいしが自身の胸元を掴む。花子も見ることがないような、苦しげな表情を浮かべていた。文はいつでも的確に、相手が嫌がることを見抜いて口にする。空飛ぶ皮肉屋の二つ名は伊達ではない。

花子の方を向き、文が眼光を鋭くさせた。その視線が語っている。大切な友人がまた貶められているぞ、黙って見ているつもりか、と。

すうと空気を吸い込んだ花子は、そのままゆっくり息を吐き出した。同時に俯き、文が見て分かるほどに落胆の表情を浮かべる。しかし、花子はすぐに顔を上げた。彼女の顔に浮かべられていたのは、文にも負けぬほど嫌味な笑顔だった。

「文さんって、口ばつかですよね」

「……なんですって？」

「ちょっと強いからって威張り散らして、それで新聞のネタを集めてるんでしょ？ 見ましたよ、あなたの新聞。どうしようもないことを自慢げに書きちゃって、見てるこっちが恥ずかしいったら。あれなら、私が前にいた小学校の学級新聞の方がいい出来だったんじゃないかなあ」

文の眉がぴくりと動いた。その表情には、驚きとわずかな怒りが浮かんでいる。

それでも、花子にとってはまだ序の口だ。文を真似て、相手を馬鹿にするように肩をすくめて、

「いばりんぼのくせして、鬼にはいつつもへこへこしてるんだもの。これなら萃香さんと普通に話せる私の方が、よっぽど度胸があるよ」

「……言わせておけば、このチビ」

「私、知ってるんですよ。文さんがいるんな人の弾幕を写真に撮ってた時、萃香さんには頭を下げてお願いした拳句に、お酒までご馳走したんでしょ？ 私ならそんなことしないもん。普通にお願いできちゃうもん。」

ある人が言っていましたよ。天狗の文はカアカアわめくばかりの、能無し鴉だつて」

散々見下してきた花子にここまで言われては、文がこめかみに青筋を浮かべるのも無理はない。彼女は震える拳を握り締め、何とか

笑みを象っている唇から言葉を紡いだ。

「ど、どこのどいつがそんなこと。絶対許せないわ、そいつは誰なの？ 教えなさい」

「この人です」

いつの間にか隣に移動していた萃香を、花子が親指で示す。ふんと萃香が鼻を鳴らすと、文は一瞬頬を引きつらせ、慌てて口をつぐんだ。

わずかな沈黙の後、文がゆっくりと顔を上げた。

「言うようになったじゃない、便所妖怪風情が」

「誰かさんのが移ったんですよ、バ鴉天狗さん」

お互いに凶暴なほど目つきを鋭くさせ、睨み合う。周囲から煽りが飛んできたのは、その直後だった。

早く始めるだの、酒がまずくなる勝負はするなだの、ずいぶんと好き勝手言ってくれている。しかしどんな言葉でも、二人の心に火をつけるには十分だった。

「萃香さん、こいしちゃん」

「始めるんだね」

「……はい」

少しだけ空中に飛び上がり、二人の師へと振り返る。萃香は信頼を寄せた視線を、こいしはわずかに心配そうな瞳を、こちらに向けていた。

行つてきます。声には出さず唇だけを動かし告げると、萃香とこいしが揃って頷いてくれた。

花子の中で、何かが吹っ切れた。後はやるだけだ。勝つだけだ。文の方へ向き直る。すると文は腕組みをしながら、高圧的な口ぶりで言った。

「カードは五枚だったわね。そんなに使えるのかしら？」

「あら、文さんには多かったですか？ なんなら三枚にしてあげてもいいですよ」

負けじと言い返す。文が楽しげに口元を歪めた。花子も眉を吊り上げたまま、笑みを浮かべる。

双方、カードを取り出す。お互いに五枚。ルールに変更は、ない。喧騒と野次が、一気に大きくなった。空を目指した文を追いかけ、花子は妖力を練り上げる。

空中高くに舞い上がった花子へと、文が叫んだ。

「さあ、新入りの弱小妖怪！ 手加減してあげるから、本気でかかってきなさい！」

絶対に勝つ。自分を育ててくれた皆のためにも。何度も自分にそう言い聞かせ、花子も大きな声を張り上げる。

「手加減なんてさせません！ 私はもう、あなたの知る花子じゃない！」

両手を広げる。文が右手をこちらに向けた。臆するな、突き進め。花子は力を解き放つ。

「私はもう 弱くないッ！」

双方の周囲に色とりどりの妖弾が浮かび、放たれた。

決闘が、始まった。

花子がこなしてきたいくつかの実戦では、ショットそのものに脅威を感じることなどなかった。ショットはあくまでスペルカードに向けた布石、相手にスペルを使わせたくなるようなものにすぎないというのが常識だ。

しかし、文のそれは違った。瞳を焼くほど鮮烈な赤と青の妖弾が、輪をなし弧を描き空を舞う。一瞬スペルなのではと思わせるほどの美しさと密度だが、花子のもとへ届く頃にはかなり拡散しており、避けることは容易だ。

スペルカードは精神の勝負とは、弾幕ごっこのプロフェツショナを自称するこいしの言葉だ。今までどういう意味か分からなかったが、ようやく言葉の真意を汲み取った。

まだ戦い始めたばかりの、それも初撃だというのに、花子は文のショットに呑まれかけていた。

「う
」

このままでは、戦わずして負けてしまう。何とかして自分を奮立たせようとする花子の目に、文の冷ややかな笑みが映る。

すぐに妖弾の輪で見えなくなってしまうが、彼女の言いたいことは嫌というほど伝わってくる。心中を見透かされているのだ。

「馬鹿にして……っ！」

ゆっくりと広がり消えていく赤と青の波に、自ら進み出る。一度撃つただけで消えてしまった桃色の妖弾を再度作り出し、文めがけて撃ちだす。

花子の頭上と左下、右下の三点から二つずつ、計六つの妖弾が放たれた。それぞれが対となる妖弾と何度も交錯し、やがて三本の二重螺旋となる。

三箇所から射出される大きめの二重螺旋は、直線的な弹幕とはいえ、狙いさえ絞っていればかなりの範囲をカバーできる。腕組みなどして余裕の表情だった文も、わずかに驚いて回避行動をとった。

赤い妖弾のリングが目前に迫る。その下を潜るようにして避けながら、花子は文の姿を探した。

ほんの一瞬目を離れたただけだというのに、花子の妖弾が狙っている位置とは正反対の場所に移動している。驚愕に目を見開く花子に、文は肩をすくめて見せた。

「どうしました？ ショットがあさつてのほうを向いてますよ」

歯噛みしながらも、再度文へとショットを向ける。しかし、あるうことが彼女は花子の頭上から放たれている二重螺旋に飛び込んできた。螺旋の中心は安心と見たのだから、花子もそれは知っていたし、文がこのことに気付くだろうことも読んでいた。

足元の二ヶ所から発射している妖弾で、文を狙う。交錯した場所は三つの渦が重なり、その流れは混沌を極めている。巻き込まれれば被弾は免れないだろう。

しかし、肝心の文がない。確かに捉えたはずなのにと思った直後、すぐ頭上から声が聞こえた。

「どこを見ているので？」
「っ！？」

見上げれば、文はすでに花子の目前まで迫っているではないか。当然文もショットを展開しており、彼女の近辺は密度が恐ろしく濃い。密集した文の妖弾が放たれる前に、花子はショットを中断し、撤退に全力を注がなければならなくなった。

「このっ、すばしっこいんだから！」

「幻想郷最速の二つ名は、伊達ではありませんよ」

「そんな二つ名、聞いたことないもの。でたらめ新聞記者なら、よく耳にするけれど」

「私は真実以外、決して記事にしない。よく覚えておくことね！」

言葉が途切れ、花子はショットを再開した。今度は決して逃がすまいと、文に視線を釘付ける。体を細かく動かして、雪のように降り注ぐ青と赤の妖弾を避けることも忘れない。

ふと、気付く。文が遅い。先ほど見せた目にも留まらぬ速度とは大違いだ。

パフォーマンスだったのだ。本気になればあれほど速く動ける、だが花子にはこれで十分。そういうことだろう。

花子は憤慨した。なんとしても文の本気を引き出してやりたい。対等に戦える妖怪だと思い知らせてやりたかった。

ポケットに手を突っ込む。そこにある厚紙には、花子にしか分からない妖力の凹凸があった。触れるだけで、どのスペルか判別がつく。

取り出したカードを、文に向かって高々とかざす。それを見た文がショットを止め、にやりと笑みを浮かべる。

体中に滾るものは、妖力だけではないだろう。気合のままに、花

子は叫んだ。

「いきますッ！」

妖力の乗った声は、他のどれよりも高い山の頂にあっても、山彦が叫び返したが如く響き渡った。

花子の頭上に光球が二つ、浮かびあがる。大きな 召喚した花子の背丈と同じほどの、純白に輝く光の玉だ。まばゆいほどの白さを持つ光球だが、その中央には黒い妖力の塊が不気味に蠢いている。文にも、そして下方の観客達にも、それはまるで大きな目玉のように見えた。

刹那、目玉から弾けるように無数の妖弾が飛び出した。色も何もない、キラリと光る日差しのような白い光弾だ。

怪談「目力ベーターベン」。妖弾は規則性がほとんどなく、また密度もそれほど高いものではない。文にとって、避けることは容易いだろう。

大雑把に文へと狙いを定めて降り注ぐそれには、熟練者が放つ弾幕のような美しさはなかった。しかし、秋晴れの青空に夏の太陽を取り戻させたかのような真っ白な光弾は、見るものを釘付けにし、その心に戦いの情熱を呼び起こさせた。

格下とはいえ初見の相手なので、文は警戒しつつ花子の背後に回ろうとした。その直後、彼女の顔色が変わる。花子がこちらを目線で追うと同時に、彼女の頭上にある巨大な目玉もまた、ぎよろりと文をにらみつけたのだ。

弾幕そのものは文に苦戦を強いているとは言えないが、彼女はそれでもわずかな焦燥感を抱いたように見えた。宙に浮かぶ眼球は、花子の目と動きを同じくしているのだ。逃げれば逃げるほど光弾は散らばり、動きが狭められていく。彼女自慢の高速も使いにくい状

況だ。

花子が有利になるかと思われたが、文はすぐに冷静さを取り戻し、迫り来る妖弾を細かく避けることに集中し始める。

散らばらせなければ、この弾幕はさして脅威にはなり得ない。弾幕を展開している花子自身も、当然の判断だと思った。

しかし、花子はこの時を待っていた。正確に言えば萃香の案なのだが、ともかく、口元に勝ち誇ったような笑みを浮かべ、

「もらいました！」

突如、それまで大人しかった黒目の部分が、その動きを活発にした。黒いレーザーを放ち始めたのだ。

ばら撒かれる白い妖弾よりもはるかに速く、鋭い狙いを文へ定めて、細長い妖弾は一直線に進んだ。一瞬、花子はこれで先制点を挙げたと思い込んだが、文の反応は凄まじく早い。光弾の密度がもつとも薄い場所を的確に選び、すぐさまそちらに移動して黒い直線妖弾の回避に専念し始めたのだ。

花子が文を目で追えば、光弾はばらまかれるしレーザーも文を狙う。そうすると、文はまたも弾の密度が薄くなった場所へ移って黒く輝く矢をあしらう。

一進一退の攻防に見えなくもないが、文の回避は正確で、被弾するかもしれないという危うさは微塵も感じられない。

「当たってよっ……！ このままじゃ

」

避けきられたと判断する時間制限が、刻一刻と近づいている。文はそれを知らないだろうが、かといって嘘をついてまで攻撃を続けることは反則だ。ズルをしてまで勝利を得たいとは、花子にはとて

も思えない。

それでも、最初こそ意表をつくスペルに驚いた文が余裕を取り戻していく様を見ていると、心に芽生えたざわつきを抑えられなかった。

まだ一枚目なので、花子としても簡単だと思えるスペルを選んだつもりだった。しかし、こつも簡単に破られそうになるとは思っていなかったので、文に狙いを定めつつ、苛立ちを露わに唇を噛む。

黒いレーザーをまたぐように避け、散弾のような光球の中をすいすい飛んでいく文に、境内の外野から感嘆の声が上がる。同じ天狗共からだろうが、それも花子の胸をかき乱すに十分な役割を果たしていた。

やがて、ばら撒かれていた妖弾もレーザーも、そして目玉を模した光球も消える。

時間切れだ。スペルを攻略した文に二点が加点され、彼女の持ち点は十七点となる。

一枚目の軍配は、文に上がった。

肩で息をする花子とは対照的に、文は額にほんのり浮かんだ汗を拭う程度で、こちらを見下すように言った。

「アイディアはいいと思ったんだけどね、使い手が悪すぎるわ」
「……………」

皮肉の一つでも言ってやりたい気持ちだったが、花子の頭はそれを思いつくほど回らなかつたし、何より息が切れて声が出ない。せめてと憎憎しげに睨み付けるが、文はそれを鼻で笑い飛ばした。

「これで私は十七点。あなたの残りカードは四枚。得点でも枚数でも不利になっちゃってるわね」

「……しら、ない。そんなこと」

ようやく搾り出した声は、なんとも重く苦しそうで、その上ドスも効いていた。文は少し驚いたようだったが、すぐに飄々と肩をすくめてみせる。

「シヨットの被弾なしで先制スペルを撃てば、今のような結果になるかもしれないと、あの萃香さんが教えていないなんてことはないでしょう」

実際それを教えてくれたのはこいしなのだが、それを言ったところで、文にとってはどうでもいいことだろう。

文が、腰のポーチからカードを取り出した。緑色の、葉とも風ともつかぬ模様が入った綺麗なカードだった。

目前にカードを提示されたところには、花子の息はすっかり元に戻っていた。だが、スペルを破られた悔しさだけはどうしようもなく心に燻っている。それを知っていながら、文は挑発するかのようにな花子を見下ろした。

「一矢報いるために不利を覚悟でスペルを撃つ。そんな度胸があなたにあるなんて思わなかったわ、花子。私も敬意を示すべきだと思うから、チャンスを上げる。ここで私はスペルを使う。もし避けることができれば、勝負は振り出しに戻るわ。もちろん当たれば、点数で私に勝つことは絶望的になるけどね」

ひらひらとカードを振るう文。花子はもうスペルカードには目もくれず、見下してくる文の瞳を、眉を吊り上げて真っ直ぐ見つめた。

「どうする？ あなたが怖いというなら、またシヨットから始めるけれど。観衆も待たせているしね」

眼下の宴会を眺めながら、文は答えを待った。実に余裕のある仕事だったが、次に花子が発した言葉で、彼女は跳ねるように顔を上げることになる。

「スペルを使いたくないなら、好きにしたら？　どんな技がきても、私は避けきってみせるだけだもの」

じつとこちらを見据える花子の表情は、文の中にあつた弱気な少女の印象を完全に吹き飛ばすほどの、とても強気なものだった。

その瞳に何を見たのか、文は一瞬顔色を変える。しかしすぐに元の挑発的な顔に戻ってしまったので、実は彼女が武者震いを覚えていたことを、花子が知ることにはなかった。

すうと瞳を冷たく細め、文が口を開く。

「……よくぞ言ったわ。覚悟はいい？」

「いつでもどうぞ。とつくに準備はできてるんだから！」

「その強がり、すぐにかき消してやるわッ！」

花子がいる場所よりもさらに高く、文が飛び上がった。ほぼ同時に突風が吹き荒れ、とつさに目を覆う。

ようやく風に慣れたころ、文がいるであろう上空を見上げた花子は、言葉を失った。文の周りで風が渦巻き、秋の落ち葉だけでなく、まだ青い葉までもが風の中で舞い躍っている。まるで文を崇め守っているかのように見え、廻り踊る風と葉が織り成す文様は大変素晴らしく、花子の語彙では美しい以外の言葉で表すことができなかつた。

風の演舞に見とれていた花子は、しかし次の瞬間、我に返って青

ざめる。踊っていた葉が、突然鎖のように連なって四方八方に伸び始めたのだ。

風神「天狗嵐」。紅葉も入り混じった葉の鎖は、花子へ近づくと連れて離れて砕け、やがては無数の葉となった。木の葉一枚一枚全てに妖力が付与されており、それが文の妖弾となっているとすぐに気付く。

鎖の一部から解き放たれた木の葉は、不規則な動きで花子の動きを封じてくる。風に乗って自由がままに落ちているようにも思えたが、葉と葉の間には絶妙なバランスで避けられる空間が存在しており、例外なく文が操っているのだと知れた。

動きの読めない妖弾の回避は、すでに何度も練習してきた。集中すれば避けられないことはないと言い聞かせ、小さく俊敏に動いて舞い落ちる葉をかわす。

見上げれば、文の周りでまたも木の葉が風に巻かれて渦を作っている。文の周囲を彩る紅葉と緑葉は、観衆こそ楽しませたが、花子にはもうちつとも美しく思えなかった。

「くうっ……」

汗が頬を駆け下りていく。背中も額もびっしょりだが、拭う暇などあるはずがない。

気まぐれに軌道を変えて落ちる木の葉の回避は、花子の集中力を一気に奪っていく。第二波がくると思うと、花子はいいポケットのカードに手を伸ばしかけた。

あわやカードを掴むかと思われた右手は、ポケットの入り口で握り拳に変わり、腕が下ろされてから解かれる。ここでスペルを使おうものなら、花子の負けはぐっと近くなってしまふのだ。辛抱するのだと、自分に言い聞かせる。

ようやく落ち着いたかと思った瞬間、第二波の木の葉に襲われた。

伸びた葉の鎖が散らばり、青空は再び木の葉色に染まる。

息を整える間もなく、体を動かす。安全な避けやすい場所を探したが、そんな場所はどこにも見当たらない。

木の葉の騎士に守られる風の女王となった文は、とてつもなく遠い存在に見えた。あの場所に辿り着けるのだろうか。花子のような下級妖怪風情が彼女と対等に戦おうなどは、おこがましいことだったのだろうか。

否。花子は胸中で激しく否定した。あの夜、あの川原で、花子は萃香と誓ったのだ。

「一番綺麗に、輝かなきゃ」

夜空に輝く、一等星のように。思い出した途端、疲れ始めていた全身に力が戻ってきた。

そこからの花子の動きは、まるで別人のようだった。今までの固さを感じさせる回避とは違い、流れるように木の葉を避けていく。

しかし、やはり消耗は激しかった。信念は間違いなく花子の力となったが、伝う汗の量や動くたびに漏れる呼気は、葉の一枚を避けるたびに酷くなっていく。

目がかすみ、頭が重くなる。いよいよここまでかと思った、その時だった。あたり一面に、凄まじい突風が吹き荒れた。

もはや文を見ている余裕などなく、葉の一枚一枚に全神経を集中させていた花子は、殴りつけてくるような風に目を閉じて身を縮こまらせた。しかし、これほど風が吹いているというのに、妖弾となった葉が体に当たった感覚はない。

やがて風が消え、花子はそっと目を開け、そのままぼかんと開いた口を閉じることができなくなった。

見渡せば、妖力を纏った落ち葉はどこにも見当たらない。ただ文が、上空から小馬鹿にしたような顔でこちらを眺めている。

「やあ、よくがんばったわね。手加減していたとはいえ、一本取られましたよ」

文の周囲に、再び赤と青の妖弾が召喚された。文と共に、花子の息が整うのをじっと待っている。

「よ、避けきつたの？」

いまいち理解が追いつかずに訊ねると、文は大げさに呆れてみせた。

「おや、まさか気付かなかったの？ 見ての通り、今回はあなたに加点よ、花子。これで勝負は仕切り直しね、癩だけど」

「……！」

途端、花子は瞳を輝かせた。切れ切れだった息もあつという間に整えてしまう。

文のスペルを凌いだ花子に、二点加点。持ち点は十七点。カード枚数はお互いに四枚となる。

桃色の妖弾を、今度は正面に三つ展開し、いつでもショットを撃てる体勢を取ってから、花子は言った。

「さあ、続きをしましょう。けちよんけちよんにしてやるんだから、覚悟してくださいね」

「やれやれ、さっきまで死に掛けの子犬みたいだった子の言うこと

かしらね。最初の一手であの様じゃ、この勝負はとてつまらないものになりそうだわ」

「文さんの舌は、どれだけ動いても疲れはないの？ それとも、私が強いもんだから言葉で脅かそうとしてるんですか？」

花子も文も、それは楽しそうに 眉はお互い吊り上っているし、眉間にはしわも寄っていたが 笑みを作った。

双方の妖気が高まり、観衆にもそれが見えたのか、煽りの声はいっそう大きくなっていく。

一陣の秋風が吹きぬけた直後、二人は動きだした。

守矢の連中が用意した酒は、悔しいことにとても美味だった。霊夢の舌はとても喜んでいるといふのに、その顔には渋面を浮かべつつ、肴として用意された猪鍋に箸を伸ばす。

「しかしまあ、花子が文のスペルを破るとはねえ」

小皿に猪肉を取りながらなんともなしに呟くと、隣で空中の戦いを見上げていた魔理沙が、そうだなと相槌を打った。

「でも、ちょっと飛ばしすぎじゃないか？ 気合が入るのは分かるが、あれじゃすぐにへばっちゃうぜ」

「そう？ あんなもんじゃない？」

肉をもぐもぐとやりつつ行儀悪く答えると、魔理沙が酒を呑もう

と動かした腕を止め、じつとりと霊夢を睨んできた。

「……弱い奴が必死になる気持ちなんて、お前にゃ分からんだろうな」

「そうねー。分からないし、分かるうとも思わないわ。弱い奴が悪いのよ」

勘と才能で生きている霊夢は、さも当然とばかりに鼻を鳴らした。これには努力家の魔理沙も怒るより呆れ、やれやれと溜息をつく。

「霊夢は努力の大切さを知るべきだぜ」

「必要ないものを大切に感じるわけじゃない。それよりも、そちの肉食べないならちようだいよ」

「これは私のだ」

伸ばした霊夢の箸を自分の箸でがっちり掴み、魔理沙が再び上空の戦いに目を移した。

激しいショットの撃ちあいは、一枚目の前よりも長く続いていた。相変わらず三つの二重螺旋で文を狙う花子に対し、文は観衆に見せびらかすように、大雑把に妖弾をばら撒いている。遊んでいるのだらう。

魔理沙がすっかり弾幕ごっこに夢中になっっている様子を、霊夢は少なからず冷めた気持ちで見つめていた。あの花子が弾幕ごっこで遊べるほどにまで成長したことには、霊夢も確かに驚いた。だが、目を見張るほど強いわけではない。あの場にいるのが花子ではなかったとしても、酒宴は変わりなく盛り上がるのだらう。

「ま、どうでもいいけど」

心底本気で呟いて、酒を一口含みつつ弾幕ごっこの様子を眺める。ちようど花子が文のショット　赤い妖弾で作られた輪に当たったところだった。

花子は一点減点となり、持ち点は十六点。まだ余裕はあるが、彼女にとつては大きな一点だったはずだ。

精神的な痛手もあるのだろう、揺らいだ小さな体がふらりと宙を漂う。その様子を見て、魔理沙が叫んだ。

「ほら、言わんこつちやない！」

「あらま」

霊夢もまた、わずかに驚きの声を上げる。まさか本当に体力を消耗しているとは思わなかったのだ。しかし、それ以上の興味はないのか、彼女は再び猪鍋へと視線を落とした。

一方の魔理沙は、もはやいてもたってもいられないようで、今すぐにも加勢に行きたいと顔に書いてあった。箸を持つ手はいつしか握り拳になっており、歯噛みしながら見守っている。霊夢の箸が彼女の肉を略奪していくのにも気付かない有様だ。

聞けば、花子は妖精や妖怪と弾幕ごっこを何度かこなし、勝利を得たことも数回あるという。とはいえ、今日の相手はあの文だ。今回ばかりは分が悪すぎると霊夢は思っていた。

まだ増長まではしていないだろうが、こんな大衆の前で文に負けてしまえば、花子に芽生えた自信の若葉は摘み取られてしまうだろう。今でこそ霊夢と肩を並べるほどの実力者になっているが、かつて弱者であった魔理沙は、そのことを一番不安に思っているのかもしれない。本当のところは、霊夢には分からなかったが。

文と花子が、再びショットを撃ちあい始める。霊夢と魔理沙は、花子のショットからわずかに力が抜けているのを読み取った。

「……このままじゃ、負けるわね」

「分からないぜ、まだ始まったばかりだ」

「あんたが妖怪の肩持つなんて、珍しいわね、魔理沙」

「どっちも妖怪じゃないか。それに、花子はいい奴なんだ」

霊夢はそれ以上深く詮索しなかった。上空の戦いと同様に、大して興味がないのだ。

肉だけでなく魔理沙が持参した一升瓶にすら霊夢の手が伸びていたが、魔理沙の瞳は一心に上空を見つめ、

「がんばれ花子、がんばれよ」

もう何年も茶飲み友達をしているが、こんなにも真剣に誰かを応援する魔理沙を、霊夢は初めて見た。

こんな顔もできるのかと思うと、ほんの少しだけ花子へ羨みと嫉妬を覚えたが、

「……ん、この酒おいしい」

酒を舌に転がして頬を緩める霊夢は、やはりいつも通りだった。

当たる。そう理解した瞬間、花子の体は衝撃と痛みを襲われた。

二度目の被弾。得点がさらに一点減り、花子はこれで十五点。対する文は、最初のスペルを攻略してから変動しておらず、十七点のままだ。

お気に入りのセーラー服は袖が破れ、もんぺもアップリケがはがれかけている。一方の文は涼しい顔で、衣服にもほとんど乱れがなかった。

二人ともカードは四枚なので、全て使い切っても点数を減らしきれない。お互いにショットで点を削らなければならない展開となっている。頭では分かっているのだが、花子の心は酷く乱れていた。

ここで下手にカードを使えば、確実に不利になる。避けられようものなら、もはや文の勝利が確定すると言ってもいいだろう。しかし、二点の減点と激減した花子の体力が、カードで少しでも文の点を奪えと訴えてきている。スペル中は反撃されない限り派手に動かないので、体力の回復も図れるはずだ。

先に点を奪われた悔しさと、まったく落ち着く気配のない動悸と息切れが、花子の冷静さを奪い去っていく。ただ気丈な信念だけが、彼女を突き動かしていた。

「はあっ　　うう　　」

「満身創痍じゃない。まだスペルを一枚しか使っていないのにな」

先ほどまでの威勢が消えかけている花子に、文が何度目かの呆れ笑いを見せる。もう、それに怒る気にもならなかった。

実力の差は明白だったのだ。それを知っている上で挑んだし、萃香達もまた、文には届くまいと知りながら花子を育てていたのかもしれない。そう思うととても胸が痛んだが、事実、文は強かった。

花子が数ヶ月間どんなにあがこうと手の届かない場所に、射命丸文は立っているのだ。

「まだ続ける？　リタイアするなら、私は構わないわよ」

「……」

これ以上戦ってどうする。花子は自問する。弾幕ごっこは、たかが遊びなのだ。大げさな果たし状など叩きつけたが、文も本気で受け取っていないのではないか。

息は切れている。もう動きたくない、体中が悲鳴を上げていた。これ以上続けても痛い思いをするだけならば、いつそのままその声に従い、文に降参してしまおうか。

後ろ向きな気持ちが脳裏をよぎると、花子の戦意は一気に失せていった。

「私は」

「まあ、もつとも」

漏れかけた降参宣言を、文の声が遮る。まだ何かあるのかと虚ろな瞳で文を見上げると、彼女は眼下の観衆を見つめていた。

「下の連中がどう思うかは、知らないけど」

花子は習って視線を下げた。大勢の妖怪達がこちらを見上げ、やんやんやと騒いでいる。

ふと、花子の目は妙に目立つ一点を見つけた。視力に自信がある花子は、そこに誰がいるかをすぐに知ることができた。

これでもかと目立つ真紅のパラソルの下、日光が届かないギリギリの場所から、レミアアが固唾を呑んで花子を見守っていた。その横では、今にも飛び出してきそうなほど腕を振り回して声を上げているフランドールも見える。

ドクンと、花子の心臓が大きく脈打った。痛いほどに胸を掴んで、そのすぐ近くに視線を移す。

見慣れた 見慣れすぎた小さな人影が、三つ。胡坐をかいて腕組みをし、真顔でじつとこちらを見上げる萃香と、対照的に不安を露わに両の手を祈りの形に組んでいるこいし。そして、普段着で駆けつけてくれたミステリアの姿だった。

中央にある大きな焚き火を挟んだ反対側には、なにやら大騒ぎをしている女性と童女の世話を焼きつつ観戦している早苗と、口に手を当て声を上げて応援してくれている秋姉妹も見えた。

明らかにそれと分かる紅白の霊夢と黒白の魔理沙も、しつかり見ている。ちようどそこに、店を閉めてまでやってきてくれたらしい香霖と弾幕ごつこの教本を作ってくれたという慧音がやってきた。二人は魔理沙に指差されこちらを見上げると、手を振ってくれた。

「あなたが降参したら、あの人達、どう思っのかしらね」

文の言葉が、胸に突き刺さる。

花子は今、ちっぽけな自分を応援してくれている人々を裏切ろうとしたのだ。その事実気付くと、背筋が凍るような思いになった。

「確かにまあ、正直に言うけどね。花子は弱いわよ。でも、弱くなれたじゃない。あんなにどうしようもない、強弱を語るのも憚られるレベルだったというのに」

「……」

取り返しがつくのだろうか。まだ、皆の気持ちに伝えられるだろうか。

「そこまで育ててくれた人達なんだから、当然花子のことをよく思っているでしょうね。だからあなたが降参しても、きっと誰も、あなたを責めないわ。責めないけど 落胆は、するでしょうね」

応えねば。応えるのだ。例えこれがただの遊びだとしても、その結果が惨めに這いつくばう敗北だとしても

「誰もがあなたと友人であり続けるだろうし、嫌うこともないんじゃないかしら？ ま、皆の中であなたの評価が変わるだろうことも、また間違いないでしょうけどね」

逃げるわけには、いかないのだ。

「それでも降参するというのなら、もう止めないわ。私もさっさと終わらせて酒を呑みたいし、今日は美味しそうな鍋もあったし」
「まだ喋るつもり？ 本当に、よく回る舌なんだから」

文の視線がこちらを向いた。花子の右手を見て、嘲るような口元の笑みが、別のものに変わる。

花子の小さな人差し指と中指には、しっかりとスペルカードが挟まれていた。まだ二枚目、しかし、花子にとってはもう二枚目。

痛みは消えない。息もまだ荒い。しかしその瞳には、決闘が始まった直後の強い輝きが再び宿っていた。

勝負の行方を大きく左右するだろう一手を、花子は臆することなく天に向かって掲げ、堂々と宣言する。

「果たし状に書いたはずだよ。私はもう、逃げも隠れもしないって！」

「……そうだったわね」

呟きと共に、文が間合いを取る。たったそれだけの動作も、今の二人にとっては、再開の合図として十分なものだった。

スぺルカードを空へ投げ、妖力に操られたそれがひらりと花子のポケットに飛び込むと同時に、掲げられた人差し指の上に桃色の妖弾が浮かび上がる。

「そおおお」

花子は大きく振りかぶった。身長よりも大きな妖弾を、

「れえッ！」

文に向かって投げ飛ばす。二人の間にはかなりの距離があったが、妖弾は目にも留まらぬ速度で文の目前に迫った。身を翻して避けた文が、次弾を警戒しながら花子の側面へと回りこむ。

しかし、花子は次弾を射出しない。何かに気付いたらしい文が振り返ると、避けたはずの妖弾が、彼女のすぐ背後に迫っていた。

怪談「スプリント二ノミヤ」。大きな妖弾は花子の思うがままに操られ、逃げる文の背中を猛スピードで追いかける。

本体である妖弾から生み出された小さな妖弾が彗星の尾のように伸びていき、逃げれば逃げるほどに退路は狭められていく。しかし、文はすぐに解決策を思いついたようだった。

なんら難しいことはない、ただ真っ直ぐ逃げればいい。文でなくとも、その答えにはたどり着くだろう。

「さあ、これからが本番ですよ！」

花子は掲げていた指を、パチンと小気味よく鳴らした。同時に、妖弾が弾け、四つに分裂する。

四つの彗星は、それぞれが独自の意思を持っているかのように、文の進行方向を遮り回り込み、考える暇を与えずに追いかけてまわした。さらに余裕を奪うため、花子本人も妖弾を展開する。

文は頭が切れる。普段の弾幕ごっこであれば、この程度の弾幕なら簡単に攻略してみせるだろう。だが今の彼女は、花子が疲弊しきっていると油断していた。花子はその侮りを逆手に取ったのだ。

全身に感じる疲労感が、花子に歯を食いしばらせた。このスペルは、ただでさえ消耗が激しい。かなり体力を使ってしまった現在の状態では、そう長くは続かないだろう。

「もう少しだけ、がんばって、私……！」

あとわずかでも文が慌ててくれさえすれば、花子が描いた理想通りの展開になる。

そして、ついに時はきた。

四つの妖弾に追いかけられて、その上流れる細かな尾と花子の弾幕に進路を妨害され、とうとう文がしびれを切らしたのだ。

「私の背を襲おうなんて、千年早いッ！」

鋭い叫びと共に、文がスペルカードを取り出した。カード宣言、撃ちあわれる。

一瞬妖弾を警戒した花子だが、文の周囲に渦巻く風を見て、その必要はないと直感した。同時に、決して文から目を離してはならないとも悟る。

怒涛の如き風を従え、文の体が動いた。突風「猿田彦の先導」。花子に向かって、真っ直ぐ突進してくる。

文が纏う風の鎧は、桃色に煌く彗星の尾や花子が撃つ弾幕を、ここごとく吹き飛ばした。

相手の弾幕にスペルで干渉することは、ルールでは禁止されていない。ただ、どうしても力技が多くなるためか、好んで使うものが少ないのだ。しかし、こういった対弾幕用のスペルを奥の手として

持つこともまた、常識となっている。

尋常ではない風の唸りと文の気迫に吞まれかけながらも、花子の瞳は満足げに輝いた。文に奥の手を使わせるこそが、彼女の狙いだったのだ。

あとは被弾を避けて、彼女のスペルを破ることができれば完璧だ。花子のスペルを文に当てることができれば、さらに理想的と言える。轟々たる爆音を引っさげて、文が迫ってきた。駆け抜ける突風に吹き飛ばされないよう体に妖気を滾らせながら、花子は巨大な弾丸となった文をかわす。

その凄まじい勢いと風に紛れる文の巨大な妖力に、思わず息を呑む。あんなものの直撃を受けたら、きつと気を失ってしまうだろう。

「でも、すごい」

文はすごい。そして、彼女と戦えている自分もまた、すごい。口元が緩むのを、止められなかった。

一度は消し飛ばされかけたが、花子の大きな妖弾はまだ生きている。文のスピードと風に押し負けながらも、花子は四つの妖弾を操り、その背中を狙う。

再度突進を仕掛けようと切り替えした文は、完全に吹き飛ばしたと思っていた妖弾が眼前に現れたのを目視すると、一瞬停止して上空へと退避した。

さらに追いかけてようと妖弾を操りかけた花子だが、見上げた文と目が合い、獲物を狙う猛禽類のようなその眼光に凄まじい恐怖を覚え、震え上がった。

「く、くるっ！」

咄嗟に、妖弾を自分の正面に引き戻す。それよりも早く、そして何よりも速く、文が襲い掛かってくる。

疾風の羽を背負って急降下してくる文は、今までの彼女よりも数倍威圧感があった。恐ろしさのあまり泣き出しそうになる自分を内心で激しく罵りながら、花子は妖弾が間に合わないかと判断し、文に視線を向けたまま後方に下がる。

急いで退避したにも関わらず、文はすぐ目の前を通り抜けていった。後を追うように上方から吹き付ける風に押し潰されそうになりながら、下方を見渡し文の姿を探す。

すぐに見つかった。真下から、こちらを見上げている。

「うっ
」

花子の目で追える速度なのだから、まだ手加減の範疇なのだろう。だがその目は、もはや花子を生かして帰すまいとしているのではとすら思えた。

「い、いやッ！」

生まれて初めて、花子は生命の危機を感じた。文を追い払おうと、必死に妖弾の彗星を操る。

恐怖と混乱の渦中にあつたせいで、妖弾をどう動かしたのか、さらには何が起きているのかすらも、花子にはよく分からなかった。

本能的に目をつむってしまった花子の耳に、鞭を打つような音が聞こえた。しかし、体に痛みや衝撃はない。

身を縮こまらせながら、恐る恐る目を開ける。状況を理解するまでにかなりの時間が必要だった。

嵐のような風はすっかり止み、花子の足元まで上がってきていた文が左腕を押さえながら、舌打ちをしている。押さええた部分の衣服

がわずかに破れているのも確認できた。

観衆からは、激しい動揺のざわめきも聞こえてくる。

まさか。花子は慌てて妖弾の数を確認した。力なくぶかぶか浮いている桃色の弾は、全部で三つ。

「えっ、本当に……？」

「……」

文は答えなかった。それでも、苛立ちを隠もしないその態度で、ようやく状況を信じる事ができた。

がむしゃらに操った花子のスペルが、文に被弾したのだ。

射命丸文、三点の減点。持ち点は一気に十四点まで減少した。

「やっ たあッ！」

花子は力強くガッツポーズをし、喜びの声を上げた。すぐに気を取り直し、ふわりと飛び上がってきた文の視線を真っ向から受け止める。

つまらなそうな顔をしてはいるが、文は被弾を潔く認めた。

「やってくれるじゃないの、まぐれみたなもんでしょうけど。これで、カードは互いに三枚。得点は 花子が十五点、私が十四点ね」「逆転しちゃいましたよ。どうします？ 降参しますか？」

腰に両手を当てて挑発すると、いつもの調子を取り戻した文は、フンと鼻を鳴らした。

「このくらいで勝った気になってるの？ おめでたい頭ね、まるでお花畑だわ」

「花子、ですから。そのくらいがちょうどいいんですよ」

にっこりしながら言うと、文はあっけに取られて何度かまばたきしてから、なるほど確かにと、おかしそうに笑い出した。

数秒二人で笑いあったが、花子と文は再び距離を取った。先ほどの笑顔は消え失せ、睨みあったまま、それぞれの妖弾を自身の手に呼び出す。

合図となる言葉もきっかけもなかったが、二人はまったく同じタイミングで、妖弾を撃ちだした。

真っ青な秋空の下で繰り広げられる妖怪少女の決闘は、まだ、終わらない。

そのじゆうに 決戦！勝利は我が友のために！ (1) (後書き)

じじく - A ()

そのじゅうさん 決戦！勝利は我が友のために！（2）

二枚目のスペルカードを使い、花子が逆転した。そのことに酒を楽しむ誰もが驚いたが、すぐに喧騒は酒宴のそれに戻っていつてしまふ。静葉を含むただ一部の者のみが、再開した戦いに目を向けている。

「どう思います？」

そう訊ねてきたのは、守矢の二神の小さいほうを寝かしつけた早苗だった。どうと言われても、と静葉は腕を組む。

花子は見違えるほどに強くなったと思うし、文を前にしても決して引かず果敢に攻めている姿勢は、高く評価できる。しかし、早苗が聞きたい答えとは違うだろう。

正直にそれを口にするのは嫌だったが、黙っていても仕方がないので、静葉は少しだけ唸ってから口を開いた。

「厳しい戦い、だよ。私も穰子も、きっとあの天狗には勝てないし」

「私も姉さんと同感。もちろん、花子ちゃんが私らより弱いって決め付けてるわけじゃないけど」

用意された兎鍋を無視して焼き芋を頬張っていた穰子が、湯気立つ芋から口を離して言った。

静葉と穰子の家に訪ねてきた時はまだ空も飛べなかった花子は、勇ましさすら感じさせる勢いで文へとショットを放っている。静葉の目から見てもまだまだ粗いが、対する天狗に余裕があまり感じられないのは、きっと文にしか伝わらない覇気があるということだろう。

「気持ちの強さは、妖怪にとって力になると聞きますけど……。花子さんは今、文さんを凌ぐほどの気力があるんでしょうか」
「うん、きつと　今はね。あなたも現人神なら、分かってるんじゃないの？」

少し意地悪いかと思いつつ、静葉は横目で早苗の顔を覗き見た。彼女は小さく「そうですね」と答えたり、表情もほとんど変えないで上空に広がる弾幕を見上げている。

神という存在にとって、信仰心　すなわち心の力は、大きな意味を持つ。妖怪の妖力や悪魔の魔力と違い、固体のポテンシャルに左右されない、全ての存在が平等に、そして無限大に持つ力だ。静葉達を始めとする神々は、その力を感じ取ることができる。

時に、心の力は弱者を大きく飛躍させる。窮鼠猫を噛むとはまさしくその通りで、決死の覚悟を決めた者は誰にも負けない強者となり得るのだ。今の花子が、まさにそれだった。

しかしながら、想いは磨耗する。どれほど強い意思があっても、時間の経過や体力の低下で、気持ちは削れていく。まして、もとの力が小さい者であれば、消耗は早い。

意志の強さで一時的に力を得られても、その力がある間に勝利を掴めねば、いずれは弱者に戻ってしまう。文と激闘を繰り返している花子は今、凄まじい勢いで精神を磨り減らしているはずだ。

「……長くは持たないかもね」

そう呟いた穰子の言葉を、静葉も早苗も否定できなかった。できることなら、花子に勝ってほしい。しかし、もともとの力でも精神的な余裕でも、文が有利なことは揺るがない事実だ。

ただでさえ、花子は一度くじけかけている。静葉達の姿を見て気

を取り直したようだが、それもいつまで持つのか。

胸元で両の手を握り合わせて戦いを見守っていると、突然右半身に重みを感じた。同時に凄まじい酒臭さを覚え、静葉は反射的に逃げ出そうとし、そして失敗した。頭を抱えられ、引き寄せられたのだ。

柔らかい感触に驚いたのも束の間、酒の臭いに全力で眉間にしわを寄せながら、顔を上げる。

注連縄しめなわを王冠のようにして頭に乘せた、青髪の女性だった。守矢の二神が一人、八坂神奈子だ。

どれだけ酒を呑めばこれほど臭うのか、静葉には理解できなかった。神奈子は静葉を抱えたまま、酔った赤い顔を隠そうともせず、

「神が祈りの姿勢を取るなんて、感心しないね」

「……それは」

「しかも、弱小妖怪一匹相手に。信仰する側とされる側の区別くらいは、つけておくべきじゃないかな？」

言い返そうとして、静葉は口をつぐんだ。神格としては大先輩である神奈子には逆らえないし、彼女の言っていることは正しい。

なんとか神奈子を引き剥がし、こちらの様子を心配そうに眺める穰子に目配せしてから、静葉は神奈子に告げた。

「確かに、私が妖怪に祈りを捧げることは間違いです。けど、でも……」

分かっていても、そうなってしまふのだ。静葉の両手は、自然と胸元で握り合う。

「友達の勝利を願う気持ちまで、許されないのでしょうか？」

「そうだねえ、そのくらいならまあ、大目に見ましようか。しかし

だね、秋神の姉よ」

一升瓶から最後の一滴まで搾り出すように杯さかすきに注ぎ、神奈子が一気に呷る。ただ酒を呑んでいるだけだというのに、静葉と穰子はその振る舞いに凄まじい神々しさを感じた。

杯から口を離して、しゃっくりを一つ、神奈子が笑う。

「友人を応援するなら、心からするべきだ。負けるかもしれないなんて、間違っても思っちゃいけないね」

「……」

「神の心力は、相手に大きく影響する。秋神を長いことやっているあんたらが、知らないわけではないと思うんだけど、どうだい？」

頭では分かっていた。穰子もまた、同じだった。

力の弱い八百万の神であっても、二人の想う力は相手に影響を与える。神々が持つ、相手の願いを聞き入れ叶える力は、まさに神の心なのだ。

それを知っていたからこそ、静葉と穰子は花子と友人になり、彼女が空を飛ぶ力になった。だというのに、今こうして花子が負けるだろうことを信じてしまっただけ、彼女の足を引っ張ることになってしまうかもしれない。

観衆がどよめいた。見上げれば、花子がわずかに落下し、何とか体勢を整えている。霧散していく青い弾は、文のものだ。

花子が、ショットに被弾した。一点減点し、持ち点は十四点。得点でもカードの枚数でも、文と再び並んでしまった。この状況での被弾は、花子にとって大きなプレッシャーになるはずだ。

自分が弱気になってはいけない。分かっている。分かっているのに、心は勝手に弱くなる。静葉はこの時ほど、自身の弱さを憎んだことはなかった。

「……早苗！」

突然、神奈子が声を上げた。あまりの大音声に、周囲の妖怪がびくりと肩を震わせる。彼らと一緒に驚いた早苗だが、神奈子の意図を察して、新しい一升瓶を持ってきた。

「加奈子様、ほどほどにしてくださいね」

「断る」

「ですよ。知ってました」

もはや呆れもないのか、早苗は淡々と答えて、四つのコップに酒を注ぐ。一つは神奈子に、もう一つは自分に配ってから、残りの二つを静葉と穰子に渡した。

戸惑いつつも受け取ると、神奈子がそれでいい、と頷いた。

「神が弱気になるなんて、そんなことを言うつもりはないよ。でもまあ、今はその時と違う。どうせ応援するなら、派手にいこうじゃないか、なあ早苗？」

「……そうですね」

「どう思う？ 秋の妹」

「ううん、確かにグチグチ言ってるよりは、大きな声出したほうが元気は出るかな」

先ほどまで一番重苦しい顔をしていたというのに、穰子の最初から分かっていたとでも言いたげな顔ときたら。まったくやり手だと静葉は苦笑した。

神奈子がこちらをじっと見ている。一瞬だけ目を合わせてから、コップの中身を口の中に注ぎ込んだ。アルコールが喉を熱くする。

「ぶはっ」

度数の高い酒を一気に飲み干し、全身に行き渡った熱をそのままに、静葉は叫んだ。

「がんばれえええ！ 花子ちゃあああんツ！」

控えめで地味と呼ばれていた秋静葉の叫びを聞いて、妖怪達が一斉にざわめいた。少しだけ羞恥を覚えたが、

「負けるなああああつ！」

「まだまだいけます、諦めないで！」

穰子と早苗も共に叫んでくれた。それだけで、静葉もまた、大きく息を吸い込める。

すっかり応援に夢中になった静葉達には、一升瓶を抱えながらしやつくりをする神奈子の、満足そうな笑みは見えなかった。

「これはまた、賑やかな応援なこと」

変則的な赤と青の妖弾を展開しつつ、文が神社の境内を見下ろした。花子にそんな余裕はなかったが、その声は花子の耳にもしつかりと聞こえた。

ありのままの自分でいればいいと教えてくれた秋姉妹と、スペルと一緒に考えてくれた早苗だ。こんな空高くまで聞こえるほど、一生懸命に応援してくれている。同点となったことで動揺していた花

子の気持ちは、彼女達の声ですっかり元に戻っていた。

「……こんなに応援されたんじゃ、簡単には負けられないや」

「そう。まあ私には関係ないけどね。守矢の巫女はまだしも、秋姉妹とはあんまり仲がいいわけでもなし」

「それこそ関係ないですよ。穰子さんと静葉さんは、私の友達です。あなたがどう思おうと、あの人達が応援してくれるなら」

弱りかけていた花子のショットに、勢いが戻る。桃色の妖弾が、花子を中心に五つの頂点を取る。

「私は、負けない！」

足元に二ヶ所、両肩に二ヶ所、そして頭上に一ヶ所の計五ヶ所から、桃色の二重螺旋が放たれた。

範囲が狭かった三ヶ所の時とは違い、確実に文の退路を断つ弾幕だ。文のショットには並べずとも、先ほどよりも洗練されている。

空を埋め尽くす、赤と青、そして桃色の妖弾。二人のショットはお互いの行動を大きく制限し、少しも気を抜けない状況が続いた。そこらの弱小妖怪ならば、もうとっくにスタミナ切れで被弾しているか、焦れてカードを使っているはずだ。しかし、花子は不思議と疲れを感じず、また心にも余裕があった。慣れもあるのかもしれないが、文のショットなら、まだまだ避けられるという自信があったのだ。

文にショットを当てることができれば、勝負を動かすことができる。スタミナも妖力も小さな花子にとって、長期戦は避けたいところだった。ただでさえ、もう精神力だけで戦っているようなものなのだ。

上半身を右に反らして青の妖弾を回避し、花子は背後を見る。文

が回りこんでいた。

「意気込みは結構。だけど、言葉だけではこの射命丸文は倒せないわよ」

シヨットを展開しながら腰に手を当て、口元を嫌味に歪める。その頬はわずかに上気しているが、疲労は少なそうだ。

一方の花子は、秋空の気温は寒いほどだというのに、セーラー服が体に張り付くほど全身汗まみれになっていて、肩で息をする始末だ。しかし、瞳の光は真っ直ぐに文を捉えて、負けぬとばかりに挑発的な笑みを浮かべる。

「言葉だけに思えるなら、文さんの目は節穴ですね。新聞記者、向いてないんじゃないですか？」

「ふん、余裕を見せてるつもり？ そんなふらふらな状態じゃ、もうスペルを使えないんじゃないかしら。カードはあと三枚も残ってるのにな」

桃色の弾幕を軽々と避け、文が弾幕をばらまく。妖弾は無数のリングを形成して、花びらのように空を彩る。

何度も避けた文のシヨットだが、妖弾は放たれるたびに不規則な迷路を作り上げてくる。例え慣れを感じていても、油断はできない。速くもなく遅くもないが、確実に相手の精神を追い詰めてくる文の弾幕に、花子は歯を食いしばる。

小さな体を動かすたびに、汗がほとばしった。五つの二重螺旋を維持しつつ、短く息を吐き出す。

「ふうっ
」

交差するように迫る妖弾を飛び越えて避け、文を狙う。範囲が広

まったとはいえ、花子のショットは直線的だ。遊びがある文のそれとは違い、余裕がない。撃ち合いが長引くほど、花子は不利になる。それでも、ここでショットを当てなければと花子は思いつめていた。カードを使い切らせるほど文を追い詰めることは難しい。お互いの持ち点が十四点で、カード枚数は三枚なので、カードだけで得点を減らしきることもできない。

最低でもあと五回、ショットを被弾させなければ。その回数に、花子は酷い焦りを覚えた。胸によぎったその感情はまるで他人事のようにも感じたが、一瞬の焦燥感の花子の冷静さを確実に奪う。

文のショットを潜って回避した先に、赤と青の妖弾が待っていた。重なるようにして花子へ向かってくる。隙間はまったく無く、その間を抜けることはできない。

すぐに避けなければと思っても、花子の体は下降した慣性が残っている。その上疲労までもが押し寄せてきており、体が動いてくれない。

「や、だっ!」

それはもはや、彼女の意志ではなかった。勝利への執念か、被弾への恐怖か。花子は自分がとった行動に愕然とし、すぐに悔しさのあまり唇を噛みしめる。

文のショットが消える。上空から見下す宿敵へ、嫌味を言うこともできない。

自然と突き出していた右手が、震える。握られているのは、桃色のカード。

花子、三枚目のカード宣言。文のショットを回避しきれず、逃げの選択としてのスperlだ。

「宣言の撤回はできないわよ」

花子の前へと下降してきた文が告げる。花子はそれに、分かっていると言いつ返しすることもできなかった。

ショットに追い詰められてしまった。その事實は、この後の撃ち合いで花子の重荷となり、文にとっては余裕となるだろう。

心が乱れる。自分を嫌いになるほど、花子は胸中で自身を罵っていた。避け切られたら、いよいよ勝ち目はなくなる。まだ、ショットに被弾していたほうが傷は浅かったかもしれない。

しかし、もう取り返しがつかない。カードをポケットにしまい、花子は震える唇でなんとか言葉を絞り出した。

「当てれば、いいだけ。大丈夫」

「そんな蚊の鳴くような声で言われてもねえ。……本当に大丈夫？ 顔、真っ青じゃない」

眉を寄せて花子の顔を覗きこむ文は、まるで本気で心配しているようだった。しかし、今の彼女は敵なのだ。甘えるわけにはいかない。

花子はもんぺの左ポケットに手を突っ込んだ。秋姉妹からもらった髪飾りとブローチ、その尖った部分が、花子の掌に当たる。ちくりとした小さな痛みが、動揺と焦りを少しだけ和らげてくれた。

肩をゆっくりと動かし、深呼吸。花子の顔色に血の気が戻り、それを見た文が花子から離れる。

「いらぬ心配だったようね」

「そうですね、全然いらぬ心配です。このスペルを当てればいいだけの話だもの」

「……よくもまあ」

最後まで言い切らずに、文が間合いを大きく取る。

花子が無意識に選び取ったカードは、消耗こそ大きいですが、自信のあるスペルだった。自分のタイミングで選べなかったことは悔しいが、今はこのスペルに集中しようと、花子は何度も自分に言い聞かせた。

全身に妖力が滾る。もはや搾り出しているに近い状態だ。

遠めに見える文が、人差し指でかかかってこいと挑発してくる。最初こそ腹が立ったあの態度も、今ではなぜか楽しく思えてしまう。

いこう。例え避けられて不利になっても。よぎった思いを、

花子はすぐに否定した。

避けられない、避けさせない。妖力を解き放ちながら、花子は咳いた。

「必ず、当ててみせる」

緑の妖弾が、文を囲むようにして、ぶわりと不気味に浮かび上がる。その数は十や二十では足りず、もしかしたら百に届いているかもしれない。

大した密度ではないが、設置型のスペルはどう動くか分からない。文が警戒の色を強め、いつでも動ける体勢を取った。

文にばれないように、花子は少しだけ眼下の観衆に目をやった。皆が見ている前で、慌てふためく姿は見せたくない。

このスペルで、戦況を変える。花子は体中の妖力を両手に溜めた。掌が、淡い桃色に輝く。

「さあ、文さん。準備はいいですか」

離れた文には聞こえない、小さな声だった。しかし、文は答えるかのように妖気を高めている。

設置された緑色の球体全てに、花子の妖力が伝播する。輝きを強める花子の妖弾に、文が身構えた。

「それじゃあ、いきますよ」

眉を吊り上げ目を鋭く細めた花子が、腕をいっぱい広げ、

「さん」

おかつぱ頭のとっぺんで、両手を景気よく打ち鳴らした。

「はいっ！」

変化は、その直後に起きた。緑の妖弾全てが、いつせいに動き出したのだ。まるで無数の蛙のように、文の周囲を跳ね回る。

怪談「ホルマリン蛙の運動会」。妖弾は鬱陶しくバウンドしながら、文の全周囲を囲うように動いていった。

完全に囲まれたら最後、被弾を待つだけになってしまっただろう。文はそれにいち早く気づき、回避と移動を始める。だが、上下に跳ねながらあちこちに動き回る緑の妖弾は、文の動きを徹底的に束縛した。

彼女自慢の高速を封じ、慎重な回避を余儀なくする。遠くから妖弾を操作しつつ、花子は体力の回復も忘れて文に被弾させることだけを考えていた。

もし、蛙に見立てた緑の妖弾を高速で動かすことができれば、文に被弾させることは容易だろう。しかし、それでは遊びとしての側面が死んでしまう。あくまで避けられるようにしなくてはならないのが、とてももどかしい。

それでも、「避けられたはずなのに避けられなかった」という焦

燥感を文に与えられれば、以降のショットを当てやすくなるはずだ。ここが勝負どころだと、花子は神経を集中させる。

文は、花子が思った以上に苦戦を強いられているようだった。跳ね回る妖弾にじわじわと追い詰められ、次第に全周囲を囲まれていく。その様子にはスperl名のような可愛らしさはなく、無数の蛙が文を捕食しているかのようにすら思える。

これならば、当たる。花子は確信と共に安堵した。完全に囲まれてしまった以上、もはや回避の手立てはない。

その考えは、酷く甘いものだった。

頬を撫でた風が優しくかったのは、一瞬だけ。花子はいきなり全身を襲った衝撃に、両腕で顔を覆う。

「な、なにがっ!？」

叫びになってしまったのは、そうでもしなければ自分の声すら聞き取れなかったからだ。吹き荒れる風は、花子の声を一瞬で掻っ攫っていく。

見れば、妖弾に囲まれていたはずの文が、渦巻く風を中心に佇んでいるのではないか。花子の妖弾は暴風に巻かれて飛び散り、今もなおバウンドしながらも、その動きは完全に風に支配されている。

あまりの風に目を開くこともできず、花子は細目で文の姿を捉えた。鋭い目つきでこちらを睨み、見せ付けるように掲げた手には、スperlカード。

竜巻「天孫降臨の道しるべ」。暴風はかなり離れているはずの花子までもを巻き込み、妖弾となった葉を舞い上がらせる。

攻勢一方だった戦況は一転、スperlの撃ち合いとなる。ようやく

生まれた余裕までもを吹き飛ばされ、花子は風に翻弄されながらも木の葉を避け、散らばった妖弾を再び操り始めた。

花子の妖弾は相変わらず跳ね回り、竜巻に翻弄されながらも、じわじわと文との距離をつめていく。竜巻というスペルの性質上動きの取れない文は、自身の風で妖弾を吹き飛ばすしかない。

スペルによって文の武器となった葉の妖弾も、動きが荒い。防御に集中力を割いている証拠だ。かといって、花子も気を抜くわけにはいかない。風に押し戻される妖弾を無理矢理文に近づけることは、思った以上に妖力を削られる。その上、飛んでくる木の葉を避けなければならぬのだ。

双方共にほとんど動かずスペルに集中する様子は、一見すれば地味な戦いに見えるだろう。しかし花子は、離れた場所にいる文と自分との間で激しい火花が散っているのを確かに感じた。

緑の妖弾が、風を押しつけバウンドしながら、文を再び困んでいく。近づけば近づくほど文が風を強めるので、少しでも油断すればまた飛ばされてしまうだろう。

「それでも　あと少しで、届くっ」

苦しげに漏れた言葉は、竜巻に巻かれて消えていく。花子の目には、避けるべき木の葉と敵である文の姿しか見えていない。その文も、目を逸らすことなくじつと花子を見据えている。

睨みあいながらの攻防。そんな中、ふと文がほくそ笑むのが見えた。同時に、ザアと一際大きな葉のこすれる音が耳に届く。花子は咄嗟に周囲を見回し、

「う、うそ……」

竜巻が、大量の木の葉を巻き上げている。足元から、紅葉が入り

混じる葉の波が迫っているのだ。

全てが妖弾となっっているわけではないことは、遠目に見ても分かった。しかし、あの波に飲まれてしまえば、中に混ざった妖弾には確実に当たってしまう。風の中を飛んで逃げても、追いつかれるに決まっている。

木の葉は凄まじい速さで近づいてきている。あとどれくらいで花子に届いてしまうのか、考えている余裕すら惜しい。

花子は焦った。このままでは被弾は免れない。

「どっしよ、どっしたら」

慌てふためいたところで、現実が変わらない。葉の波が奏でる耳障りな波音は、一瞬ごとに大きくなっていく。

時間がない。花子は咄嗟に文を見た。

文の、挑戦的な笑みを見た。

「ッ！」

さあ、どうする。文はそう言っているようだった。花子に戦いへの熱意が戻る。

いくら冷静になれたとはいえ、木の葉の大波は着実に近づいている。花子の取れる選択肢は、ただ一つしかなかった。

葉の妖弾に当たるより先に、文を被弾させるのだ。浮いている緑の妖弾全てに渾身の力を伝播させ、

「っつけええええええ！」

叫び、両腕を前に突き出す。同時に、風の抵抗を受けていた花子の妖弾が、グンと動き出した。今までの地道な攻防が嘘のように、

文へ狙いを定めて進み出す。

巻き取られている大量の葉が花子を食らうまで、あと数秒とないだろう。十分だと、花子は胸中で断言した。

その場からまったく動かない文は、まるで花子の妖弾を受け止めようとしているかのようだった。

葉のこすれ合う音が近づく。それでも目は動かさない。

思考は止まっている。花子はただ、妖弾を操る。

文が防御の姿勢を取る。妖弾は当たる寸前。

あとわずか、ほんの一瞬。

そして、その刹那。

「あつっ！」

小さな叫びと共に、花子は大量の葉に巻き込まれた。ざらざらとした感触が肌を撫で、妖弾と思われる重い衝撃が花子の体を叩く。

体を丸めて痛みに耐え、ようやく風と葉が過ぎ去った。ふらつきながらも、何とか意識を覚醒させる。セーラー服は左の袖がほとんど無くなり、あちこちが破けてしまっている。打ち身と擦り傷が体中にあるようで、少し動かすだけでも酷く痛んだ。

「あ、当たっちゃった……」

言葉に出してみると、望まない現実感が花子を包んだ。被弾した事実は、どうあっても揺らいでくれそうにない。

しかし、事実はもう一つあるらしい。視界に入った文が、痛みを掻き消そうと頭を振っている。花子は知らず、声を漏らしていた。

「も、もしかして」

花子と文、同時に被弾。双方共に三点減点、二人の持ち点は揃って十一点となった。

望んでいた結果とは違うが、それでも文にまたスペルを当てられた。荒れた呼吸を落ち着かせながら、花子は喜びが表情に出るのを止められなかった。

ざわめく観衆を無視して、文がショットの妖弾を形成する。もう息を整えたらしい。もう少し休みたかったが、花子は本音を飲み込み、桃色の妖弾を召喚した。

残るカードは二枚。十一点という持ち点を考えると、花子も文もスペルは当分使えなくなった。

ショットは、もうスペルへの布石ではない。文も本気で点を削りにくるだろう。撃ち合いはいっそう激しくなるはずだ。

「ここからよ、花子」

自分に言い聞かせ、疲労に悲鳴を上げる体に鞭を打ち、花子は飛んだ。勝負はいよいよ、後半戦に突入する。

こいしが思っていた以上に、花子は善戦している。勝負は拮抗しているが、スペルだけで考えれば、花子はもう二回も文に当てている。

最初は遊びに付き合う程度の気持ちで、彼女の練習に付き合っていた。それがいつしか、自分まで本気で文に勝つことを目指してい

ただ。

「こいし、大丈夫かい」

声に振り向けば、瓢箪を片手に胡坐をかく萃香だった。彼女はきつと、文がこいしに放った暴言のことを言っているのだろう。

正直に言えば、とても傷ついている。胸が裂けそうな思いだったが、きつと花子がやり返してくれると信じ、頷く。

「うん、大丈夫。なんてことないよ」

うまく笑えた自信はないが、萃香は納得したようだった。再び勝負の行方を目で追っている。習って見上げ、こいしは一心に花子を見つめた。

二人とも疲れが表に出てきているらしく、ショットの撃ち合いが再開してから、お互いに何度も被弾している。

今の持ち点は、花子が八点、文は九点。体力面では花子が劣り、もう限界を通り越していそうだが、戦いの行方はまだ分からなかった。

「すごいよね、花子ちゃん」

淹れたたのお茶をこちらに差し出しながら、ミステリアが言った。

「私ならきつと、もうスペルを使っちゃってると思うな。文さん、弾幕ごっこになると目つき怖いから」

「ううん、そうだねー。私とやった時も、最初はニコニコしてたのに、だんだん怖い顔になっていったよ」

「あの目で見られちゃうとき、とにかくスペルで追っ払わなきゃっ

て気持ちになるんだ。だから、あの文さんと真っ向から勝負できる花子ちゃんは、やっぱりすごいよね」

「うん、すごい」

花子は強いのだ。こいしが思う強さとは違う、もっと別の力を持っている。

その強さがあれば、こいしは覚の力から逃げなかったかもしれない。もう戻れない昔のことを悔やむつもりはなかったが、それでも花子の無邪気な強さが眩しかった。

彼女と友達でいられれば、その強さをこいしも得られる気がしたのだ。その答えは、きつと間違っていない。

「花子」

ギリギリで妖弾を避けている花子は、いつ被弾するかもしれない危うさを感じさせた。

怪我はしているのだろうか、無理が祟って具合が悪くなってないだろうか。心配は尽きない。

それでも、駆けつけることは許されないのだ。これは、花子の戦いなのだから。

こいしにできることは、たった一つ。祈ることだけだ。

「きつと、勝ってね」

ショットでの削り合いは熾烈を極めた。花子の持ち点はさらに減り、六点となっている。対する文は、八点だ。

しかし、負けっぱなしというわけではない。

「ちいッ！」

叫んだのは、文だ。直後に、バチリと妖弾が破裂する音が響く。

桃色の妖気が霧散して、空中に消えていった。

文がショットに被弾したのだ。これで彼女の持ち点は、七点にまで減少した。

体力的に言えば、文はまだまだ余裕だろう。しかし、とっくに限界を超えているはずの花子が今も立ち塞がっていることに、調子を崩されているのだ。

視界は徐々に白ばみ、意識はすでに朦朧としている。それでもまだ戦えるかどうかとして思えるのか、花子自身にも分からなかった。

文が体勢を整え、二人ともに妖弾を召喚した。ショットが再開される。

点差は一点だが、この一点はとても大きかった。花子は六点、つまり、文に残っている二枚のスペルカードで削りきれてしまう点数なのだ。花子は最低でもあと一回はショットを当てなければならぬ。

「勝たなきゃ」

なんとしても、文に勝ってみせる。その思いだけで、花子の二重螺旋はさらに勢いを増した。

もう、文のことを怒ってはいない。レミリアとこいしへの中傷は許せないし、謝ってほしいとも思うが、それでも嫌いにはなれないだろう。

見ず知らずの土地で独りぼっちだった自分と友達になってくれた皆に、強くなつた花子を見てほしい。皆と並んで立てる妖怪になっ

ただと知ってほしい。

それだけのために、ただ、勝ちたかった。

五つの二重螺旋を密集させ、花子は無謀にも文へと突進していった。赤と青の妖弾が密集している文の付近は、今の花子が避けられる場所ではない。

被弾もやむなし、それでもあと一点。花子の鬼気迫る突撃に、文がわずかに後退する。直後に、彼女は顔の前で両腕を交差させ、防御の姿勢を取った。一際激しい破裂音が周囲に木霊し、花子の全身を衝撃が襲う。

双方、ショットによる被弾。持ちは、花子が五点、文が六点。

あまりの激痛に、花子は完全に意識を失った。落下するかに思われたが、セーラー服の襟を文につかまれ、目を覚ます。

頭を振ってからなんとか自力で飛ぶと、呼吸が乱れている文が、わずかな安堵を顔に浮かべた。

「ここまできて、気絶負けなんてやめてよね」

「……ごめんなさい」

「謝らないでいいわよ、目は覚めたんでしょ？」

わずかの沈黙。一分にも満たなかったが、その間で花子と文はある程度息を整えた。

合図があつたわけではないが、それぞれ同時に、カードを取り出す。

「あなたはよくやったわ、花子。でもね、私にも天狗としてのメンツがある。簡単に負けてやるわけにはいかない」

「分かってます。ここから先は、手加減なしですよ」

「手加減はするわ。負けない程度にね」

文が笑い、後方に飛び退った。カードをしまい、その右手には、八手の葉のような天狗の団扇が握られている。

「さあ、ちよつと強めにいくわよッ！」

団扇を二振り、文の正面に二本の細い竜巻が出現する。

旋風「鳥居つむじ風」。二つの竜巻は蠢きながら高速で花子へ近づき、赤い妖弾を無数に吐き出し始めた。妖弾は竜巻が起こす突風に飛ばされ操られ、空は瞬く間に弾幕地獄と化す。

負けてはいられないと、花子はカードをポケットに入れて、両手を天に掲げた。

この時のために、練習してきたのだ。ずぶ濡れになって、酷い時には川に流され、それでも諦めずに特訓を続けて手に入れた力を、解き放つ。

「いけえええっ！」

叫びとともに、あたりが突然暗くなった。観衆と文が天を仰ぎ見て、絶句する。

天空を覆う屋根のように、水が一面に広がっているのだ。立ち込める暗雲がそのまま水になったかのような、実に摩訶不思議な光景だった。

誰もが呆然と見上げていた水の天井が、突如、崩れた。

怪談「お化けプールの水面下」。花子の胴回り程度の直径を持つ大粒の雫が、文めがけて落下する。水弾は文の頭上で破裂し、細かい妖弾へ変化する。

水の天井は広い。文がその下をどれだけ逃げ回っても、水弾は先回りして落下し、弾け、妖弾となって降り注ぐ。

それでも、文に与えた驚愕は一瞬だけだった。すぐに冷静さを取り戻し、水の妖弾を的確に避けていく。花子も文の竜巻と妖弾を避けなければならず、水弾をつまぐ操れている自信はなかった。

文の風に対抗するために身につけた水の力だが、いくら縁が近いとはいえ、それは花子の本質ではない。河童達ほどうまく操れず、長続きもしないだろう。

それでも花子は、文との決闘で何が何でもこのスペルを使いたかった。今も外に住む妖怪は、技術に溺れた人間の影響で、自然との繋がりが薄れてしまっている。花子もその一人だったが、それは妖怪としての力を非常に弱めると萃香が言っていた。

きつと、文もそれを見抜いていただろう。だからこそ、水を操り大自然の縁を取り戻したことを証明し、文に認めさせたかったのだ。

二本の竜巻が空気を巻き取り轟音を鳴らし、花子へ近づく。引きずり込まれば二度と出られないような威圧感を花子に与え、さらに真っ赤な妖弾までも撒き散らす。

風に翻弄されているようにも見える文の赤い妖弾は、しかし確実に花子を狙っている。どこへ逃げてみても必ず追いかけて、また回り込んでくるのだ。かといって、後退しようものなら竜巻が待っている。

巻き上げられたマグマのような文の妖弾は、第三者からはどう見えているのだろうか。目に入るところ全てが紅蓮地獄となっている花子からは、想像もできなかった。

体を細かく動かして、四方八方からの弾幕を避ける。そんな状況であっても、花子は常に前進し方向転換をして、竜巻から距離を取る。

攻撃に集中できないことが、とてももどかしかった。文に見せ付けるために手に入れた力なのに、彼女は花子の水弾を余裕を持って

避けている。

「……ダメ」

焦るなど、花子は自分に言い聞かせた。だが、一瞬浮かんだ切迫感
は文の竜巻と妖弾に煽られ、胸中をかき乱す。

左方から赤い弾が迫る。わずかな間だけその場に留まり、花子は
体を大きく仰け反らせた。そのままぐるりと回転し、水弾を操作し
ながら次に避けるべき妖弾を探す。

背後で渦巻く風の音が聞こえる。ぞつとするその音を耳から搾り
出し、花子は飛んだ。

上空を見上げる。水の天井が小さくなっていく。時間切れが近づ
いているのだ。文は避けきれてしまうのだろうか。どうにかして被
弾させなければと思考を巡らせるが、今の花子では水をこれ以上う
まく操れない。

花子にもっと妖力があれば、状況は変わっただろう。自然の力で
ある水も、もっと長く操れたに違いない。だが、元のキャパシティ
だけはどうやっても超えられない壁だった。

降り注ぐ水弾が増し、分裂もさらに細くなる。最後のあがき、
スペルの終盤だ。かなり避けにくい工夫をしたというのに、文は見
た瞬間に全てを理解したかのように、細かく散った水弾を容易にか
わしてくる。

残り時間はもう二十秒程度しかない。このままでは回避が成立し
てしまい、文に加点されてしまう。よしんば花子が文のスペルを避
けきったとしても、持久戦になってしまえばもう花子に勝ち目はな
いだろう。

「どついたら」

眩きかけて、花子はふと自分の体勢に気がついた。
被弾する気がまるでしない文に慌てすぎた結果か。それとも、集中力が底をついたのか。現状を理解した花子を襲ったのは、大きな後悔だった。

時間と言えば、ほんの数秒程度のものだろう。しかし、弾幕ごっこにおいては致命的な時間といえる。

花子は、その場に停止していた。迫る妖弾と竜巻を見もせず、文を注視してしまっていたのだ。

「ッ
」

焦りが膨れ上がる。もはや自分に冷静な判断など期待できず、花子は直感だけで自分を囲んでいた赤い妖弾を避けた。

当然のことだが、動き続けていた時と違い、弾の密集率があまりに高い。よくも止まっている間に当たらなかつたものだと、心のどこかで呟いた。

もんぺが妖弾とかすり、破ける。その感触と音が、花子の意識をわずかに逸らした。

そして、結果が訪れる。

凄まじい衝撃。花子は背中を鈍器で殴打されたかのような感覚に襲われた。

疲労困憊な状況で意識を保てたのは、奇跡に近い。痛みを縮こまっ
ていると、竜巻と妖弾が消えた。水の天井も蒸発したかのように霧散して、青空が戻る。

徐々に痛みが柔らいでも、花子は体を丸くしたまま動けなかつた。全身が震える。

「あ、あ……」

花子、スペルに被弾。減点三、残りの持ち点は二点。花子のスペル終了前に被弾したため、文は六点から持ち点の変動はない。

互いのカードは残り一枚ずつ。一枚では、文の点数は削りきれない。対し、花子は二度のショットで敗北が決まってしまふ。文はもう、スペルを使わなくても勝てるだろう。

負けが決まったようなものだ。花子は悔しさでいっぱいになり、掌が真っ白になるほど、拳を握り締めていた。

「いやあ、まさか水を操るとはね。さすがに驚いた　　って」

やれやれと汗を拭いながらやってきた文が、花子の顔を見て眉を寄せる。

「ちょっと、なんて顔してるの。あなたの勝ちたいうって気持ちはよく伝わってくるけど、泣くほどのもんでもないでしょうに」

「私には、大切な戦いなんです……。文さんにとっては、この決闘、やっぱり遊びなんですか？」

半分涙声になって、花子が上目遣いに文を見上げる。その視線にたじろいで、彼女は頬を掻いた。

「まあ、最初はそう思ってたわ。一枚目のスペルあたりまでかしら。でも花子があんまり真剣なもんだから、ちょっと本気になっちゃった部分はあるかな」

「そうですか……」

「そんなことより、私が言いたいのは、あなたのその態度よ。なに、もう降参するの？　まだ点数もカードも残ってるじゃない」

花子の心は挫けていた。もう体力もない。気力も尽きた。こんな有様で、どうやって戦えというのか、教えてほしい気持ちだった。もし文も同時に被弾していたり、花子がスペルを避けられていれば、まだやる気も出ただろう。圧倒的不利な状況が、花子に敗北感を植え付けてくる。

「……」

声が出なかった。まだ自分のどこかで、負けを認めたくない気持ちがあるのだ。目を伏せ、どうしたものかとぼんやり考える。

文は、じつと花子の言葉を待っているようだった。このまま黙っていても仕方ないことは分かっているのだが、答えが見つけれない。

数分が過ぎたころ、深々と溜息を吐き出した文は、短く告げた。

「花子。あなたに最後のチャンスを上げるわ」

凜とした声と共に、文がスペルカードを取り出す。

最後の一枚だ。彼女の意図を理解すると共に、花子の心臓が大きく脈打つ。

文の口元に浮かんだ微笑は、とても力強く、大妖怪の貫禄を漂わせるものだった。花子に緊張が走る。

目に見えて分かるほど、文が妖力を高める。天と地ほどの実力差を見せ付けられ、それでも花子の体には、不思議と力がみなぎってきた。

敵に情けをかけられたが、これを逃せば勝機はない。

他の選択肢など、あるはずがなかった。

「決着をつけましょう」

鋭く重い文の言葉に、弱気な心を投げ捨てた花子は、はつきりと頷いた。

まだ秋とはいえ、山頂は冷える。普段外出をしないパチュリーは、寒さを少しでも凌ぐため肩から毛布を被っていた。

新たな友人の戦いを観戦しているレミアとフランドールは、いっつになく真剣だ。時折悲鳴じみた声を上げながら、一生懸命に応援している。

外出という人生初の大イベントに浮かれていたフランドールだが、憧れていた館の外への好奇心もすっかり失せてしまったようだ。彼女があんなに友人思いであるとは、紅魔館の住人は誰も知らなかったのではないだろうか。

普段他人の前では冷徹な吸血鬼を装っているレミアも、今ばかりは感情を惜しみなく表している。彼女と長年親友をやってきたパチュリーは、素直なレミアを見れるのは自分と咲夜だけの特権だと思っただけに、少し寂しくもあった。

「……ま、レミイも妹様も、これで少しは垢抜けるでしょう」

「パチュリー様もね。ご自身から進んで外出されるくらいですもん」

イタズラっぽく舌など出して言ったのは、パチュリーの使い魔であり大図書館の司書でもある、名もない小悪魔だ。

紅茶の入ったカップを差し出してくれた小悪魔に、パチュリーは「そうかもね」と、小さく微笑を浮かべた。

パラソルの下に敷かれた真紅のシートには、弁当箱がいくつも開けられていた。もうだいぶ減っているが、咲夜と美鈴が残りを少しずつ箸で突いている。パチユリーも少し食べたのだが、元々小食のため、ほとんど手をつけていない。

吸血鬼姉妹も最初は喜んで箸を伸ばしていたのだが、決闘が盛り上がるにつれてそちらに夢中になってしまい、早々にごちそうさまと宣言していた。とはいえ、レミリアの好物である納豆巻きとフランドールがリクエストしたミートボールは、ことごとく無くなっているのだが。

上空の戦いは、どうやら滞っているようだ。弾幕ごっこで睨みあいは珍しいが、恐らく文が花子の体力回復を待ってやっているのだろう。

「お姉さま、花子はあと何点持っているの？」

妖弾は一つも飛んでいないというのに、フランドールの声は緊張で強張っていた。すると、レミリアも似たような声音で、

「二点よ。フラン、自分で数えてよね」

「数えてたよ。ただ、信じたくなかっただけ」

「私だってそうなんだから、言わせないでちょうだいよ」

パラソルの影が途切れる寸前の場所から、四つんばいになって覗き込むように空を見上げている姉妹を後ろから眺め、パチユリーは目を細めた。

フランドールを外に出すと言った時、どんな問題が待ち受けているのかと皆が冷や汗をかいたものだが、レミリアと仲良くしている姿を見ると、自分達が抱えていた不安が全て杞憂だったように思える。

無論、フランドールはまだまだ加減が下手なので、少しずつ慣らしていく必要はあるだろう。それでも、彼女は外に出られたのだ。五百年という時の壁を乗り越えたレミリアの決断が、何よりも大きな意味を持っていた。

そのきっかけとなったのが、あの小さな御手洗花子なのだから、世の中は分からない。紅茶を一口飲み込んで、パチュリーは思案に耽る。

「あの子の能力　トイレで子供を驚かす以外に、何かがあるのかしら。例えば、そう。花子は子供がたくさん集まる場所に住んでいたのだから、精神的に未成熟な者の心を操ることができるとか。そう仮定すると、レミイや妹様があんなに必死になるのにも、鬼や覚の妹と行動していることもつじつまが合うのよね」
「うーん、それは能力じゃないと思いますけどねえ」

体が温まるようにと紅茶のポットにジンジャーを入れながら、小悪魔が苦笑した。

「きつと花子ちゃんは、純粹なんですよ。子供を驚かすつてことは子供の気持ちを理解しなきゃいけないことです。だからあの子はきつと、誰よりも子供で、真っ白なんじゃないですか？」

「なるほどね。つまりレミイ達は、花子の純粹さに当てられたつてことかしら」

「素直つて、伝染するんですよ。次はパチュリー様かもしれませぬ」

「それは大変。予防しておかなければね」

「冗談めかして返事をしつつ、パチュリーはカップをソーサーに置いた。

空にいる文の妖力が、パラソルに遮られて見えないパチュリーに

も分かるほど大きくなる。レミリアとフランドールも当然気付いているようだ。

「スペルかしら」

レミリアが呟く。フランドールはそれに、可憐な顔にはいまいち似合わない神妙な顔で頷いた。

「おっきいのがくるよ。ショットでも勝てるのに、大人げないなあ、天狗は」

「でも、これを花子が避けきれたら、花子の勝ちよ」

「あ、そっか！」

「まだチャンスはあるわ、まだ」

希望は捨てていないらしいが、花子の妖力はもうかなり小さくなっている。レミリアへの侮辱を取り消させるために、文字通り死力を尽くしていると言えた。

もしも花子の立場が自分だったら、彼女と同じように死ぬ気で決闘を挑むことができるだろうか。パチュリーはその自問に、ほんのわずかにかぶりを振る。

きつと、悪口の内容をレミリアに告げ、彼女自身に叩きのめしに行かせるだろう。お互いの力を信じていると言えば聞こえはいいが、どこか冷たく感じなくもない。それでも、レミリアとの友情はそうあるべきだと思っただ。

「私達は、これでいいのよ」

「？ なんですか？」

首を傾げる小悪魔に小さく肩をすくめ、

「なんでもないわ。さて、私もそろそろ」

レミリア達と決闘を見守ろう。そう言いかけて立ち上がり、全身を冷たい風に打たれて、再びおずおずとその場に座り込む。毛布を肩からすっぽり被って、小悪魔に告げた。

「……紅茶のおかわりをくれるかしら」

「はい、すぐご用意しますね」

笑いを堪えながら紅茶を淹れる小悪魔に、何も言えない自分が少し恥ずかしかった。しかし、生まれつき病弱なのだから仕方がないと、開き直る。

酒宴に参加している妖怪達が、喚声を上げた。レミリアとフランドルも、日差しに当たってしまふのではと思うほど騒ぎ出している。決闘が再開したらしい。

戦いが見えなくとも、状況の把握はできる。誰にも伝わらなくとも、心の中ではそれなりに花子を応援してもいるのだ。

小悪魔から紅茶を受け取り、まだ温まらない体を毛布の中で震わせながら、

「私は、これでいいのよ」

眩きは、吸血鬼姉妹のやかましい応援に包まれ、消えてなくなつた。

あまりにも強大な妖力。見ているだけで食われてしまいそうな気

迫。花子は怖気づきそうな自分を必死に奮い立たせる。

文がカードをしまう。溢れ出る妖力をそのままに、彼女は鋭く花子を睨みつけた。

「天狗の本気　その断片を、あなたに見せてあげるわ」

「っ……… 光栄です、と言つてあげればいいんですか？」

なんとか余裕を見せようと吐いた言葉だが、文には花子が怯えていることくらい分かっているだろう。

それでも、逃げるつもりはないとだけ表明できればいいのだ。震える手を無理矢理拳に変えて、花子は文を見据える。

覚悟が伝わったのだろう。文が頷き、その身を風が包み込む。

「勝つても負けても、恨みつこなし。さあ、いくわよ！」

声が耳に届いた瞬間、文が消えた。直後に莫大な妖気を感じ、花子は振り返る。

妖力の塊が、風を従え巨大な弾丸となって迫っている。それを目にするや、驚く暇もなく、左半身を全力で反らす。何とか避けられたものの、空気を引き裂き通り抜けていく妖力が、花子の全身をちりちりと刺激する。

「妖弾……、じゃない」

速さのあまり分からなかったが、あれは妖弾などではない。妖力を纏い風の化身となった、文自身だ。

風を支配する天狗の力、「幻想風靡」。圧倒的な妖力の前では、手の込んだ小細工など全て無に帰すだろう。

瞬く間に遠くまで移動してしまった文が、急激に方向転換をし、

再びこちらを向く。花子が身構える暇もなく、距離は一瞬でなくなった。

無理な姿勢での回避が、脇腹に痛みを生む。しかし、無視するしかない。文はもう、体勢を崩した花子を捉えんと迫っているのだ。通り過ぎ、振り返り、再び迫る。その間はほんのわずかしかなかく、花子は考える余裕もなく勘でかわすしかなかった。

大きく体を仰け反らせ、その背中すれすれを文が通過する。刹那に吹き荒れる風が、花子を吹き飛ばした。

「まつ　　ずい！」

思わず叫んでしまいなから無理矢理体勢を固定し、すぐに宙返り。さきほどまで足があった部分を、射命丸文という暴風が通り抜ける。文の姿はわずか一瞬しか目視できず、表情など分かるはずもない。回復したと思った体力は、あつという間に奪われていく。息をつく暇もなく襲ってくる文から視線を外せず、集中力も今までで一番求められた。

時間が長く感じられる。もうとつくに数分が過ぎているようにすら感じられたが、実際は五秒と過ぎていなかった。

真下から文が接近する。後退してやり過ごし、突風にも負けずに瞼を開け、文から目を離さない。

上空に飛んだ文を見上げ、花子は小さい舌打ちをした。昼の太陽は天高く、文が逆光となってよく見えないのだ。文の妖力と風の音、そして花子の勘で避けるしかない。思考を止め、その場から急いで移動する。

一瞬だけ文に背を向ける形となり、すぐに振り返る。反応の遅れは刹那とはいえ、文のスピードの前では致命的といえた。

落下の慣性を殺し、急激な方向転換をした文が、一瞬で間合いを詰めてくる。花子は咄嗟に、下方へ移動した。文はひたすら真っ直

ぐ進み、やがてまたこちらへ振り返る。

「やっぱり、そうなんだ」

花子は見抜いていた。このスペルでは、文は真っ直ぐしか飛べない。花子の背中を追いかけることができないのだ。

文が使った二枚目のスペルの強化タイプか。そんな考えが脳裏をよぎったが、それとはまったくレベルが違うことを、花子はすぐに思い知る。

ただでさえ速い文の速度が、さらに上がった。もはや目で追える代物ではない。彼女は花子への狙いを一旦逸らし、自ら山の木々に飛び込んでいった。木がなぎ倒されるような轟音が聞こえ、文はすぐに空へと現れる。

大量の、木の葉を引っさげて。森の木々から奪い取った葉が妖弾となり、文が飛ぶ軌跡に沿って巻き上げられる。

視界が不明瞭になるばかりか、葉そのものに当たってもいけないのだ。回避する対象が増え、花子はどこを見たらいいのか、いよいよ分からなくなった。

葉の妖弾に注意を払いつつ、風の音に耳を澄ます。真横、右側面だ。舞い落ちる葉のことも考えると、前進以外に避ける道がない。

前に進み、同時に花子がいた場所を凄まじい風が通り抜ける。落下する葉が再び舞い上げられ、それらを回避しながら、すぐに文を目で追った。

最初とは明らかに速度が違う。こちらに戻ってくるまで、一瞬しかない。文が通るたびに葉が上空へ運ばれるため、葉の妖弾は一向に減らなかつた。花子の精神力は一気に削れていく。

呼吸が漏れる。文は目前。さらに、頭上と四方を囲むように葉の妖弾が舞っている。

文の下を潜るように避け、その先にあつた葉に当たらないよう注意しながら、さらに体を右に捻る。もう接近していた文の妖力が体をかすり、セーラー服の脇腹が破れた。

危なかつたが、まだ被弾ではない。安心して暇もない。

上からの轟音。決るような角度での体当たりだ。風に葉が吹き飛ばされ、文のために道を開けているかのようだった。

花子の周りに浮いている葉の数は、相変わらず多い。下手に回避行動を取れば当たってしまう。

文が落下に入った。考えている時間はない。花子は迷わず、文へ向かつて飛び上がった。

ほぼ博打であつたが、なんとか間に合う。葉の囲いから脱出し、激突寸前でわずかに身をそらし、文だけを回避した。

スペルの残り時間、あと五秒。

頬を汗が伝う。葉を避けることには慣れたが、迫る文の気配が恐ろしい威圧感を持っていた。

四秒。

高速で接近する文が纏う妖力は、さらに大きくなる。かなりの距離を取って回避したというのに、花子の背筋を悪寒が走る。

三秒。

落ちてくる葉に遮られ、文の姿が見えない。音と気配を頼りに、体を右に傾ける。怒涛の風が、空を切る。

二秒。

攻撃が止んだ。スペルが終わつたのかと錯覚したが、葉の妖弾は健在だ。不気味な静寂が花子を包む。

一秒。

膨れ上がる妖力。真後ろ、それもすぐそばだ。花子はこの時になつてようやく、最後の最後で油断したことを知った。

振り返る暇もなく、背中にとてつもなく強い衝撃が襲う。文の妖力が爆散し、木の葉が連鎖的に砕け散っていく。

「かはっ

」

花子、スペルに被弾。三点減点し、持ち点は、〇点。

修行の果てに挑んだ決闘は、花子の敗北に終わった。

しかし、花子はそれを理解することすらできなかった。息ができないほどの鈍痛は、花子に残っていた最後の力を完全に奪い去ってしまったのだ。

落ちかけた花子は、文に横抱きにして受け止められた。痛みがわずかに和らぎ、途端に気が遠くなる。

体力も、妖力も、気力までもを使い果たした花子の視界は、徐々に黒く染まっっていく。

「訂正するわ、花子。あなたは　とても強かった」

文が零した称賛は、闇に塗られる花子の意識に溶けていった。

そのじゅっさん 決戦！勝利は我が友のために！(2) (後書き)

一話に収まりませんでした……。もうちょっとだけ続くんじゃ
A、)

書きあがってはいるので、月曜までには推敲を終わらせます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0910v/>

かちこめ！ 花子さん

2011年11月27日00時52分発行